

広島大学図書

2500020902



學理心の近輓

2500020902

書名	近心の心理學	著
著者	保良 英著	
頁数	140 頁	
冊数	第 137	
架	音内	



廣島大學圖書印

春秋文庫は類書中のダイヤモンドだ。

眞に生きた思想と知識の精髓を、これだけ軽便な、至廉な、而かも堅牢な形に凝縮させて、エネルギー節約とスピードを生命とする現代大衆の手に分つ、これが春秋文庫の使命であり、同時に理想でも、モットーでもある。

先づ試みに一冊を取つて読んで見給へ。吾等の言葉は諸君を欺かぬことがわかるであらうから。

序

本書は既に一般心理學を一通り學んだ人で、尙も現代に於ける各方面の心理學の趨勢を知らんとするものゝために編纂したものである。現代の心理學は、その原理に於て、その任務に於て、その研究法に於て實に驚くほど多岐多様である。しかしその趨く所を辿ると、縦に横に一縷の脈絡は存して居る。本書は出來るだけその織糸を辿りて互に聯絡を取りつゝ、出來るだけ各方面の研究を網羅することに努めた。而して主張の相容れない場合は一々私見を加へ、且つ將來の研究の餘地が何處にあるかを明にした。

私は先きに「大思想エンサイクロペディア」の一部として、本書の如きものを認めたが、叢書のことゝて執筆を急がせられ、十分に思想を鍊り、資料を集めるだけの餘裕がなかつた。従つて其の後書肆より單行本として發行したいとの要求を受けても、そのまゝ公にすることは到底忍びなかつた。再三の求めに遂に思ひ切つて筆を加へることゝし、漸く茲に一冊の本となつた次第であ

る。章に於ても三章を増し、各章に於ける内容も舊稿を採用した所は一少部分に過ぎない位に改訂を加へた。それで本書は全く新たな著書となつたと言つてよいと思ふ。

本書の編纂に當つて、種々の著書を參酌したことは言ふまでもないが、その中で本書の結構や資料に直接間接に最も多くの暗示を與へたのは、(1) Saupé : Einführung in die Neuere Psychologie.

(2) Henning : Psychologie der Gegenwart. (3) Hunter : Human Behavior. (4) Coleman and

Connis : Psychology. (5) Griffith : General Introduction to Psychology. であつた。これ等の著者に對し茲に厚く感謝の意を表する。

各章の終りに英獨の參考書を掲げたのは、その章に引用した書名といふ意味でなく、その章を讀まれるには、少くともあれだけの著書を參考されたいとの意味である。我國で出版された名著も數多あるが、既に知られて居ると思つて省くことにした。

卷末の附録は私が數年間いろいろの雜誌のために筆を執つたものゝ中から、本書と關係の深いものだけを選んで、そのまゝ印刷に附した。本文と併せて讀んで貰へば參考になることが多いと

思ふ。只過去十三年間に互つた論文であるから、考へ方が少しづつ變つて行つた所があることを御恕し願ひたい。

昭和四年二月

著者

目次

第一章 定義と研究法

第一節 心理學の定義.....一

第二節 心理學の研究法.....四

第二章 學說と分野

第一節 心理學說の變遷.....三

第二節 心理學の分野.....五

第三章 動物心理學

第一節 動物の行動の研究.....六

第二節 主なる結果の二三……………六
第三節 形態及び合目的の問題……………七

第四章 兒童及び青年心理學

第一節 兒童心理學の研究法……………八
第二節 主なる結果の二三……………八
第三節 兒童精神の發達……………二六
第四節 青年心理學……………二四

第五章 差異心理學

第一節 差異心理學の問題……………一五
第二節 智能に於ける個人差……………一〇
第三節 性格に於ける個人差……………一五

第四節 心誌と輪廓……………一六

第六章 應用心理學

第一節 醫事心理學……………一七一

第二節 法庭心理學……………一七五

第三節 教育心理學……………一八二

第四節 産業心理學……………一八七

第五節 軍事心理學……………一九七

第七章 異常心理學

第一節 智能の異常……………二〇一

第二節 性格の異常……………二一〇

第三節 防禦機制……………二二五

第四節 精神的疾患……………三九

第五節 精神分析法と催眠術……………三一

第八章 社會心理學

第一節 社會心理學の問題……………三三

第二節 社會生活と本能……………三四

第三節 社會的產物……………三五

第九章 民族心理學

第一節 縱斷的研究……………三六

第二節 横斷的研究……………三七

附 錄

內省と客觀的觀察……………三八

快	と	苦	三〇八
動的	心理學		三三〇
作用の	心理學		三七〇
精神發達の	問題		三六七
人格的	心理學		三九〇
人名原語表			四二二

第一章 定義と研究法

第一節 心理學の定義

心理學の發達した跡を尋ねて見ると、その一般的目標は人類生活の理解にあつたやうである。第十九世紀の中頃までは、主として知的方面が注意され、爲めに心理學は認識の問題に關係するものとして哲學の一部であると考へられた。従つて心理學は靈魂の學と言はれ、或は意識の學と唱へられた。所が一八三〇年以後心理學に於ける科學的運動がドイツ、フランス、イギリスに始まつて來た。ドイツでは生理學者並に物理學者に依りて始められ、感官に關する研究が非常に進歩し、フランスでは異常精神現象の研究が行はれ、イギリスでは人間並に他の動物の行動に關する生物學的研究が盛になつた。

かやうに最初の研究には生物學や生理學の知識と方法とを適用したり、或は物的現象に行はる

法則を心的現象に借りて來ることもあつた。それで一時は心理學の獨立科學たることを疑ふ者すら生じた。現時でも他の科學の知識と方法とに頼る所もあるが、然し心理學は其等の科學の一部分とか又は寄せ集めであるといふことは出來ない。心理學は心理學として独自の研究の境地と方法とを有するものである。

然らば心理學は如何なる研究をなす科學であるか。先づ心理學の語義を尋ねると、二つの希臘語 *Psyche* (心) と *Logos* (言語) とから成立つて居る。故にその意味は「心に關する語又は話」といふことになる。然し學者間には希臘語の *Logos* が或る英語又は獨逸語の語尾となる時は、單に「主題に關する話」の意味でなく、その主題の科學といふ意味に取られる。故に心理學はその語義から言ふと心に關する科學といふことになる。若しかやうに心理學を定義すると、心といふ或る實體が存するか否かの如く誤られ、人間の生々したる精神活動を研究する科學とは考へられない虞がある。又意識の學と言はれることもあるが、これは無意識的行動を除外するかの如き嫌ひがある。或る人は行動の學と定義するが、これも身體の上に現はれた行動のみを取扱つて、意識の方

面を排除するが如く誤られるやうである。故に茲では精神生活の事實と法則とを研究する學と定義しようと思ふ。もつと簡單に言へば心理活動を研究する學と言つてもよい。

かやうに定義すると尙ほ問題になるのは、心理活動とは何かといふことである。色を見たり音を聞いたりする心的現象と、光波や音波に關する物的現象とを對立せしむると、その間に判然たる區別の存することは誰も承認するであらう。然し吾人が色を見るには眼球と神經系統との活動を要し、音を聞くには耳と神經系統の活動を要する。單言すれば其等は凡て物的現象の一たる身體活動に因りて生ずる。心の活動は身體の活動に依りて行はれ、身體の活動も心の活動無くしては完全に行はれない。心身の關係については古來哲學者の頭を悩ました問題で、今猶ほ論争が続けられて居る。然し心理學に於ては心身二元か一元か或は兩位相かの議論を棄て、其等は哲學に譲り、二個の現象の存在を假定する。但しそれは兩者が並行するとか共在するとかの意味でない。心的活動には必ず何等かの身體的活動を伴ふものであるが兩者は相互並行して活動すると限らない。又心と身體との全く異なる現象が共在すると考へることも出来ない。即ち人間には數學の

問題を思考する時の如く心的活動が主として働き、食物消化の如く身體的活動が主として働く場合がある。而して前者に於ても吾人の腦髓その他の活動に依りて思考は生じ、後者に於ても消化の順不順は氣分に依りて影響を被る。實に吾人は消化しつゝある間に思考すと一唯物論者が言つたのは一面の眞理である。故に心的活動といひ、身體的活動といふも、凡て人間の活動で、便宜上二個の活動に分類したに過ぎない。

第二節 心理學の研究法

精神生活を知る方法として、これまで心理學で採用せるものは觀察法である。而してその觀察の對象よりして、主觀的觀察又は反省法と、客觀的觀察法とに分類されて居る。

主觀的觀察法の最も簡單なる一例を取ると、電燈の強き光を一瞬間見つめたる後、眼を灰色の壁の方に向け、その所に輝く光を見ることが出来るか否かを觀察する場合である。これは積極的殘像の觀察であるが、その殘像の光度、色、持續時間等を報告せしむるものである。この種の内

省的研究法が從來最も多く行はれて居たもので、これは意識内容の分析である。しかし一層深く反省して見ると、見る色や光の外に、それ等を見せしむる作用又は機能のあることに氣付く。尤もこの内容と作用とは日常の經驗の上には區分されることなく、全體的經驗として經驗されるが、反省分析して見ると二つに分れるのである。而して内容の方は觀察し記述することが容易であるが、作用の方はそれが行はれて居る間に、同時に觀察し記述することは出来ない。その經過した直後に追想するより外はない。従つて内省法に依る研究は比較的經過の遅くて内容の顯著なる知覺、表象、思考等が多く向けられ、内容の不明な作用の強烈なる衝動や感情の研究は餘り進歩しなかつた。かやうに内省法に於ては記憶を辿ることから往々誤謬を生ずることがあり、且つ觀察者の間に不一致を來たすことが多いといふことから、行動心理學者は内省法を心理學研究法から全然排斥して、客觀的觀察を唯一の研究法とするに至つた。しかし吾人の複雑なる精神生活の中から意識の部分を除き去して、純粹に刺激と反應のみから研究することの不完全なことは明白である。

次に客觀的觀察法の中で最も代表的のものは動物心理學に於ける觀察法である。言ふまでもなく動物は自己の精神内容を内省したり報告したりすることが出来ないから、吾人は外部に現はれた行動に依りて、動物の本能や智能を研究する。兒童心理學に於ても、大部分は客觀的觀察に依りて兒童の精神生活を研究する。異常精神生活を對象とする異常心理學も亦異常者の主觀的觀察を信賴することが出来ないから、客觀的にその行動を觀察する。正常の大人に於ても客觀的觀察が精神現象を理解するに大切な方法になつて居る。例へば悲哀とか喜悅とかの情緒を研究しようとするには、他人の容貌、言語、身振等に注意することが大切で、特に言語は精神表現の一要件であるから、心内の機微を窺ひ知るに都合のよいことが多い。然しこの方法で得た結果を解釋するには、先づ自己の經驗即ち内省して得た結果を基礎としなければ誤謬を生じ易い。

主觀的並に客觀的觀察は精神現象の自然の生起を待つて行ふことも出来るが、尙ほ完全な結果を得ようとするには、種々の方法に頼らなければならぬ。第一は實驗法で、精神現象を生ずる條件を統御し、性質上又は分量上に及ぼす條件を系統的に變化し、精神現象に於ける影響の結果を

知る方法である。例へば記憶の實驗を行ふに當りて、一定の條件の下に、或る文章を暗誦するやうに命じたとする。而して被験者の記憶した分量や、記憶に要した時間を計測し、又その間の内省をも記録する。その次に同一の被験者に他の文章を暗誦せしめ、或は條件を變へて記憶せしめたりして、記憶の分量や時間を計測し、且つ内省を報告せしめて、前の場合と比較してみると、吾人は材料の相違や、條件の變化が記憶の量や質に如何に影響するかを知ることが出来る。かの個人の素質を知るに用ゐらるゝ各種の精神検査法は實驗に依る客觀的觀察である。被験者は一定の作業を行ふやうに命ぜられ、實驗者はそれに對する被験者の作業の結果並にその作業に要する時間よりして、被験者の作業能力を知ることが出来る。

第二は比較法で、個人、學級、團體、民族等の精神生活を比較して、その間に共通の型があるか、或は如何なる例外があるかを觀察する。或はその間に存する標準や平均を研究し、各自がその標準や平均よりどの位相違するかを觀察する。尙ほ進んでは各種の能力の間の比較を行ひ、動物と人間との智能を比較したり、各教科の間に共通的に存在する一般能力や、特殊の作業のみに

現はるゝ特殊的能力を研究したりする。或は脳量や頭圍等と智能の關係を人間の間に研究したり、又は動物と人間との間の比較を行つたりする。大脳皮質の構造を顯微鏡的に觀察比較を行ふことは生理學に屬するが、心理學者に於ても忽にするには出來ない。

第三は發生的研究法で、これには個體の發生を觀察するものと、種族の發生を觀察するものがある。前者は年齢の増加と共に、例へば新生兒、幼兒、兒童、青年、成人、老人等となるに従つて、精神生活が如何に發達、變化して行くかを研究するものである。後者は動物、歴史前の民族、現代の野蠻民族を通りて、吾々の如き文化生活を營むに至るまでの精神發達の徑路を觀察するものである。例へば言語、道德、宗教、藝術、慣習、政治等の發達は、民族心理學的に研究しなければ完全なる理解を得ることが困難である。

第四は異常現象の觀察で、吾人正常者に起る一時的の異常現象を觀察したり、或は往々天才家に現はるゝ變質徵候を研究したりする。白痴、低能者、犯罪者の行爲の觀察は勿論のことで、精神病者の行動の觀察も必要である。近時精神分析學の研究に依ると、夢、忘却の如き日常有觸れ

て居り、然かも一般に注意されなかつた方面の觀察も重要であることが明かになつた。従つて心理學は精神病學に負ふ所が非常に多いと言はなければならぬ。

第五に傳記、自叙傳、日記、藝術的作品等の研究である。吾人の精神活動は有意味であり、意味即ち價値の追求であるから、精神作用の方向を知るには、具體的な精神記録による方が最も便利である。尤もこの種の資料は以前は分析的要素の發見に用ゐられて居たが、近時精神構造は意味の關聯のみより理解されるとの精神科學的心理學の主張、合目的性並に全體性より精神生活を説明せんとする形態心理學の見地が、承認さるゝに従つて、以前の取扱方とは趣を異にし、且つ遙かに重要視されるに至つた。

現實の人間を認識する方法は凡て二つの極端の間を動いて居るやうである。その一は物理學的方法と他は傳記的方法とである。物理學者は彼の對象を完全に支配せんと努め、對象を部分から建設し、全部の特質を數量的に決定し得ると考へ、その關係を一般的形式によりて示し、その形式に一々の數を當てはめ得るとする。完全なる知識は物理學者に取りては、將來の状態を精密に

豫じめ計算するやうになることである。物理學者の不變數、例へば重量の加速度、特殊の溫の如きは經驗に基づくもので、一般的命題から合理的に導き出されない。しかし經驗される變化は、大さや状態の決定の中に變化するから、計算によつてそれを支配し得ると考へる。故に物理學に入りくるものは、理性から導き出されないが、數學的思考から凡て決定される。これに反して他の極端たる傳記學者は偉人の經驗や運命を理解せんとする。彼は事實の證據や、説明の正鵠に就ては科學を使用する。しかし彼が集めた一々の状態を物理學上の不變數の如く、數字の上に持來たすことをせず、追體驗し、生活全體に對する意味に於て理解するやうにする。傳記がその目的を達したといふことは、細かく叙述された一々の生活を吾人が理解する時であり、その統一を捕え、出來事、體驗、個々の事實の多様なことを共體驗 (Erfahren) する場合である。しかし吾人が要素を捕え、その要素によりて他のものを構成することが出來、又その所興の結合よりして尙ほ廣い出來事の經過に適用し得るといふ如き意味の支配は、傳記の中に少しも無い。傳記が完全にその職能を發揮し、且つ吾人がそれを理解するだけの十分な能力を有する時には、一々の生

活が吾人自身の如く全體的に理解されるものである。故にこの種の認識は同等的 (gleichstehend) のものと言はれて居る。

心理學は一面に理解の科學であり、人間を同等的に認識しなければならぬ。しかしそれと同時に一般的概念と法則に對して努力する。それには物質を取扱ふ際に類似せる認識を精神生活の中に適用することによりて可能になる。尤も物理學の對象の如くに、心理學の對象は完全に數學化する事は出来ないが、比較的單一なものを要素として取扱ふことが出来る。而してその分析し難い心的特質は恰も算術上の單位の如く取扱はれる。生物淘汰説では生物の繁殖、形質遺傳、趨異、順應力等は分析されないものとし、統計學では出生、結婚、自殺者、犯罪者を分析しないで取扱つて居る。これ等の場合に理解し難く、分析し難いものは、一定の捕捉し得る特質、作用、又は作用能力として示され、研究に對しその主要點が不變化に止まるので、單位として取扱ふことが出来る。しかしかやうな研究は機械論的證據を必ずしも基礎としない。即ちその外部關係よりして、事實の本質を明かにし得るかの如く考へもせず、或は往々機械論に歸し難いものまで

も機械論的に説明せんとするものでもない。寧ろ事實の本質と吾人の認識の本質との研究は、機械的に解し難い生活や精神の特質に氣づかしめる。それで研究者は現象を支配的に取扱ふ時にも、この考へ方に影響され、要素の外に全體又は形態が存すること、個々の特質の外に形態質があることを認めるやうになる。

故に心理學の研究に於ては支配的（解剖的と構造的）部分と、同等的（理解的と描寫的）部分が獨立して行はれるのではなく、一々の研究、一々の研究行爲に於て、二つの態度は結合せるもので、只ある時は一方が優勢になり、ある時は他方が優勢になるものである。理解されたものが報告され、それが他人の理解によりて證明される時には、それは一般的概念を形成する。しかし一般概念の下に包括することは、對立、疎隔、支配の發端である。逆に感覺や快感の如き心的要素、快感が快的興奮に移り行くこと等は、それが精神的關聯である時に理解され、共體驗され得るのである。若し支配する成分を除去するならば、科學を放棄して藝術家的な見方に精神を敘述することになる。これに反して理解を除去するならば、心理學たることは止まりて、物理學の模

傲を行ふことになる。理解的認識によりて吾人は有意味的、合目的なる精神生活を知ることが出来る。故に精神科學派のいふ如くに、理解と説明とを對立せしめ一方は他方を排除するかの如き研究の仕方は不完全であり、又形態心理學でいふ如くに、要素と形態とを對立せしめ、要素の分析を不必要の如く考へることは當を失つたもので、かゝる對立を超へて吾人は研究を進めなくてはならない。かやうな研究的態度を今少しく明白にするために、更に章を改めて輓近に於ける心理學上の根本見地の變遷を述べることにする。

第二章 學說と分野

第一節 心理學說の變遷

第一構成說

心理學は長い間哲學の一部として取扱はれ、獨立の地歩を有して居なかつた。しかし心理學が

哲學より分離するに至つた端緒は遠くアリストテレスにあると言へる。氏は後に聯合の法則と言はれた事實に氣付いた。氏によると觀念は類似、反對、時間的繼起の爲めに識得されるとする。事物は他の事物と聯關することによりて記憶される。極めてよく似て居るものが全く異なる事物は容易に聯合される。同時又は繼續的に起る出來事は結合する傾向がある。意識經驗をかゝる一般の觀察によりて説明することはヒュームやハートレーの如き哲學者に於ても表はれ、聯合説は心理學の主なる原理を述べたものと考へられて居た。

ヒュームやハートレー以前に於ても、哲學者は心を以て一定の區劃に分け得ると信じた。十八世紀に於てウォルフが構成した能力説は、それ以前に漠然と承認されて居た。この考へ方の便利なことは否定出來ない。感覺、記憶、思想、情緒、意志は眞の力であり、その能力の發現が反應であると考へ、心の一々の屬性をそれによりて分類した。近世の心理學者が本能の數を減少する傾向がある如くに、能力説の主張者は多數の能力を少數の主なるものに縮少し、有勢でない能力は從屬的のものとした。かくして、知と情と意の三つが經濟的分類の主題目になつた。總ての心的

屬性はそれぞれ所屬の部門に分類され、精密に各種の機能が圖解された。しかし單なる分類では十分でなく、それは何物をも説明しない。事物の名稱を發見して、それを適當の所に配置することは、少しく混雜を避けるに過ぎない。近世の心理學者は心の機能を以て分離した能力の集合とせず、一の單位であると考へる。能力心理學者の人々は分類にのみに熱心であつた爲めに、形而上學的争闘によりて分裂を來たし、科學に於ける好評を失ふに至つた。

しかしヒューム及びハートレーに取りては、全宇宙は印象と觀念との集合であつた。物質界並に精神界に於ける總てのもの、要素たる印象と觀念とは心の種々の機能によりて結合される。この考はヘルバルト、ミル父子、スペンサー、ベーンにも影響し、一世紀の間英國心理學の主なる潮流は聯合説によりて支配されて居た。彼等によると、各の觀念は獨立し、且つ多少永久的な實體である。而してそれは他の觀念と聯合することが出來、一方の觀念の群が再生する時には他の觀念もそれと共に再生されるとする。總ての心的現象は、觀念の永久的實在と聯合力との二つの特質によりて説明され、觀念は常に本質上殆んど機械的であり、従つて心的生活に於ける發動力であ

るといふ如くに、前提を結論にまで持來たすに至つた。

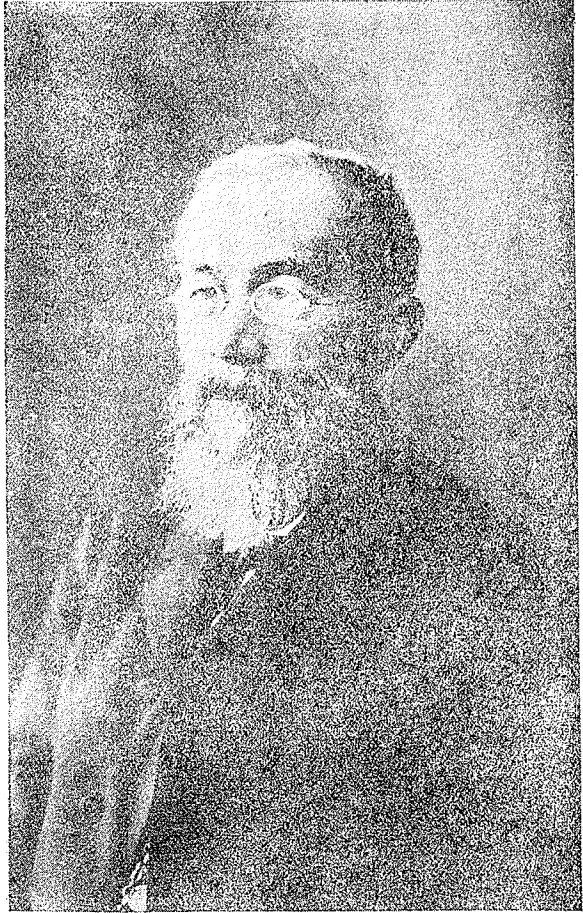
十九世紀の終り頃までは聯合説は英國に於ける主なる學派であつた。この説が思想として分裂を來たしたのはブラッドレーの批判に基いて居る。その後ムーアは聯合説の批判を總括したが、殊に氏は、聯合説が心的實體の單位としての能力に對して觀念を置換へたに過ぎないといふ事實を強調した。聯合説は觀念の本質を全く誤解して居る。觀念は永久的事物でなく、心的生活の經過的位相であり、一の觀念はその時に於ける一の出來事である、意識の流は時々には表はれる變化によりて影響され常に變化するものであると氏は主張する。結局氏は心的生活の總ての複合體を聯合の原理によりて説明することは不適當であると考へた。

數百年間親密の關係を持續して居た哲學と心理學との間が分裂を生ずるに至つた。その分裂を引起さしめた、生物學は哲學並に心理學の會合點となり、又生理學者の言は法則となつた。心に關する總ての研究者は彼等の指揮を待つ有様であつた。生理學者は觀察の技術を發達せしめたが、それは永い間期待されて居た方法であつた。茲に於て心の神祕はそれ自身觀察される時に知

ることが出来る。有機體の本質は反應の術語に於て記述され説明されなければならぬし、刺戟と反應とは漠然たる能力として議論することなく測定さるべきものになり、抽象的概念であつた心はそれ自身で研究しなければならなくなり、心理學者は有機體の行動を觀察すべく生理的實驗室に立て籠つた。

この變化に對して準備を與へた科學者中の最初の者は、ドイツではミユラー、ウェバー、ヘルムホルツ、フェヒネルで、イギリスではダーウィン、ハックスレー、スペンサーであつた。これ等は生物學、物理學、解剖學に集注した人々であり、且つ心理學者として知られては居ないが、心理的研究の性質と内容を變化せしめたものである。若し集團的に言へばそれ等の人々は生理的心理學の學派といふことが出来る。生理的心理學者の見地は科學の一分派以上に出で、總ての研究の面に浸潤して行き、論争者の間に承認されるに至つた。尤もそれは獨立せる科學として認められたのでなく、一方からの接近に過ぎなかつた。十九世紀を通じて心理學は漸次形而上學から遠ざかつて行き、殊に生物學がその結合を絶つやうにした。

圖 一 第



ウィルヘルム・ゴット

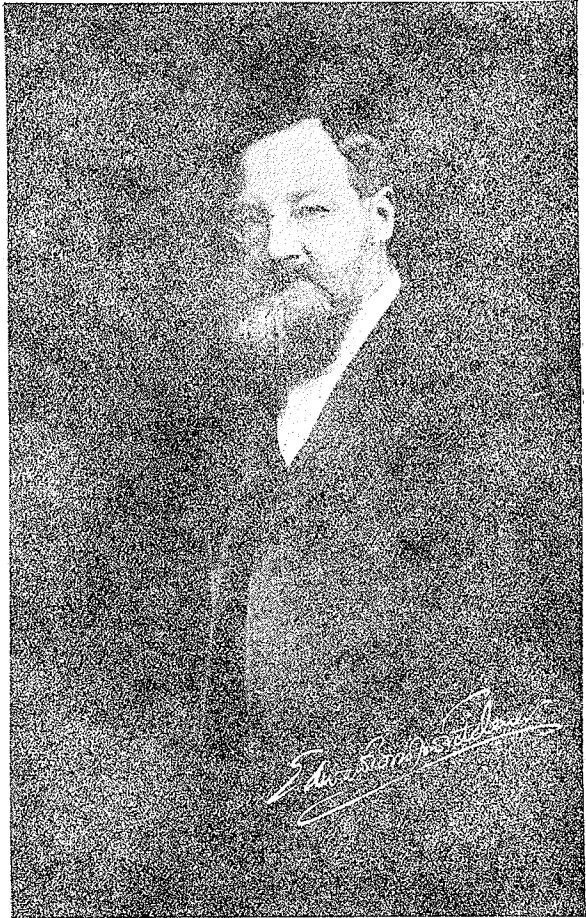
總ての説明と叙述とは未知の觀念よりも現實の構造に就て行はれ、意識の現象は純粹の要素として考へられ初めた。心的現象と身體的現象との間の共應が認められ、精神生活の量的並に質的測定が、構成心理學者によりて初められた。この見地は構成説 (Structuralism) の學派によりて取扱はれ、その指導者はヴァントであつた。氏が初めて建設した心理學實驗室には、テイチェナーやキェルペの如き型の人々が集まつた。茲に於て心理學者は觀念論者たるべきか、或は實在論者たるべきかに就ての哲學者間の長い間の論争が解決された。ヴァントは單に一心理學者たることで十分であると考へた。氏の經歷が實に十九世紀の後半に於ける心理學の方向を示して居ると言つてよい。氏は最初醫者としての教育を受け、哲學博士の學位を得、物理學者ヘルムホルツの助手になつた。氏はチューリッヒの哲學教授たるために物質に就ての科學を捨て、心理學を構成するには圖書館は無用であるとし、實驗室に於ける現實の經驗の研究が眞理を持來たすものと考へた。かくして哲學者たる氏は心理學を哲學より獨立せしめ、立派な科學にしたのである。

ヴァントに取りては假令生理學的方法であらうが、無からうが、それには無頓着に如何なる方法

でも利用し得べきものならば、心的現象の研究に使用することが一の本務であつた。それで氏は感覺に就ての研究を初め、感覺に於ける要素、例へば強度や質の分析を行つた。氏は個々の成分の分析に細心の注意を拂つたとは言へ、それ等の内的相關による現象の複雑なる結果を看過して居ない。例へば氏は情緒を以て感情の連続と等しきもので、別々に觀察は出来るが、それ等の全體の複合物であると考へた。ヴントの繼承者は氏の説を餘りに變化せしめないで採用し、キュルペの如きは後にヴントに反對したとは言へ、心理學を以て個人の經驗に基づく事實の科學であると定義した。氏は生理學は心的事實の完全なる説明を與ふるに不適當であり、實驗、觀察、内省の一層重要な方法を共に用ゆべきであると考へた。而して氏は常に分析を強調した。

ティチェナーはヴントの最も忠實なる弟子であり、全くの構成説者であつた。氏にとりて構造の分析、心的動作の叙述は全く定言的であり、經驗は心理學の取扱ふべき材料であつた。構成派の人々は、要素とその屬性とを複合し關聯して居るものとして取扱ふ。今日の心理學の語法では最早構成派の分類を用ゐなくなつたが、彼等の實驗の結果は非常に價値あるものと認めて居る。

圖 二 第



エドワード・ビー・ティチューナー

又テイチェナーは構成的方法を用ゐては居るが、構成的といふ語は心理學の資格を示すものとして
は廢たれたと言つて居る。構成説に對する現時の態度はブレットがいつた如くに、ヴントの畢生の
事業を輕視するのではなく批判を試みて居るのである。

已に述べた如くキュルペはヴントの教義に反對した最初の人である。氏の反對は氏がヴントの
主要なる原理を承認し、それを高等精神過程に適用して居る點で全然革命的のものとは言へな
い。事實上キュルペの率ゆるヴルツブルグ學派のものは、その主人によりて破門されなかつたな
らば、ヴントの實驗室の一分派と考へたかも知れない。キュルペは感覺、注意、知覺、記憶、聯
想、行爲に就ての研究は十分であるとし、尙ほ複雑なる心的過程に研究を向けることによりて心
理學の領域を擴大する必要があると考へた。かくして氏は努力を内省に集注し、總ての實驗は内
省的報告の分析の形式を取つた。高價な感覺測定の器械は願みられず、被験者の報告が高等思考
過程を測るに十分であるとされた。その方法の一つは、先づ問題を提出し、被験者をしてそれを
解決せしむるのである。例へばバラの匂とそれの外姿といづれが氣持がよいかといふやうな質問

を發する。その答が得られた直後、或は思考の中途に於て、その解決を求めた心的過程を叙述せしむるやうにする。

キェルペはそれを系統的實驗的内省と名づけた。ヴァントはこの方法は論理的に不完全であると攻撃した。しかし千九百九年にティチュナーはキェルペの實驗を以て、特殊の問題態度、發見された説明の原理、證據によりて與へられた無變改の内省と評價した。かくしてヴェルツブルグ派の人々は心的過程の質的分析に於てヴァントの考から遠ざかつて來た。例へばキェルペは心的内容と心的機能とに分ち、吾人の見る色彩や形體は心的内容であり、色彩や形體を見る心的作用が心的機能であるとする。氏は又内容が同一でありても機能は異なることがあり、機能は同一であつても内容が異なることがあるから、機能と内容とは比較的獨立をして居ると言つて居る。従つて内容の分析を主とするヴァント流の研究に飽き足らなかつたのは當然である。尤もヴァントに於ても注意とか統覺とか類化とかの作用を認め、或は精神活動の一法則として創造的綜合を述べては居るが、ヴァントの主力を用ゐたのは要素の分析であつた。それでヴェルツブルグ派の人々は前述の如く

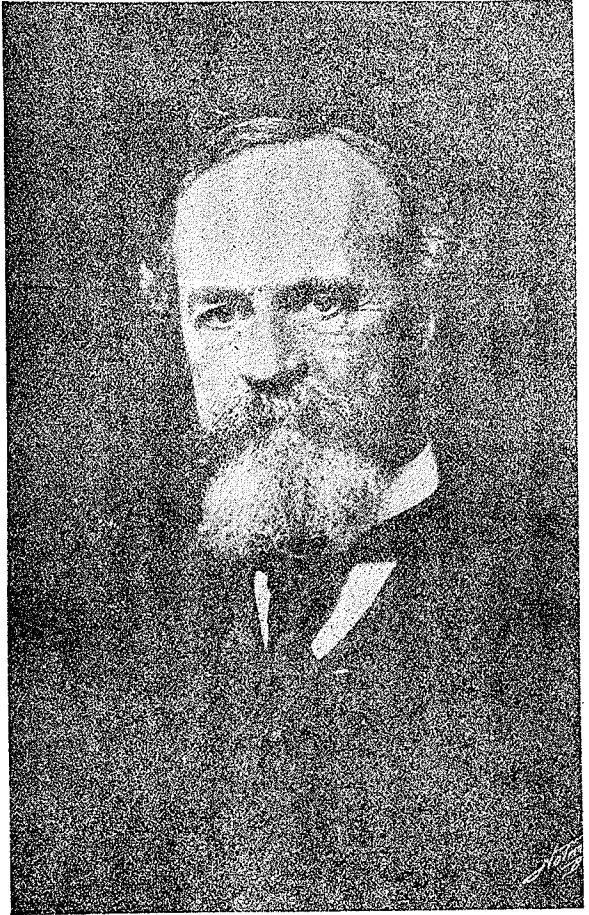
ザントの研究の仕方に反旗を翻したが、しかし全然反對の立場にまで走らなかつた。謂はゞ今日の形態説への過渡であると言ふことが出来、又一方に機能説への橋渡しになつて居るとも言へる。

第二 機能説

科學の主なる方法が分析であるといふことに異論を生ずるに至つた。構成説が一定の實驗的方法を取り、多くの異つた方法を許さないことに、この説の制限がある。構成説者は實驗を行ふ際の條件を記載する。所が動物の實驗に於て、影響を及ぼす成分を除去することが如何に困難であり實驗者の總ての豫定を打破ることがある。それは構成説者の實驗に於ても同じく免れることの出来ないものであつた。構成説者の取つた分析の方法はその初めに於て已に疑問を生じた。デュウイーの如きは構成説者の方法に同意し得なかつた一人である。この不同意の團體は、經驗を構成する要素を研究する爲めに經驗の眞の流と事實の研究を棄てることをしなかつた。彼等は構成派が意識の連續を破壊したことを論じ、分割したものを再び集めんと試みた。即ちこれ等の機能説

者 (Functionalist) は構成説者と反對して、意識は靜的のものでなく、一の過程を分析することはその文脈から孤立せしむることを意味し、孤立して存在する時には何等の意義を有しないことを主張した。

機能心理學者として一般に言はれるジェームスは、一度過ぎ去つた状態は再び起ることが出來ず、又以前にあつたものと同一のものたり得ない點を強調する。吾人の心は感覺と知覺とを替へることに忙殺されて居る。吾人の感受性は絶えず變化して居るもので、數回知覺した同一對象は何時も同一の感覺を生じない。多くの間接的考察によりて、それが同一なることを推定し得るのである。精密に感覺を測定するには、感覺が不變化の腦髓の中に再び生じなければならぬとジェームスは述べて、構成説者の爭論を攻撃した。生理的にそれは不可能である。蓋し意識に於ける變化は單一感覺の受容に變化を引起すからである。心は決して精密に同一でない。變化することが心の機能の一部である。かやうに論じてくると、構成説者が高等精神過程を測定せんとしたことは、尙更その根據を失ふことになる。



ウィリアム・ジェームス

心の變化はそれの具體的全體的仕方にて觀察されなければならぬとのジュームスの主張は、機能説者全部の挑戦を言ひ表はして居る。氏によると思想は連續的である。氏の思想流は機能説者の研究領域の全部になつた。適切なる譬喩を用ゐて、機能説の態度を氏は述べて曰く、在來の心理學は恰も川の流が一桶、一匙、五合鉢、一斗鉢に満たされた水、或はその他の形體を取つた水から成り立つて居るかの如く述べて居る。桶や壺を流の中に立てたとしても、自由の水はそれ等の間を通りて流れて行くであらう。この意識の自由の水を心理學者は全く看過して居る。心の中の一定の像はその周圍を流れる自由の水の中に浸され着色される。その像に對する近き又は遠き關係の感、それが何處から吾人の所に來たかの終末の反響、それが何處へ導かれるかの開始の感がその像と共に生ずると。

二十世紀の初頭に於て、この見地の結晶を見た。歐米の心理學界に於ける巨匠は機能説の旗下に集まつた。ジャッド、ソーンダイク、マクデューガル、スタウト、エンジェル、ヘフディング等は種々の方面から機能説の建設に貢獻した。機能説者は構成説者と同じく哲學よりの獨立を反復し

彼等も亦ヴァントと共に單に單に心理學者たることを主張した。形而上學の痕跡だも彼等の原理に附けないことを斷言し、只觀察によりて發見され、經驗によりて證明し得られるものゝみを求めた。

しかし意識の流といふ如き術語の中には未だ形而上學の微光が残つて居る。

機能説者が非常な吟味をした内省は、根底に於て不明に止まる他の術語に過ぎないことが證明された。自身の心の内を眺め、それを精密に報告することは、眞の科學によりて要求される客觀的精密を缺ぐことになる。結局何れの内省的觀察もそれを行つた人間によつて變化する。これ等の報告の無限の變化が科學よりも寧ろ混亂を産み出すやうになる。機能説者が在來の心理學に叛旗を翻した時に、最初の心理的現象の研究に對する主なる態度を維持することが出来なかつた。その代りとして、彼等は心的要素を綜合せんと求めた。しかしその綜合は構成説者の見地の補充なくして成し遂げられることが出来なかつた。單言すれば機能説は十分に構成説を脱することが出来なかつたのである。

尙ほ興味ある點は新興の形態説とジュームスの心理學と極めて一致して居ることである。今ジュー

ームスの巧みなる例を述べると、子供に取りてレモナードの味は最初單純なる質として生ずる。彼は後になりて酸いとか、冷たいとか甘いとかを區分して認知することを學ぶ。これ等の特質は要素的感覚として考へられて居るが、最初はレモナードの風味といふことに融合されて居る。子供の心は單にレモナードの風味を喜んで居るもので、それが後に成長してその風味を分析するやうになると、形態説者のコフカが、同一の外的状態は全く異つた現象的内容から生ずるかも知れないといひ、又有意味の統一的全體として以前に表はれたものが、同一状態に於て無意味の感覺として表はれたことがあり得るといつたことは、ジェームスの例と主要點に於て一致する。尙ほジェームスは純粹の感覺は抽象で、吾人の感官に影響する事物の質は感覺より以上のものである。それは過去の經驗によりてその器官の組織に基く脳半球に於ける過程を引起す。その結果感覺を暗示する觀念として通常意識の中に叙述されると言つて居る。この組織の語は形態と似た意味を有する。

かやうに機能説と形態説とは要素の心理學に反對したことに於て相同じであるが、しかし機能

説の方は單に機能の方面を力説したゞけで、その取扱ふ内容は依然として構成説の要素的材料であつた。これに反して形態説に於てはその取扱ふ内容が已に統一的構造的の形態で、要素的材料でないといふ點に大なる相違がある。

第三 行動説

二十世の初頭に於て、心理學の主なる見地に就て異論を生ずるものが増加して來た。數年の内にそれが明白になり、千九百十二年に行動説 (Behaviorism) の主張が表はれた。行動主義者は、心理學は總ての人間行動を研究の對象とする自然科學の一分派でなければならぬ。人間が實際に行ふものが總ての心理的研究の對象たるべきで、その間に何等の憶測を加ふべきものでないと主張する。しかしこの主義の表はれる以前に於ても觀念を取扱ふ心理學に不満を懷くものはあつた。分析と内省とは行動を理解すべき原理を與へないとし、行動の問題は漸次に心理學者の特殊の領域になつて來た。五十年前スペンサーは已に今日の行動説を豫想して居る。生物學者は一般に行動主義者によりて強調される教義を實際に研究して居るもので、例へばロエブの生命の機械

第 四 圖



フ ロ ヴ

觀は嚴密なる客觀的方法に對し暗黙の支持を與へて居る。

全く異つた方面から機械的見解を主張するものはロシアのバヅロフとベヒテレフとである。この種の研究を反射學 (reflexology) と言つて居るが、その根據は總ての行動主義者の原理と實質上同一である。彼等によると感官ですら意識の道具でない。如何にそれ等を機械的に論じて居るかはその術語を見ると分かる。味の感官は化學的受容機官であり、耳は聲音受容機官であり、眼は光の受容機官であるといふ如くに、新しい命名をして居るが、これは心理學に於ける在來の主張と如何に一致し難いかを示すと云へる。

ワトソンが心理學に於ける新舊二派の分離を明示したのは千九百十三年であつた。氏の註釋によると、行動説は在來の總ての心理學説よりの極端且つ急進的な出發である。即ち第一に驚くべき主張は、心理學の取扱ふ事項は心でも又意識でもなく、實際の行動であるとする點である。それで氏は先づ内省法を放棄した。口善惡なき批判者の中には、ワトソンが在來の内省材料の夥しく多いのに驚いて、勞力を省く方法を案出したと言つた者すらある。



ジョン・ピーワトソン

かやうに解放された心理學は二つの主なる問題を解決し得ると行動説者は辯明する。第一は一定の反應を引起す成分を決定すること、この原因的成分即ち刺戟は行動説者の尺度によりて決定され計測され得るとする。第二は第一が決定された後に生ずるもので、反應の豫示に關係する。かくして行動説者は研究者と豫言者との二つの役目を演ずる。即ち何れかの行爲の原因が調査されると一々の刺戟によりて如何なる種類の反應を生ずるかを豫じめ知ることが出來ると主張する。しかし單純なる刺戟に反應する如き有機體は無い。如何なる簡單なる生物と雖、複合せる外部の影響を被る。それで單細胞有機體には注意されず、個體の極めて複雑なる統一的活動に對して大膽なる研究が行はれた。かやうに行動説者は最も複雑なる形式の刺戟を精密に觀察し初めた。

一々の行爲は先行の成分の倍加されたものである。これ等の成分を研究するために行動説者は被験者の内省の報告を便りにしない。それは信用の出來ないもので、寧ろ筋肉と腺との報告が遙かに正確であるとする。環境に對して行ふ個人の複雑なる反應は受容機關たる感官と、實行機關

たる筋肉及び腺の共應に基く。反應は所與の刺激に伴ひ、隨意及び不隨意筋の變化によりて支配される。而してその刺激と反應とは多數であるが、ワトソンはそれ等の凡てを四つ一般的範疇に入れてしまつた。即ち總ての反應はそれが見られるか否かによりて表白的と含蓄的とに分けられ、又それが先天的か否かによりて遺傳的と習慣的とに分類される。例へば歩行、身振、競技は表白的習慣反應であり、噴嚏、恐怖、激怒、愛情の本能等は表白的遺傳反應である。含蓄的習慣反應には思考や條件づけられた唾液反射があり、含蓄的遺傳反應には總ての腺分泌や血行の變化がある。

學習しない行動、例へば恐怖、愛情、憤怒の如きは本能の名稱を與へないで、無條件反射と名づけ、環境に對する順應により、或は生活の急迫により學習したものは條件反射と言つて居る。出生後に表はれる活動は發育變化と構造とに基づくか、又は練習と條件づけられることに基づくかである。習慣もワトソン獨特の分類を試み、内臟的又は情緒的、喉頭的又は言語的、手技的習慣との三種とする。人間が下等動物に優れることは、手を以て事物を取扱ふことを學習した爲め

である。手で行ふことの出来ないものを、人は聲音か又は腹部内の器官かで行ふもので、心で行ふものでない。對象に對する言語的代用物は、その對象の再認を示すから、言語そのものは思考過程であり、その機制は腦髓に於けるよりも寧ろ咽喉に於て研究しなければならぬ。喉頭は總ての言語的習慣を把任するから記憶の座所になる。單言すれば、これまで思想と考へられたものは、談話による喉頭の練習に外ならないと行動説者は言ふのである。

尤もワトソンは喉頭運動が思想に於ける唯一の役目を演ずるとは言はない。喉頭の除去は腦髓の除去と同一の結果を引起すと主張しない。しかし氏は含蓄的談話即ち思想に對する責任は表白的談話に於て學習した筋肉的習慣にあると言ひ、言語的報告と思考とが分離たる證據として、一人で居る時に絶えず話をする子供の例を擧げて居る。曰く三歳頃の子供は終日何か話をする。彼の欲求、希望、恐怖、苦惱、母や父に對する不滿をいふ。所が乳母や兩親の形式に於ける社會は「ひとり言をいつてはいけませんよ。お父さんもお母さんもひとり言をいひません」と注意する。かくして表白的談話は直ちに私語になる。唇の運動を上手に解する者は、この子供の唇を見て彼

が何を考へて居るかを判断することが出来る。ある子供はこの社會に對する讓歩をしない。獨りで居る時は聲高く獨語する。尙ほ可なり多くのものは、獨りの時に私語の階段以上に達しない。かの電車の中で本を讀んでゐる人や、獨りで座つて考へて居る人を見よ。しかし大多數の者は社會的壓迫を絶えず受ける爲めに第三階段に達する。「獨りで私語するな」とか「唇を動かさないで讀むことが出来ないのか」とか絶えず戒められる。それで過程は唇の後方に起るやうに餘儀なくされると。

しかしこの外に言語を有しない多くの情緒があり、學習せる又は學習せざる行動がある。従つてそれ等はワトソンの思考の中に入れることは出来ない。話すことを學ばず、又言語のないこれ等の事物は内臓及び腺の反應の中に潜んで居る。例へば恐怖は内臓の變化と代謝機能の破壊を引起し、愛情は代謝機能を増進する。換言すればこれ等の場合には腹部器管の混亂があるだけで、腹部器管は總ての説明し難き反應の貯藏所になつて居る。ワトソンの主張は一般に破壊的ではあるが、非常に新味を有する爲めに、多くの研究者の好奇心をそゝつた。しかし氏の主張を證明す

べき實驗的證據は未だ僅少で、今後の研究に俟つ所が非常に多い。それでマクヂューガルの如きは、行動説者は積極的の新しい原理を提議しないとすら批判して居る。

行動心理學の研究に幾分の變化を來たしては居るが、しかし、斷乎として主張する點は、人間意識は人間行動の研究に何等の價値を有せず、恰も鬼神學の如く不用であるといふことである。従つて精神分析法やその他これに類似の心の研究は無價値として放棄する。行動主義者に取りては異常精神も條件反射の結果が正路を失したとして説明し得るものでなければ存在しない。智能の遺傳に就ての多くの研究も時間の空費である。ワトソンは氏に新生兒を與へ、全く自由に教育を施すことを許せば、欲求する如何なる種類の天才も作り得ると放言する。この態度に對して最も憤慨するものはマクヂューガルで、かやうな考へ方をする者を科學の大なる方面に於ける一指導者の如く推稱することは實に困つたことであり、學界の不祥事であると言つて居る。

マクヂューガルは尙ほ行動説者が自己の宣傳することを實行しないと非難する。曰く活動に於ける動因の要素を認めないやうな振りをしながら、實驗にはそれを利用する、暗黙の中に合目的

行動を許し、結論を引出す時にそれを拒むことは大なる誤謬であると。更に動物心理學の權威者ケラーは動物が刺戟に對する反應として不連續の運動の系列を示すに過ぎないとすることを否定する。即ち動物には目的とする仕事に導く行動の連續の中には明かに統一があると主張する。

これは思考の指導力を意味する。學習せる行動又は運動の混沌たる連續の適用より以上のあるものが目的を完成する。これは行動をなさしむる筋肉と腺が、それ等を支配する心的過程に附隨せるものたることを證明するやうである。

要するに行動説者が心理學は行動の研究で、主觀的方法の代りに客觀的方法を用ゆべしと主張することからして、内省心理學者はこの方法とそれの取扱ふ主要事項は心理學でなく、寧ろ生理學であると攻撃したが、現時の研究者はその何れの方にも味方せず、雙方より研究を進むべきであると考えふものが多い。即ち現時の心理學は意識過程を離れた行動の研究は不十分であり、又行動を離れた意識の研究は不可能であるとし心理學上の論争は一方に生理學を基礎とするに至つた。能力と觀念、意志と知識等の語は殆んど跡を絶ち受容器官、感官知覺、神經通路、その他の

生理的術語が絶えず用ゐられて居る。かやうに生理學者の發見に基礎を置く團體の中には次に述べんとする形態説もある。

第四 形態説

形態 (Gestalt) といふ語は、英語にも適譯がないと言はれ、往々原語が使用される。これと生理學との密接なる關係は神經機能の解釋の中に發見することが出来る。しかしこの運動は近世心理學史の中に孤立した唯一の現象でない。形態質を唱へた學派は、通常の事項に新要素の意味を附加することによりて、知覺的複合體即ち高次の對象物を説明しようと試みた。所がマイノングの手に於て、その原理は論理的になり遂に認識論に變じてしまつた。ヴェルツブルグ派の思考過程に就ての研究は、ワントの心理學に於ける感覺、感情、統覺に對する反對であつた。しかしこの運動から何物をも結果しなかつた。作用 (Act) の心理學 (附録の條參看) や機能心理學又は行動心理學は、存在又は過程の心理學の横斷的分析を非難して、縦斷的に有機體の活動を説明せんと試みた。尙ほこの形態説に刺戟を與へたものゝ中、最も主要なるものは現象論で、これは精神

科學に密接に關係せる新しき敘述心理學の勃興を來たした。この心理學の對象は實驗心理學がなしたよりも一層密接に日常生活の事實に近よりて居る。茲に於てディルタイやフッサールの影響が特に方法の上に及ぼして居る。

フッサールは一九一〇年に心理學は物質科學を模倣してその方法を試むべきものでない。蓋し物質科學に於ける分析の方法は心理學の主要事項に導くものでないからであると主張した。ディルタイは一八九四年の昔、心理學はそれ自身に特有なる概念を用ゐる、それ自身の問題に適合した概念を用ゐべきことを述べて居る。これ等と同時代に又實驗心理學に於て、新しい見地より複合體や關係を取扱ふものがあつた。尤もこれは新系統を得るほど成功しなかつた。この人々の中でマイノングの後繼者は形態心理學と密接なる關係を有する形態質の語を使用した。實に一九一二年ウエルトハイマーが假現運動に關する實驗的研究に於て形態の概念を述べ、今日の形態心理學に發達するに至つた以前に、己にベヌシ、ヴィタセク、ヘフラ―等は質の語を捨て、形態に就て述べて居る。原子的結合の假説に立つ在來の生理的原理を不満足とし、一八九八年にはフォン・クリー

ス、一九一一年にはベツヘルによりて、從來の原理は、形態、關係、大さ、類似、一般的觀念、思想過程を説明することが出来ないとして居る。かやうに舞臺は一九二二年の新運動に對して用意された。

形態説者の批評の主なる對象は、科學的心理學の主なる武器たる分析的方法であつた。例へばヴント、ワトソン等の如き指導者は精神生活又は行動の直接分析は可能であると假定する。これ等の人々によると、直接分析は組織學者の解剖、物理學者や化學者の分解と比較すべきものと考へて居るやうである。所が形態説者は、この感覺的並に行動の單位を以て推論及び反省の結果とし、或はその事實に對する人爲的の實驗室的態度の產物であるとする。對象、意味、價值及び動的過程はかくして無意味の單位に分析され、それ等が最初に表はれたものとは全く別物になつてしまふ。所が形態構成は心理的研究の科學的方面から屢々排除されて居た。形態説者はミュラーの再生的傾向、作用心理學者の作用、行動心理學者の連鎖的反射及び聯合の規則によりては、假設的單位から複合せる組織が如何にして構成されるかを説明することが出来ないとする。分析に

圖 六 第



ウルフガング・ケーラー

對する他の反對は、分析したものを元の通りに綜合することは不可能で、最初の全體を説明するには何か附加的假定を持つて來なければならなくなるのである。かの視的對比を説明するにヘルムホルツは、無意識的判斷の假説を使用し、尙ほ知覺に新しいもの、發生することを説明するに、ヴントは創造の原理を用ゐる如きはその一例であるとする。

形態説によると、若し吾人が觀察の事實を眞なりとすれば、部分が全體を構成するとの假説は拒否しなければならぬ。蓋し系統發生的にも、又個體發生的にも知覺に與へらるゝ最初の材料は全體であるからである。ケーラーは絶對的單位に對してよりも、全體として見渡し得る状態に對し一層迅速に反應することを發見した。コフカによると、子供は他人の顔に對し、その色やその他の部分的の知覺を有する前に、顔全體を再認し反應することを學ぶといふことである。例へば三ヶ月の子供に幾何學的形態の簡單なる圓や四角を示しても何等の反應を示さないが、極めて複雑なる母や乳母の顔を認識する。尙ほ變態心理學の方面よりの證據としてフックスの例を引用して見よう。半盲症に罹れる患者に瞬間露出器を用ゐて圓の一部を提示し、網膜上の見えない部分

圖 七 第



クルト・コフカ

に、その圓の不完全の部分がかかるやうにすると、患者は全部の圓を見るであらう。形態説者はこの完成を以て形態の成全作用に基づくと説明する。分析の要素は經驗の眞の材料でなく、要素とか感覺とか部分とかは、人爲的實驗室の態度の結果で、そのために最初に與へられた組織は破壊されてしまふ。觀察者が分析的態度をとると、觀察の對象はその爲めに自然の材料から變化して自然的でなく、且つ一層貧弱なる組織を有する他のものになつてしまふ。この點に於てコフカは、注意や態度の變化は、明瞭度の相違を來たすが、事物そのものは不變化に止まるとする心理學者と意見を異にした。即ち表面の知覺が時として形 (Form) となり、又時として地 (Grund) となることは、一の新しき對象が新しい特質を以て表はれることを意味し、その表面が單に明瞭度を變化したことを意味しないとする。かの反轉する錯視の場合も同様で、反轉して表はれた圖形は全く新しい現象的特質を有するもので、注意又は明瞭度の變化と見るのは正當でないとする。

分析に對する他の反對は、組織の統一と特殊化とに關係して居る。若し形態組織が超總和的で、全體としてそれに屬する特殊の性質を有するならば、これ等の特質は分析のために失はれる。換

言すれば超總和的特質は、所謂部分の一樣な特質や活動の複合したものでない。ケーラーは曰く、吾人は空間の形が、その要素的視的感覚よりも一層多くの特質を有することを發見する。旋律とそれを構成する音との間にも同様なことが發見され、知的過程とそれを生ずる材料との間でも同様である。何となれば色や音の感覺、單一の語の意味は、空間的形、旋律、及び高等思考過程の一部として考へられると假定することは出来ない。視的圖形の精密なる印象、音樂的趣旨の特質、知的命題の意味や、色や音の感覺及び一々の單語の意味の總和以上のものを含んで居るからである。ウェルトハイマーの主張によると、形態構成は内部の法則によりて支配され、無意味の要素の總和的、偶然的、時間空間的接近に反對して居ると考へなければならぬ。この法則によりてのみ全體は合理的有意義的組織として説明され得るとする。

形態説者は又直接の分析が不完全であることを發見した。直接分析に於ては孰れの科學的方法の上になされた要求を満足せしめない。蓋し科學的方法に於ては吾人の資料に對して生じたものを統御し豫示することが出来なければならぬ。所が部分の知識からして眞の全體を敘述し、導出

することは不可能である。全體はそれ自身の特質を有するから、部分の知識から豫じめどんな全體が出来上るだらうとか、如何にその全體が働くかを言ふことが出来ない。形態説者は直接分析の代りにコフカの名づけた機能的分析を用ゆる。機能的分析の方法は、現象的材料を變化することの代りに、刺戟を制限することから成立する。刺戟と状態とに於ける變異は制御され測定されることが出来る。この場合には機能的状態と形態的状态とは同一と認めることが出来る。蓋し吾人が孤立した部分に對すると異りて、全體を認識し反應する場合には、敘述的に且つ機能的に説明しなければならぬことが觀察し得られるからである。

形態説者は又ワトソン、ソーンダイク等によりて主張された學習の行動的並び偶然的原理を攻撃して居る。形態説者によると、行動派の原理の主なる弱點は、知的行動がそれ自身には無意味である部分活動から成り立つとの假定に立つて居ることである。如何にしてこれ等の單位が意味あり目的ある行動に結びつくかは未だ説明されずに残されて居る。反射の偶然的結合は最初に提出された問題の正しき解釋と考へることは出来ない。偶然説は各の行爲をその成功に導くに意義

を與ふる目的の大切なことを見逃して居る。尙ほこの説の困難な點は、その説の背後に原子論的生理學が潜んで居ることである。即ちこの生理學では生理的單位が相互に孤立し、且つ全體の有機體から獨立して機能を營み、その有機的活動は部分活動の總和であるとする。所が形態説者は代表的の神經、筋肉、腺の過程は、刺戟と状態の分離せる方面に相應せる單一の單位から成立せず、寧ろ全體的組織の中に相關と相應とを有する全體過程として認めなければならぬと主張する。尙ほ偶然反射の原理は、偶然又は快の法則によりて聯合した筋肉及び腺の反應を、有機體の眞の行動であると看做した。而して行動の觀察は、説明さるべき行爲を喚起する根本状態とは全く無關係なる單位の觀察になつてしまつた。形態説者は分析的單位の術語にて敘述することの代りに、全體的動作の觀察に復歸することを求めて居る。

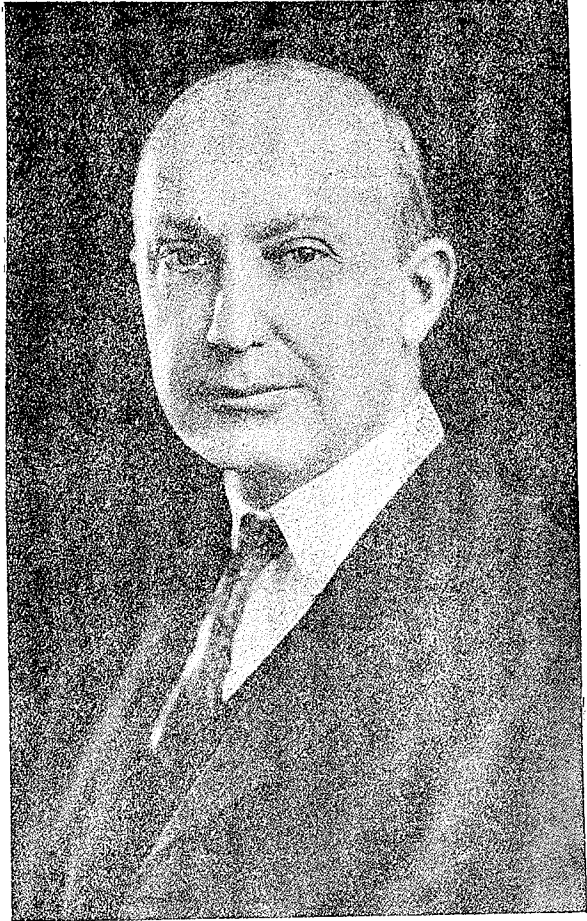
形態説が主張されるや歐米の研究者によりて幾多の批判を被つた。ハンターの如きは、形態説の方法は間接的であり、思案的であると評し、神經機能を進る點に價值はあるが、實驗生理學者の心理學に對する貢獻の方が遙かに大であると述べて居る。しかしドリーシュがいつたやうに見

代の心理學で、全體的見解を全然顧みないものは無い。只それをどの程度に採用して居るかに相違があるだけである。實に今日の實驗心理學の多くは、これまで無條件に通過すべき階段となつて居た要素分析を餘程控え目にするやうになつて居る。形態説は要素並に聯合の法則を極度に排斥して、それに代るに形態並に成全 (Ergründung) の法則を主張した。意識の内容並にその機能を説明する上に従來の學説よりも形態説が一步を進めて居ることは勿論である。しかし凡ての意識内容とその機能とを形態説によりて説明し得るかは今後の研究に俟たなければならぬ。今日の所では形態を解するには一方に要素の知識が必要であり、成全の法則を知るには一方に聯合經過を解しなければ不十分のやうに思はれる。

第五 折衷 說

以上述べて來た如く、構成説と機能説、意識の研究と行動の研究、要素心理學と形態心理學といふやうに互に相對立して論争をつゞけて居るが、これ等の諸派の長所とする所を結合して、折衷的方法を發達せしめた者もある。その中最も著名なものはウッドワースの動的心理學とシユテ

圖 八 第



ロバート・エス・ウッドウオース

ルンの人格的心理學であらう。先づ動的心理學から述べる。

動的といふ語を心理學に最も強く適用した最初は、千九百十年フロイドがクラーク大學に於て行つた講演である。この時にフロイドは個人に於ける内的推進 (inner drive) の概念を米國に輸入した。これは二三の心理學者によりて氣付かれて居た以外には、從來全く看過されて居た力である。フロイドの學説が米國に入つてから十年以内に少くとも三人の研究者が全く異つた方面から動的心理學の系統を發達させた。一はヴェルツブルク型の古典的心理學者ムーアで、二は精神病學者マッカーディーで、三は心理學者ウッドウォースである。

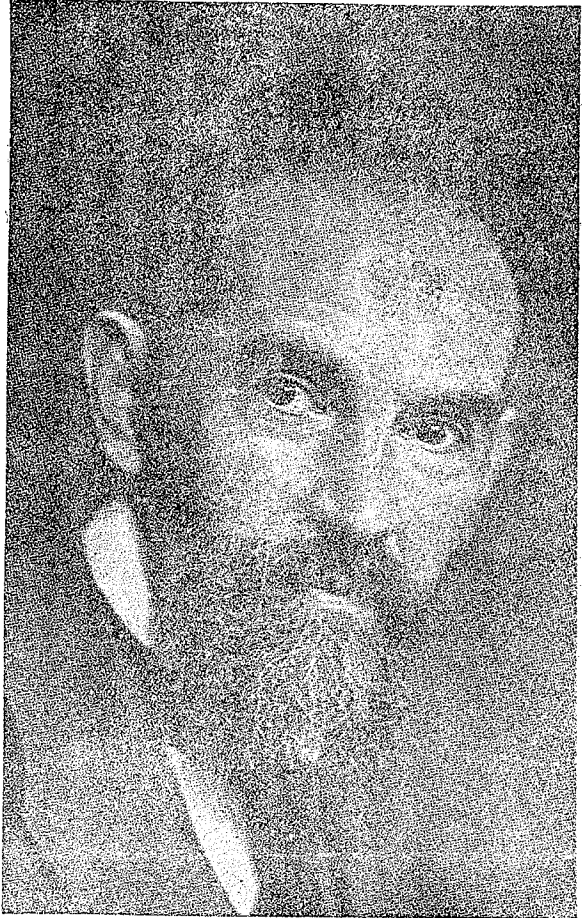
ウッドウォースは心理學の研究法として、一方に行動を客觀的に研究する外に他方に意識の内省的研究を許して居る。氏は殊に有機體が絶えず探求し努力すべく強ひらるゝ力又は推進に注意を向けた。しかしこの點を除いては何にも新味や創見はない。行動主義者や内省心理學者の得た材料を利用して、配列しなほしたに過ぎない。氏の動的心理學は折衷的であるとの非難を被むることを氏自身も許して居る。この包括的性質の爲めに氏は總ての思想を同格に取扱ふに最も都合の

よい地位を占めて居る。この態度に於て氏はワトソンの示すよりも一層廣い寛容を示すことが出来たが、その代りに折衷的態度は最も熱心なる支持者を得るには困難のやうである。

動的の考を最も強く言ひ表はしたものはマッカーディーの解釋したフロイドの概念である。氏の動的心理学は本能、動機、情緒、想像的思考の研究を含み、注意、知覺、記憶の如き一層靜的な機能を顧みない。氏はフロイドの動的態度に就て巧みなる譬喩を用ゐて曰く、吾人は自動車に於ける種々の機制を觀察することが出来る。啣子が如何にして曲柄を廻轉さすか、傳力が如何にして行はれるか、如何なる微動が行はれるか等を見る。しかしこれ等の凡ては機關が如何にして働くかを明かにしない。それは熱力学の問題である。心の靜知的機能は自動車の機制の如きもので、情緒的又は本能的機能はその熱力学の如きものであると。しかし氏の主張は茲に述べんとする折衷説の域を脱して居るから、これを省くことにする。若し動的心理学の内容を知らんとするものは、本書の附録を見らばいい。

折衷説の中で最も出色のものはシュテルンの人格的心理学である。氏によると、現代の心理学

第九圖



ウィリアム・シュテルン

は全體的考察の方に強い傾向を示すが、その全體といふことは人間といふことより以上に直接的、現實的、本質的の人間的存在はない。故に心理學を人格的に基礎づけることは、近世心理學の種々の分派を何等強ゆることなく包括し得るものであるとする。然らば氏のいふ人間とは何か。即ちその人間とは精神的と身體的との對立を超越したもので、獨立的に自己規定をなし、目的努力を行ふ意味に滿ちた全體である。かやうに人間を定義する時は、人間なるものは意識内容そのものでもなく、又身體機能そのものでもなく、精神的のものと身體的のものが互に獨立せずして存する究極の不可分のものを示すことになる。人間は實に精神身體的には中性のもので、精神と身體の根本的特質と機能とである。一般に精神的部分と身體的部分とに區分することは二次的のもので、それは往々科學的考察の目的から人爲的に孤立せしめたものに過ぎない。

身體的と精神的とに區別する前に存する人間の標識として構造がある。蓋し人間は種々の秩序に於ける部分全體 (Teilganzzahl) から豊富に組織されて居る多様の統一であるからである。即ち感官、機能、目的に向ふこと、行動の範圍、經驗等の總ての部分全體が、密か又は粗な透入に於

て、或は上位又は下位の配列に於て相互に關係して居る。而してその一々の部分全體の中には又同様な構造が行はれて居て、その中には下位の成分が、その特殊の位置と任務、即ちその存在を維持して居る。人間の組織はその中に何物も全く孤立したのもなく、又それは決して要素即ち根本的成分からも生ぜず、又その要素の總和的結合から成り立つても居ないで、非獨立的成分から生じて居る。全體は部分よりも一層初期のものであり、又全體は部分よりも一層現實的である。従つてこの考を心理學に適用すれば、精神生活は最も簡單なる意識の分子から構成されるとする在來の要素心理學を排斥することになる。

所がシュテルンは一方に差異的心理學の創始者である。差異的心理學は精神生活の相違並に趨異に於ける一般的形態と法則、性、年齢、種族、職業等による個人的特質、それ等相互の關係、或は個性を研究するものとする。故に差異的心理學に於ては精神生活の個々の状態を知る必要がある。所が要素心理學を排斥するシュテルンはこれを如何に調和させたかといふに、個々の状態の結合によりて全體を構成するものでないが、個々の状態を知ることによりて全體が一層明白に

認知されるとする。これは氏の提唱した心誌法の思想の中に特に表はれて居る。心誌は傳記と異なつて、統一的特質でなく、個人の中に存する特徴の多様性を明かにする個性研究の一方法である。氏はそれによりて心理學的一般圖式を構成せんと企てた。しかしこれは直覺的全體的に特質を捕へんとするものでないから、その圖式によりて人間の全體的性質を知ることが困難である。故に心誌は全體的性質を知るに幾分の補助を與へるものに過ぎないことになる。要するに要素的見地と全體的見地とを調和せしめんとするの企は認められるが未だ成功したものとは言へない。

最後に形態心理學と人格的心理學は如何といふに、曰く人間の全體は一の構造であるが、それには幾多の部分構造がある。部分構造に於てはそれと全體との關係が大切である。人間とそれの生活との部分的成分には、何處かに全體から浮き出たり、又は全體の中に埋没したりすることか行はれる。この浮き上りより埋没への關係は思考上の階段を示し、その系列の一方の極端には比較的強く獨立した構造がある。それは直接に取まく人間の成分と對立することによつて、それに屬する總てのものは形態であるとの特質を生ずる。而してその形態に對して一定の形態的合則性

が建設される。かくして近時提唱される形態心理學は人格的心理學の中にその地位を發見する。しかしこの形態はそれが身體的か精神的か又は精神身體的かいづれにしも獨立せるものでない。それは人間の力によりて統一と擬似的全體を構成する。單言すれば形態構成者がなければ決して形態は存在するものでない。かやうに形態心理學は人格的心理學の一部をなすことが分かる。

以上に於て現時に於ける主なる學説を略述した。意識と行動、材料と作用、内容と機能、部分と全體、要素と構造といふ如くに、それぞれ相對立して居り、且つその何れもそれぞれの長所と短所とがある。中にはこれ等の諸説を綜合することは不可能であるとするものもあるが、しかしその長を採り短を捨て、總ての學説を包括せんとする企もある。人格的心理學の主張の如きはその企ての一つで、未だ成功しては居ないが、その企てに對して他の折衷説よりも一步を進めたものといふべきである。

第二節 心理學の分野

既に述べた如く心理學は精神生活の研究には相違ないが、しかし多數の異なる條件があつて、その條件の下では、種々異なる方面に分けて研究するやうになつて居り、中には殆んど他の方面とは没交渉に獨自の方法と獨自の目的とを以て研究を進めて居るものもあつて、全く獨立した科學の如き觀を呈して居る。今その主なる分野を見ると、一般的に精神現象を取扱ふ普通心理學の外に、動物、兒童、青年、差異、應用、異常、社會、民族心理學等がある。この外發生、教育、職業、犯罪、集團心理學など種々の名稱の著書があるが、前記八種の中何れかに屬するやうである。即ち發生心理學は、動物、兒童、青年、民族の心理學中にそれら取扱はれ、教育並に職業心理學は應用心理學に、犯罪心理學は異常心理學に、集團心理學は社會心理學に屬する。この外生理的心理學、實驗心理學の著書もあるが、今日の心理學は何れの部分と雖、生理的過程や實驗的研究を無視するものはない。故に本書では前記の八種の心理學に於ける最近の研究の概要を述べることにした。

1. Moore, J. S. The foundations of psychology.
2. Wundt, W. Grundriss der Psychologie.
3. Külpe, O. Vorlesungen über Psychologie.
4. Titchener, E. B. A beginners Psychology.
5. James, W. Text book of Psychology. (譯體) (卷一)
6. Watson, J. B. Behaviorism.
7. Köhler, W. Die Physischen Gestalten im Ruhe und Stationären Zustand.
8. Koffka, K. Die Grundlagen der psychischen Entwicklung. (譯體) (卷一)
9. Woodworth, R. S. Dynamic Psychology.
10. Stern, W. Die menschliche Persönlichkeit.

第三章 動物心理學

第一節 動物の行動の研究

動物心理學の研究には幾多の變遷がある。最初の研究は擬人論的で、動物の意識を人間の意識より類推して説明した。ダーウインの著書を見ると、その傾向が最もよく表れて居る。例へば下等動物が吾人と同じく色を認知することは自明のやうに考へられ、彼等が裝飾の色を有し、性的選擇を行ふことは人間の色彩論から無反省に解釋された。其の後要素心理學の發達に従つて、動物心理學に於ても動物の感覺や簡單な表現を研究する様になり、擬人的演繹の代りに觀察と實驗とを用ゆるやうになつた。しかし人間の場合の如く意識の研究は不可能であることから、漸次に客觀的に動物の行動を研究するやうになり、動物心理學は動物行動學に變つて行つた。所が一般心理學に於て、要素の分析を排して形態心理學の提唱されると共に、動物心理學に於ても形態の

問題を取り扱ふやうになつた。尙ほ他方に發達心理學的興味よりして動物精神病學、或は比較的病的心理學なる一分科が動物心理學の中に現はれて來た。人間の精神病に相當する現象が動物にもあるか否かの研究で、精神病學者であり且つ動物心理學者であるゾンメルによりて特に研究されて居る。氏は、人間の精神病學に於て病的として認められた症狀が、動物に於ける一定の正常の過程に對し、如何なる風に相應して居るかの問題を取扱ひ、人間の精神病的症狀と動物の心理生理的症狀とを比較した。例へば人間に於ける痙攣狀態が下等動物に於ける生物學的不動の機制に關係のあることが分り、精神病の一症狀なる強直狀態、即ち *Stenotype* と筋肉緊張とが、檻内の猛獸の態度に見らるゝ *Stenotype* や鰐魚の強直的態度に比較された。氏は更に人間に於ける精神錯亂狀態や感官に於ける錯覺の分析、尙ほ進んでは情緒の分析にまで同様の比較的取扱をして居る。しかしこの方面は僅かにその研究の端緒を得たといふ位のものであるから、茲には行動の研究と形態性の問題とを述べることにする。先づ行動の研究から始める。

動物の行動に就いての主要なる問題は、大別して三とする。(一)は感官過程の研究で、動物が何

を見、聞き、味ひ得るか等の問題と、彼等の日々の行動に於ける其等の機能との研究である。

(二)は筋肉及び腺の活動の研究で、本能、反射、習慣等の研究が之に屬する。(三)は模倣、觀念的行動、言語能力等と便宜上言はれて居る高等精神能力、並に動物が思惟するか否かの一般問題の研究である。

此等の問題を研究するに用ひらるゝ方法としては、その主なるもの三種ある。(一)は自然法、(二)は一般的反應法、(三)は選擇反應法である。第一の方法は特にダーウィン時代の博物學者に依りて行はれたもので、今日と雖も、動物の自然生活を營む際の行動を觀察する場合に行はれる。動物の表情、移住、配偶を求めること、巢を營むこと、争鬪等に就いての觀察がこれまで公にされて居る。この方法に依る結果は種々の問題に就いて尙ほ一層精密なる研究を喚起する點に特に價值があると言へる。蓋し此の方法は實驗を行はないから、感官運動や行爲の形式の發達について知識を與ふることが少いからである。例へば鷹が死肉の堆積に近づき、梟が鼠を捕へるならば、自然觀察者は其の事實を記録することが出来る。然しそれは如何なる感官が關係して居る

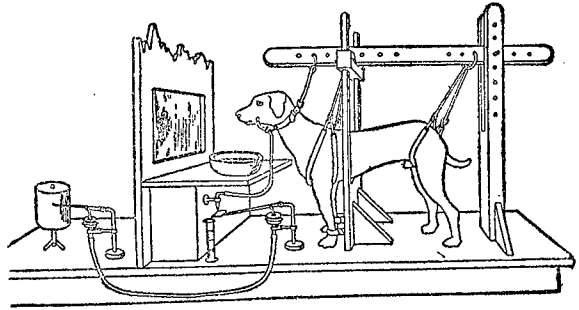
かを言ふことは出来ない。鷹は其の肉を嗅ぐか又は見るか、鼻は鼠を見るか聞くか、或は嗅ぐか不明である。これは感受性に就いての注意深き實驗に依りてのみ答へることが出来る。

次に第二の一般的反應法の中の代表的のものは、一定の刺戟や事物を動物に與へ、それに對する一般的先天的反應を見る方法である。ガルトンは此の方法を用ひた先覺者であつた。氏は自己の案出せる笛を懷中に忍ばせ、ロンドン動物園に於ける種々の動物の近くで、高い調子の音を鳴らした。若し動物が或る種の行動を以つて反應すれば、その動物はその音を聞くことが出来るものと結論した。この方法は單なる感受性の問題に對しては正確なる結果を與へることが出来るが事物間の辨別力の有無を検する如き複雑なる場合には安全なる方法とは言へない。例へば動物をして音に對しては一種の反應を、光に對しては他の反應を行はしむるやうに仕組むことが出来なければ、動物が果して音と光との刺戟を區別し得るかを言ふことが出来ない。然し一般的方法を用ひて研究されたものの中には、魚の聽覺、嗅覺、味覺等の實驗がある。

此の實驗の中で最も重要であり、且つ最も効果あるものはバヴロフ並びにその學徒の行つた條

件反射實驗である。或る刺戟は練習無くして一定の筋肉又は腺の活動を生ずる。例へば味は唾液の分泌を惹起し、光の増加は瞳孔の收縮を生じ、痛みはその害を被れる部分を引込ませる。此れ等の活動は無條件反射である。所がかやうに自然的に反應を惹起することの無い他の刺戟でも、それを屢々一定の反應と聯合せしむるやうにすると、遂には其の刺戟に對して一定の反應を生ずるやうになる。かやうにして唾液は食物を見ただけでも、又食物の豫告だけでも分泌されるやうになり、痛みを惹起す事物の觀念を生じただけでも手を引込める様になる。此れ等が即ち條件反射である。第十圖は犬に用ひた條件反射實驗で、食物を與ふると共に、音、光、味等の刺戟を度與へると、若し犬が其等の刺戟を感受するとすれば、食物無くして、其等の刺戟のみが與へられても唾液の分泌を生ずるのである。分泌した唾液は犬の頬の所に挿入してあるゴム管を通りて槓杆の上に落ち、その爲めに槓杆は動き、その動搖を一定の裝置に依りて煤紙の圓筒に記録するやうになつて居る。

第三の選擇反應法は最も廣く用ゐらるゝ方法で、條件反射法と同じく聯合又は習慣構成を基礎



として行はれる。然し選擇反應法では一定の事物例へば色や音を動物の全身運動と聯合するやうに習慣を構成するものである。動物を判じ箱や迷路の内、又は其等の近くに置き、動物がその箱を開き、又は迷路を通過するやうに學習せしむる。而して動物が正當の解決を行へば食物の賞を與へるやうにして學習せしむる。時としては誤つた行動を取ると、罰として電氣刺戟を與へるやうにすることもある。動物は賞のみを用ゐられるよりも、賞と罰とを併用すると一層迅速に學習するといふことである。

第二節 主なる結果の二三

以上の方法を用ゐて得た結果の主なるものを紹介しよう。

う。

動物の本能的行動に就いての研究は多く自然反應法に依りて行はれて居る。スポールディングは鳥の飛ぶことは、親鳥の飛ぶのを見たり又は羽の運動の練習を行つたりする機會を有する爲めに學習するか否かを検査しようと思つて、睨りたての雛を巢から取り去つて、別々に小さい箱に入れて育て、羽を使用すること、他の鳥の飛ぶのを見ることが出来ないやうにした。所が普通の鳥が飛び出す時期に、その鳥を箱から出してやつたら、羽と尾とを自由に動かして、巧みに樹の間を縫うて飛び去つたといふことである。即ち飛ぶことは發育の自然の經過のうちに自づから生じて來ることが分る。

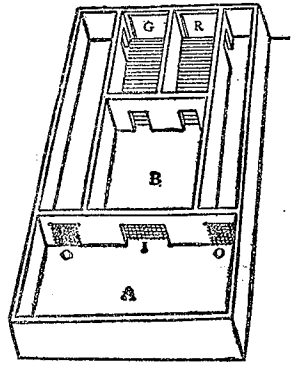
スコットは鳥の鳴くのは學習の結果か又は先天的のものかを決定せんとして、黄鳥の雛を實驗室で育てた。一定の時期が來ると其の鳥は鳴き出したが大體の聲の調子や特質は普通の黄鳥と似て居る。然し異つた仕方に其等が結合して、一種獨特の歌をうたつた。それで今度は他の雛を取つて來て、前の鳥の側で育てたところが、一定の時期になつて、前の鳥と同じ歌をうたつて、普通

の黄鳥の歌をうたはなかつた。かくして實驗室は特殊の歌をうたはせる練習所となつたといふことから、發聲は先天的であるが、如何なる種類の歌をうたふかは學習の結果であるとされた。

ブリード及びシエバードは雛の啄み運動が如何に發達して行くかを研究した。それに依ると卵を出るや否や啄み運動が現はれるが、第一日の行動は不完全で、五回に一回食物を得、その翌日は啄む回数の約半分だけ食べ、第三・四日目は四分の三を食べ、十日目には啄む回数の八五%を食するやうになり、それ以上は進歩しなかつたと言つて居る。即ち啄み運動は先天的のものであるが、その確實の度は練習に依りて獲得されることが分る。

次に動物の視力、形や色の認知に就いての研究は多く選擇反應法に依りて行はれて居る。就中色彩知覺に就いての研究は可也多くの人に依りて試みられた。早い時代の研究には色紙を用ひて居る。即ち動物は不規則に置かれた色の中から一つの色を選擇するやうに要求され、その色の選擇と同時に食物が得られるやうにした。かくして動物に色覺のあることが證明されたが、この方法は完全な方法とは言へない。蓋しかやうな色紙には光度の差があり、又色の飽和の量も相違す

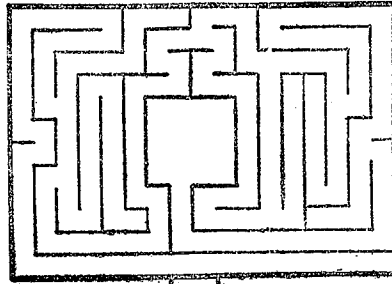
第十圖



るから、假令色そのものの區別が出来なくとも、猶ほ兩者の間の相違を發見するかも知れないからである。それでワトソンは多くのレンズやプリズムを用ひて光度も飽和の量も完全に統御し得る如き装置に依りて、綠や赤の線を第十一圖に示す如き辨別箱の一端（G及びR）に送るやうに工夫した。動物はBの所に置かれ、GかRの通路を通り、再びAに戻る様になつて居る。而して作業に對する賞として、どちらかで食物を得、若し誤つた通路を通ると、罰として電気刺戟が與へられる。この實驗に用ひられた動物は、猿、雛、兎、鼠等であつたが、その結果は實驗毎に相違し、動物が波長の差のみある刺戟に反應するやうに習慣を構成し得るとの證據が擧らなかつた。然し近時ラッシュン¹は雛が光度の差と等しく色の差にも反應するとの確實な結果を得た。

動物の習慣構成即ち學習の實驗は人間學習の上に多大の光明を與ふる爲めに、特に研究者の興

第 十 二 圖



味を引いた。今鼠を第十二圖の如き迷路の中に置くと穿鑿を始め、嗅ぎ廻り、前後に歩き、何れの通路にも入つて行く。そのうちに偶然中央の食物の箱を發見する。又出發點に戻すと鼠は以前の通りに進んで行く。但しこの度は以前に比べて盲目的行動の爲めに躊躇することなく、一層迅速に進んで行く。之を反復するに従つて漸次不必要な運動は除去されて、遂には彼は頭を振向くことなくして食物の方に走つて行くやうになる。ワトソンに依ると、鼠のこの種の學習は筋肉運動感覺並に有機感覺過程に基き、視・聽・嗅感覺は不必要であるといふことである。故に迷路を十分に學習した後、直線の通路を短縮したものと取換ると、鼠はその通路の端まで走り行き、適當な入口を通り過ぎてしまふ。

次に學習が最も有効に且つ迅速に行はるゝ條件や方法の

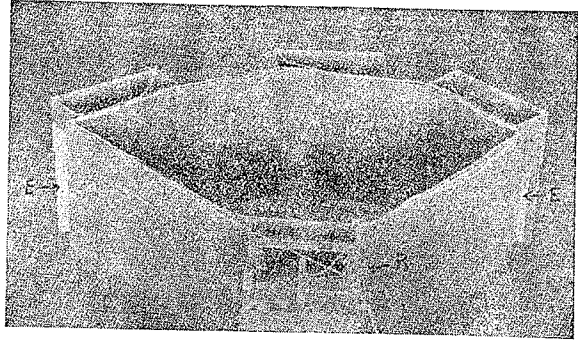
研究、並に學習を妨害し助長する條件に就いての研究がある。アルリッチは白鼠に就いて毎日一回、三回、五回づゝ學習せしめ、その何れが最も經濟的であるかを比較した。その方法としては鼠が箱を開けて食物を得る爲めには横木を引き上げねばならぬやうにした。鼠が最小の時間で箱の方に走り行き横木を引き上げるやうになると、彼はその問題を學習したことになる。その結果に依ると、一度に試みる回数が少ければ少いほど、又試みる日の間隔が長くなればなるほど學習には多くの日數を要したといふことである。

練習効果の轉移又は干渉に關する問題も二三の人に依りて研究されて居る。例へばハンターは與へられた習慣の構成は、それと反對せる習慣の構成に妨害を與へるが、然し後の習慣の構成は前の習慣の把住に影響しないことを發見した。尙ほ視的習慣と聽的習慣との間には轉移を生じ、一方の練習が他の練習を助長するが、二つの視的習慣の間、又は二つの聽的習慣の間には轉移が現れなかつたと言はれる。

動物に模倣があるか否かに就いての研究は、種々の條件の混入に依りて未だ明白にされて居な

い。一定の仕掛のある籠を出て魚を食べるやうに練習された猫の側に新しい猫を連れて来て、數回前の猫と共に籠を開いて魚を食べさせることを試みた。それから後の猫のみを残して同一の作業を行はしめた所が、前の猫の行動を少しも見ないのと同じ行動を取つたと言はれる。ハガテイは猿を檻の中に入れ、針線を攀ぢ登り、管に飛び付き、彼の手を延ばし糸を引いて食物を得るやうにした。この猿が學習し終つた後に第二の猿を連れて来て、第一の猿が食物を得る方法を十分見得る位置に置いた。一定回数この作業を目撃せしめた後、第二の猿がそれに成功すれば、第一の猿の行動が彼を助けたといふことになる。その結果模倣の存在することを見たが、然し果してそれが模倣であるか否か不明である。猿の注意が鮮活に働き同僚が食物を得るのを見、その後機會が與へられた爲めに、以前食物のあつた所に行つて食物を得たに過ぎないとも言ふことが出来る。第二の猿に於ける第一の猿の行動は社會的影響で、活動に特殊の刺戟を與へたもので、動物は人間に見らるゝ如く合理的に模倣する證據は無いと批判されて居る。

最後に遲滯反應の實驗の結果を述べる。これまで述べ來つたものは、凡て現在の刺戟に對する



反應の場合で、動物は提出された色、音、通路等を選択することになつて居る。所が遲滯反應に於ては、反應の瞬間に、その刺戟が存在しないやうにする。即ち選擇さるべき刺戟が消失して後に、猶ほその印象が残りにて適當の反應をなし得るか否かを検査する實驗である。サールプロトは第十三圖の如き装置に依りて猫を實驗した。猫をRの所に置き、三つの箱の中どれかに火を點じ、その光を動物に見せしめる。その後火を消してしまひ、暫くRの所に動物を留らしめそれから動物を放してやる。而して動物が少し前に點火した箱の方に行くか否かを見、若し之に成功すれば遲滯の時間を増加して再び試み、遂にその動物が反應を誤るに至るまで遲滯時間を長くして

行く。かやうな實驗に於いて、各種の動物及び子供の遲滯反應に成功した遲滯時間の最大限度は次の如くである。

鼠.....	1—5秒	犬.....	1—3秒
熊.....	10—25秒	猪.....	16—18秒
$1\frac{1}{4}$ 歳の子供.....	20秒	$2\frac{1}{2}$ 歳の子供.....	50秒
2歳の子供.....	20分		

此の實驗に就いて興味あることは、鼠、猫等は彼の頭や身體を正當の箱の方に向けるやうにしないと正しき反應を生じない。之れに反して、熊、犬、子供は遲滯反應の際、彼等の定位を失つても、猶ほ正しき反應することが出來た。即ち遲滯の間に正當の箱の方に向けなくても、正しき反應に導くだけの一種の過程が身體の内にあると思はれる。而して其の過程、即ち手掛りは動物の筋肉から來るもの、即ち運動感覺に屬するものがあるに相違ないと假定されて居る。

第三節 形態及び合目的の問題

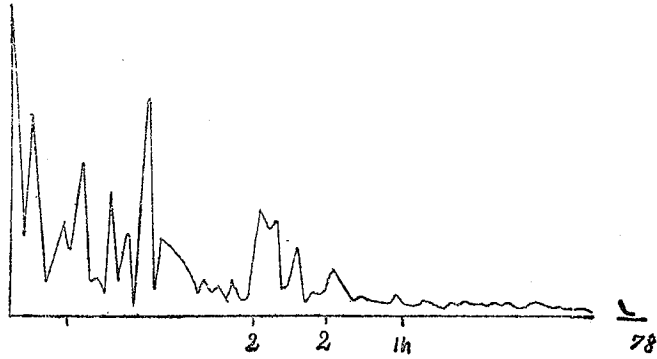
要素分析が形態心理學に變化した時に、フォルケルトは一九一四年蜘蛛の研究に於て初めて形態の問題を取り扱つた。かくして古い觀察が新しい精神の中に再び鑄かへられるやうになり、フアブルの昆蟲に關する著書が獨逸語に翻譯され、種々の仕方に氏の行つた實驗の困難な多くの取扱が分析された。氏が屢々古風な合目的判斷をなしたことは、全體として何等の妨害を與へず、寧ろ氏の緊張したる研究振りが、自然研究者を陶醉せしめた。今日では合目的な複雑なる行動を演繹的に説明することはしないが、外部の事情の變化に依りて、何處に合目的性と有意義的反應とが發見されるかを吟味するやうになつた。尙ほこれと共に動物は全體狀態を如何にして構成して居るかといふ問題を生じた。彼等の反應の内的成分と外界の總ての外的成分は全體狀態の下に於て初めて理解される。動物は外界を物質的機械的に構成するものでなく、例へば蜘蛛に對して蠅は事物として存在せず、如何なる事情の下にも蠅として存在するのである。

動物が外部の刺激に對して分析的に反應することなく、全體の状態に對して反應することの實驗がケラーによりて行はれた。ケラーは類人猿と牝雞と三歳の兒童に一對の灰の光を見せた。一方は淡く一方は濃い灰であつた。所がこれ等のものは絶對的に反應することなく、彼等の訓練された特殊の色に反應した。例へば光度の順にA、B、Cの三種の灰を用意し、一の動物にAとBの一對の灰の光を示して、其の中の濃い方のBを選択するやうに訓練したとする。それからBとCの對を示すと、前のBを選択することなく、Cを選択する強い傾向があることをケラーは發見した。若し動物が要素的に反應すとすればBを選んだに相違ない。然るにCを選択したことはこれ等の刺激が動物に對して分割的、孤立的、附加的のものと考へられず、一つの全體を形成するもの、即ち二つの場合は根本的に同一なる全體状態、換言すれば「より濃い」として考へられたのである。

次に動物が目的を洞察して行動するか否かの實驗に就いて述べよう。これまで動物の學習に關してはソーンダイクやワトソンの主張が何等の疑義もなく承認されて居た。氏等は動物を以つて

愚鈍と假定し、動物は學習の際推理することなく、盲目的に最初行動するもの、即ち試行錯誤に依りて學習するものと假定した。之に對して形態論者ケラー及びコフカは動物に洞察ありて、決して盲目的行動をするものでないとし、形態構成が學習の主なる法則であるとする。今兩者の主張の大意を吟味してみよう。

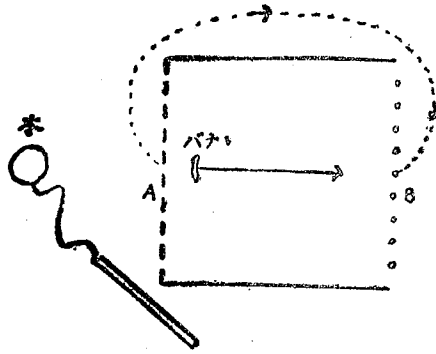
ソーンダイクの考に依ると、動物は行ふことに依りて學習するもので、彼等が何を爲しつゝあるかを關知せず、又危急の行爲が自由と食物とを持來することを知らないといふのである。而して氏はその主張の證據として、動物の作業時間の曲線の形式と、彼等の爲した誤謬とを擧げて居る。今、猫が横木を上げて籠を逃れ出づる際の時間線を見ると、練習の回数を重ねるに従つて漸次に減少して行く。(第十四圖)ソーンダイクに依ると、若し動物が智能の痕跡にも有すとすれば、彼が數回その籠を逃れ出でた後、以前の試みを繰返すことは無い筈である。尙ほ又動物が眞にその状態を理解すとすれば、その任務の正しく確實なる解決を躊躇無しに行ふことが出来る筈である。その結果時間曲線は一上一下しつゝ、漸次短縮されることなく、急速に降下しなければなら



ぬ。所が動物を観察すると、急激の降下を發見するこ
とが無いから、動物には何等思考の連続が無いと言は
なければならぬと述べて居る。

所が形態論者に依ると、動物に推理や洞察の無いや
うに見ゆるのは、ソーンダイク等の行つた學習實驗の
方法が盲目的に行ふやうになつて居る爲めである。例
へば判じ箱の仕掛が外の方において、内にある動物に
はそれが見えないやうになつて居る。従つて彼等は盲
目的に行動せざるを得ないのであると批判する。(それ
にはケラーの猿に就いて企てた實驗の如きものを行
つて見なければならぬ。ケラーは最も簡單な問題よ
り系統的に漸次困難になる様な問題を十七種作つて實

第五十圖



験した。その中の二三の例を述べると、最も簡単なものは檻の外に猿の手の届かない程の所にバナナを置きそれに糸を附け、糸の端を猿の手の届く所に置いた。これは道具を使へば直ちにその目的を達し得るが、更に困難になると目的を達する爲めには、他の行動を取らなければならぬやうにした。例へば檻の内に短い棒を置き、それで檻の外の長い棒を引寄せ、その長い棒でバナナを取るやうにした。最も困難な第十七の實驗は第十五圖の如く、箱の中に食物を入れ、その箱の一方(B)は猿の手が入るやうに棒が立て、あり、それと反対の側(A)は手が入らぬ程密に棒が立て、ある。その手の入らぬ側の近くにバナナを置き、且つその外側の木に棒を堅く縛りつけて置く。それでバナナを得るには、その棒を用ひて手の入

らぬ側から手の入る方へバナナを突きやり、それから手の入る方へ廻つて行つて、手を入れてバナナを捉へなければならぬやうにした。

この種の實驗を試みると、解決が偶然に生じ、その後多少理解されるやうになるといふことなく、その状態や場所の理解が客觀的解決に先んずる。換言すれば動物は試行錯誤に依りて行動するのでなく、最初より材料の關係を洞察して行動する、とケーラー及びコフカは主張する。即ち形態論者に依ると、バナナと糸、バナナと二本の棒の間に形態が構成され、材料關係の形態を動物は洞察に依りて認知するもので、幾つかの要素的刺戟と行動の中から、試行錯誤に依りて結果を生ずる如き行動のみが選定されるに至るものでないとする。従つて試行錯誤を根底とする練習や結果の法則、頻繁や漸近の法則は學習の法則として不十分で、洞察を基礎とせる形態構成の法則を以つて之に代へなければならぬと主張する。

この二つの對立に就いては、甲論乙駁の有様で未だ決定されて居ない。中には折衷説を取るものもある。即ち動物が全く未知の状態に置かれる時には試行錯誤をするが、一部分その状態が分

つて居れば、洞察に依つて行動すると。單言すれば試行錯誤と洞察とは學習の二つの階段で、何れも動物の學習に存するものであるとする。この折衷説は吾人に對して今後の研究を暗示して居る。即ち一方にはケラーのいふ洞察を安易にし又はそれを妨害する一般的又は特殊的條件が見られ、他方には試行錯誤を規定する條件が発見されると、如上の兩説の主張が自づから明白なることと思はれる。

参 考 書

1. Thorndike, E. L. Animal intelligence.
2. Washburn, M. F. The animal mind.
3. Köhler, W. Intelligenzprüfungen an Anthropoiden. (英譯あり)
4. Koffka, K. Die Grundlagen der Psychischen Entwicklung. (英譯あり)
5. Watson, J. B. Behavior.
6. Pavlov, I. P. Conditioned reflexes.

第四章 兒童及び青年心理學

第一節 兒童心理學の研究法

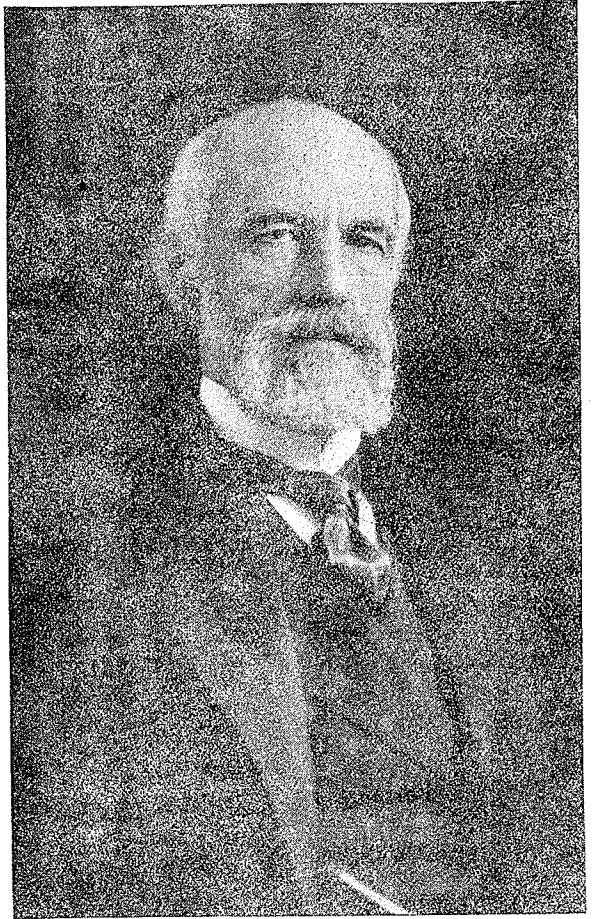
兒童心理學は兒童の精神生活を研究の對象とするものであるが、その研究の目的によりて他の分野の中に包括される。例へば人間精神の發達を研究する發達心理學に於ては、動物、兒童、青年、民族、文化人の精神活動を比較的發生的に研究する以上、兒童心理學はその主成分を構成する。又教育心理學に於ては、教育の對象が主として兒童であるために、兒童精神の研究はその主題であり、又差異心理學に於ては、兒童の個人差を知ることが重要な部分を占めて居る。この他職業心理學、犯罪心理學、異常心理學に於ても、兒童の正常又は異常の精神生活を知らなければならぬ。教育、差異、職業、犯罪、異常心理學に就ては、以下に於て述べるから、茲には主として發達心理學の見地から述べることにする。

兒童精神の個體發生的的研究は、兒童が直ぐに年長者の文化領域の中に入り込むことから制限を被る。しかしこの制限は民族心理學によりて補充することが出来る。このことはヴェント以來今日まで忽かにされた所で、中には兒童精神の發達を知るには、總ての環境から隔離して初めて可能であると考ふるのもある。しかし兒童精神の發達を環境より切り離して研究することは全く無意義である。蓋し兒童精神の發達を單獨孤立の状態に於て知ることが、誤れる實驗心理學的方法に墮するもので、若しこの方法による時は、單に人爲的條件の下にある特殊の精神状態のみを知ることが出来て、社會的共同生活に於ける兒童精神の發達を知ることが出来ない。あらゆる複雑なる状態に於ける彼等の活動を見て、その發達の法則、條件を研究しなければならぬ。

兒童心理學に用ゐらるゝ方法は、心理學に於ける他の分派のそれと相違がなく、各種の方法が用ゐられて居るが、これを大別して（一）自然觀察法、（二）質問法、（三）分析法、（四）實驗法、（五）測定法、（六）傳記法とする。

第一の自然觀察法は兒童の自然の行動を觀察し、その材料を系統的に敘述する方法である。古

圖 六 十 第



ジ ー ・ ス タ ン レ ー ・ ホ ー ル

くはブライエル、ダーウィン、シン等の觀察録があり、近くはシュテルン夫妻の幼兒期心理學がある。我國には石川貞吉博士の生後一年間の觀察があり、又著者の生後二ヶ年間の觀察、並に六ヶ年間の言語の發達記録が公にされて居る。是等の觀察録は、時として幾分の實驗又はテストを試みて居るが、大部分は自然の狀態の觀察を基礎とせるもので、感覺諸器官、筋肉活動の發達、感情生活、記憶、思考、想像等の諸作用に就て述べ、言語、遊戲、描畫の發達を明かにして居る。

第二の質問法はホールによりて初められたもので、一定の行動例へば憤怒や恐怖の如きものに就て、一定の質問を發し、兒童を觀察する機會の多い父母や保母又は教師に向つて、その回答を求めるのである。例へば如何なる場合に怒を發するか、怒の際の顔面、手足の表情は如何など、質問する。故にこの方法は間接觀察法ともいふべきである。年長の兒童になると、多少自己觀察が出来るので、直接にその答案を書かせることをする。この方法は、廣く各種の兒童に就ての觀察を集めることが出来るが、兒童心理學に精通しないもの、觀察は不完全であり、又時として質問によりて暗示を受けることもあり、科學的研究としては不十分の方法である。しかしこの爲

めに一般的に兒童研究熱を盛んにしたこと、特定の兒童觀察に見られない記録が得られ、發生的研究に資することが大であつたことは、ホールの效績に歸すべきである。

第三の分析法とは精神分析學に於けるそれを指して居る。子供の夢の分析、自由聯想による分析は勿論、彼等の日常の行動を精神分析的見地より分析することである。これは本能殊に性慾を強調し過ぎる嫌があり、又兒童を往々油斷の出來ない性慾の權化の如く悪く見る傾向があるが、從來看過されて居た、本能活動、無意識界の説明に一大光明を齎らしたことは、この方法の賜である。分析法に於てはユングが三歳の女兒を分析した如くに、直接に兒童を分析することもあり、青年又は成人の精神分析よりして兒童期の生活を追跡したり、或は偉人の傳記や文學的作品によりて、幼時の生活を分析したりする。殊に發生心理學の上から興味あることは、原始民族の呪物崇拜や禁忌、傳説や神話の分析で、夢と子供と神話とは不離の關係にあることを主張する。

第四に實驗法であるが、兒童には嚴密なる意味の實驗は不可能であると言はれて居た。ホールの新入學兒童の觀念内容の調査の如きは實驗法の初期に屬すべきである。しかしその後この方面

の研究が大に進歩し、殊に近時ワトソン一派の唱導する行動心理學に於ては、動物心理の研究に用ゐたと同じ方法を適用し、一定の條件に對し、一定の反應を構成したり、或は除去したりして居る。ワトソンが幼児に兎や鼠に對する恐怖を生ぜしめ、又それを解除した實驗は代表的のものである。學齡兒童に於ける實驗的研究は可なりに進歩し、殊に人爲的實驗室より離れて、教室に於ける實驗へと變化し、ライ、モイマン、シュテルン、ピネー、バート、ソーンダイク等の實驗教育學又は教育心理學の研究者によりて幾多の結果が公にされて居る。これ等のことは後に差異心理學並に教育心理學の章下に述べることにする。

第五に測定法は實驗法の一部といふべきであるが、實驗法の如く、實驗室に於ける人爲的條件を作りて研究するのでなく、なるべく兒童の日常生活、教室に於ける作業を測定し、且つそれ等の活動の質よりも量に多く注意し、種々の統計的方法を利用して結果を整理するものである。後に述べんとする智能検査法や、教育測定法、或は體力測定法等と稱せられるものは、これに屬するものである。

第六に傳記法は他人又は自己の幼時に於ける行動を記録したものを材料とするものである。質問法に於て幼時の追憶を求めたり、分析法に於て兒童期の追想を材料とするが、幼時の追想を極めて生々した形に敘述した傳記、殊に自敘傳は兒童研究の上に價値がある。例へばアグスチヌス、ルソー、ゲーテ、ヘレン・ケラー等の自敘傳は非常に參考となつて居る。

第二節 主なる結果の二三

(一) 筋肉運動の發達。これは基本的のものより從屬的のものへと發達すと一般に言はれて居るが、研究者によりて多少の變改を免れない。ホールは基本的を以て胴に近い大なる筋肉を意味し、これは高等及び大なる動物にも共通であるとする。從屬的系統とは多數の小なる筋肉で、その機能は後になりて發達し、進化の一屬高い地位を代表すると言つて居る。しかし、この主張は兒童の活動及び共應に就ての觀察の結果と反すると言はれる。眼、跗趾、指、顔の筋肉の如きは活潑に活動する所を見ると、手足や胴の大なる筋肉と同じく早くから發達せることを暗示する。

次にポルトンは基本的のものを生活に關係し必然的のものとし、從屬的を基本的のものよりも生活に關係すること無く、生存に一層少く必要であると解する。これ消化、呼吸、血行、分泌的反射の早くから現はることを説明するには都合がよいが、胎生後期に變化する有意的統制の發達に適用することは出来ない。次にブライヤンとハンコックとは共應的筋肉の系列中、一層大なるものが最初に成熟すと言ひ、シムバードソンは有意的合目的統御は種族發達の中で最も古いものから、若いものへと發達すと説明する。ノースワーシー及びホイトレーとはこの最後の説明を以て、最もよく事實と一致すと言つて居る。子供の遊戯を觀察すると、自發的筋肉運動に於ては大なる筋肉が主なる役目を演じ、小さい筋肉は後になりて使用される。有意的に運動する時には、大なる筋肉を含む運動が、小なる筋肉の共應運動よりも努力を要することが少い。この原理は遊戯、言語、讀方の發達、その他一般の知覺現象に於ても適用が出来る。

(二) 右利左利。ワトソンは生後間もない子供を布の上に乗せ、その下に秤を置きて體重を測るやうにした。子供の左か右かに木の棒を與へると、子供はそれを確乎と握る。それでその棒を徐

々に引上げると、子供は引上げられて秤に對しては體重が減じてくる。而して子供が手を離すまでつゞけ、左右いづれか強力なるかを實驗した。その結果と自由活動の量並に兩手の中いづれを選んで使用するかを調査したが、ワトソンは出生の時に右利か左利かの區別を發見することが出来なかつた。しかし一歳の後半になると、兩手を一樣に動かさなくなる。右手利が多いといふことは先天的組織の相違によるか、或は環境が凡て右利に適するやうになつて居ることに基くかは問題である。家畜はその本來の状態では左右の差が無いが、右手を用ゆる世界に置くと右手利にすることが出来るといはれて居る。

これによると後天的影響によるといへるが、他方に先天説を主張するものもある。尤もこの主張者の多くは思索の結果で、實驗的材料に基く主張は非常に少ない。ヨテローは左の手と腕との使用は右側の使用よりも心臓の活動に大なる影響を有すること、並にその影響は左利のものも右利のものも同様であることを發見した。かやうに必然的生理的關係があるとすれば、右手を用ゆることが疲勞を少くするので、従つて右手使用が先天的傾向となり、又慣習となりて環境の凡

てが右手使用に都合よいやうになつて居ると言へる。ジョーンスは右利か左利かいづれにしても先天的のものは、その方の腕の骨が大であるが、後になつて馴らしたものは筋肉の方が發達して居ると言つて居る。又標準を定めたり、狙打をしたりする際の兩眼の鋭さ又は統御の差に基いて、右利か左利かになると言ふものもある。これ等の原理はヨテコーを除いては、何れも右が左よりも選ばれることの先天的基礎を指摘して居ない。

次に右利を外部の原因に歸したのも少くない。例へば母親や乳母の抱き方、寝方、身體の兩側面の半分の重量の差等に歸するものもあり、又兩手で弱く闘ふよりも、一方の手で強く向つた方が有利であるといふものもある。或は原始時代の往來には、他人と行き合ふ時に右の方に行くことが非常に利益であつた。蓋し左手は楯を以て心臓を保護する爲めに、右手は自由に殘され、武器を以て敵を攻撃することに都合がよかつたと説明される。この他右利の者は初期に左利の時代を通過するとか、又就眠前の幻の時には左利になるとか言はれる。ポールドウインは原始人の身振語を調べて、彼等の通信には右手を主として用ゆることを發見し、右利は最初一方で表現す

る機能であると主張する。

右利か左利かは言語の機能と密接な關係を有する。失語症の徵候が左利の者には腦の右側に表はれ、右利の者には左側に表はれる。又左利を無理に矯正した爲めに吃音になり、それを元の左利にすると吃音が治ることもある。要するに右利左利の問題は未だ決定して居ないが、出生直後に區別があるのでなく、鬚や智惠齒の生ずると同じく、一定の時期を經過して後に、區別を生ずることは慥かである。しかし鬚や齒と異なり、外部の影響を全く除去することが出来ないから、そのの先天的か後天的かを決定することが困難になつて居る。

(三) 言語の習得 前章に於て發音は先天的であるが、如何なる歌を歌ふかは後天的であることを明かにした。人間の言語に於ても同様で、従つて言語の習得に就ての研究は極めて興味ある問題である。この種の觀察録によると、言語の習得には多少の個人差はあるが、一般に五の階段を經過するやうである。(a) 原始的發語の時期で、生後二週間位は主として不分化の叫聲を發する。一ヶ月の終り頃には一般狀態例へば飢、痛、怒と共に稍變化する位に分化される。注意深き

母親や乳母などはその音によりて一般状態を知るが、未だ言語といふべきものでない。(b)かやうに練習をつゞけて居る間に、種々の出鱈目の發音が母親や乳母の習慣によりて導かれた行爲と對象とに結びつくやうになる。かくして種々の出鱈目の音が特殊の身體的必要、不愉快、満足、興味ある事物を代表するやうになる。それは後に表はれる語ではなく、全く出鱈目に發した音聲で、ンガー、ウクン、ナーナー、マーマー、アーン等の音である。この最初の發語は民族を異にしても、殆んど類似して居ると言はれる。事物が見えたとその音を發し、或は事物に伴ふ状態に於て、その音を發し且つ反覆する。(c)その間に幼兒の近侍者は行爲又は子供の注意を引く事物や出來事と一所に言語、顔面表情、身振を用ゆる。子供自身の偶然的行爲が觀察者の側の言葉と聯合される。かくしてこれ等の語の音は、それと聯合した行爲を生ずるに十分になる。例へば子供が偶然兩手を上にあけた時に「坊やは大きい」とか「萬歳！」とか母親がいふ。それを度々繰返すと、今度は母親の方で、「坊やは大きい」とか「萬歳！」とかいふと子供は兩手を上げる。

この時期は自分では言へないが他人の言語を理解するものである。(d)この階段に於ては發語が

一層活潑になり、遊戯的に反覆して居る中に彼の周圍に用ゐる言葉と似た發音を言ひ當てるやうになる。類似的の音を言はれると、馴れて居る爲めに特殊の注意を引き、従つて興味を以て幾度も反覆する。かくして發語と、近侍者によりて既に用ゐられた言葉、事物又は出來事との間の關係が再び新になり、その使用が満足に導く。かゝる反覆は他方に自己又は他人によりて言はれた語の音が、それを發音する行爲と聯合するやうになる。かくして言語を使用する能力は音の理解と合體する。その後その音は示された事物の指示として用ゐられるのみならず、現在しない人又は事物に對する要求にも用ゐられるやうになる。この時期の語は主辭と賓辭とに分れたものではなく、根とか文章語とか言はれるもので、單一語で複雑な状態を示して居る。プーアと言へば「自動車がある。」「自動車を頂戴」「自動車を動かして」とかの代りになる。(e)單一語が二つ又は二つ以上結合するやうになる時期で、例へばガツカン、ニヤイ〜(電車を仕舞つて頂戴)といひ、尙ほ進歩すると、チャーチャン、ベベ、アーク(お母さん着物を早くきせて)といふやうになる。

生後六年間に習得した語彙の数を著者が一男児に就て調査した結果は次の如くで、三歳より四歳までの一年間の増加が最も多く、この間の半年間の増加すら、尙ほ五歳及び六歳の一年間の増加よりも多数である。語彙の上から言へば二歳は荅の時期で、三歳は半開、四歳は満開、五歳六歳は漸次凋落を來たすが、しかし大人の語に近づいて來て、結實期に一日一日と進んで居ることを示して居る。

	二歳	三歳	三歳半	四歳	五歳	六歳
名詞	一六五	四六一	七〇一	九八一	一二三七	一三六四
代名詞	七	一九	二〇	二三	二五	二九
動詞	五一	一七九	二二一	三〇一	三六六	四〇三
形容詞	二〇	五〇	六二	八六	九八	一一六
助動詞	一一	三三	四一	四七	五〇	五六
副詞	二四	六四	九二	一二九	一五四	一八四

接續詞	二	五	八	一〇	一二	一八
助詞	三	四	四	六	七	八
感動詞	一二	三一	三二	三二	三二	三三
計	三〇〇	八八六	一二一三	一六七五	二〇五〇	二二八九

これによると名詞が各歳を通じて最多数を示して居る。之に次では動詞である。試みに米國兒童に就て調査した名詞と動詞との割合の二三の例と著者の結果とを比較して見ると、次の如く著者の結果よりも動詞の数が少しく多い。しかし何れにしても動詞が名詞を除く他の品詞よりも遙かに優勢なることは同一で、兒童の發展的活動の精神を表現して居ると言へる。

年 齡	名詞(%)	動詞(%)	調 査 者
三 歲	五六・一	二〇・一	Whipple
	五二・〇	二〇・一	久 保
	五五・〇	二二・〇	Matear
四 歲	五八・六	一七・九	久 保

六 歳

五六・八

二〇・七

Nise

五九・六

一七・六

久 保

(四) 數の發達

數觀念の發達には個人差がある。例へばブライエルの觀察によると、十ヶ月の子供には、九本のピンの中から一本でも取り去ると直ちに氣付くと言はれて居る。處がフリースは細密なる觀察の結果これを否定し、ブライエルの子供は單に量的に認識し、その大きさの變化に氣付いたのである。例へば九本のピンを子供の前に並べ、それより子供を後るに向けて、その中からピンを取去ると三本位までは氣付かない。それ以上になると何だか變だといふ感を抱き、「他のは」と叫ぶ。かやうに「多數」といふ漠たる觀念を有して居ると言つて居る。ジェギーの女の子は二歳の時十二まで正しき順序に發音し、時としては十七まで言つた。しかし眞の數の價値を知つて居るのは一と二位であつた。唯上位の數は大きい數に用ゐられるといふ漠たる感を有して居るやうに見えた。三は六乃至七よりも小なる數に對する愛好の語であつた。而して八と十一とは其以上を示すに用ゐられた。彼女は十七段ある梯子を上り下りしながら數へたが、十一か又は十

三あつたといつてお仕舞にして滅多に十七あつたとは言はなかつた。下位の數を上位の數の所には置かないが、しかし正しき順序に決して言はなかつた。第二回の誕生日の後四ヶ月の間は少しも進歩しなかつた。數觀念は極めて徐々に發達したが、大さを比較する能力は著しく改良されたと述べて居る。

一、二、三等の語は最初は通常大人の發音を眞似て機械的に發音する。著者の觀察した一男子は一年九ヶ月頃イッチンチャン（一・二・三）と言つて居たが、これは競走の際の模倣で何等の數觀念を伴つて居ない。又この頃「坊はいくつ」といへば、二本の指の代りに片手を出して居た。それも傍から手を出すことを教へた爲めで、何等の數觀念を表はして居ない。所が一年十一ヶ月頃から、ピッチ（三つ）といふ語を覺えて、幾つといへばピッチといひ、坊はいくつになるといつてもピッチといふやうになつた。これは「幾つ」といふ語とピッチとが聯合されたやうに思はれるが、しかしこの頃より幾つかの數といふ觀念が朦朧に生じて居るやうに見える。何となれば一個の事物に對しては決してピッチと言はず、二個以上の場合に該語を使用するからである。その後二歳半

になつて一つ二つ三つといふ語を習得したが、唯數といふ朦氣の觀念だけで、その數の意味が明確に理解されて居ない。三歳になつて一つと二つとの區別が明瞭になり、一個の菓子に對しては一つ、二個の菓子に對しては二つといふやうになつた。しかし三個の菓子を出し、指を以て押へしめながら一つ二つ三つと模唱せしめ、幾つと尋ねた處が「知らない」といつた。處が三年六ヶ月頃になつたら三つが理解された。三歳十ヶ月頃には三つ四つ五つと出鱈目に發音して勘定して居たが、しかし未だ正確に三個以上のものを計算することが出来なかつた。その後二ヶ月の間に數觀念は急速に進歩し、四歳には一より十まで完全にいふことが出来るし、且つ勘定も出来るやうになつた。その後三ヶ月經過して、一より二十まで言ふやうになつたが、往々十二と十七とを抜かして發音した。しかし最後の數が全體の總數であるといふことは理解して居た。この十二と十七の脱落も約半ヶ月位にして完全になつた。これを見ると著者の觀察した子供の數觀念の發達には (a) 數の朦氣の觀念を得るに至ること、(b) 二を認知するに至ること、(c) 三より十までを知るに至ること、(d) 十より二十までを知ることの四階段があるやうに思はれる。

加算及び減算の能力の發達に就てはベックマンの興味ある實驗がある。氏は骰子の目を使用し六以下の加減を行はせた。例へば骰子の2の面を示しながら、「これは2の所です」と言ひ、「それに他の骰子を持つて來て、3になるやうにして御覽なさい」といふやうにした。これを氏は作出行爲と名づけた。次に氏は骰子の目の1と4とを對にし、更に2と1とを對にして、どちらの對が3になるかと尋ねた。それを氏は區別行爲と名づけた。氏は又二つの骰子を投げて、その目の數を二つ合せて幾つあるかを尋ねて居る。これを氏は命名行爲と名づけた。著者は小形の積木を用ゐる、例へば10と10の場合は、二個の積木を兒童の面前に置き、「それは幾つですか」と尋ね、兒童が「二つ」と答ふれば、「それを四つにするやうに、前にある積木(兒童の前に他の十三個を雜然と列べて置く)から取つて御覽なさい。二つを今度は四つにするのですよ」と命じた。それで著者の方法はベックマンによると作出行爲になるやうである。著者は十以下の加減を行はせたが、ベックマンの結果と比較するために、六以下の加算のみを摘出して表示すれば次の如くである。表中Bはベックマン、Kは著者の結果で、數字は正答した人數の百分比である。

年 終 問 題	$\frac{3}{2}$	4.0	$\frac{4}{2}$	5.0	$\frac{5}{2}$	6.0
1+1 { B. K.	0 100.0	10.0 100.0	38.9 100.0	53.1 100.0	65.9 100.0	93.7 100.0
2+1 { B. K.	0 50.0	10.0 100.0	38.9 100.0	50.1 100.0	65.9 100.0	90.6 100.0
3+1 { B. K.	0 50.0	5.0 25.0	22.2 50.0	43.7 50.0	63.7 55.0	81.5 100.0
4+1 { B. K.	0 50.0	0 50.0	11.1 50.0	37.4 50.0	54.6 55.0	81.5 100.0
5+1 { B. K.	0 50.0	0 50.0	5.6 50.0	28.1 50.0	47.7 55.0	71.6 100.0
2+2 { B. K.	0 50.0	5.0 75.0	11.1 50.0	35.0 62.5	50.0 91.5	71.6 100.0
3+2 { B. K.	0 50.0	0 50.0	5.6 50.0	18.7 50.0	28.7 55.0	71.6 100.0

4+2	{B.	0	0	0	12.5	34.1	62.5
	{K.	50.0	0	0	12.5	55.0	94.0
3+3	{B.	0	0	0	12.5	25.0	46.9
	{K.	0	0	25.0	50.0	55.0	96.5

著者の成績が一般に優つて居るのは、検査に用ゐた材料の相違か或は被験兒童の能力の差かに基つくと見るべきである。

(五) 遊戯。何故に遊戯するかといふことに就ては種々の説が主張されて居る。例へば腦の中樞に於ける勢力の過剩が遊戯活動を解發すと言ひ(過剩説)、或は將來の生活に於ける仕事の準備であると述べ(準備説)、或は種族の活動の全部ではないが簡約された形に於て、子供の行爲の中に反覆再現されたものが遊戯であるとし(反覆説)、或は原始状態にかへりて身心を弛緩せしむる必要上遊戯を行ふとし(弛緩説)、或は遊戯的活動の主要素は競争の動機に存して居ると考へ(競争説)、或は遊戯は身體の構造に基つくもので、生長する身體には必要であり、且つその必要を満たすものであると説明する。最後の生物學的説明が前の四説に比して長所があるやうに思へる。吾

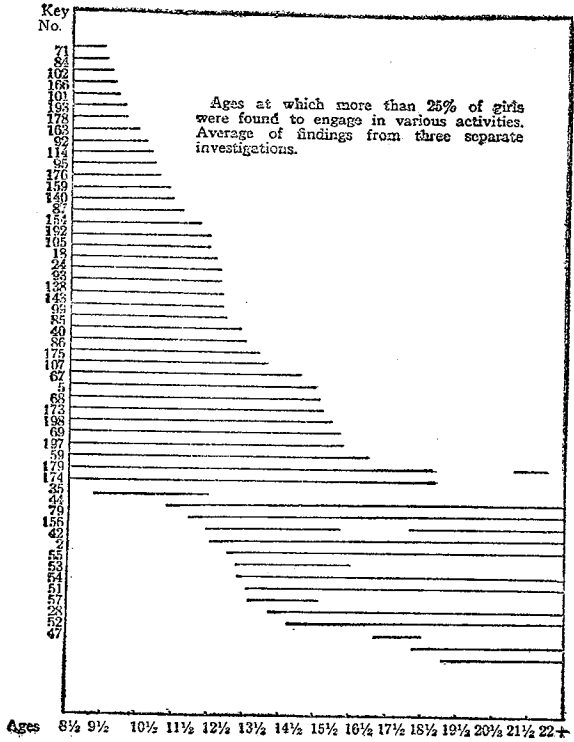
人の行爲感情思想の本能的傾向は、神經系統に於ける一定の聯絡が發達して後生するもので、その發達は常に同一の順序を取るものである。又神經系統が働き出すことは、それが發達して居るといふ許りでなく、周圍の事情、個人の狀態、直前の經驗にもよるものである。又實際生活に於ては、多數の反應が同時に解發しようとして居るし、反應を惹起した事情も、一つが一つを解發するといふやうに單純なものでなく、或時はこの本能が反應し、他の時は他の本能が反應するといふやうに複雑なものである。故に遊戯も漸次成熟してくる本能と、又それを解發する外界の事情や個人的狀態によりて多少の變化を示すことは當然である。

従つて遊戯は神經系統の年齢的發達に従つて相違し、又同一の要素が存して居ても、環境が異るとそれに對する行爲の反應も異つてくる。レーマンは二百の遊戯活動の表を造り、その一週間に行つた遊戯の所に符號を附けるやうにした。季節的關係を見るために、十一月と二月と四月との三回調査し、又都市の兒童と田舎の兒童との比較をも行つた。年齢は男女共に八歳半より二十二歳までで、各年齢の中最多數の所は三百二十名、最少の所は四十四名位で、總數は可なりの多

人數になつて居る。茲には年齢による遊戯の種類の相違のみを摘出して表示すると次の如くである。横の線は一定の遊戯がその年齢の間に表はれることを示して居る。尤も男女兒共に二十五名以上のものが従事する遊戯のみを列擧し、その他は省いて居る。尙この結果は三回の調査を平均し、都市と田舎とを區別しないで示してある。左端の數字は遊戯番號で、その遊戯の名稱は表の後に記載することにした。尙氏のいふ遊戯は非常に廣い意味に解せられ、通常娛樂と稱するものまでも含んで居る。

遊戯の發達には前述の如く幾多の要素が働くから、各年齢に於ける遊戯の種類も、精密に分類することは困難であるが、しかし大體に就ていふと、幼兒の時代には感官的知覺的遊戯が主で、一般の身體的運動・手技・發音の遊戯が行はれる。反應は粗雑で、最初の間は殆んど出鱈目の運動をする。七歳以前は競技よりも遊戯に従事し、想像や模倣が新に入り來り、玩具時代を形作つて居る。七歳より十歳までは、孤獨が漸次減じて競争的遊戯が増し、競争・跳躍・投けること・攀上ること等の身體的運動や、團體的の演劇化・蒐集・一層落付いた手技等を行ふやうになる。十歳より

圖 七 十 第

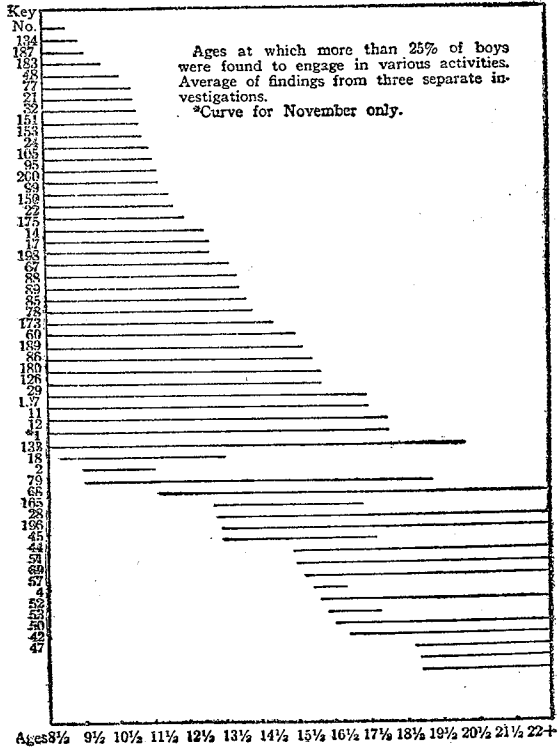


女兒遊戯番號表

- 71 詩を書く
84 シーソー遊び
102 指輪隠し
166 ハンケチ落とし
101 ホヌン隠し
193 他の玩具
178 ビーズに糸をさす
163 ロンドン橋
92 石けり
114 球ころがし
95 指揮者の眞似遊
170 場所取り
159 何處から来た
140 家庭遊び
87 三段飛び
154 活動の俳優の眞似
192 人形、人形の衣物等で遊ぶ
105 鬼ゴッコ
18 ローラースケート
24 水泳
93 跳躍、繩飛び
138 古代人の服を着る
143 學校ゴッコ
99 かくれん坊
85 只走る、はね廻る
40 花を集める

- 86 ランニングの競技
- 175 鋏で紙を切る
- 107 口 笛
- 67 謎を話し、又は解く
- 5 対手を捕える
- 68 嘶 を する
- 173 鉛筆、ペン、白墨、クレヨンで描く
- 193 愛猫と遊ぶ
- 69 嘶 を き く
- 197 愛犬と遊ぶ
- 59 ラヂオを聴く
- 179 縫 ふ、編 む
- 174 水彩畫をかく
- 35 運動競技を見る
- 44 音樂會、招待會に行く
- 79 體操をする
- 156 只想像する
- 42 只ぶらつく
- 2 籠 球
- 55 カード遊び
- 53 社交ダンス
- 54 地方ダンス
- 51 約束をして遊に行く
- 57 社交俱樂部
- 28 自動車に乗る
- 52 のちくちする
- 7 講演に出席する

圖 八 十 第



男兒遊戯番號表

- 134 砂 遊 び
 187 玩具の汽車、船、自働車等
 183 獨樂をまわす
 48 會に出席又は招く
 77 狼火をあげ、又は見る
 21 小舟に乗る
 32 輪 廻 し
 151 印 匂 遊 び
 153 巡查と泥棒遊び
 24 プ ラ ン コ
 105 鬼 コ ッ コ
 95 指揮者の真似遊び
 200 可愛がつてる動物と遊ぶ
 99 か く わ ん 坊
 150 牧 者 遊 び
 22 車 に 乗 る
 175 鋏で紙を切る
 14 將 棋
 17 ラ ム ネ 玉
 198 愛猫と遊ぶ
 67 謎をいひ、又は解く
 88 巾 飛 び
 89 高 飛 び
 85 只走り廻る
 78 木登り、垣根、棒に上る
 173 鉛筆、ペン、白墨、クレヨンで描く
 60 慰みにヒアノを弾く
 189 繪 を 見 る

- 86 走 り 競 争
 126 石 を 投 げ る
 180 鎚、鋸、等を用ゆる
 29 自 轉 車 に 乗 る
 197 愛 犬 と 遊 ぶ
 11 拳 闘
 12 相 撲
 1 蹴 球
 133 鐵 砲 を 打 つ
 18 ローラースケート
 2 籠 球
 79 體 操 を 行 ふ
 68 嘶 を す る
 165 只 歌 ふ
 28 自 働 車 に 乗 る
 196 無 線 電 信 そ の 他 電 氣 機 械 を 作 り 又 は 用 ゆ る
 45 會 や 遠 足 に 行 く
 44 音 樂 會、招 待 會 に 行 く
 51 約 束 を し て 遊 び に 行 く
 69 話 を き く
 57 社 交 ク ラ ブ
 4 戸 内 又 は 戸 外 で 球 投 げ
 52 の ら く ら す る
 53 社 交 ダ ン ス
 50 喫 煙
 42 只 ぶ ら つ く
 47 講 演 に 出 席 す る

十二歳までは、種々の競技が行はれ、心的活動も一層複雑に且つ廣汎的のものとなり、読み物・當て事・勝負・言語等に關する興味が表はれてくる。球戯・水泳・繩飛び・人形の衣裳の競争によりて能力が著しく發達するが、又一方にブランコの如く受動的の運動をも喜ぶやうになる。青年期に入る前には、團體的精神が生じ、冒險的行動を歓迎する。青年期になると、男兒は女兒よりも競争を好み、遊戯も分化し、組織化するやうになり、又知的競技を多く行ふやうになる。要するに幼兒に於ける感官的身體的個人的無目的無組織の遊戯は、年齢の増加と共に知的情緒的社會的有目的組織的の遊戯に進歩してくる。而してその進歩は極めて漸進的で、各階段の區別を定めることは不可能である。

(六) 描畫力の發達 兒童の圖畫は材料が容易に集められること、精神活動の發達を表現して居ることの爲めに、これまで多く研究された。今その主なるものを擧げると、第一はケルシエンシュタイナーの獨乙兒童に就てのそれである。氏は兒童の繪を多數に集め、その結果から四つの階段に分類した。(a) 第一の階段は圖式の時代で、これは子供が一般にまだ本當の畫を描くこと

の出来ない時代である。兒童の描く人間・動物・植物などは、兒童がそれ等の事物に就て知つて居る所を象徴的に描き現はし、彼等の見た所を所謂寫實的に描寫しない。例へば骰子を種々の位置に置いて、遠景視的に描かず、一樣に四角の形にかくのである。(b)第二の階段は線及び形の感じを描く。兒童は單に事物に就ての表象内容を描くばかりでなく、その關係をも描き出さうとする。しかしその場合には前の純圖式的の特質が入つて來て、今の形式的のものと圖式的のものとが混合することが多い。(c)第三の階段は現象に適合する描寫をなす階段で、最初の圖式的傾向が全く除去され、出来るだけ事物の形を示さんとする。尤も最初の間は輪廓が描かれる。従つて立體的、或は三方向を有する如き空間關係の困難な描寫は、この時期には十分發達して居ない。殊に學校で圖畫教育を受けないものは、獨力で第三階段以上に出るものは非常に少ない。深さの關係を描寫したり、或は物體を浮彫的に表現するといふ手段を知るのは十一歳以後のことで、しかも教育の影響からくるものが非常に多い。(d)第四階段は形に適合した描寫をする時代で、兒童は能く目的に適つた明暗配合、或は適當な表面の線を用ゐて一々の物體の形を描寫するやうに

なる。尤も以上の四種の階段は總ての兒童が漸進的に進んで行くとは限らない。中には圖式の階段に止まる兒童もある。それも男女別から見ると、女兒に於て殊に甚だしい。一般に圖畫の發達からいふと、男兒は女兒に比し形の理解或は描畫の點に優れて居る。これに反して女兒は色彩或は裝飾的の圖畫の方面に於て幾分男兒に優つて居るといふことである。

兒童の描畫の發達と民族に於ける描畫の發達とを比較した研究がある。個性發生が系統發生を繰り返すといふことは、身體現象のみならず精神現象にも行はれると一般に信じられて居た。所が描寫の發達はこの主張に反するといふのが、フェルウォルンの研究である。即ち子供は最初自己の知る通りに描いて、見る通りに描かない (*idio-plastic*)。所が上古民族の繪を見ると、彼等は感官世界に住み、彼等の見る所をそのまま、描いて居る (*physio-plastic*)。かやうに自然に忠實であるが、文化の階段が少し進むと、繪畫は記憶から描かれ、直接の事物でなく、再生された事物の觀念を描くやうになる。今日の野蠻民族の繪はプッシュメンを除き觀念畫である、といふことである。

ケルシエンシュタイナーの四種の階段は又不十分であるとし、例へばシュテルンの如きは、第一の圖式の階段以前になぐり畫きをする錯畫の時代があると主張する。シュレープラーは自身の子供三人に就て、この錯畫期を詳細に研究して居る。氏によると、この時代の兒童も決して勝手な線を以て、無意味に畫きなぐるのではなく、兒童は繪畫的描寫の技術、或は材料の上の困難に打勝つ爲めに眞面目に努力し、而かもその進歩の跡が明かであると言ふことである。實際錯畫の階段は眞の圖畫の發達すべき豫備時代で、心理學上非常に興味ある一時期を劃して居る。

尙ほ一層詳細に時期を劃して居るのはバートで、氏は倫敦の兒童に人を描けと命じ、時間は別に制限せずして描かせた人物畫を集めて居る。それによると第一はなぐり描きの時代で、年齢から言へば三歲位のもの、描くもので、早い兒童になると二歲頃から表はれる。このなぐり描きの時代は更に細分されて四つになる。(a)は盲目的に鉛筆を走らす時代、(b)有目的に鉛筆を走らす時代、(c)他人の鉛筆の運動を模倣して描く時代、(d)一定の場所を定めて描くやうになる時代、例へば人間を描けと言へば、頭をかくべき所に、何だか分らぬ線を澤山描くやうにな

る時代である、第二の階段は四歳頃の繪で、律動的に手を反復して動かすといふよりも、寧ろ單純の運動に活動が制限される時期である。従つてこの時期には、眼に點を打ち、頭は圓い形になつて居る。第三の階段は叙述的象徴の時期で、六歳頃に表はれ、一般的に大體人間の形が出來上る時代である。第四は寫實主義の時代で、七歳乃至八歳頃、學校で言へば一年乃至二年後に表はれる。但し寫實といつても、客觀物を描寫すといふよりも寧ろ叙述的で、眼で見るといふよりも論理的に頭で考へるといふ風である。第五は視的寫實の時代で、九歳乃至十歳頃に表はれ、見る所と知る所とを混同せず、見た通りに描くやうになる。しかしそれには二種の階段があり、最初は見た通りに描くにしても二方向の繪を描くが、その後になつて三方向の繪を描くやうに發達する。第六は禁止の階段で、十一歳乃至十四歳頃に表はれ、殊に青年初期に於て、この禁止が表はれる。これは描寫力が進歩しないで停滯する時期で、中には續けて描く兒童もあるが、大抵はこの時期に到達すると進歩しない爲めに失望して中止する。この禁止は何によりて起るかといふことは明確でないが、恐らく心的變化に基づくのであると言はれる。即ちこの時期になれば觀察

力は増加し、美的評價力も發達し、また一方には自我意識或は自己批判力が強くなつてくる爲めに、無鐵砲な繪が描けなくなるのであらう。それで腕が一時鈍つてくる。第七は藝術的復活の時代で、腕が復活されるに至る頃で、長く續いた物語の如きものを繪で表はすやうになると言つて居る。

第三節 兒童精神の發達

兒童精神の全體の發達は極めて複雑なる進路を取る。現在せる多數の説明は身心の作業の記述で、例へば記憶力、打叩速度、推理力等の發達を辿つて居る。この一々の作業は一定の仕方に増加し又は改良するもので、その他の作業も同様の徑路を取る。これ等の圖式的記録はある程度まで、心的過程並に心的組織の發達の指標になる。幼兒は行動並に身心完成の一定形式の方へ豫定された神経系統を以て出立する。ある種の行爲は簡單で、兒童の身體の個々の部分に關係し、ある行動は複雑で、全有機體を包括する。心的生活の出現に對する條件は定められて居り、時間が

經過するに従つて過程を蓄積し、組織を構成する。心的出來事は作業の身體的條件と關係するやうになり、精神物理的機能は漸次に完成される。その過程は毎時又は毎日に於ける質的變化でない。心的過程は添加的に進んで遂に成人を生ずるものでない。精神生活の發達は心的生活及び組織の連續的質的變化の出現を意味し、その變化は今は一の能力、次は他の能力を生ずるといふ如く、新しい機能の表はれることである。

ピューラーは人間と下等動物との比較よりして發達の圖式を述べて居る。智能の總ての現象は、三つの階段を有し、最初に本能、次に特殊行爲に對する訓練、最後に叡智が表はれるとする。本能は使用に對して準備された能力の遺傳を示し、固定されて學習の必要がない。特殊行爲に對する訓練は聯合的記憶を利用し、本能的傾向の基礎の上に働き、あるものを抑壓し、他のものを發達させて、新結合を構成する。叡智は新しい状態にそれ自身を順應する力を有し、洞察と熟慮とによりて發見をする。それは本能に知られない、又聯合によりて學習されない行動を行ふ方法、間道、道具を案出する。

近世に於ける最も重要な心理學的發見の一は如上の三つの階段が動物にも適用し得るといふことである。智能は決して人間の專有物でないことは、前章に述べたケラーの類人猿の實驗によりて證明され、彼等も洞察を以て行爲し得ることが分かる。若し兒童の發達を辿るときは、人生の極初に於て本能が働き、數ヶ月の後には經驗によりて學習した行爲をし、第一年の最後の月には、類人猿と同一程度の智的行爲を示すものである。かやうに叡智の領域に於ては、兒童は下等動物と人間との間の心的境界を極めて迅速に通過する。最も高等に發達した動物の智的行爲は、常に直接現在、明かに單純なる出來事、純粹に實際的適用に限られて居る。兒童が前後を眺め、一般化し、質問し、彼の經驗を表現するのみならず、それを名稱や描畫によりて代表せしむることが出来るや否や、動物の階段を遙かに踏み越えるやうになる。

精神發達の階段として如上の三種の形式のあることは明白であるが、それに就て重要な問題を生ずる。即ちこの三種の形式は最切の基本形式即ち反射運動より漸次に發達したものであるか（二元論）、或は三つの形式は根本的に相違し、進化の道程に於て低いものに高等のものが附加さ

れたのであるか（多元論）に就て議論がある。これに對する形態論者の主張は在來の考と反對して形態の一法則によりて説明せんとする點に興味がある。

先づ最初の反射形式から述べる。在來の考によると、反射は極めて簡單で、一定の刺激に對して比較的規則正しき應答をするが、それは極めて簡單なる裝置の機能であるとする。即ちその裝置たる反射弓は求心性と遠心性のノイロンとそれ等の間の結合から成立し、有機體の狀態と反應とはその結合に基づく。故に本能運動並に大多數の反射運動は非常に順應的に見ゆるが、その順應はこれ等の行動そのものゝ特質でなく、唯傍觀者に與へられる單なる印象に過ぎない。行爲は狀態の本能的性質によりて決定されるのでなく、既に存在せる連鎖の仕組によりて決定される。換言すれば動物は機械の如く、その行爲が事情に適するか否かに拘らず、既に建設されて居る連鎖の系統に従つてのみ働く。従つて狀態と反應との間の結合は純粹に偶然的で、吾人は何故にある狀態は一定の通路に影響するかを知らず、只左様に行はれると言ひ得るに過ぎないこととなる。在來の主張を今少しく明白にする爲めに、二三の例を取つて見よう。卵から新しく孵つた雛

が穀物を啄み、それを捕へて呑み込むことは、特殊の状態に對して有意味の反應をするためではなく、かやうな系列に於て反應をするやうに、ノイロンが相互に結合して居るからであるとする。若し吾人がこれ等の結合を變化せしむることが出来れば、最初に嚙下運動をし、然る後啄む運動をするであらう。尙ほワトソンの嬰兒の實驗の例を取ると、若し暗室の中に光を持つてくると、嬰兒はその光の方に眼を向けて凝視する。これは状態には無關係で唯内部の結合よりしてかゝる行爲を行ふものであるから、若しこの結合を變化せしむれば、その反應も變化して、例へば光が右の方に表はるゝ時に、嬰兒は左の方を凝視するやうに出来る筈である。この實驗は偶然にも嬰兒でなく猿に就て行はれた。マリナは猿の眼の内外の筋肉を切断して相交叉してそれを連結した。右眼の外部筋肉を收縮するやうに送られた衝動が、今は左の方の運動を生ずるやうになり、左の方に送られた衝動は右の方を動かすやうになるべきである。即ち猿は光が右の方に表はれる時に左の方を注視しなければならぬことになる。所が實際に於ては、かやうな事は少しも起らず、傷が治るや否や、その動物は彼の眼を手術前と同じく正常の通りに動かした。即ち變化を引起す

やうに企てられたに拘らず、同一の運動を行ふことを續けたのである。

かやうに状態と反應との間に於ける單なる偶然的結合の概念は反射の階段に於てすら破れることになる。然らば第二の階段たる訓練に於ては如何。これは前章の動物學習論に於て少しく述べたが、總ての學習は試行錯誤といふ如く偶然によりて進行するものでない。ケーラーの類人猿は提出された問題を試行錯誤によりて解決しなかつた。ワトソンの子供は生後百五十日頃から再三再四焰を捕へようとして居たが、二百二十日目には焰を捕へる代りに、それを打つやうになつた。かやうな變化は一定の刺激と一定の反應との聯合が變化したと言ふよりは、知覺の變化に伴ふ反應の變化と解すべきである。學習は偶然に二つの接近した觀念が單に聯合するといふことでもなく、又試行錯誤によりて豫じめ出來上つた通路を選択するといふでもない。これは知覺過程がそれ自身の組織、形態を構成し、形態や組織が變化すれば反應も變化する。故に學習は組織又は形態の變形である。而してその變形には二つのものが相寄りて一つになることもあり、一つが分れて二つに分れることもある。ピューラーの子供は最初糸をつけてある菓子を與へられ、その糸

を引いて菓子を取ることを知らなかつたが、其の後糸を引いて菓子を取ることを學んだ。これは糸と菓子とが別々の事物の知覺でなくなり、統一體として知覺した爲めである。即ち一々の要素が聯合して學習されるのでなく、統一體となつて初めて學習されるのである。次に一つが二つになる場合は、ある統一體が分節され、有意味の部分に分れることである。例へば旋律を聞く時に吾人はそれを統一體として認知するが、その旋律を構成する各音を聞くやうに練習すると、旋律の間にその一々の音を聞き出すことが出来るやうになる。而してその一々の音は旋律の要素として聞くのでなく、旋律とは異つた意味を有する部分として認知する。

これまで述べた原理は一元論か又は多元論かといふに、多數の異なる組織と形態的變化の形式とを包括する多元論になる。しかしそれは反射・本能・訓練・智能の如き分離した多數の能力を假定する意味に於ての多元論でない。しかし一方から見るとそれは又一元論である。尤もそれは精神的連鎖又は聯合の機制に各の過程を歸着せしむる如き一元論でなく、形態の一般法則によりて發達を説明せんとする企に於ての一元論である。

要するに形態説の主張によると、兒童精神の發達は形態即ち統一體の變形といふことになる。然らば兒童に於て表はれる變形の主なる形式は如何といふ問題が起る。エーリッヒ・シュテルンによると、幼兒の生活形式は、自我と外界とが區別されない如くに、精神そのものも分離されて居ないことで、ジンメルの所謂未開發の統一であり、フレーベルの所謂總てのものと生活とが一致せる生活である。少年期になると對象の區分を生じ初め、夫々一定の意義を有するやうになる。即ち少年期の生活形式は根本的統一が多様に分割されて行くことで、ジンメルの所謂開發せる多様の階段である。この開發した多様は再び開發した統一を生じなければならぬ。而してこの統一は自我と世界との間が一致調和することによりて生ずる。個人が自己に振り向き、自身に示される世界を發見することによりて、兩者の間に緊張を感じる。この内部への轉向、即ち自我の發見と、それと同時に外界に於ける全く新しい方面の發見とが、青年期の生活を示し、この時期には世界と自我の調停即ち發達の最後の目的に導く所の戰が行はれると。以上に述べたシュテルンの生活形式はその大綱を捉へた點に最も優れたものである。しかしこの辯證法的進展は、各々の時

期に於ても尙行はれて居るやうである。幼兒期に於ても自我と外界との分裂、兩者の争鬭が表はれ、少年期に於ても同様である。只その自我とか外界とか、青年期のその如く複雑せるものでなく、發達の程度に於て低く、行はるゝ範圍に於ても狭く、兩者の間の緊張の感も弱いだけで、分裂、綜合の形式は同一であるやうに思はれる。例へば二歳頃になつて多少外界とか他人とかを認識するやうになり、意志活動が多少發達すると青年初期に見る如き一種の反抗の時期が表はれる。少年期になつて社會生活が一層擴大して來ると、自我と社會との對立が幼兒期よりも遙かに複雑になり、矛盾、不一致を感じる。但しそれが青年期ほどに、強烈でないといふだけである。

第四節 青年心理學

青年期は言ふまでもなく兒童より成人への過渡期であるが、個人によつて身心の發育が相違するから一定しない。一般に女兒は十二三歳、男兒は十三四歳頃から青年期に入り、二十歳又は二十四五歳で成人の域に達する。青年期の研究には、大部分は觀察法と質問法とが行はれ、時々實

驗法が企てられた。所が精神科學派の主張が考慮に入れられるに従つて青年の日記や詩が重大視されて來た。エーリッヒ・シュテルンによると、子供に於ける精神機能の關聯は一層弛やかで、機能の中心點は價值の方に向つて居ないから、實驗的研究は容易である。所が青年になると、價值生活を構成し、それに彼の人格的中心を置くやうになる。而してその全人格を捕え、それを形成する所の價值生活を探究するには實驗は不十分である。又青年は自己の内部に生ずるもの、自己の携はるものに就て詳細に報告することを嫌ひ、寧ろ自身の内に引込み、世界に對する自己の興味を祕密にすることを求める。故に質問法やそれに似た方法は決して本質的洞察を與へない。これに反して青年は彼自身の體験を日記、手紙、詩歌などに表はす傾向がある。従つてかゝる敘述又は藝術的形態構成の試みが吾人に貴重なる材料を與へると言つて居る。氏の主張は青年の精神生活の方向性を知るには眞であるが、しかし彼等の差異的方面を研究するには、實驗法や觀察法を捨てることは出來ない。

青年期の精神生活に於て特に著しく吾人の眼に映するものゝ中、自我意識の發達、性的感情の

覺醒、思慕の情に就て述べる。

(一) 青年初期に入ると男女共に身體的發達が急に著しくなり、それに伴つて生活感情が高まり、力の意識が強くなつてくる。粗暴な遊戯、力試し等が兩性のもものに喜ばれ、目的もなく亂暴に歩いたり、寒いのに薄着をして自慢したりする。これ等の力自慢は新しく構成される自我意識の基礎をなすもので、高上する力と高上する意志とは相提携して行く。少しく經過すると、漸次に自己の力に對して不安不確實を感じ、烈しき自己縮小又は自己輕視の感を生ずるが、一方には青年初期の本質たる虚榮と賞讃の希求等が表はれてくる。かくして不確實と確實とが交替的に起り、新に生じた愛の欲求が朋友、教師及び他の人に近寄るやうに強ゆる。以前の所有物は捨て、顧みられず、両親にも嫌きたらなくなり、出来るだけ異つたもの、反對せるものへと新しい欲求を生ずる。昔時の友達も棄て、理想は全く新しく異つてくる。そのために反抗と自己主張の衝動が表はれ、青年初期の自負的力の感は新しい形式の自負となり、自己意識、精神的自由の希求が表はれてくる。

身體的力を基礎とせる自己意識は青年期に入ると漸次に發達して自我意識に代つて行く。シュブランガーやシュテルンも自我意識の根本が青年初期に於て始まつてくると述べて居る。子供や子供の業績を他人の前に公開する如き教育を施すと、早くから自己を意識するに至るが、普通の状態では無意識である。而して正常の發達に於てはシュテルンが言つた如くに、子供の自我意識の早い表現は、自己に就ての知でなく、自己に就ての感情と意志とである。個人的感情、利己的意志が自我の知的理解よりも遙かに早く表はれ、前二者は後者の準備をなすものである。この個人的感情や利己的意志は、我儘、頑固、名譽感情、功名心、虚榮、羞耻として表はれて來、殊に十二歳頃になると、名譽心が旺盛になつてくる。甚だしきものになると、名譽の權化であるかの如く振舞ふ子供もある。而して名譽も外部的で、衣服とか携帶品の如きものに氣を引かれるが、漸次内部的になり精神的のものに代つて行く。

自我の發現と共に無目的の反抗時代が表はれてくる。青年初期に於て暫らくの間は青年のエネルギーは無目的に働き、從來の狭い途から出て新しい途を探索する。若しこの瞬間に方向が定め

られるとすれば、それは時代の影響や模範からくるものである。しかし多くは積極的自由が得られず、一定の方向が選擇されない場合である。そのために従來の周圍のものから逃れることを企て、今まで一所に騒いで居た家庭を離れ、自分の室に立籠り、自由な空想に耽る。しかし一方には大なる孤獨と苦き悲哀とを感じる。而してこの新しい境地は誘惑的であり、且つ避け難き運命を示すやうに見ゆる。時々昔日の親しい間柄の生活をあこがれ、幼児時代の回想に耽り、殊に女子にありては母親の腕に抱かれて泣きながら總てのことを打あけたい氣がする。しかし時は己に經過し、兩親の權威は覆され、家庭の滋味は破壊されて居る。

かやうに無目的の寂寞や憧憬よりして漸次に目的表象や理想の構成へと進んで行く。しかし最初の理想は一部は知的で一部は感情的であつて、殊に青年初期に於ては英雄的理想が強く表はれ、所謂偉人崇拜の時代を生ずる。青年の理想構成には明かに二つの形式がある。一は美的理想構成で、他は道德的宗教的理想構成ともいふべきものである。美的理想構成には驚嘆、愛情、及び特徴の認知等がある。その理想に向けられた執意、又は志向は注意されず、只その完全、力、

美、他人の能力等が嘆美され、認知され、理想として感ぜられる。都市の青年が活動篤眞や芝居に熱注するのはそのためである。宗教的・道徳的理想構成に於ては一種の激情的信奉を生じ、積極的にそれに到達せんと努力するやうになる。青年の理想構成には一の根本的特質がある。青年は決して抽象的目的、即ち美とか眞とかに對して努力するものでない。青年が自身で自己を教育しようとするやうになつた場合は、抽象的目的を理想とした爲めでない。模範となつた具體的人間に對する深き愛情がその動力になつて自己教育をなして居ることが多い。このことは次に述べる性的感情の覺醒に關係がある。

(一) 青年期に於ける他の特徴の一はいふまでもなく性的感情の覺醒である。生物發達史の上から見ると性的衝動は二つの成分が漸次に結合して行くと見るべきである。最初に性的物質を排出する衝動が表はれるもので、程度の低い生活體に於ては一生涯この衝動のみを示して、自己交接又は自己受胎を行ふものもある。しかし異性間の二つの個體が接觸しなければならぬ一層高い階段にある生活體に於ては、二次的に第二の衝動たる相互に追ひまはす接近衝動を生ずる。青年初

期に於てはこの二つの衝動が未だ結合することなく、それ／＼獨立的に發達して行くもので、二者が全く一つになることは青年期に於て表はれるものである。しかしこれは健全なる家庭に育つ青年に於ける發達經過であるが、性的關係に無頓着な家庭、文化的又は經濟的關係より抑壓を受けない青年に於ては、二つが一致することなく、排出衝動が強く發達して自慰を試みたり、放蕩に身を委ねたりして、悲しむべき結果をもち來たすやうになる。

尤も接近衝動は單に性的のものと考えてはならない。他方に社會的方面がある。殊に幼時に於ては社會的成分が著しく、子供は保護のために両親から離れないやうにする。抱擁とか接吻とかを喜ぶことは、幼兒の無害の愛情に屬するもので、それが青年期になると、性的に規定された愛情へと變つて行く。この最初は社會的成分と性的成分とが不分化であつたものから、性的方面が明白に表はれてくる時期に就ては、シュブランガーが觀察した如くに、文化的發達の高いか低いかによつて遲速がある。高等なる文化發達の階段にある青年は接近衝動がそれ自ら淳化されて居て、一般的同情、崇拜、他人の理解に向ふものである。この不明瞭な深い同情及び接近欲求の時

代は、デッサアの名づけた不分化の性的衝動の時代である。しかしこれを性的衝動と名づけることは當を得て居ない。蓋しそれは社會的成分と性的成分とが交錯された不明瞭な努力で、對象の選擇が單に性的見地からのみ行はれないからである。保護と模範とを求め、補助と理解とを欲することは、この愛情渴望の有力なる成分である。

接近衝動と關聯して表はれるのは空虚の感である。これは青年期の初めより中頃にかけて多く經驗されるものである。一方に自我意識が發達して父母の膝下を離れるやうになり、他方に接近衝動が旺盛になると共に一種の寂寞を感じ初める。

これに對して靜的の青年は自身の室にとちこもり、憂鬱な灰色につゝまれた氣持で、自身の空虚の心を眺めて居るものもある。これに反して動的の青年は登山や旅行にその空虚を慰め、或は低級な歡樂に身を委ねるやうになる。飲酒、喫煙、自慰、賭博等の悪行爲は凡てこの空虚を満たさんがための行動といつてよい。シュブランガーが天幕生活や遊歷團の運動を推稱し、又理解ある年長の婦人の必要を説くのはこの點に存する。立派な寮母を有する青年男女の寄宿舎が如何に

彼等の生活をして、明るく樂しきものたらしむるかは言ふまでもない所である。

(三) 孤獨や空虚の感に關聯して思慕の情が表はれる。思慕の最初は現在ある所の總てのものに對する不滿に就ての苦惱や新に生じた孤獨の悲哀の情である。思慕する内容は何にも無く、只途方にくれて居る。純粹に感情ばかりで内容の無いことが思慕の最初である。この時代の青年の日記を見ると、自分に對しても不滿足であり、自分以外の總てのものに對しても不滿足であることを知るだけで、それが何であるか分らない。自分が所有するものは自分が所有したいと欲したものでなく、所有したいと思ふものは所有することの出来ないものである。實にこの單なる不滿足を何によりて言表はすべきかを知らないやうに見ゆる。

しかしその思慕は單に感覺的のものに向ふのでなく、それ以上の何ものかに向つて居ることは確かである。青年は往々この不明の思慕の内容を精密に確定せんと求めることがある。例へば何かを思慕しては居るが、それは何であるかを知らない。朋友か、あらず、學校に於ける自由か、あらずといったやうに探究して行く。従つてこの時期の感情は複合したもので、喜悅と悲哀、希

望と絶望、孤獨と充足とが相半ばして存して居る。而して最初に意識せらるゝ思慕の對象は、自己を理解する人である。これは孤獨の感から免れんとする接近要求で、男子は平均十六歳、女子は十三乃至十四歳頃表はれるといふやうに、女子の方が男子よりも早く表はれる。而して求める人は冷やかに傍に立つ補助者でなく、自己を理解して共に生活し、共に苦んでくれるものである。彼の愛する人が彼の缺點に就て惱んでくれることが彼を善くすることの刺戟として受取られる。理性に基く洞察とか、決意とかによりては彼の心は高められることなく、愛人の苦惱が彼を鞭撻する。

かやうに思慕は最初は無目的抽象的であるが、漸次に直觀的有目的になつて行き、一方には愛人に對する思慕となるが、他方には文化財に向けられて、自然、藝術、科學、道德、又は宗教上の理想を目的とするやうになる。この場合の思慕は單に空虚の感を補充するものとは限らず、十分なる緊張、烈しき欲求、不満足、希求等が表はれる。故に純潔で健全なる青年を作り上げるには、この思慕の念をして、自然、藝術、科學に向はしむるのみならず、宗教及び道德的理想へ向

参考文献

1. Norworthy, N. and Whitley, M. T. The psychology of childhood.
2. Stern, W. und Cl. Psychologie der frühen Kindheit. (英譯)
3. Hall, G. S. Youth. (英譯)
4. Bühler, Ch. Das Seelenleben des Jugendlichen.
5. Hillingworth, L. S. The psychology of the adolescent.
6. Stern, Erich, Jugendpsychologie.
7. Spranger, E. Psychologie des Jugendlichen.
8. Hollingworth, H. L. Mental growth and decline.

第五章 差異心理學

第一節 差異心理學の問題

差異心理學の名稱はシュテルンが個人差を研究する心理學に用ゐたものである。この種の研究は一般に個人心理學 (Individual Psychology) といふ名が用ゐられて居るが、しかし個人心理學といふ時には種々の混同を生ずる恐れがある。例へばヴント其の他の民族心理學や社會心理學に對して、一々の個人に就いての一般心理學の敘述であると考へられ、又精神分析學のフロイドと異つた立場から精神分析を行ふアドラーなどの彼等一派の研究する心理學に對して (Individual Psychologie) の名を與へて居る。故に茲にはシュテルンの用語を踏襲して差異心理學 (Differentielle Psychologie) の名を用ゆることとした。

個人差の研究は可成り古い。ドイツのフヒネルは一八六〇年には己に氏の著書精神物理學の中に、友人に質問を發して回想や表象像に於ける個人差を明にして居る。フランスの研究者シャルコー及びテーンは、ある者は視的表象を最も多く有し、他の者は聽的又は筋肉運動的表象を多く

圖 九 十 第



アルフレッド・ピネー

有すること、且つこの相違は言語像や數觀念に於て證明されると述べて居る。しかし最も精細な差異心理的研究の最初はピネーの著書「大計算家と將棋差しの心理學」である。氏は二名の算術家、即ち視覺型のデアマンヂと聽的運動感覺型のイノーヂの行動を比較し、又多くの勝負を盲目で行ふ將棋差しの行動を研究した。而して視覺型並に聽的運動感覺型の算術家の相違を示す爲めに、種々の實驗を用ひたが、その結果、感覺型の區別は、表象生活の本質的相違を理解するには十分でなく、それは直觀像の具體的性質の程度に基づくと結論した。尙ほ將棋差しは遊戯の進行を本質的に歸約せしむる所の、短縮せる圖式を有することを發見した。其の後の研究に於てピネーは詩人の報告を集めて、劇的創作を明かにせんと試みた。

これより先きイギリスにはゴルトンが人間能力に於ける個人差を公にし、米國のキャテルは感覺や筋肉作業に於ける個人差を研究した。かやうにこの種の研究は各方面に行はれて夥多の材料が得られたが、シュテルンはその種の材料を集めて公にし、それに差異心理學の名稱を與へた。氏によると差異心理學は精神生活の相違並に趨異に於ける一般的形態と法則、並に性・年齢・

種族・職業等による個人的特質、及びそれ等相互間の關係、或は到達し難く説明し難い個性に一般的のものから近づくといふ如き研究をなすものである。しかし現時に於ける個人差の研究は主としてビネーによりて初められた智能の相違と、近時特に注目されて來た性格又は氣質の相違である。即ち以前に注目された意識内容に於ける個人差の研究は直觀像の研究を除く外一般に廢れて、各人が環境に於ける諸種の問題を解決する能力と、それ等の問題を處理する態度とに研究が變つて來た。

以前の差異心理學は分析的構成心理學の立場に立ち、意識の根本要素又は機能に於ける個人差を知ること傾いて居た。しかしこの種の研究によると個々の人間の生きたる特質、男と女、或は兒童と青年といふ如き間の全體的區別が理解されないといふことから、歴史や詩などより得た心理的洞察に就いて考へるやうになつた。分析的並に説明的心理學の外に理解的並に記述的心理學を提唱したディルタイの主張は個性の方面に於ける一般心理學的概念に就て疑問を引き起した。即ち精神的又は精神物理的全體の假定なくして精神生活の一般的現象、思考經過、注意、感情狀

態は説明されなくなつて來た。知覺過程の統一、感官に於ける錯覺の如きも、これを認識するもの、全體の意義に依存すと證明された。茲に於て差異心理學の研究態度にも變化を生じ、在來の分析的態度と、新興の統一的態度とを如何にして一致せしむべきかに就て、研究者の頭を悩ますやうになつた。

吾人は一人の特質を他人のそれと比較せんとする時に、一つの特質を引き出してそれを並置して見なければならぬ。如何なる行動を彼から豫期し得るか、彼は一定の職業に對して如何に適して居るか等を知らんとするには、その行動、その職業に要求される特質を區別して研究し、彼の能力と他人の能力とを比較しなければならぬ。尤もその際にその人を一々の素質からなり立つ寄木細工のやうに取り扱ふならば、その人を正しく取扱つたと言へない。他方に職業活動を生々したまゝに引き出し、一々の特質がその職業に對して如何なる意義を有するかを尋ねる時に、素質と職業との關係を知り得るとすれば、吾人は職業活動の意義に就て考へることになる。かくして吾人は全體の組織的表象を得るが、この組織の原理は意味關聯である。藝術家の行動を取扱ふ時

に、中間に位して、相互作用として働く體驗の深さと表現能力との關係を求め。素質により、尙又外界の影響によりて引出された方向性の中に、體驗が表はれて來、構成された表現は體驗を明白にし、殊にその表現が分化された場合に然りである。故に吾人は一方に素質とか特質とかを分析すると共に、他方には有意味的全體を理解する必要がある。要素の分析は全體の理解によりてその根據を得、全體の理解は要素の分析によりて明白にされる。従つて差異心理學は一般心理學と同じく要素と全體との兩方向より研究を進むべきである。

第二節 智能に於ける個人差

人間に於ける最も著しき特質の一つは個人的に相違する事實である。この相違は人間の意識を構成する材料の種類に於ける相違のみならず、尙ほ環境の要求に順應する爲めにこの意識を用ゐる能力の相違に基いて居る。吾人の感官はその鋭敏の度に於いて相違し、一方の人の見たり聞いたりする以上に、他方の人は見たり聞いたりすることが出来る。尙ほその相違は感官に於ける缺

陥に基くこともある。例へば或る者は全色盲であり、或る者は一部色盲である。或る人は一定の音に對して聾であり、或る人は一部の皮膚覺を失つて居る。之に似た相違は意識過程の特殊の形式の中にも存し、例へば或る人は或る事物を考ふる時に、常にその視覺像を使用し、或る人は視覺像を有せずして、その聽覺像を用ゐる者もある。或は筋肉運動を利用して思考する者もある。近時エーレンシュ及びその學徒の行つた直觀像（殘像と記憶像との中間に位するもの）の研究に依ると直觀像は青年期に入る前後の年齢十二歳より十四歳までに最も多く表はれ、それ以後は漸次減退する。しかし文學や藝術的才能の方面に傾く人々は直觀像が長い間持續する。而して殘像に近い直觀像を有するものは強直症病型（T型）と名づけ、冷靜な眼を以つて物を視、内部刺戟よりも環境に反應する。これに反して記憶像に近い直觀像を有するものはパセドウ氏病型（B型）と稱し、眼は大きく輝き、常に目を見張りて外界を眺め、寧ろ自己の心内に動けるものを外界に傳達する役目をなして居る。日常經驗から離れて内部精神生活を營むものである。前者は感覺的であり、精神の結合が弱く、後者は精神的であり、精神の結合が強いといふことである。

かやうに意識内容に於ける個人差と等しく吾人が環境に於ける諸種の問題を解決する能力にも個人差がある。即ち一方に極めて優れた解決を與ふるものから、他方に全く劣れる解決を行ふものに至るまで多數の階段がある。而して此等の能力を便宜上大別して二つにする。第一は一般能力の個人差で、新狀態に自己を順應せしむる能力や、學習する先天的能力に於ける相違を指すもの、第二は特殊能力の個人差で特殊の狀態に對する順應力、又は特殊事項の學習力に於ける相違である。而して前者を量的に測定する方法が一般能力検査法又は智能検査法といはれ、後者のそれが特殊能力検査法又は適性検査法といはれて居る。此等は今日では教育心理學又は職業心理學に於ける重要な部分を占めて居るが、何れも個人差の研究から發達したものである。

特殊能力の検査のことは産業心理學の節に譲り、茲では一般智能の検査法を述べる。これには個別的に検査するものと、團體的に検査するものと二つがある。個別的検査法中最も著名であり、且つ最も廣く用ゐられて居るものはビネー・シモン法である。これは一九〇四年にビネーが巴里の教育當局者の依頼に依りて精神薄弱兒を鑑別する爲めに案出したものである。その後氏は

助手シモンと共にその方法を改訂し、一九二一年に現時行はれて居る如き方法を公にした。この改訂の主要點は、第一に學校で習つた知識を検査することを止め、普通の人生の經驗に於て年長者なり、遊び友達から自づと知るに至つた知識や熟練を検査しようとなつたこと、第二に智能といふ廣い事項を單一の検査で測定しないで、多數の簡單なる検査法を採用し、兒童をしてその學んだ所や爲すことの出来ることを示し得る機會を多くした。此等の検査法はその困難の程度に依りて年齢別とし、下は三歳兒検査法より上は十五歳兒検査法までの階段を附した。而して子供がこれ等各種の階段のどの位の検査法まで合格し得るかを測定した。

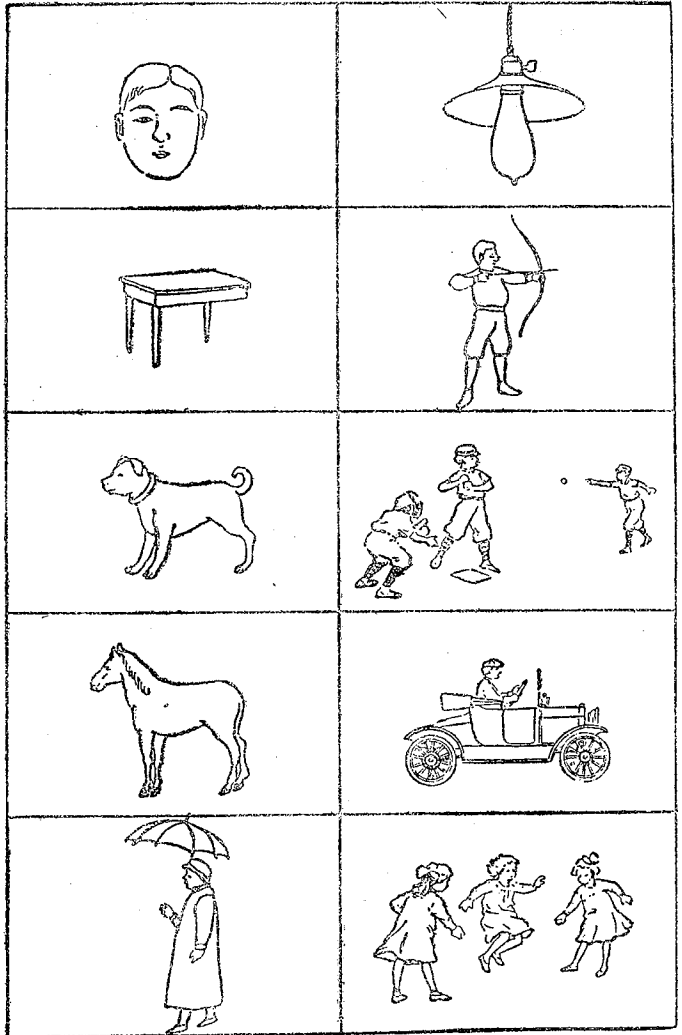
此等の検査法は決して新しいものでなく、在來の心理學者が行つてゐたものであるが、其等の幾つかを組合せて一般智能を検査するに至つたのはビネーが最初である。この方法に就いては種々の批評を蒙つたが、その實際的效果は驚くべきもので、爲めに各國に傳はり、それ／＼自國に適用するやうになつた。合衆國に於けるゴッダードやターマンの改訂法、獨逸に於けるボーベルタッフの方法の如きは著しきもので、我國でも本法の紹介は早く行はれたが、未だ我國兒童に就いて

その眞價を検査した者がなかつたので、予は大正七年にピネーの原法を試み、その後二回の改訂を経て大正十一年法を公にした。ピネーやターマン法は三歳児以上の検査になつて居るのを二歳児より検査の出来るやうにし、又ピネー法は十一歳児、十四歳児の検査法なく、ターマン法は一歳児、十三歳児の検査法を缺けるのを、予は之を附加し、十四歳児検査法まで作成した。一々の問題も全然踏襲することなく、新しい問題を増補して面目を一新した。今一例として一二検査法を示すと次の如くである。(詳細は拙著『児童研究所紀』
巻二第五卷を見られたし)

一歳児検査法。(一) 家族の名を言ふこと。(二) 自己又は他人の耳・目・鼻・口を指示すること。(三) 繪畫を示してその名を訊ねる。(四) 一種の命令を與へて、その通りに實行せしむる。

六歳児検査法。(一) 繪畫を示して叙述せしむる。(二) 日常事物をその用途に依りて定義せしむる。(三) 長三角形のカード二個を用ひて長方形を作らしむる。(四) 菱形を描かしむる。(五) 三種の命令を同時に與へて、之を實行せしむる。(六) 未成の繪を示して、その不足せる部分を指摘せしむる。(第二十圖)

圖 十 二 第

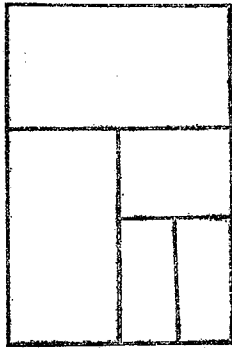


十歳兒検査法。(一)與へられた語句を用ひて文章を組立て、それが正しい意味を表して居るか否かを判定せしむる。(二)繪畫を與へてそれを解釋せしむる。(三)四個の數字を逆に反復せしむる。(四)推理問題の解答。(五)三語を與へて二句又は一句の文を作る。(六)芝生の内に失はれた球を捜す方法を圖示せしむる。

上の如き問題を兒童に課して、何歳兒の検査法まで合格し得るかを見て、その兒童の精神年齢を算出する。例へば、六歳兒検査法全部と、七歳兒検査法の中の半分即ち三問だけ合格したとすれば、精神年齢は六歳六箇月になる。若しこの兒童の生活年齢(普通の年齢を指す)が六歳六箇月であれば、その子供は正常の精神發達を遂げたることになる。所が今生活年齢が十歳で、精神年齢が八歳六箇月とすれば、その子供は一歳半だけ精神發達が遅れたことになる。之に反して生活年齢十歳の兒童が十二歳の検査法に合格し、それ以上の検査法に合格しないとすれば、精神年齢は十二歳となり、二歳だけ精神發達が進んで居ることを示すのである。

かやうに生活年齢と精神年齢との差に依つて智能の高低を判定する外に、ターマンは兩者の比

圖 一 十 二 第



を以て智能の高下を示した。これは智能指數と名づけ、生活年齢で精神年齢を除した商で、通常之に百を乗じて小數にならないやうにする。従つて生活年齢と精神年齢とが一致すれば智能指數は百となり、これは普通兒である。優良兒は精神年齢が生活年齢に超過するから、智能指數は百以上になり、劣等兒は之に反して百以下になる。予は智能指數によりて五段に分類し、優は一二一より一四〇、上は一〇六より一二〇、中は九一より一〇五、下は七六より九〇、劣は六〇より七五までとした。

如上の検査法は主として言語を用ゐるものであるから、聾啞兒や言語障得の子供又は外國生れの子供に適用することは妥當を缺いて居る。又或る子供は如上の検査法にあるやうな抽象的觀念を取扱ふには不得手であるが、具體的事物を取扱ふに長所を有するものがある。かゝる場合には、出来るだけ言語を用ゐず具體的

事物を用ゐて作業せしむる所謂作業検査法が必要になつて来る。これには種々の方法があるが、最も多く用ゐらるゝ二三の方法を紹介する。

一 型盤。第二十一圖の如き長方形の板が五個の小片に分割されたものを被験者に渡し、その五個を以て長方形を造るやうにする。作業するに要する時間と誤謬の回數とを計算する。これは形體の知覺と、構成能力とを見る検査である。

二、繪畫完成。これは一定の繪を板の上に貼附けて置き、その中から十個所だけ切取り、その小片と、それに類似した他の小片四十個とを混合して子供に渡し、その五十個の中から適當の小片を選んで、前記の空所を填充して行く検査である。これも作業時間と誤謬の數とを計算する。これは繪の内容の認知と、構成能力の検査である。

三、判じ箱。一定の仕掛を用ひた箱で、その仕掛を發見して、その箱を開く作業である。觀察力と推理力との検査として用ゐられる。

この種検査法に依りて各年齢の作業時間と誤謬數の標準を算出したものもある。その標準と比

較して、前記ピネー法と等しく精神年齢を算出するのである。但しピネー法の成績と本法に依る成績とは一致すること少く、前者に於て優良なるものが必しも後者に於て優良とは言へない。従つて此等はそれぞれ異なる能力を検査するものと言はれて居る。

以上に述べたピネー法や作業検査法は個別的に行ふものであるから、多數の時間と努力とを要する。所が一度に多數の人を検査する必要の場合には、團體的に検査する方法がなければならぬ。

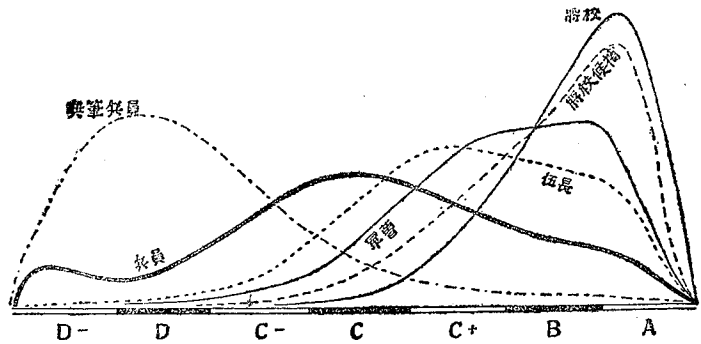
その爲めに作業の問題を印刷に附し、それを理解して作業せしむる方法が工夫された。然し中には文字を解しない者もあるから、この方法だけでは不十分とせられ、更に文字を要しないで、然も團體的に検査し得る方法が案出された。

團體検査法の最も代表的なものは、歐洲大

智能階段	得 點 數	
	A	B
A	135—212	100—118
B	105—134	90—99
C+	75—104	80—89
C	45—74	65—79
C—	35—44	45—64
D	15—24	20—44
D—	0—14	0—19

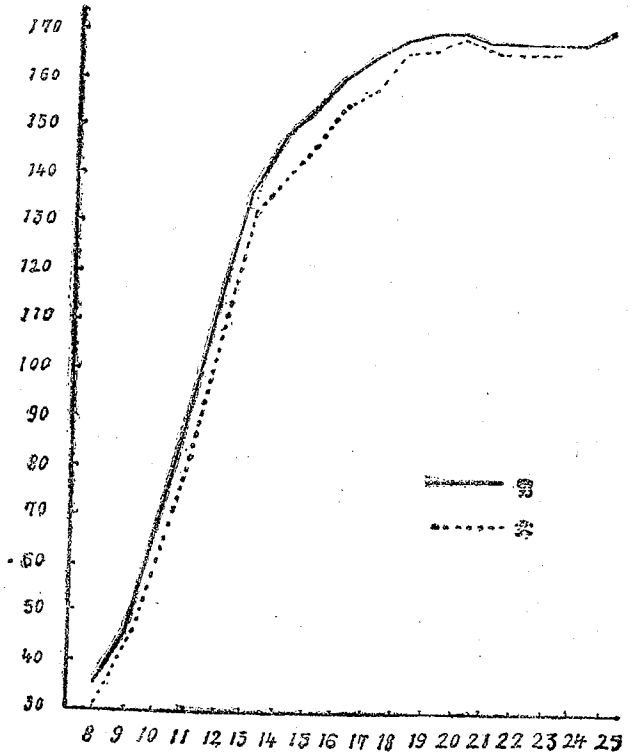
戰の際、兵士募集に合衆國で採用した軍隊テストである。これは α テストと β テストの二種があり、前者は文字を解する者に課し、後者は文字を解しない者に課するもので、言葉や手眞似で命令を傳へ、その回答も文字を用ゐないで出来るやうになつて居る。 α テストは八種の検査を組合はせたもので問題の總數が二百十二ある。例へば検査用紙に小圓を五つ一列に印刷してあるが、言語命令に依りて、「第一の圓から第四の圓に線を引け、但し第二の圓の下を通り第三の圓の上を通るやうにせよ」と言ひ、その通り實行せしむる。或は特殊の専門的知識なくして出来る算術の問題を課したり、斷片的になつて居る句を文章に組立て、その主張の正否を判断せしめたり、或は常識に基く知識を検査する問題があり、或は又一々の間に對して豫め三つの答を印刷し置き、その中でどの答が正しきかを選択せしむるものもある。 β テストは七種ありて、問題の總數が百十八ある。例へば迷路を與へて、一方から他方へ抜けるやうに線を引きかせたり、繪の不足せる部分を指摘せしめたり、立方體を積み重ねた繪を示してその數を計算せしめたり、數字を符合に置き換へしめたり、三位以上の數字を左右に竝べて印刷してあるものを比較して、同一數字が

圖 二 十 二 第



否かを發見せしめたりして居る。この二つの検査法とも各問題の正答に對して一點づゝ與へることにし前に示す如くその點の高下に依りて七種の階段に智能を分類した。最高のA階級と最低のD-階級との差は極めて烈しく、前者はカレッジや大學に於て優秀なる成績を示したもので、後者は精神年齢十歳以下で、長年の間通學したに拘らず小學校の三年又は四年以上に進級出來なかつたものである。中央のC階級のもものは、中等學校の全科を卒へることの出來ない位の程度のもので、精神年齢十三乃至十四歳のものである。C-階級のもものは小學校六年卒業の程度で、精神年齢十二歳である。C+のもものは中等學校卒業のもので精神年齢は十五

圖 三 十 二 第



歳位である。
 この分類に依り
 て十八歳より四十
 五歳迄の軍人百七
 十萬人の分配を圖
 示すると第二十二
 圖の如くである。
 軍隊テストが效
 果を収めたに鑑
 み、戦後小學校兒
 童に適用し得るや
 うな團體検査法を

作らうとして軍隊テストに參與した一部の心理學者に依りて企てられた。これが國民智能検査法と稱するもので、A式とB式との二種類ある。何れも六種づゝのテストを組合せたもので、A式には應用問題、文章完成法、論理的選擇法、語義比較法、置換法があり、B式には計算問題、智識の問題、語義の検査、類推法、比較法がある。予はこの方法を再度改訂して我國兒童及び青年を検査し得るやうにした。(問題及び方法は拙著『兒童(研究所紀要第七卷を見よ)』)今八歳より二十五歳(女子は十三歳)までのA式に依る得點中數の進歩を圖示すると第二十三圖の如くである。實線は男子、點線は女子の線である。之を見ると十五・六歳になると進歩が鈍くなり、二十歳以後は全く進歩して居ない。

第三節 性格に於ける個人差

智能に個人差がある外に、情意の方面にも個人差がある。假令智能指數は同一であつても、大膽な者と臆病な者、進取的の者と退嬰的の者、快活な者と憂鬱な者、激情の者と冷靜の者に依りて、その作業成績に相違を來すものである。これ等の個人差を検査するものを一般に性格検査法

といはれて居る。性格には種々の定義があるが、茲では個人の情意的反應の總ての可能性の全部を指すことにする。而してそれは發達の進みに於て表はれて來るもの、換言すれば遺傳と環境(身體的影響、教育、社會、經驗等)とから出來上つたものである。性格の個人差研究には情意的反應の一般的傾向によりて分類するものと、一々の場合の反應行動を比較するものがある。前者は主として觀察に基き、後者はテストを用ひて研究する。

一般的傾向の分類の一としては、昔時から知られて居る膽汁、多血、粘液、憂鬱の四氣質の分類である。氣質の起源に就ての昔時の論は省き、近世の著者はこれ等の氣質は種々の腺並にそれ等の分泌物の活動に基くと信じ、これ等の區別は身體組織に絶えず行はるゝ化學的變化の相違から結果すとす。この四種の氣質を質、強度、速度、持續の四成分に分析すると、快不快、強弱、速遅、固定動搖と夫れ々二つの方向に分類される。それで人間の一般的傾向を二つの極に對立せしめた研究者もある。精神病學者エワルドは多血質的又は燥狂的氣質と憂鬱質的又は鬱狂的氣質とに分類し、前者は生物緊張力(Biotoniaとは生物のエネルギーの緊張する力を指す)が高く、

心的速度が促進し、心的質の強度が高上せるもので、快的生活感情と快活な氣分を伴ふ者である。後者は生物緊張力が弛み、心的速度と強度とが低下せるもので、不快的生活感情と陰氣な氣分を伴ふ者である。氏は更にその二つの極端の間に中庸を得たる氣質の者があるとす。ニーチェは人間の傾向をアポロ型とディオニソス型とし、前者は内部の美しい夢の世界、想像の世界に居る者で、後者は本能に依りて支配され破壊を喜ぶものである。蓋しアポロは想像、尺度、制限の神であり野蠻に打勝つ神である。之に反しディオニソスは上半は神で下半は小羊を以つて示される如く、神と動物との性格を有するものである。この二つの神の性質は最もよく人間の性格を表すものとして前記の如く二種の型に分けたのである。精神分析學者ユングは内向型と外向型に分けて居るが、前者はニーチェのアポロ型の如きもので、判断や思考が主觀的感情に依りて支配され、主觀的價值に依りて行動するが、後者はディオニソス型の如く、興味も注意も客觀的事物に依りて支配され、客觀價值に依りて行動するものである。マルストンは二歳より六歳までの兒童一百名を調査して、學齡前に既に内向型と外向型とが明かに表はれて居たと報告して居る。氏は

その觀察の標準として、未知人に對する社會的抵抗、困難な作業の要求に對する聽従、變化あり珍奇な環境に對する興味の反應、欲求の拒絶に對する自己主張の四種の態度を用ゐた。尤も氏はこれ等の態度が本質的傾向に基づくか、又は子供の經驗の産物であるかに就ての研究をして居ないが、二種の傾向がかやうに人生の早い時代より表はれることは性格研究上極めて興味あることである。

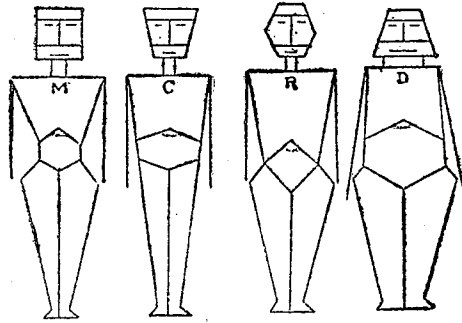
精神病學者クレッチュマーは二百六十名の男女の患者の體格、體質、表情、分泌腺等を詳細に觀察測定して、その性格に二種の型があるとし、これは正常者に於ても同様であると言つて居る。

一は躁鬱狂者に表れる周期性精神病型で他は早發性痴呆症に表はるゝ分裂性精神病型である。前者に於ては(一)社交的、好人物的、友情に厚い、親切な、(二)快活、滑稽、爽快、短氣、(三)靜肅、沈着、憂鬱に陥り易い、心情が弱いといふ三種の特質が常に去來する。しかしこれには變種がありて、非常に快活で噪狂的のもの、靜かに満足せるもの、憂鬱に陥れるもの等がある。分裂型に於ては(一)非社交的、靜肅、控目、眞面目(無滑稽)、中心を外れる、(二)臆病、恥しが

る。微妙な感情感受性を有し、神経質、興奮し易い、自然と本とを好む、(三)温順、親切、正直、無頓着、機智に富まぬ、沈黙等の特質が表れる。これによると周期型はユングの外向型に、分裂型は内向型に相當するやうに見ゆる。

更に文化價値に對する興味の方向から分類するものもある。精神科學派のシュプランガーの生活型式はその好例である。それには經濟的、美的、理論的、社會的、政治的、宗教的の六種の型があつて、各個人の生活はこの代表的形式に依りて建設されるといふのである。例へば人間の總ての努力が現實の捕捉、客觀的認識の方に向く者は理論型の人で、客觀的認識から遠ざかつて、寧ろ特殊の場合を絶えず汲み取り、個人的特殊性を捉へる者は審美型の人で、生活が實用の理想に依りて支配され、出来るだけ僅少の出費を以て、出来るだけ多くの結果を得ようとする者は經濟型の人で、愛情と協同に依り、他人に對する生活に依りて生活の要素が構成されて居る者は社會型の人で、權勢と名譽、支配と價値に對して努力する者は政治型の人で、個人を生活と世界の全體の意味に關係せしむる者は宗教型の人であるとする。勿論此等は代表的のものであるから、

圖 四 十 二 第



その中間に位する者、一人で二つ以上の型に屬する者がある。

かやうに吾人の行動に依りてその型式を分類する外に、身體的特質よりして、その者の行動を豫知せんとするものがある。かの性格學と稱して研究されて居るものは多くは之に屬する。歐洲大戰の際フランスの兵士に分類を試みて多少の効果を挙げたと言はれるのは第二十四圖に示す如き四種の型式である。圖中Dは消化型又は腹型と稱へられ、腹と顎とが大きく顔は三角形をしてゐる。この型に屬する者は健康と能力はその人の消化狀態に依る。飢と渴とに堪へることが最も困難で、進撃的方面よりも防禦的方面に適すと言はれる。次にRは呼吸型と名づけ、飢渴には堪へるが多量の空氣を必要とする者

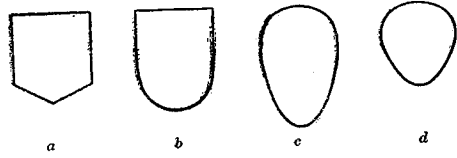
で、胸は凹み、身體は長く、咽喉も長い。顔は眞中が擴つて上と下とが尖つて居る。この者の氣分は呼吸状態に依り、肺を擴げる行動を非常に喜ぶ。故に此の種の兵士は登山や飛行機に乗ることに最も適し、攻撃に長じ、冒險的であるが、機械的と單調に苦しむ者である。第三のCは大脳型と稱し、頭が上に擴つて下の方がこけて顎の所が小さいやうに見える。身體には他のタイプ程特徴は無いが、頭も腦も大きく活動も亦大きい。智力を表はすのも、能率を舉げるのも、凡て氣分に依り、病氣も氣分に依りて治りもし、又重くもなるといふ者である。兵士としては主腦部となつて働かせてよい。第四のMは筋肉型といひ、手足が長くて丈夫で、胴は長くはないがよく發達して太い。頭が四角で三方面凡て同長をなし、筋肉が最もよく發達して居る。運動競技を喜び、それを止めると憂鬱になり、呼吸器病や神經的疾患に陥る。従つて兵士としては運搬、土掘り、など筋肉作業の總ての方面に適し、少しぐらゐの病氣も筋肉活動を行はせると治つてしまふ。又作業の結果などは問題にせず、唯働けば喜ぶといふ者で、その代り知的方面の仕事は不得手である。

この分類は純粹に思索的であると非難される。即ち理性の人は大きい頭を持つべきであるとか、大食家は腹が大きくなければならぬとか、運動家は筋骨が發達して居るとかと演繹されるが、それは正當でない。例へば呼吸型のものは肺のみならず全部の呼吸系統、鼻、上顎竇、前顎竇等が超發達しなければならぬし、消化型は腹部のみならず、顎骨も發達しなければならぬ。それでクレッチュマーは頭蓋、身長、體重、手や足の長さ、骨盤の廣さの人類學的測定は勿論、頭、目、鼻、口、耳、顎の形、鬚、髮、齒、齒莖、顔色、姿勢、骨や關節、筋肉、皮膚、血行、分泌腺等凡てに亘りて調査測定し、先づ身體型として五種を列擧する。第一は虚弱型で、顔、顎、胴、手足その他の組織が凡て厚味が缺け、長さは平均よりも短くないものである。従つて體重は平均體重を有して居るが、全體の周りや廣がりは平均値以下である。第二は強力型で、身長は高く、大さは中位で、肩幅が廣く、立派な胸を有し、胃が丈夫で、骨盤の方へ漸次小さくなり、立派な足を有するものである。第三は肥滿型で、圓々と太り、身長は中位で、顎は短くて大きく、顔は廣く、下腹が大きく膨れて胸よりも前の方へ突き出て居る。第四は混合型で、前記の諸型が混合せ

虛弱	虚弱と強力との混合型	虚弱型	四	二期型	二
強	強型	三	三	分裂型	八
肥滿	肥滿型	二	二		
肥滿型の混合	混合型	六	二		
不定型	不定型	一	三		
變形	變形型	四	三		
計		八五	一五		

滿型との間に明白なる生物學的の一致があり、(一)分裂狂的傾向と虚弱型、強力型、並に不定型との間に明白なる生物學的の一致を示し、(三)分裂狂型と肥滿型との間には非常に一致を缺き、周期型と虚弱型、強力型及び不定型との間にも一致が少いと、氏は尚ほ眼、鼻、口、頭や顔の形と二種の心的傾向との關係を詳述して居る。今その中で顔の形と心的關係を紹介すると、氏は顔の

るもの。第五は不定型で、何れの型とも著しく異つて、分類し難いものである。一般に男子に於て如上の型は明白に表はれ、女子に於ては餘り著しく表はれず特に顔の形、筋肉と脂肪の發達に於て明かでない。従つて女子には不定型や準型のものが多い。クレッチェム¹はこの五種の身體型のもが、前掲の周期と分裂の二種の氣質の中どれに屬するかを調査して上表を得た。而して結論して曰く、(一)噪譁の周期的傾向と肥



形を四種に大別する。aは平たくて五つの角のあるもの、bは廣い楕の形、cは長い卵の形、dは短い卵の形である。虚弱型の分裂型のもものは短い卵形で、強力型の分裂型のもものは長い卵形で、肥満型の周期型のもものは平たくて五つの角のある顔をも有する。廣い楕の形の顔は強力型にあるが、長い卵形に屬する強力型の約半數であるといふことである。

以上の如く吾人の性格を全體的傾向に依りて分類する外に、分析的に一々の特性の有無を研究する方法がある。例へば決意、進取、固執、信頼、暗示、感激、柔軟、忠實その他の性質を見る爲めの検査法が工夫されて居る。これには直接法と間接法とがあり、前者は被験者に一定の行動を行はしめて直接にその者の性向を見る方法で、後者は一定の行動より間接にその者の性向を見るものである。

今直接法に屬する一二の例を示さう。

(一) 忍耐力の検査。これは被験者をして踵を床から四分の一インチだけ離して直立せしめ、一方に簡單なる装置に依りて被験者が爪立つて居る時の踵の高さを記録するやうにして置く。被験者に向つて踵を下けないやうに命ずる。實驗の結果に依ると、正常者が踵を高く保ち得る時間は平均五十分で、最大二時間半、最小二十分である。所が怠惰者になると最小四分足らず、最大が五十二分足らずであるといふことである。

(二) 決断速度の検査。先づ被験者に向つて、「こゝに二つの封筒がある。その中に精神検査の問題が入つて居る。一方は他方よりも容易である。何れか一つを取つて検査しようと思ふが、然しどちらを取るかは汝の勝手である」と言ひ、二種の封筒を示す。而して被験者がどちらを取るかを決定するまでの時間を測定する。一秒までに決心すれば一〇點、二秒までは九點といふやうに、長くなるほど點を下けて行き、四十四秒もかゝる者は一點とする。

次に間接法の二三の例を示す。

(一) 樂觀型の検査。樂觀的の人は常に快の經驗を想ひ起し易く、悲觀的の人は常に不快の經驗を想ひ出す傾向があるといふ見地から行つた方法である。實驗者が或る單語を發音すると、被験者はそれを聞いて最初に想ひ出した觀念に注意し、それが快であるか又は不快であるかを報告せしむる。若しその觀念が快でも不快でもない場合には、それが何れにかなるまで考へを續けさせる。かくて毎日異つた五十個づつの語に依りて五日間續け、その者が快的聯想をするか、不快的聯想をするかを検査し、若し前者であれば樂觀型の人とし、後者であれば悲觀型の者と判斷する。

(二) 感激性の検査。先づ二種の文章を用意する。第一の文章は日常有觸れた内容で、少しも感情を惹起さないものとし、その中に二十語だけ不要の語が挿入してある。而して被験者はそれを讀んで行くうちに不要の語を抹消して行く。それが濟むと第二の文章を示す。それは非常に感傷的なものや充奮的内容を有するものとし、その中にも不要の語を二十個挿入して置き、被験者はそれを讀んで行くうちに、不要の語を抹消するのである。採點法は第一の文章と第二の文章とに於ける抹消數の差に依りて行ふ。即ち餘り文章に感激して不要の語を見落すか否かを検査する

のである。

(三) 衝動性の検査。一定の文字を出来るだけ遅く書くやうに命ずる。衝動性の人は遅く書く方がよいと言はれても、それを抑制することが出来ずに速くなつて行く。或は簡單で單調な作業、例へば轉つてくる球を拾はせ、或は小さい棒を穴に差し込む等の作業を、常に同一速度で行ふやうに命ずる。單調に堪へざる者は、時間が長くなるに従つて、同一速度で行ふことが出来ず、漸次に速くなつたり、又は遲速不規則になつて行く。

上に例示したことに依りて明かな如く、性格検査法は智能検査法に比し、方法も不完全であり、且つ結果の信頼度も低い。これは智能よりも性格の方が研究に困難なること、尙ほこの検査法が智能検査法よりも後に發達したことに基因する。尙ほ性格検査法に於ける未決の重要問題は、智能検査法に於ける一般智能並に特殊智能の問題と同じく、一般性格とか特殊性格とかいふべきものが存するか否かといふことである。例へば前記の忍耐力の検査は主として筋肉に訴へるものであるから、この検査に成績のよい者は果して心的苦痛に對しても、忍耐力が大であるかといふこ

とである。若し忍耐力なるものが、特殊的のものであれば、前記の忍耐力の検査をしても、吾人は被験者のあらゆる状態に於ける忍耐力を知ることが出来ず、一々の場合の忍耐力を検査しなければならぬことになる。この方面の研究は目下の所全く着手されて居ないと言つてよい。只電流計法を用ゐて、情緒の特殊性を研究せるものが二三あるだけである。

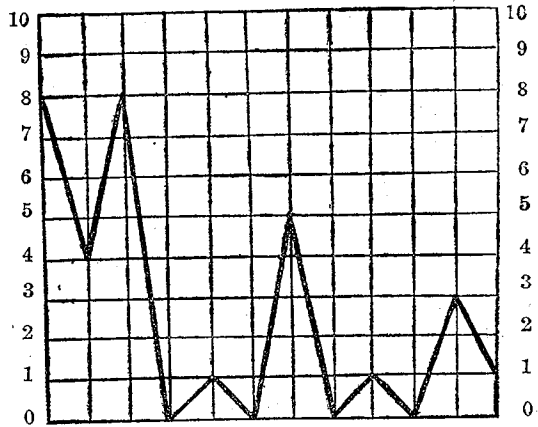
第四節 心誌と輪廓

心誌 (Psychograph) には個人心誌と職業心誌とがある。前者はツールズが行つたやうにゾラやボアンカレーの如き特殊の人間の心的特質を明白に表示せんと企てに用ゐられたもので、後者は今日一般に職業分析と名づけられて居るものである。しかし近時の發達によると、心誌といふ語は個人の計量をテスト又は特質の順に示す特殊の分析的圖表的方法と考へられ、輪廓 (Profile) の語はかゝる測定を表から得た圖解を示すやうに用ゐられて居る。

心誌法には先づ計量の結果を標準單位で示さなければならぬ。例へば總ての特質の計量を分配

單位、順位、百分比單位、絶對單位、又は精神年齢の如き發達單位に依りて示す。それ等の計量は合法的に比較され、結合され、平均され、その他量的仕方に處理されなければならぬ。而してそれ等の計量の結果を簡單なる圖解を以つて直觀的に示すと、種々と必要なる目的に役立つやうになる。例へば縦線を水平の底線の上に等距離に引け。この一々の線はテスト又は特質の一つを示す。縦線の一つを沿ふて、採用せる單位の語に於て目盛を書く。残りの縦線の各々の上に點や横線等によりて個人の有する特質の程度や量を示すやうにする。この點や線の分布や、その點を線で結びつけることに依りて、個人の作業の一般水準のみならず、種々の特質の相對的位置、並に種々の性能間に平衡を得て居るか否かを容易に知ることが出来る。今ドーニーが意志氣質検査法を用ひて、或る個人の十二種の特質を検査した結果を圖示したものを示すと次の如くである。これは各種の特質を十の階段に分け、評點法を用ゐ、最高が十點になつて居る。或は各種の性能の正常又は豫期の状態を示す線を引き、それと各個人に就いて計測した線とを比較して示すこともある。一例としてホリングウェアスの検査した一兒童の結果を示すと第二十七圖の如くである。この

圖 六 十 二 第



固執性
衝動の調節
詳細に對する興味
運動の禁止
最後の判断
妨害に對する抵抗
反對に對する反應
運動的衝動
決意の速さ
柔軟性
情性よりの解放
運動の速さ

兒童の生活年齢は八歳であるが精神年齢は十五歳で、握力は八歳兒の標準に達し、打叩は七歳兒の標準に近い。共應動作、側面圖構成、セガン型盤、抹消及び置換法は八歳兒の標準に達して居るが、ステッキストの機械能力検査には少しく遅れ、觀念傳達と語構成とは十歳兒の標準以上に達して居る。かくしてその兒童が如何なる特質に於て正常

圖 七 十 二 第

19																		
18																		
17																		
16																		
15																		
14																		
13																		
12																		
11																		
10																		
9																		
8																		
7																		
6																		
5																		
4																		
3																		
2																		
1																		
精神 年齢	握 り	打 叩	共 應	側 面	型 盤	機 械 能 力	抹 消	置 換	觀 念 傳 達	語 構 成								

の兒童より優れて居るか又は劣つて居るかを一見して知ることが出来る。而して正常標準よりの脱逸が極めて不規則なことは、疾病、缺陷、不平均の教育に基くことが多いと言はれて居る。

この心誌又は輪廓の方法は數年前シュテルンによつてその可能を

提言された。その後ロツソリモは各種の性能を代表する十種の精神作用を選び、それ等に對して十種の検査をなし、その結果よりして性能輪廓を作つた。シーショアは聲樂家の性能を十九種の項目に分析して性能輪廓を作り、カーティスは種々の學業成績の平衡を示すが如き圖を工夫して居る。これ等の方法は個人的相談、臨床的試験、異常精神の研究、不適當の人格の再教育、職業指導や紹介に於ける實驗の場合の心的分析の具として非常に利益がある。

心誌法の眞の利益は、その技術や標準が尙ほ一層多くの特質の測定に利用される時に初めて表はれるものである。かゝる人格的圖示は多年間差異心理學の目標であつた。約三十年前クレーパーンはこの種の心的狀態の描寫の必要を述べて居る。異常精神を取扱ふ際に、人格の適當なる穿鑿の必要を常に切實に感じて居た氏は、性格測定の發達に對し種々と有益な暗示を與へた。氏は精密なる測定の必要殊に標準の設定や脱逸の測定の必要を主張し、重要な性向を示すことを企てた。クレーパーン及び氏の學徒の著書の中には、性格研究に於ける實驗的方法の實際的適用、圖示、統計的手續等の端緒が多く發見される。今日流行して居る教育測定法の如きもゾンメルが

算術の根本過程の能力を決定する尺度を工夫したことの中にその萌芽があると言へる。

しかし吾人の性格や智能は極めて複雑であるから、これ等を分析して完全なる心誌や輪廓を作ることは難事である。恰も大海の水を柄杓で汲み出す如きものであると批判する者すらある。又要素の總和は全體と異なるとの近時の考察から、心誌及び輪廓の方法はその出發點に於て有して居た程の期待を失つて來た觀がある。しかし不斷の努力によりて分析を行ひ、一方に全體活動との關係を研究して行つたならば、遂には完全なる心誌及び輪廓を得ることが出來よう。

参 考 書

1. Stern, W. Differentielle Psychologie.
2. Binet, A. and Simon, Th. A method of measuring the development of the intelligence of young children.
3. Ternan, L. M. The measurement of intelligence.
4. Yerkes, C. S. and Yerkes, R. M. Army mental tests.

5. Hollingworth, H. L. Judging human character.
6. Roback, A. A. The psychology of character.
7. Kretschmer, E. Körperbau und Charakter. (英語訳)
8. Ellis, R. S. The psychology of individual differences.

第六章 應用心理學

第一節 醫事心理學

茲にいふ應用心理學とは、醫學、法律、教育、産業、軍事方面に於ける心理學的研究の總稱である。従つて應用心理學とは何かといふ嚴密な定義を下すことは困難である。若しこれを以て、一般心理學の方法と結果とを實用的目的に適用する學であるとすれば、現時の應用心理學は、これに反してそれ／＼独自の研究方法を用ゐ、その結果は却つて一般心理學の知識を擴大せしめて居

る。又若し一般心理學の知識を基礎として研究するものとすれば、異常、社會、動物、その他の心理學に於ても同様で、吾人の有する總ての心理學を適用しなければ研究は出來ない。故に應用心理學は嚴密に他の心理學と區別することは困難で、唯その研究が他の心理學に比して、一層實用的效果を目標として居る點に於て相違するに過ぎない。

先づ醫事に關する心理學から述べる。醫師が人間本質の基本的事實を一般に理解することによりて治療上利益を受くることは明白である。而してその主なる補助は次に述ぶる諸點に存する。

(一) 感官の研究、心理學者が種々の感官を検査する方法を醫師は習熟する必要がある。感官知覺に關する研究は最初生理學者によりて發達されたが、現時に於ては心理學者の研究が非常に進歩して、却つて生理學者並に醫學者による結果を提供して居る。色彩や光度の辨別、色盲、聽覺、音高低の辨別、觸覺の缺陷、嗅覺に關する實驗方法と結果とは、醫學者の心得べきことで、殊に神經系統に於ける疾患とそれに伴ふ精神缺陷、例へば發語不能、書寫不能等との關係を知るには心理學の知識が必要である。

(二) 疲勞並に筋肉運動、學校衛生に關係する醫師に於ては、心理學に於ける精神疲勞の意義と研究方法とを熟知しなければならぬ。又體育競技に關しては兒童の手足に於ける筋力、作業の正確度と巧緻度等に於ける測定法を知る必要がある。殊に競技者の適性検査法の如きは近時發達したもので、その方面の知識無くしては體育の指導は困難になつてくる。

(三) 智能の判定、前章に述べた智能検査法によりて智能の高下を鑑別することが、醫學的診斷の上に必要である。例へば夜尿、榮養不良、寄生蟲、疾病等と智能との關係は勿論、各種の精神的疾患と智能との關係は、決して看過し難きものである。

(四) 腺分泌の研究、キャノンのアドリニン分泌の研究は恐怖と激怒の生理的基礎を明かにし、引いてゼームス・ランゲ説の批判に及んで居る。ベルマンは内分泌と性格との關係を詳述して、吾人の氣質が種々の内分泌に關係を有することを明かにし、新な方面より氣質の研究を促して居る。

(五) 性格の分析、前章の性格の個人差に述べた如くに、精神病學者によりて吾人の性格の分析が試みられ、又精神分析學者はこれまで些末なこととして看過されて居た日常生活に於ける忘却

や錯誤（置忘れ、宛名の忘れ、言誤り、書き誤り等）夢、滑稽、言語障害等が不快の觀念を抑壓する作用に基づくことを明かにした。これ等のことは後に再び述べることにする。

第二節 法廷心理學

法律に對する心理學の貢獻も決して少くない。法律を正當に理解するには、社會の本質並に人間の相互關係を支配する力を理解しなければならぬ。この種の材料の多くは次章に述ぶる社會心理學の供給する所である。心理學的研究が法廷の問題に適用された最も著しきものを列擧すると次の如くである。

(一) 裁判官の個人差、裁判官、陪審官、辯護士等の個人差の研究が注意を引いて來た。裁判官が刑期の判決を言渡すのに、一定の選擇があると言はれて居る。刑に服した者六萬三千六百五十三名に就いて調査すると、一、二、三、五、七、十、十四、二十年及び終身の刑期が多く選まれ、四年以上十年の刑期が特に選まれることは裁判官に一定の心的習慣があることが分る。尙ほ二三

の細かい點を見ると、六年刑は二十名、五年刑は二百四十名、四年刑は六十名、三年刑は三百六十名といふやうに一種の選擇があり、十九箇月は二十名、十八箇月は三百名、十七箇月は一名も無く、十六箇月は三十名、十五箇月が百五十名といふ不揃を示して居る。

陪審官の判断が種々の條件に依りて影響されることも重要な研究である。この種の實驗の一例を述べよう。灰色のカードの上に種々の形を有する白い紙の小片を不規則に貼附する。小片は九十二個より百八個までとし、數枚を用意する。陪審官十八名にそのカードを二枚竝べて一分半提示し、どちらのカードの數が多いかを各自に書記せしむる。その後その數に就いて討論を行ひ、五分間の後投票をする。尙ほ五分間討論をして第三回即ち最後の投票を行はしめる。この結果第一回は五二%正しかつたが最後は七八%正しかつたことを發見した。同様の實驗が婦人の陪審官にも行はれたが、五分間の討論に拘らず、正確度の百分比に變化がなかつた。婦人に於ては否定への變化と肯定への變化とが互に相殺されて居たことが分つた。尙ほ第一回と第三回との間にとのくらの變化を蒙つたかといふに、男子の方は四〇%、婦人の方は一九%であつた。

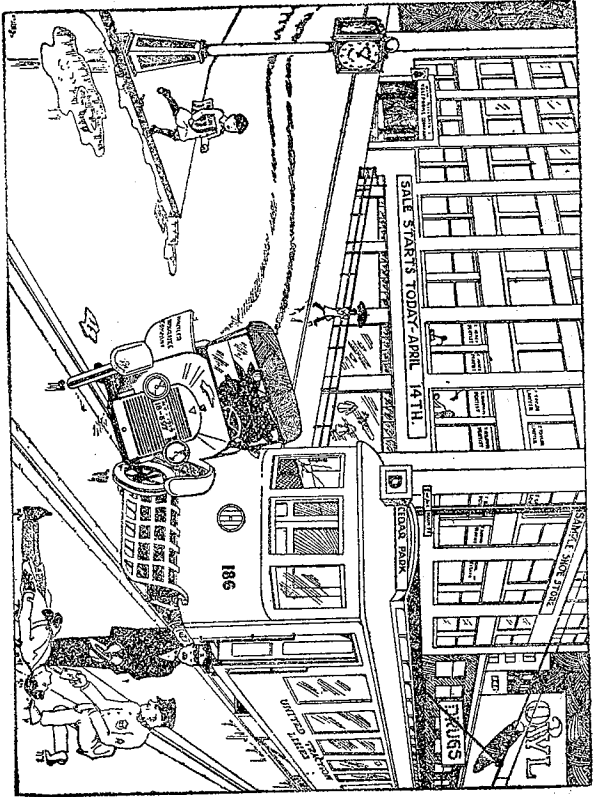
(二) 犯罪者の心性、犯罪者の智能及び性格を検査することは、彼等の責任能力の有無が明白になり、判決の上に多大の補助を與へて居る。嘗てロンブローは觀察の結果、下の尖つた顎、突き出た耳、畸形の頭蓋を有するものは犯人型であるとした。しかしその後の研究者はこの事實を否定する。例へばゴーリングは三千名の犯罪者を調査したが、身體的に常人と異なる型式はないと斷言した。その後智能検査法が行はるゝに至り犯罪者は凡て精神薄弱であるとされ、初期の研究では犯罪者の九三%まで精神薄弱であると言はれた。しかしその後の研究によると犯罪者は必ずしも精神薄弱でないことが主張されて來た。ドルは八三九名の犯人に軍隊検査のαテストを行つたが白人の兵士の標準より少し低いだけであつた。ヒーリーは不良少年を検査した結果、僅かに七%だけが精神薄弱であつた。かやうに以前の結果と相違する理由としては、テストの方法が犯人の智能を検査するに不適當であつたこと、又智能の優れたものは巧みに犯行をくまましたり法網のがれたりし、投獄されるものは比較的智能の劣つたものであると言はれる。

精神分析學の研究と共に、吾人の總ての行動の動因が無意識界の中に存することが強調され、

犯罪者の犯行が假令外見上又は法律上同一に見えても、その動機と道程とを精査すると同一でないことが明かにされた。フロイドによると、吾人の精神生活は二つの原理によりて支配されて居る。一は快の原理で、それは自己中心的、反社會的であり、先祖返りをしたものである。他は實在の原理で、個人をして彼の生活する世界に順應せしむる動因になつて居る。社會に對する責任感とか自己犠牲とかはこの原理からくる。而してこの二種の相反せる原理の調停のために斷えず争闘を生じ、社會的秩序を破る如き行爲、心的疾患を引起すやうになるといつて居る。シュテークルは盜癖 (Kleptomania) といはれる非社會的行爲の原因を以て、性慾の満足が十分でないことに歸して居る。その原因を探究して淳化の方法を取ると竊盜行爲も治るといふことである。かやうな研究によると、犯罪者の心的歴史の調査が非常に重要であり、刑罰を課することは必しもその犯行を矯正する手段でないことが明かになる。

(三) 供述の研究、法廷に於ける供述は、如何なる場合に確實なるか、詳言すれば、供述者の年齢、性別、供述事項、訊問の方法、事件よりの時間經過等の諸種の條件によりて、供述の信頼度

圖 八 十 二 第



は如何に變化するかの研究が行はれて居る。その實驗の方法としては、被験者に一定の繪や出來事を短時間示し、(第二十八圖はフライドの用れた電車と自動車との衝突の繪で、これを一分示した後、自動車の損害の程度、電車の番號、時間等に就て五十の質問を發して答へしむる)それより後その繪を撤回し、又は出來事から遠ざけて、彼が見たまゝ聞いたまゝを報告せしむる。この場合の被験者の精神過程は複雑で、注意の集中、辨別、解釋力、直接記憶、自身を急速に順應せしむる力等が行はれる。この種の實驗の結果、子供と異常の成人とは報告の範圍が狭く、誤謬が大であることは多數の研究者の一致する所で、シュテルンに依ると、七歳より十八歳の間に、範圍が五〇%増加し、確度は二〇%増加する。又供述に對して、確實であるとの誓言を要求する場合には、誓言を要求しない場合よりも誤謬が半減する。然し誓言した供述に於ても猶ほ一〇%の誤謬があつた。供述の分量と確度とは或る程度まで反比をなし、範圍が多くなると確度は減少する。性別は餘り烈しくなく、シュテルンは男子が女子より正確であるが、その範圍は女子の方が廣いといふ結果を得たが、その他の研究者は却つて反對な結果を得、又は予の研究と同じく男女の相違

が無いといふ者もある。又供述を行ふ際に自由に報告せしむる場合と、その事項に就いて訊問を發して報告せしむる場合とに相違がある。即ち自由報告に比し訊問報告は範圍が五〇%大となるが確度は減少し、前者の誤謬が十分の一なるに比し、訊問法では約四分の一の誤謬を生ずる。尤も訊問の仕方に依りて誤謬の割合は相違する。非常に暗示に富んだ訊問をすると誤謬が増加し、殊に兒童や婦人は暗示に罹りて誤答する。事件を目撃した際の報告者の精神的態度や、豫期が報告に著しく影響し、又目撃した時と報告をする時との時間が長く経過するに従つて誤謬は増加する。例へば事件の直後は一一%の誤謬であるのに、五日後には一四%、十五日後には一八%、四十五日には二二%になつた。

(四) 聯想診斷法 刺戟語百を用意し、それに對して最初に聯想した語を言はしめ、刺戟語が與へられてから、反應語の發せられるまでの時間を測定する。即ち實驗者が刺戟語として「机」と言へば、被験者はそれに對して最初に聯想した語「椅子」と答へ、その間の時間を測定する。これは情緒的障礙の爲めに、或る聯想は滑に進行せず、反應時間が長くなるといふことを根據とせ

るもので、例へば茲に竊盜の嫌疑者があるとす。それに對して普通の刺戟語、例へば男、大きい、顔等を用ゐる時は別に反應時間に相違がないが、隠す、盗む、刑務所、紙幣等の刺戟語を用ゐると反應時間が長くなるとすれば、その者は犯人たることが分る。蓋し事件に關係せる語の反應が長くなることは、その裏面に犯罪を隱蔽せんとして情緒が混亂して居る爲めである。この方は一時非常に流行したが、種々の條件が混入して、往々正確に行かないところから、近時は犯罪の檢舉よりも情緒障礙を發見するに用ゐられて居る。

第三節 教育心理學

應用心理學の最初は教育事實に關する心理的研究であつた。従つてこの方面の研究は可也廣く且つ深く行はれて居る。その中で最も重要な問題は本性又は素質、學習過程、精神疲勞、教育測定等の研究である。

(一) **素質の研究** 教育を施すには先づ吾人の本性の何者かを知らなければならぬ。殊に人間一

般に通有する本能は何か。身體的條件に關するもの、環境の事物又は出來事に關するもの、他人の存在又は活動に關するものがあるが、手足の運動、操縱、發音、自己主張、好奇心等の本能は學習に密接な關係を有する。尙ほ智能や性格の相違に依りて學習效果に相違を來し、此等の相違は一方に民族的相違、境遇の相違等に基因する。例へば獨逸は科學並に音樂の方面に天才家を出し、伊太利は藝術家、佛蘭西は軍人、小説家及び科學者、英吉利は哲學者、詩人及び政治家に傑出した人物を出したと言はれる。又知的職業に従事する者の兒童の智能が最も優れ、それから商工業者、農業者、労働者の子弟といふ順に智能は低下して居る。白人兒童は黑人兒童よりも一般に智能が秀で、同じ白人兒童に於ては北歐の者が南方のラテン系の者よりも智能が優つて居ると言はれて居る。此等の個人差を知ることには教育上最も根本的のものと言はなければならぬ。

(二) 學習過程 學習進歩の過程は、學童の身體的並に精神的個人差以外に學習の材料や方法に依りて相違する。學習の速度を迅速にすることは、その材料に馴れて來るに従つて効果が増加して來る。反復した學習を命ずる場合には一度に重積して反復せしむるよりも、一定の間隔を置い

て反復せしむる方がよい。但しそれにも限度があつて、餘りに小刻みに短時間づゝ學習したり、又前の學習と後の學習との間隔が長くなり過ぎると効果が無い。長い材料を學習する場合には、その全部を通して學習する全體法と、一部分づゝ學習する部分法と何れが効果があるかといふに、これは兩者の折衷法が良いと言はれて居る。材料が餘り困難でなければ最初にその大體を捕捉させ、更に困難な部分だけを部分的に學習する。若し材料が非常に困難で全體の大意を捉へることの出来ない場合には、最初は部分法に依りて一部分を學習し、次に第二の部分を學習し、更に第一と第二とを連結して學習するといふ所謂進歩的學習法が効果が多い。この外律動を附することが好影響を與へること、無意味よりも有意義のものが學習に容易なること、孤立した仕事よりも大きな仕事の一部分とする方が有利なこと、教授の様式即ち講演式、説明式、自學自習式等に依りてその効果にそれづゝ相違がある等種々の研究問題がある。

學習問題の中で最も重要であるが未だに解決して居ない問題は、練習轉移のそれである。一方の陶冶や總ての方向に轉移するといふ古代の能力心理學に基く形式陶冶論は打破されて居る

が、或る一定の條件では一方の練習効果が他方の學習に多少の影響を與ふことは、多くの研究者の承認する所である。然し如何なる範圍に轉移が行はるか、又如何なる程度に轉移が行はるかにかんじては實驗的效果が一致して居ない。

(三) 精神疲勞 精神疲勞の研究も亦極めて重要であるが、決定的結果を得たものはない。これには直接に精神疲勞を測定する方法と間接に測定する方法とがある。前者は計算や書寫の作業を長時間行はせて、その作業の量と質とが悪くなることに依りて疲勞の指數とする。間接法には精神作業の前後に、二點閏（兩脚器の尖端を皮膚に當て、二點と感じ始める距離）を檢査し、その距離が大となる割合を以て疲勞の指數とし、或は痛覺の銳度が減少することに依り、或は筋肉作業の量及び質が悪くなることに依りて疲勞の指數とする。各科の授業時間を四十五分として、十五分づゝの休憩を置くことが疲勞を回復すること、午前の授業は始業時間より漸次能率が上り、十時乃至十一時に至りて最高に達し、正午近くになると疲勞を生ずるが、晝食後は再び回復され、午後二時に於て能率は最高に達し（但し午前の最高能率に達しない）、それより能率は悪くなり午前の能率減退よりも

尙ほ烈しきこと、學科に依りて疲勞度は異り、注意の集中を要する學科は疲勞の度高く、且つ從來休養の意味に考へられて居た體操科は可也疲勞度が高いこと、月曜日より漸次能率が上り、水曜日に至りて最高能率を示し、それより能率が減少すること等の結果が得られて居る。然し前述の如く種々の條件が混入して來るので、研究者の間に可也結果に相違を來して居る。

(四) 教育測定法 これは素質を検査する智能検査法に對して、教授効果を測定する方法である。これまで教授の効果を測定する方法としては試験や考査が行はれて居たが、精密に作業の分析をせず、又その評點も教師の主觀に妨げられて、甲級と乙級の成績を正確に比較することが出來なかつた。それで各種の作業成績を見るやうな標準の問題を作製し、且つ一々の要素に就いての評點法を一定し、それに依りて成績を測定することになつた。尙ほかやうな方法に依つて多數の兒童を検査して得た平均得點を以て標準點とした。例へば加算テストで一年生は何點、二年生は何點を取るべきであるとの標準點が設定された。この方法に依つて甲の教授法と乙の教授法と何れが効果が多いかを判断したり、或は甲の學級と乙の學級とは同一程度の智能を有して居るに

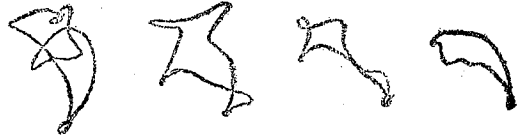
拘らず教育測定の結果に優劣があれば、教師の努力に相違があるに相違ないと判断したり、又標準點に照して兒童を促進せしむる限度が分り、彼等の有する能力に相當する學習を行はすことが出来る。

尙ほ教育測定法と智能検査法との間に如何なる關係があるか、入學試験には何れを採用すべきか、入學試験の成績はその者の將來の成績を如何なる程度にまで豫知し得るか、低學年の成績と高學年の成績との關係は如何等の問題がある。

第四節 産業心理學

産業方面に於ける心理學的研究は近時特に長足の進歩をした。就中産業に於ける能率方法、各種の職業分析、適材の選擇、廣告、店頭の裝飾等の研究はその主なるものである。

(一) 能率研究 能率研究の中で、作業過程の研究が心理學者に取りて最も興味がある。これは (a) 用具や装置の改良、(b) 休息時間の改正、(c) 不要運動の除去等がある。ペースは金屬



削りの機械の運轉速度を調節して、一倍半より九倍の成績を擧げ、ギルプレスは煉瓦積みの高さを調節し、且つ必要品を手近に置くことに依りて、従來の十八運動を五運動に減少することが出來た。次に休息時間の改良の一例は、テーラーの鐵塊の運搬作業の改正である。氏は勞働時間を分割して、全塊を取扱ふ場合は七分働き、その間に十五の鐵塊をトロッコに運ぶ、その後十分間休息する。半塊を取扱ふ場合には十分働いて七分休むといふやうにした所が、これまで一日平均十二噸半運んだものが、四十七噸半に増加した。ギルプレスはこれまで無休息にハンケチたゝみをやつて居た女工に、一定時間の休息を挿入した所が、勞働時間は減少したに拘らず仕事高は三倍になつた。

次に不要運動の除去は運動研究と言はれるもので、各種の作業過程を寫眞に取り、又は活動寫眞のフィルムに取つて、未熟の作業と熟練作業を比

較して見る。第二十九圖は鑽孔機の作業の左手の運動徑路を示すもので、左端は未熟の場合で、漸次練習を積むに従ひ不要運動が除去されて右端の如き運動になる。又熟練者と未熟練者の作業をフィルムに取りて兩者を比較し、未熟者がどの點に於て遅延したり不要の運動をして居るかを發見し、漸次それを除去するやうに努める。

(二) 職業分析 職業分析には種々の方法があるが、先づ一般智能検査法を各種の職業に従事する者に課して、どの程度の智能が各種の職業に必要であるかを検査する。米國の軍人三萬六千五百人に前章に述べた軍隊検査を行った結果、職業別に整理すると次表の如く、専門的職業の者が最も多くの智能を要し、それより事務的職業、技術的勞働、半技術的勞働に従事する者となり、非熟練勞働者が最も智能を要しないことを示して居る。

能力を含むと思はるゝ一組の検査法を作上ける。而してその検査法を既に實務に従事して居る

職業	中得	職業	中得
自動車 倉庫 警動 自船	63 64 64 65 66	非熟勞働者 非勞働者	35
事務的職業 電話交換 電氣工 寫字機 電氣鐵 一機書齒機 速計	70 75 77 82 84 92 96 98 99 105 112 115 117	半技術的勞働者 靴・馬具 製取農理馬 蹄	39 41 42 43 44
專門的職業 土木軍工 隊兵	125 130 150 157	技術的勞働者 鐵道瓦 煉料パ ベ鍛橋大 獸關 機鐵鉛器 自動	45 48 49 53 53 54 55 57 58 59 61 62 62 63 63
手官工匠 立組		工丁者師工 職積燒塗 人工工工工 商手工學工工 轉車管製作工 織	
監督師 技師 書記 醫師 記者 者係 圖			

職業には一般智能のみならず、特殊の能力を必要とする。従つてどの職業には如何なる特殊能力を必要とするかの研究が大切である。それには先づ一定の職業を觀察し、又は従業者に質問を發して、作業の本質を分析し、その職業に必要ななりと思はるゝ數種の能力を選択して此等と同一の

者に課して實務の成績との相關を求め、兩者の一致の大なるものを以て、その職業に必要な能力の検査法と定める。更にこの方法に依りて候補者を検査し、その得点と一定時間實務に従事した後の實務成績との相關を求め、兩者の一致が大なれば、その検査法は確實なるものになる。それに依つて吾人は、どの職業には如何なる能力が必要であるかを確實に知ることが出来る。例へばシーシヨアは聲樂家の能力検査として、音樂を聞く能力を知る感覺検査九種、歌ふ能力を知る運動の検査十三種、想像・再生・音樂的心像を知る聯想検査九種、音樂を感受する性能を知る情緒検査五種を選定し、この外に補助的資料を得る爲めに、音樂的素養、經歷、教育、氣質、性格、環境、體格、訓練程度等を調査することにした。氏は此等の検査法を聲樂家に施し、多數の日子を費して實驗を重ね、この選定したる方法と必要能力との關係を確めて、之を本として聲樂家としての必要條件を確定し、今後の聲樂家志望者の適性検査法を組立てた。尙ほリンクは藥莢の疵を發見する検査工と、その大きさを計る測定工とを觀察して、何れも視力の鋭敏、視的辨別力の鋭敏、反應の敏捷、運動の正確、注意の不動が必要と考へ、その爲めにカード分類、打叩、

數字抹消、命令、數列辨別、狙打、堅實度、視力の八種の検査法を作つた。而して検査工五十二名、測定工二十一名に之を施し、その得點と實務成績との相關値を算出したが次の如き結果を得た。

(相關値は1に近い程兩者の關係の一致度が大なることを示す) 之に依ると検査工では數列辨別

相關値 テスト	検査工	測定工
カード分類	0.56	0.05
打 叩	0.14	0.52
數字抹消	0.63	0.17
命令	0.14	0.18
數列辨別	0.72	0.9
狙 打	0.3	0.21
堅 實 度	0.24	0.26

な能力の相對的重要度を確定して、所謂職業心誌が作製されて居る。一例としてエリスマンの心

法が最も實務と關係が深いのに、測定工では負數を示して全く反對の關係があることを示した。又測定工に於て相關値の高い打叩法は検査工に於ては最も關係の少き作業になつて居る。之に依ると測定工と検査工との仕事は全く性質を異にせることが分る。即ち前者は運動速度の大なることが必要で、後者は視的辨別の鋭敏なることが大切である。かやうな研究を基礎として、各職業に必要な

圖 十 三 第

必要性能	備考 ○ 必要の少ない又は不要のもの ● 作業本職以上の必要とし又は要員なれば好都合のもの ◎ 従事することを必要とするもの	従事	金器	販賣	印刷	マイ	電話	農	屋	高
		運転手	機械製作工	店員	工	ヒート	交換手	業	業	等
身性 健 的 能	1. 體 力 2. 寒冷病氣感染に對する抵抗力 3. 神経系統の抵抗力	○	○	○	○	○	○	○	○	○
病態 的 な 素 こ 質 と	4. 呼吸器病 5. 心臓病 6. リウマチス 7. 銀 痛	○	○	○	○	○	○	○	○	○
感 覚	8. 目 測 (腕力) 9. 遠近知覚 10. 探 覺	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運 動 能 力	11. 運動速度 12. 突然刺激に對する反應速度 13. 運動精度 14. 複雑運動 15. 兩手の協同作業	○	○	○	○	○	○	○	○	○
記 憶 的 又 は 察 断 力	16. 感覺的記憶 17. 應覺的記憶 18. 運動的記憶	○	○	○	○	○	○	○	○	○
注 意	19. 妨碍刺激に抵抗する注意力 (注意の集中力) 20. 注意の分配 (範圍) 21. 注意の持続	○	○	○	○	○	○	○	○	○
意 志	22. 意志の持久力 23. 確實迅速なる決断力 24. 困難に對する抵抗力 25. 情緒の激動の抑制	○	○	○	○	○	○	○	○	○
思 考	26. 思考の迅速 27. 思考の確實 28. 空間的結合能力 29. 精神的運動性 30. 一般智能	○	○	○	○	○	○	○	○	○
其 他 の 能 力	31. 技術能力 32. 計算能力 33. 秩序の感 34. 忍耐能力	○	○	○	○	○	○	○	○	○

誌を示すと次の如くである。

(三) 適材の選擇 上の如き職業分析は又適材の選出法になる。即ち職業に必要な能力を知り、その能力の有無を知る検査法を用ゐて適任者を選出するのである。實務と検査法との類似の點から、雛形検査、見本検査、類推検査等の名が興へられて居る。實際作業の縮圖的雛形を用ゐて検査するものが雛形検査で、ミュンスタールヒの電車運轉手の採用検査の如きはそれである。實際作業の一部をそのまま、取つて検査する時は見本検査となり、ソーンダイクの店員検査の如きはその一例である。類推検査とは實際作業の縮圖でも又は一部でもなく、唯その職業に含まるゝ主要な能力と同一の能力を要すと思はるゝ他の作業を行はしめるもので、前掲のリンクの検査や、リップマンの植字工の検査の如きは然りである。

(四) 廣告 廣告の研究は言ふまでもなく如何にせば廣告に依りて購買の量が増加するかといふことであるが、心理學的にこれまで研究された方面は、如何にすれば世人の注意を引くか、又注意した事項を如何にすれば永く記憶するか、又その記憶と購買の反應との關係は如何等が主と

なつて居る。此等の研究法は、多く普通の雑誌や新聞の廣告欄を用ゐ、又はそれと殆ど同一の様式に作つたものを用ゐ、且つ出来るだけ普通の状態に於てそれを示し、然る後その内容を再生せしめたり再認せしめたりする。而して一の廣告が他の廣告のそれよりも多く記憶されて居れば、前者は廣告の價値が大であるとするのである。今その結果の二三を摘記する。

商品名を説明する繪が商品名と適切であるものが、然らざるものよりも容易に認知される。然し時としては不合理なことが却つて記憶價値の大なることもある。廣告繪の内容は無生物よりも人間が注意と興味とを引き、同じ人間の繪でも活動を示す繪が價値が高い。着色せるものは無着色のものよりも多く再生され、着色の價値は赤・緑・黄、青の順になる。雑誌の廣告頁は右がよいか左がよいかに就いては、右が多く注意を引くといふものと、左の方が長く凝視されるといふものとあつて一致して居ない。廣告の大きさに就いては、その大きさを増すに従つて價値が増加する。即ち $1\frac{1}{4}$ 大と $1\frac{1}{2}$ 大と全紙大とを比較すると、記憶價値は、 $1\cdot00$ 、 $1\cdot87$ 、 $3\cdot16$ の比になると言はれる。更にこの大きさと廣告の回數とを合せて考へると、 $1\frac{1}{4}$ 大の四回の反復は

1/2 大の二回の反復より効果が少く、1/2 大の二回の反復は一頁大の一回の廣告よりも價值が少いと言はれる。又四週の間各週一回づゝ廣告することが、一箇月毎に一回や、四日間連続や、同時に四種の異つた雑誌に廣告することよりも有効で、最後の方法が最も効果が少いと言はれる。

吾人が何物かを購入せんとする場合に、その商品名を回想することの必要なことは勿論であるが、然し實際に使用する品物の商品名を吾人は常に最初に思ひ浮ぶか否かは疑問であるとされる。靴、齒磨、煙草、石鹼等の十五種の一々に就いて、その最初に想ひ起す商品名を記入させ、更にその者の日常使用せる商品名を記入させたところが、比較的一致することが尠く、日用品に於て六二%一致し、贅澤品に於て五六%、衣服類に於て四八%の一致を見た。

この外尙ほ廣告と關聯せるものは、商品の包装、名稱、商標等の研究で、更に模造品の檢定に關する心理的研究がある。

第五節 軍事心理學

軍事に關する心理的研究も種々ある。智能検査並に性格検査に依りて、軍務に従事する者の適否の鑑別を行つたことは既に述べたが、尙ほ將校品等法なるものが歐洲大戰の際米國に於て行はれた。これは先づ將校として必要なる資格を五種選んだ。一は身體的特質(體質、體質)、二は智能、三は統率の才、四は個人的特質(勤勉、忠實、共同等)、五は職務上の知識及び經驗等である。この五種に就いて例へば大尉の集團の中から最も優れた者を相互に投票せしむる。その結果最高點を取つた大尉を模範的大尉とする。而してその大尉を標準として各自の部下に居る中尉の中から、その大尉に最もよく五種の點に似た者を選出する。かくして選まれた中尉は一定の教育を受けると立派な大尉になれる資格があるとするのである。一時に多數の將校を必要とした米國では、この品等法に依りて好成績を得たといふことである。

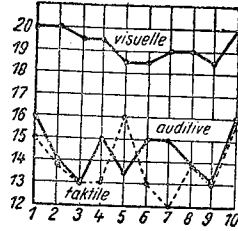
軍事心理學に於て最も多く注意を引き、且つ研究の行はれて居るのは航空心理學である。飛行

家としての適性検査は勿論、上空に於ける心的作業の變化を研究して居る。實際の上空に於て實驗もするが、多くは上空と等しき氣壓、溫度、濕度を有する室を人爲的に造りて飛行家の行ふ各種の作業に就いて實驗を試みて居る。今飛行家の選抜に行はれた二三の検査を紹介して見よう。

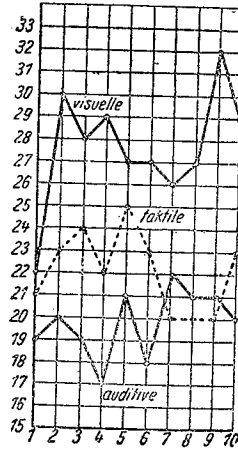
フランスのカミュとネッパとは精神運動的反應時間の測定と神經系統に於ける刺戟の影響とを検査して居る。前者は視・聽・觸の刺戟に對する十回宛の反應時間の測定であるが、此等の結果によると、良き飛行家の平均反應時間は視的刺戟に對しては $\frac{19}{100}$ 秒、觸的及び聽的刺戟に對しては、 $\frac{14}{100}$ — $\frac{15}{100}$ であるが、悪しき飛行家になると平均反應時間がそれより $\frac{80}{100}$ と $\frac{92}{100}$ とになつて居る。第三十一圖は良き飛行家、第三十二圖は悪しき飛行家の例である。更に神經系統の安定性は、一定の烈しき刺戟に對する呼吸と血行との變化によりて示され得るとして、それ等の變化を測定して居る。

イタリーのゲメリーは飛行前と飛行中とに區別して検査して居る。飛行前には(一)感覺的並に筋肉運動的反應時間、(二)選擇反應時間、(三)呼吸及び血行の變化による情緒的反應、(四)注

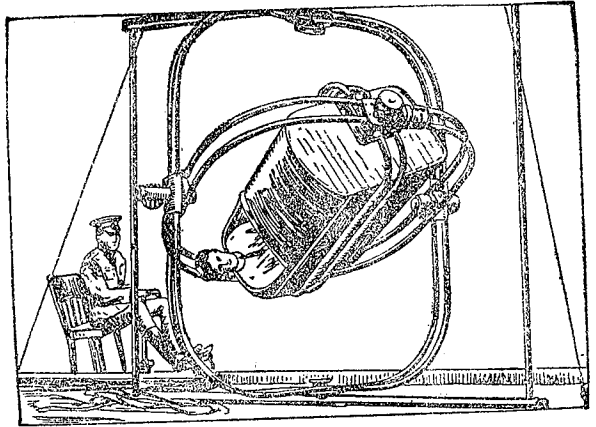
圖一十三第



圖二十三第



意の集注及び範圍の検査をした。飛行の際には、(一) 血液の搏動を數へ、(二) 呼吸の變化、(三) 血壓を調査した。ドイツに於ても種々の方法が行はれて居る。例へばベナリーによると、飛行家は、(一) 複雑なる機械を操縦するので、動搖しない注意を要し、(二) 種々の任務を同時に行はなければならぬから、注意の分配が必要であり、(三) 迅速なる判断が大切である。(四) 長時間の飛行もあるから疲勞に抵抗する力がなければならぬし、(五) 自己の位置を判断する能力、(六) 自信と沈着、(七) 智能と意志とを必要とするし、種々の検査法を工夫した。殊に此の注意力、觀察



力、定位力に於てのテストは興味あるものである。クロンフェルドは飛行家の精神機能を尙ほ細かく分析して、十五種を列擧する。即ち精密なる觀察、迅速にして正しき認知、不變の反應をする能力、精神が現在すること、確實、沈着、運動の精確と迅速、一定の任務に集注して妨害によりて注意の動搖せざること、學習能力、疲勞傾向の尠いこと、注意態度の迅速なる轉換、多くの任務に同時に取かかり得る能力、耳よりも目の方が卓越すること、情緒性の少いこと、受動的でなく發動的の態度等である。

飛行家の災害に就ての研究が又この方面に光明

を與へて居る。例へばアンダーソンの調査した災害五十八件を見ると、機體の破損が一、評價の誤りが四十二、失神が七、疲勞が四、豫知し難い事情が四であつた。而してこれ等の災害の起つた場所を見ると、上昇の際が十、空中が二、着陸の際が四十六であつた。ゼルツが災害の三百件に就ての研究によると、その六六%は個人的條件に基き、殊に五三%は飛行家として不適任であつたことが發見された。その結果から氏は飛行家に必要な性能として七種を列擧する。即ち注意の分配能力、注意の轉換、全體經驗より部分經驗を抽象することの迅速なこと、反應が迅速正確なるやうに常に精神が現在すること、神經的興奮性の確立、機敏、定位能力である。殊に身體位置の感に就ては種々の装置(例へば傾斜椅子)が用ゐられ、吾人は如何なる程度の位置の變化を知覺し得るか、どの位の精密さで知覺するか、如何に迅速に位置の變化を知覺し得るか、三種の問題が研究されて居る。又眩暈の現象に就ても研究され、第三十三圖に示すものはアメリカで用ゐた装置の一つである。

参 考 書

1. Cannon, W. Bodily changes in pain, hunger, fear and rage.
2. Berman, I. The glands regulating personality.
3. Wills, F. L. Psychology applied to medicine.
4. Bose, P. C. Introduction to juristic psychology.
5. Glueck, B. Studies in forensic psychology.
6. Göring, M. H. Kriminal psychologie.
7. Thorndike, E. L. Educational psychology, Briefefer course.
8. Meumann, E. Abriss der experimentelle Pädagogik. (附體験論)
9. Colvin, S. S. The learning process. (附體験論)
10. Burt, C. Mental and scholastic tests.
11. Gregory, C. A. Fundamentals of educational measurement.
12. Burt, H. E. Principles of employment psychology.
13. Mucio, B. Lectures on industrial psychology.
14. Baumgarten, F. Die Berufsseignungsprüfungen.
15. Poffenberger, A. T. Psychology in advertising.
16. Poffenberger, A. T. Applied Psychology.

第七章 異常心理學

第一節 智能の異常

異常と正常との區別が不定である如くに異常心理學の範圍は不定である。しかし一般に用ゐらるゝ異常といふ語には三種あるやうである。(一)比較的稀に起る場合で、例へば幻覺、身心の缺陷、天才の如きもの、(二)不思議のもので、例へば催眠現象や夢の如きもので、就中夢は稀に起るものでなく、それが睡眠中に意識のある形式が生ずるといふ點で不思議のものである。(三)説明の出来ないもので、例へば透視・讀心、占星、降神等の機祕學に屬するものである。茲では主として(一)と(二)とに就て述べ、(三)は省くことにする。尤も(一)の中の幻覺と(二)の中の夢とは一般心理學の中に述べてあるから、茲にはこれを省略する。

身心の異常は智能、性格、身體の三種に大別される。尤もこれは判然たる分類ではなく、智能

の異常は身體の異常によりて起ることもあり、又性格の異常を伴ふこともあるといふ如くに互に相交錯して居る。只説明の便宜上その主なる表れ方によつて分類したに過ぎない。智能の異常には精神薄弱者、優秀兒又は天才等をも包含して居る。先づ精神薄弱者から述べる。

精神薄弱者の研究の興味は大人よりも兒童の場合に集中されて居る。智能の優劣を示す方法は已に差異心理學の章下に述べた所であるが、精神薄弱兒を幾つの階段に分つかは研究者によりて相違し、又その分類の標準も區々である。今一例として英國ロンドンの精神薄弱兒の處置に關する委員會で規定されて居る四種の區分を述べよう。(一)遲滯兒 (Backward) は或る環境例へば疾病等の爲めに、精神發育が遅滯して居るもので、その條件をよくし、相當の處置をすれば、正常兒に復するものである。(二)輕愚兒 (Moron) は生後又は早き時代から表はれる精神遲鈍兒で、特別の保護を與へると、どうかこうか生活が出来るが、普通の生存競争場裡では落伍者になるものである。自分の行爲又は事業についても可なりの慎重を以つて行ふことが出来る。(三)痴愚兒 (Imbecils) も生後又は早き時代からの缺陷で、普通の身體的危險に對する警戒は出来るが、自分

で生活することの出来ないものである。(四)白痴兒 (Idiot) も生後又は早き時代より表はれ、自分で生活することの不可能は勿論、身體的危險に對しても、自己を保護することの出来ないものである。

精神薄弱兒の身體的特徴は、上顎の缺陷・出齒の遲滯又は粗惡・耳鼻及び口の畸形・舌の異狀・頭顱の變形・生殖器の異常・一種の皮膚の分泌・血行の不十分・矮小等である。精神薄弱兒には、多くこれ等の變質徴候があるが、しかしこれ等の變質徴候のあるものは、凡て精神薄弱兒であると断してはならぬ。即ち逆の定理は必ずしも真でない。或る人は精神薄弱兒の中で八〇%乃至九〇%まで如上の變質徴候が無かつたと報告して居るものもある。

精神的特質としては、先づ感官の缺陷又は感官的辨別力の薄弱である。筋肉共應運動も不十分で、直立したり、歩き出すことが非常に遅れる。感情が激變し易く、本能の倒錯、例へば手淫や汚物を食するやうなことが表はれる。發音も不完全で、ラ行やサ行が言へず、觀念内容も乏しく、記憶が弱く、創作的想像に缺けて居る。學習や習慣構成も遅い。推理作用は全く缺如し、抽象的

のものを取扱ふことが出来ない。注意を集中することも困難で、意識が朦朧として居る。

精神薄弱の原因は九〇%までは、遺傳とされて居る。その中で大部分は親の神経系統の疾患で、これに次ではアルコール中毒及び梅毒である。残りの一〇%は疾病・妊娠中母親のアルコール中毒・負傷・注射の有毒作用・栄養に基く腺分泌の缺陷に原因して居る。これ等兒童に對する處置は、社會事業家と醫者と心理學者との協同に俟たなければならぬ。先づ醫師が身體的缺陷を診断し、心理學者が精神缺陷の程度を検査し、社會事業家は低能を生ずる環境を精査して、それら適當の方法を講ずべきである。

優秀者又は天才には殆んど總ての學科や作業に對して優秀なものと、或る特殊の方面、例へば音楽、圖畫、數學等に優秀なものとがある。音楽的天才は往々六歳以前に表はれ、繪畫的天才は十歳以前に表はれると言はれる位、特殊能力の優秀は可なり早くから表はれて居る。數學的天才も早くから表はれ、例へばガウスは三歳前に、アンペールは三歳乃至五歳の間に計算をしたといふことである。ダーゼ (1824—1861) は二歳より學校教育を受けたが、長くつゞけることが出来

なかつた。蓋し計算は非常に旨いが數學上の原理を少しも理解することが出来なかつたからである。氏は八桁に八桁を心算で乗するのに四十五秒、二十桁に二十桁をかけるのに六分、百桁に百桁をかけるに八時四十五分を要した。機械的記憶に於て有名なものは古來可なりある。例へばセネカは連絡のない語二千を一度話されると正確な順序で再生し得たといはれ、テミストクレスは二萬一千のアテネ人の名宛を知つて居たといはれて居る。

これ等の天才は學校に於てその能力を十分に表はす機會が與へられない爲めに、普通兒、時としては低能兒の部類に入れられて居ることが往々ある。然し多くは早熟である。早熟といふと、一般に悪い意味に取られて居るが、知的早熟は決して悪いものではない。早教育も亦智能の早く發達したのものには施して差支ない。只早教育を奨勵すると、未だ十分に發達して居ない兒童を無理に鞭撻して發育を早めるやうなことをするから危険である。又往々神經質の子供は早熟の傾向を帯びて居る。それを眞の早熟と考へて、過重の負擔を課すると、途中で挫折し所謂二十過ぐれば普通の人になつてしまふ。尤も早熟の子供に早教育をすれば、それが無限に發達するといふ意

圖 四 十 三 第



ウニフッド・ストーナー

味でない。只早く發達するだけで、普通の人が例へば二十歳で大學に入るのに、ストーナーの娘（第三十四圖）の如きは十二歳で入學するやうになるだけである。しかしそのために八年間の短縮になるから人生の活動が、それだけ延長される譯である。但し八年間短縮するには仲々教育に骨が折れることは、ストーナーの教育談を見ても明かで、總てのものを犠牲にして母親はその娘の教育に當つて居る。

優良兒を生ずる原因は低能兒と同じく、九〇％は遺傳で、その残りが環境から來るとせられて居る。これを發見するには第三章で述べた智能検査法を用ゆる。但し特殊能力を有する者には、それに應ずる検査法を試みる。而してこれ等兒童の教育法としては、低能兒と同じく、特別の學級を設けて、その驥才を延ばすやうにしなければならぬ。即ち普通兒の學科目よりも、深さに於ても、量に於ても多くしなければならぬ。近時この方面に着目するものが出來、獨逸ではシュテルンこれを主張し、米國ではターマンやホキップルこれを唱導し、ターマンは優良兒學級を實際に試みて居る。

第二節 性格の異常

性格の異常には下は犯罪者、道徳的低格者、利己的人、厄介をかける者等から、上は立派な人格者、善人、聖人等がある。しかし茲には主として所謂不良兒童に就て述べる。

先天的とも見らるべき性格の缺陷者がある。例へば義務の感に缺けたり、不道徳の行爲に對する羞恥や嫌忌を感じない者がある。かやうな傾向が矯正されることの出来ない子供は潛勢的犯罪人ともいふべく、その智能が如何に高くあつても、法令規則を犯すやうなことをする。又不快の結果を將來する位のことでは、不道徳や犯罪の行爲を抑壓することが出来ない位、惡習に染つたものがある。性格異常兒には、一方に或る本能例へば自己誇示・性慾・嫉妬・狂暴性等が、單獨に又は複合して異常に烈しく表はれ、他方に抑制力の缺亡・暗示感受性の強烈・その他執意的方面の異常等がある。

これ等の異常は、又種々の程度の智力と共存して表はれる。早熟の子供に於ては、非社會的・

無愛想・病的に利己的なること・他人の權利を少しも尊重しないこと・自殺を遂げ易いこと等の傾向がある。高度の低能者の方が高度の優秀者に比し、遙かに道德的異常性を帯びて居る。尤も例外があつて、非常に智力の優れた犯罪者も無いではない。しかし監獄・矯正院・感化院等を調査して見ると、大部分は智能の劣つた者である。予が廣島修養院に於ける調査によると六三%が精神薄弱兒であつた。ウーヅやピヤソンが智能と性格との關係係數を求めた結果によると、何れも正數で〇、四から〇、五であつたと言はれて居る。性格缺陷がその者の智能の標準以下に烈しい時には、道德的低能者といふ名稱を用ゆる。この道德的低能は可なり早い年齢から表はれ、如何に注意して保育しても、又どんな罰を加へても、少しも效果がないと言はれて居る。而して道德的低能者が、若し智能も高度に劣つて居れば、野獸的傾向を示し、中度の智能であれば、無責任又は軽度の犯罪者となり、高度の智能を有すれば、惡に對する天才者となるのである。

性格缺陷を生ずる原因には種々ある。兩親の神經的疾患や犯罪性と可なり大なる關係があることされ、グループは不良兒百五名の中、父親が犯罪者たるもの七〇%、母親が犯罪者たるもの四二

%あつたと言ひ、クラメルは不良児三百七十一名に於ける兩親の犯罪者の割合が四一%あつたと述べ、ジハルドは犯罪者四千名の三六・八%は神經的疾患の遺傳に基づくと報告して居る。しかし犯罪性として遺傳されることなく、兩親の氣質の非法的のことは漠たる一般的素質として傳はり、恰も體質や智能に於ける遺傳の如く、道德的行爲に對し一般に薄弱である。従つて惡しき環境に置かれると直ちに不良行爲をするやうになると考ふべきである。パートはロンドンに於ける不良兒を詳密に調査して居るが、その條件に就て正常兒との比較を次の如く列擧する。

一、遺傳的		
	不良兒	正常兒
a、身體的	三六・九%	二二・七%
b、智能的	二五・四	七・七
c、氣質的 (病的症候)	二四・四	一〇・七
d、氣質的 (道德的症候)	五四・三	一七・七
二、環境		

A、家庭内

a、貧困	五二・八	三八・二
b、家族關係の缺陷	五七・九	二五・七
c、缺陷ある訓練	六〇・九	一一・五
d、悪しき家庭	二五・九	六・二
B、家庭外	四五・二	二〇・二

前表中の身體的遺傳とは肺病、リユーマチス、梅毒、癲癩、舞蹈病等で、智能は智能の缺陷、病的氣質とは精神病や神經病的疾患、道德的氣質とは、性の不規則、殘忍、怒り易き、貪慾、放浪、自殺、怠惰、アルコール中毒等である。環境中の家庭關係の缺陷とは、父や母の死亡、離婚、親の不在、養父母等で、訓練の缺陷とは、無頓着の教育、軟教育、硬教育、統御の不一致等で、惡しき家庭とは、性的不道德、泥酔、虐待、犯罪獎勵などである。家庭外とは友達、娛樂機關、不定期の學校や就業、又は無職業等をさして居る。これによると遺傳的條件にも左右されるが、缺

陥ある訓練、家庭關係の缺陷が最も多く不良兒を作ることが分かる。ヒールリーの不良少年研究によると、心内の烈しき争闘（多くは性欲に關して）による苦惱を免れんがために、竊盜、放火、放浪を企てることが明かにされた。而してその苦惱を除去すると、不良行爲も無くなるといふことである。

性格缺陷の診断は一寸容易のやうで、仲々むづかしい。例へば情緒の激越は永く抑壓された本能の逸出として、一時的に現はれることもあり、青春期の現象であつたり、早發性痴呆や癲癇の徵候であつたり、或は崇拜する友達の影響であつたりする。晝夢のやうな空想的の狀態も種々の原因から來るもので、例へばヒステリー・榮養不良・急速なる身體的發達・感官の缺陷・早熟的愛情等によることもある。倒錯的發作も本能から來る倒錯や頭蓋發達の缺陷・又は不揃の齒から來る反射神經の障害、或は強烈なる抑制の爲めに伴生する。故に、社會事業家・兩親・教師・醫者・心理學者等が種々の場合に、相協同して診断を下す必要がある。

第三節 防禦機制

身體の異常には下は盲、啞、癱瘓、病弱、貧血のものから、上は異常に頑健なもの、異常に發育せる巨人、相撲に至るまで、感官、身長、體重、成長又は成熟の割合が常態でないものを含むが、茲には各種の神經的疾患、或は特殊の傷害に基づく神經的異常のもの、即ち精神的疾患と一般に言はれて居るものに就て述べる。精神的疾患といふことは、環境に對し慢性的に順應の出來ないことを意味し、多くの場合に於て、缺陷が神經系統の中に發見され、それが心的障礙を惹起して居る。其等は組織的精神病と名づけられる。之れに反して機能的精神病は、それに伴ふ神經的缺陷を發見することが出來ない。組織的精神病の最も著しきものは一般的癱瘓症の場合で、その原因は梅毒に依りて腦の組織が破壊された爲めである。機能的精神病に屬するものには、ヒステリ

1、偏執狂、早發痴呆症等があり、此等は正常者の日々の經驗に最も深い關係を有して居る。尙ほ異常の中で程度の輕いものには夢、病的恐怖、失語、忘却等がある。

今此等の現象を述ぶるに當りて、先づ防禦機制のことを一言しなければならぬ。各個人は他人に對し或は自身に於ける種々の部分に對して絶えず争を續けて居ることは、一般原理として承認することが出来る。彼は他人の承認、尊敬、他人より優越の地位を絶えず要求する。その上に彼は自己に對する尊敬を維持しなければならぬ。従つて此等の欲求を妨害する如き經驗、又はその經驗の記憶は不快で、恐怖、羞恥、悔恨、又は其等に類似した情緒を惹起する傾向がある。而して、不快なこと、苦痛なことは、或る種的手段を用ゐて廻避せんとする傾向がある。簡單なる有機體は高温や低温の環境を去り、苦痛や不快を免れることをする。人間も之と同じく好意を以て迎へられない社會を去らうと企てる。然し人間は彼自身の不快の恐怖や非難から遁れることの出来ないと等しく、彼の社會から全く逃避することは出来ない。

衝突を避けることが不可能であり、又無用である場合には、意識界から不快の出來事を除去する如き防禦装置の系統を多少意識的に構成する。この防禦は細かに考へられた觀念系統の形を取ることもある。例へば自己の無能力を辯護する爲めに、彼の出會ふ總ての者に依りて迫害される

との迷想を作り上げる。彼は一定の職業に長く留まることが出来ず、一の地位から他の地位へと轉々するが、それは自分の無能力の爲めに解雇されるとは考へず、彼の同僚の猜みや迫害に因るものと考へる。この種の迫害系統よりも遙かに社會的に價値あるものは、哲學系統の構成である。或る者は好意を以て迎へてくれない世界との戦を避ける爲めに心的避難所を哲學に求める。希臘や羅馬時代のストア哲學者や快樂論者は理想の世界に慰安と威嚴を保つことを求め、現實の世界は彼等の前に粉碎されるやうに見えた。同様に臆病で自己主張の出来ない子供は空想上の遊び友達を有する不思議の世界を構成する。かやうな防禦機制は成人になつても持續することは珍しくない。美貌の婦人や堂々たる體格の男子で、彼等の精神的方面の劣れることを感ずるものは、自尊心を保護する方法として、容貌や態度に依りてその威嚴を維持するやうになる。

病氣の場合には、その不快を防禦する爲めに想像上の苦痛が現はれる。腰痛、頭痛、眼の痛み等は好ましくならぬ仕事から遁れる手段になる。尙ほ精神病が烈しくなりて床に長く横はり、獨りで單調に過ぎなければならぬ者は、特殊の發作を生じ、窓の方へ突進したり、窓の外に自身を投

出さんとしたりする。ブヂャールに依ると、極めて地位の低い貧しき一婦人が新しい場所に行く
と、よく自殺を企てた。その原因を探ると、その自殺をしようとしたことに依りて他人が恐れ、
且つ話頭に上るやうになり、その當座は他人に認められないといふ苦痛を脱して居たといふこと
である。大きな活字で新聞に書かれんが爲めに殺人を企てた例も少くない。

防禦機制が幾分高等な程度に形成されると、簡單なる防禦機制は忘却される。不快な記憶や、
羞恥又は悔恨を惹起すもの、自尊心を傷ける如きことは、それを免れんとする無意識的欲求と一
致して、それを意識の外に追ひやる。日常生活に於ける忘却や、心的疾患に起る不思議の失語症
の原因は之に依りて説明がつく。拂ひたくないと思ふ勘定は支拂を忘れ、禁煙の札があるのを忘
れて喫煙したり、出席したくないと思ふ會合の時日を失念したりする。知人の姓名を忘れること
は、知人に對する侮辱を無意識に與へて居ることになる。蓋し姓名を忘れるといふことは、記憶
の價値が無いことを意味するからである。同様なことが夢の場合に數多ある。苦痛の出來事は忘
れ勝ちであり、羞恥や恐怖の經驗はなるべく意識から遠ざけやうとする。心的疾患に於ける失語

症も同様の機制に基くが、これはヒステリーの條下で述べることにする。

防禦機制の概念はアドラーに負ふ所が多い。氏は器官の劣等と精神生活との間に密接なる關係のあることを示した。子供も大人も、他人から全く顧みられないとか、醜いとか、愛されないとか、即ち結局は他人よりも劣等であると感ずる時には、心的補償作用を行ふ。彼は顧みられない又は醜く思はれないで濟むやうな理想世界を建設して、其所に遁れ場所を求め、自己の優越や善良なことを考へるやうになる。同様に視力に缺陷のある者は、聴覺や觸覺が鋭敏になりて之を補ひ、手の自由を失つた者は足やその他でこれの代用をする。或はその劣等と戦つて、却つて非凡な能力を發揮する者もある。吃りのデモスゼニスDemosthenesは雄辯家となり、耳の悪いベートーヴェンBeethovenは作曲家となつて居る。この防禦機制は又以下に述ぶる心的疾患の特性を説明する手掛りになつて居ることが多い。

第四節 精神的疾患

正常精神と病的精神との境界が明瞭でない如くに、病的精神そのもの、中に於ける各種の形式の間にも判然たる區別が無い。故に根本的疾疇の中に特に著しく現はれる或る廣い特質を列擧することが叙述の上に都合がよい。ヂェリフとホワイトは主なる心的疾患として、ヒステリー、強迫性神經病、恐怖性神經病、神經衰弱を列擧して居るが、フロイドは此等を精神的な神經病と眞の神經病とに分類して居る。この外尙ほ種々の疾疇があつて、例へば躁鬱狂、偏執狂、癲癩、早發癡呆、精神虚脱、毒物に因る亂心、卒中、舞踏病、老衰又は動脈硬化症に因る精神病、痲痺症等がある。臨床家は此等の精神病を機能的と組織的とに大別するが、兩者の間に截然たる區別は無く、互に連絡して居る。唯精神的組織が外見上破壊されて居る場合を組織的精神病といひ、組織の上に缺陷を發見することの出来ない場合を機能的な精神病と名づける。精神病といふ以上は組織の機能が悪いことに基いて居るべきであるが、組織の變化が外から見える場合と然らざる場合とがあつて、それに依りて二つに分類したに過ぎない。

精神病の原因は種々である。神経系統の正常の機能を妨げるものは神経的疾患や缺陷を生じ、

同時に意識の障礙を惹起するものである。例へば墜落とか、怪我とかの偶發事項、遺傳又は先天的缺陷、猖紅熱、ヂフテリア、肺結核、梅毒等の傳染病、アルコール、鉛、水銀等の中毒、道徳上の打撃等種々ある。各個人は此等の妨害物に對する抵抗力が非常に相違する。一方の人には人事不省、幻覺、偏執、痴呆を惹起すものでも、他方の人には何等の影響を示さない。生死の境にある親を看護する際の緊張が一方の者にはヒステリーを惹起すが、他方の人には疲憊と苦惱とを生ずる。梅毒の如きも一方の人には羸削、癩瘰、その他の缺陷を生ずるが、他方の人には神經又は精神的疾患を惹起さない。而してこの抵抗力の缺乏は多く遺傳されるものである。

今精神病の中から主なるもの四種を取つて説明しよう。

(一) 癩瘰症。進行性一般的癩瘰は腦梅毒の或る形式と關聯した神經及び精神的疾患である。身體的方面としては一般的虚弱が現はれる程の癩瘰は餘り多くない。精神的方面では、それが進行すると、遂には痴呆、即ち心力の喪失を惹起すに至るまでの種々の形式がある。この漸進的變化は一年乃至五年間に亙りて行はることが多い。何れにしても實際上致命的のものである。外見

上の回復又は減退が通常起るが、然し直に再發し、遂に致命的になる。この患者の腦を調べて見ると組織の破壊された個所が可也大きい。

この病氣の最初の間は屢々神經衰弱と誤られる。實際にこれの最初の症候は性質上神經衰弱的であり、或は神經衰弱とヒステリーの結合したものかも知れない。不眠、震顫、氣分がいらくすること、憂鬱、頭痛、身體各部の痛み、一般的不快、食慾減退、消化不良等が現はれ、純粹に機能的疾患のやうに見える。然し病氣が進行すると、種々の症候が附加されて來て初めて診斷が決定される。その附加症候としては、文字や語を忘れ、其等の書寫不能となり、高等なる情操を失ひ、批判力が無くなり、禮儀を重んぜず、人生の重要事項に對する興味を失つて來る。尙ほ烈しくなると、金錢の勘定を誤り、約束を忘れ、道を忘れ、怒り易くなり、道德的感情が減退して來る。尙ほその強度を増すと、健忘が一層烈しくなり、憂鬱的幻想が著しくなり、無節制も強くなつて行く。身體的方面の障礙としては、筋肉震顫、談話澁滞、瞳孔收縮不能、癲癇的又は卒中的痙攣、頭髮、皮膚及び骨の病氣等が現はれ、最後の階段に於ては痴呆が烈しくなり、身體的救

治が全く不可能になつて、遂に死亡する。

(二) 偏執狂。これは前記の癡痺症と異り、神経系統の上に何等の變化を發見することが出來ない。この疾患の特質は慢性の系統的妄想で、それが烈しくなつても精神力の喪失、即ち痴呆状態を呈することは殆ど無い。この妄想の性質と強度とに依りては一定の施設の中に收容する必要があるが、軽度の者は絶えず吾人の遭遇するところである。例へば變り者とか奇人とか言はれる者は、偏執狂に罹つて居るか、或は少くとも偏執狂の性格を有する者である。或る特殊の觀念を固執し、その爲めに他人から迫害を被るとか、孤立無援の地位に置かれると考ふる者は偏執狂的人である。偏執狂の代表的のものは愛情に關する妄想、訴訟や論争を常に事とする者、發明狂、宗教的妄想、政治狂等である。

偏執狂に於ける系統的妄想は一種の防禦機制とも考へられる。今茲に無能力の者がありて一の職業から他の職業へ逐ひやられたとする。この場合に自己の劣等を承認するよりも寧ろ彼の同僚の行動を疑ひ始める。即ち同僚が彼の行爲を内偵し、仕事の邪魔をし、噂を立て、雇主に密告し、

遂に解雇されたと考へる。之と同様のことを他の所でも繰返す。それで世人が彼の特殊の行動に注意し始めると、迫害妄想が益々烈しくなり苦惱を増し、敵を作り、反抗をして、遂に所屬團體から除外される。茲に於て彼はこの迫害を以て自己の優越から來ると考へるかも知れない。彼は有數な技術者であり、發明家であり、偉人であり、救世主であると考へる。又美しい貴女から愛されて居るが、彼の敵がその仲を裂いて居ると考へ、幻聽として敵の悪口を耳にしたりする。此等の迫害に對して患者は自己又は他人に危害を及ぼすやうになる者もあるが、それほど直接行動に移らない者もある。又痴呆の最後の階段が現はれて死に至る者もあり、又然らずして精神力を失はない者もある。

(三) 二重人格。通常の人は自身を以て統一された意識を有すと考へる。彼の遭遇する大多數の事物、彼の行ふ大部分の行動を記憶する。彼の家庭の行動と、運動場や事務室に於ける行動とはそれ〴〵異つた標準の下に行はれて居るが、其等の行動を同一人の行動と考へる程に組織して居る。然し嚴密に言へば家庭の自我、運動場の自我、事務室の自我といふ如くに、それ〴〵異つた

標準や興味に依りて支配されて居る。所が時として此等の自我の間に連絡が斷たれ、一方の自我が活動する時には、他の自我の活動を忘れ、甚しきは全く他人に依りて行はれた行動と考へられるやうになる。この場合が二重人格と言はれ、三種以上の自我が同一人の中にそれ／＼獨立して活動する場合を複重人格と言はれる。これは機能的精神病で、神經的缺陷を發見することは出来ない。

二重人格の最も輕微なものは夢遊である。睡眠中突然起きて室内や屋根の上などを歩いたりする。翌日になつて訊ねると、夜中自分の爲したことに就いて少しも記憶がない。かやうに記憶の連絡の無いことは二重人格の特徴と言つてよい。夢遊は多くヒステリー、癲癇、神經衰弱者に現はれ、又發情期にも多く現はれると言はれる。

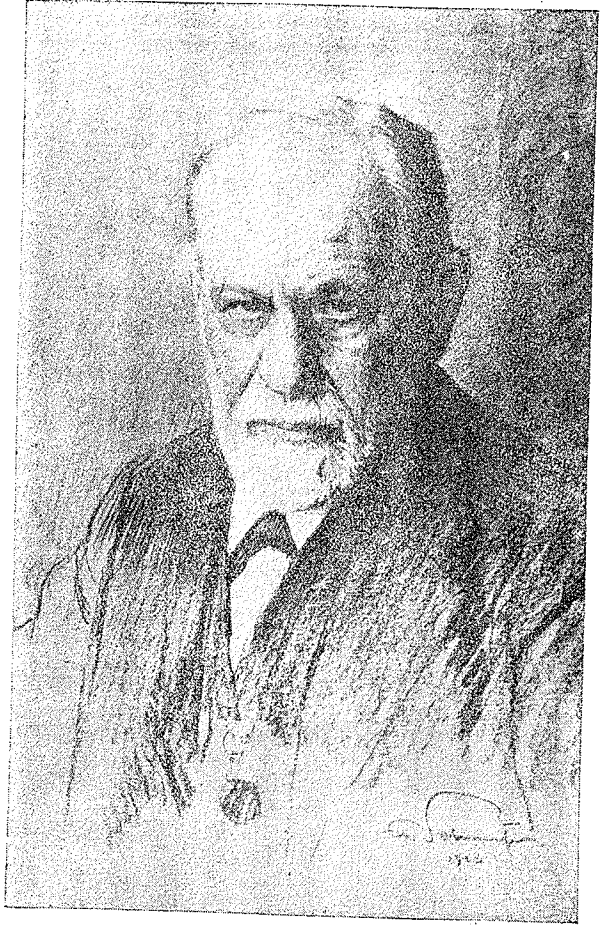
ピネーは人格分裂に就いて種々の例を擧げて居るが、その中にフェリダといふ一婦人の話がある。この女は最初一週間に一度ぐらゐる昏睡状態に陥り、それが十分間位續いてから突然目を覺すといふ風であつた。昏睡に陥る前には烈しい頭痛を感じ、何か仕事をして居ても、自然に頭が下

り、手を垂れて来て眠つてしまふ。二三分間眠ると目を覺すが、その時の精神状態は一變し、平生の憂鬱な性質は無くなつて快活になり、周囲の人々に對して初めて面會したかの如く挨拶をする。それが一定時間續くと再び睡眠に陥り、二三分眠ると元の状態に復る。今まで快活にうたつて居た歌を再び續けるやうに命じてもうたはないで全く憂鬱な状態に變る。かやうに第一の状態と第二の状態とは少しも連絡が無く、全く獨立した二つの人格が存在すると同一である。殊に甚しきは、この女は第二の状態にある時、或る男と關係して妊娠した。普通の状態の時には少しもこのことを知らず、第二状態の時のみ之を知つて居たといふことである。殊に驚くべきはその後彼女の第二状態の期間が漸次に長くなり、元の状態は二週間又は三週間に一度ぐらゐで、然も數時間續くのみになり、第二状態が却つて普通の状態になつてしまつたといふことである。

モルトン・プリンスの報告して居るポーシャンといふ婦人は四個の異つた人格を有して居り、それ〴〵性格も異り、健康の程度も相違し、名前も別の名で呼ばれて居たといふことである。

(四) ヒステリー ジャネーとフロイドとはこの病氣に就いての二大權威者である。前者は特に

圖 五 十 三 第



ジグムンド・フロイド

ヒステリーの叙述的分析に、後者はその説明的分析に貢献して居る。先づジャーネーの叙述を述べる。

ヒステリーの特徴は、觀念及び機能の系統の分裂を惹起す大なる暗示性があることである。前述の人格分裂の例は最も極端なものであるが、然しそれよりも軽い分裂もある。例へば筋肉、手、肩などに軽い筋肉的痙攣を惹起したり、夢遊状態になったり、ヒステリー性發作や放浪を生ずることもある。尙ほこの分裂には積極的と消極的とがある。即ち種々の不思議な運動を行つたり、或は癱瘓に陥ることもある。同様に感官の方面でも、不思議な事物を見、聞き、感ずるもので、所謂幻覺を有するが、實際に彼に觸れると感覺脫失をして居り、又他の感官を刺戟しても感覺を生じない。而して此等の癱瘓と感覺脫失は暗示の結果で、然も突然に現はれ得るものである。これは身體的損傷に基いては居ない。從來これは無意識觀念の表現とか結果とかと説明されたが、それは妥當でない。蓋しこれは或る腦髓過程が他の神經過程から分離して恰も正常の如き機能を持續すると假定すべきであるからである。例へば或る患者は、手を動かすことの出來ないとか、

足は感覚が無くなつたとかの暗示に遭遇すると、直にその觀念が現實になり、その患者は痲痺や感覚脱失を生ずる。中世紀の頃この種の無感覺領域は一般に知られ、それを以て惡魔や巫女の所作に因りて無感覺になつたと考へられた。而してその惡魔や巫女の存在を發見するには、患者の皮膚を針で刺し、その無感覺の領域を搜して居たといふことである。

觀念又は觀念系統の分裂を明かにする爲めにジャネーの例を引用する。イレネといふ二十歳の貧しき婦人が居たが、母親の死の爲めに失望して病氣になつた。彼女は母親と屋根裏の室に二人きりで住んで居たが、母親の肺病が重くなつて、母親は咯血し、息が苦しくなり、漸次に死に瀕して來た。彼女は六十日間毎夜母親を看護しながら、生活の資を得る爲めにミシンをやつて居た。母の息が止まつた時、も一度甦らせようと試み、手足を眞直に上げたが、母の體が床上に倒れた。床の上に再び引上げるのに非常な力を要した。葬式が濟んだ後、不思議な症候が彼女に現はれた。それは實に夢遊状態の著しきものである。即ち彼女は母親の死の際に起つた總ての出來事を再演した。如何なる名優と雖不可能であるくらゐに微細な點まで模寫し、或は辯舌爽かにそ

の出来事を話し、問答を試み、或は驚愕の顔つきをして光景を眺め、外界を注視したりした。又彼女は自殺せんとして總ての準備を整へ、そのことに就いて母親と問答し、母親の忠告を受けて居る如き行動をする。又時としては機關車に轢殺されんとするかの如き行動をする。それも彼女が一度實際に経験したことの追想である。彼女は床上に身を投げ、線路の上にあると考へて、恐怖と待ちきれない情とを以て死を待つて居る。汽車が凝視する目の前に來ると、恐しき叫聲を發して打倒れ、不動になつて死したかの如くなる。その後彼女は直に起き上つて、再び同一の光景を反復する。發作の間は何回も繰返し、遂に元氣が無くなつて來ると、夢も不明瞭になり、正常の状態に復歸する。而して平常と少しも變らぬ態度を執り、仕事を續けて行つたといふことである。

次にフロイドのヒステリーの説明を述べる。人格の分裂は記憶が失はれる爲めであるが、それは何故に生ずるかに就いて、フロイドは前述の防禦機制に依りて説明して居る。根本的傾向の間には常に争を生ずるが、その間に於て、自身を統一し、不快を免れんとするには、それと争つた

ものを抑壓して忘失せしむることを企てる。然しこの抑壓された材料は機會を得ると再び喚起され、且つ多く形を變へて現はれて來るもので、それがヒステリー發作の身體的症候になる。ヒステリー患者の精神分析を行つて見ると、多くは幼兒時代の親子間の關係の記憶が再現し、或は青年期以後の性慾生活に關する經驗と密接に關係することが明かになる。然し此等の經驗は何れも不快なものであり、且つ低級な本能生活に關係するから、出來るだけ之を意識の外に逐ひやるやうに抑壓を加へる（壓服作用）。已に承認された標準活動（看視）の許可を得たもののみが再現されるが、中には巧に標準活動に變装したり、他の活動に轉移したり、或は意味の不明瞭を來すやうに短縮され又は象徴化されて、看視の眼を欺いて再現することがある。かやうに看視を免れて現はれるものが、夢の内容となつたり、ヒステリーの行動となつたりするといふのである。

第五節 精神分析法と催眠術

精神分析法に於て努力する點は、前述の抑壓觀念の解剖である。この抑壓觀念は總ての人に存

在するが、心的疾患の者には特に異常に發達する。精神内容を氷山に譬へて居る者があるが、氷山が水面に現はれて居る部分が意識界で、水面以下にある部分が抑壓を破れるものである。この直接に認知の出来ない部分は、意識面に現はれたものよりも非常に多く、且つ所謂錯綜を呈して居る。學習したものは完全に忘却することなく、本能的傾向も亦全く消失することがないことは、多くの研究者の證明する所である。この學習せるもの又は本能的のものに結びついた不快や苦惱は、防禦機制に依りて之を意識の水面以下に抑壓する。神経系統に於ける單なる生理過程の領域から、その材料は行爲を決定し、性格を形成する。

唯一の特殊の方法に依りて、幼兒時代に忘れた經驗や、常に烈しく看視されて抑壓した經驗を再生することが出来る。而してその方法は精神分析法に於て行はるゝ自由聯想法である。一の經驗が再生すると、それと共に生じた他の經驗を伴つて來る。例へば猫といふ觀念があると、過去の聯合に依りて、鼠といふ觀念が意識に浮んで來る。この原理を基礎として精神分析法では、順次に自由聯想を行はせて、水面以下の錯綜の糸口を見出すのである。即ち注意の散亂を防ぐ爲め

に、患者を靜な室に安臥せしめ、受動的無抵抗的態度を執らしめ、先づ心に浮ぶ最初の觀念を報告せしめ、その觀念と關聯せる次の觀念を聯想せしめる。然し最初は看視作用があつて容易に且つ赤裸々に報告しないが、熟練せる分析者に依りて聯想を進められると、漸次にその真相に近づき、後に病的恐怖や苦惱の起原並に本質が発見される。而して患者自身にその原因が分るやうになるとその症狀は漸次に減退し遂に消失してしまふ。(この種の治療の實驗例は拙著『精神分析法』参照)

精神分析法は第十九世紀の後半に、ウエッテルストランド、シャルコーその他の人々に依りて行はれた催眠術から發達したものである。催眠術は暗示に依りて人爲的に複重人格を作出す方法である。その主なる方法としては、被術者の注意を單調且つ不變化の刺戟に集中せしめ、看視作用が漸次眠るやうにするのである。その結果、催眠状態にある人は術者に依りて暗示された觀念を眞實のものとして受取る。例へば巴里の光景を示してやると言へばそれを見、又水を與へて酒であると云へば酌する。又之と反對に、事物は現存しても、それを見ることが出来ないと言へば見えなくなり、痛くないと言へば針で突ついても無感覺になる。催眠から覺めると、その期間の

出來事は全く忘れ、恰もヒステリーの人格分裂の際の忘却と似て居る。但し覺醒後に一定の行動をなすやうに催眠中に暗示を興へると、その定められた時刻に、言はれた通りの行動を突然行ふ。これは催眠後暗示と言はれる。この方法に依りて術者は患者に向つて、もはや病的恐怖や苦惱の除去すべきことを暗示して、屢々その効果を見ることがある。催眠術は時として悪用されることもあるが、然し有意的統制を缺ける人にあらざれば、正常の行より外れた行動をなすことを、看視作用が禁止しないやうな危険はない。

かやうに催眠術は單に暗示に依る療法であるから、暗示にかゝりにくい人や、暗示の効力が漸次減退する場合には効力が少い。之に反して精神分析法は、自由聯想によりて病原を探究し、且つ本人の自覺によりて治療するので、他人の暗示の効力が無くなつても、病氣が元に戻ることは無いと言はれて居る。

参 考 書

1. McDougall, W. Outline of abnormal psychology.

2. Goddard, H. H. Psychology of the normal and subnormal.
3. Burt, C. The young delinquent.
4. Terman, L. M. Genetic studies in genius.
5. Freud, S. Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. (精神分析学)
6. Freud, S. Zur Psychopathologie des Alltagslebens. (精神分析学)
7. Adler, A. Ueber den nervösen Charakter. (精神分析学)
8. Healy, W. and Bronner, A. F. Delinquents and criminals.
9. Janet, P. The major symptoms of hysteria.

第八章 社會心理學

第一節 社會心理學の問題

人間並に多數の動物は、他の有機體の存在、殊に同一種族の面前では著しく異つた行動をする。蟻が他の蟻穴に入ると特殊の行動をし、檻の中に獨りで居る猿の所に他の猿を連れてくると異様の行動をする。人間に於ても未知の人の面前では羞恥、逡巡、緊張の感を生じ、又個人の意志に反して團體的行動を取ることが往々ある。此等は動物並に人間に社會精神ともいふべきものが存するからである。但しこの社會精神は個人精神以上に位する神祕のものでない。その精神要素に於ては個人精神のそれと根本的に異つたものでないが、他の個體の存在といふことの爲めに、異なつた精神構造を示すに過ぎない。例へば一個人の場合には反省的理智的であるものが、團體的暗示にかゝると無批判的本能的行動を敢てする。この無批判的本能的行動は全然個人の中に存在

して居ないものでなく、只團體的行動によりて、新に活動したものと云ふべきである。

個人的に作業する場合と群集的に作業する場合とに、能率上相違する研究は、モイマンやメーデによりて行はれて居る。メーデによると學童の力量計による作業は一人で行ふよりも、二人で競争させて行ふ方が作業が増加するといふことである。しかしモイマンは團體の影響は兒童の年齢、個性、體質、作業の種類によつて相違し、能率のあがる場合と然らざる場合とがあると言つて居る。例へば一般に仕事の緩慢なる薄弱の兒童は、學級團體の仕事によりて比較的得る所が多く、年少者は年長者よりも得る所が多い。かやうに薄弱の兒童は出來る兒童よりも學級のために促進されることが比較的多い代りに、往々薄弱の兒童は精神の過勞に陥ることがある。又兒童によりては、學級生活に伴ふ種々の外面的妨害に打克つことが出來ず、却つて靜かな家庭の方が仕事に適して居るものもある。エリスマンは群集のために個人精神が如何に變化するか程度とその變化を規定する成分を次の如く圖式で説明して居る。

これによると、個人が群集によりて影響されることは、思考の單一化、粗雜化、直觀化、輕信、

評 準 人	群衆中に於ける個人の變化	意識の占有 群衆によりて生じた拘束による	傳染、大多數の匠の威壓	社會意識による		情緒	達 観 不 可 能	一 致 的 成 分
				（專制的態度 傳染傾向の高上	（專制的態度 傳染傾向の高上			
	思 考 作 用							
◎	6.0 独立的批判的思考の困難と低減	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	6.5 思考の單一化、粗雑化、直観化	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	6.5 輕 信	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	4.0 感情や欲求の從屬	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	4.5 (a) 確信力	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	6.5 (b) 變 更	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	5.0 偏見、不公平、峻嚴	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	4.5 水 平 化	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	感情、意志、行爲							
◎	4.5 情緒の強度高上	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	5.0 感動性の高上	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	5.0 情緒の單純化、粗雑化	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	4.5 變 更	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	6.0 偏見、不公平、峻嚴	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	4.5 高慢、怒り易き、兇暴	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	3.0 大膽、犠牲を喜ぶ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	5.0 活動性、衝動性	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

變更等が最も多く表はれ、情意方面に於て、大膽並に犠牲を喜ぶ心が最も少く表はれることを示す。而して思考の單一化は表の右側に列擧せる項目中、最初から五つの成分が全部働き、最後の第六の成分が約半数程共働することを示して居る。エリスマンのこの圖表は包括的ではないが、影響の程度を成分の相對値によりて示す點に興味がある。群集現象に就て今後詳細に研究して、各種の成分の價值を洩れなく圖示することを得れば、群集心理の上に非常な光明を與へることが出來ると信ずる。

社會心理學に於ける問題は、如上の個人と他人との相互刺戟と、他人に對する反應の根本的事實、個人の場合と群集の場合とに於ける反應の比較など所謂ウイーズの人間に於ける諸關係を取扱ひ、更に進んで複雑なる社會精神の發現たる慣習、傳統、禁忌 (Taboo) 流行、群集、公共團體、暴徒等を研究し、又法律、宗教、道德、國語、藝術の社會的發達を明にする。従つて社會心理學者は、先づ人間並に動物の先天的本質、殊に本能と情緒を理解し、それ等の本質が個人の經驗によりて、如何に且つ如何なる範圍に變化するかを知らなければならぬ。彼は又暗示、模倣、

同情の本質と作用とを熟知し、想像と思考の活動を理解しなければならぬ。尙ほ個人の精神が社會精神の中に全く没入して特殊の精神統一體を構成すること、即ち關係構成物に於ける人間精神をも研究しなければならぬ。

以上に於て社會心理學の一般的問題を述べたが、茲に少しく社會の本質を明かにする必要がある。エルウッドによると、社會とは個人の心的相互作用を意味すると言つて居る。單なる物質的接近並に相互作用は社會的行動を構成するに十分でない。パラメシアは化學的藥品の一滴の所に集まるが、決して社會を構成して居ない。人間も市中に群がつてゐることだけでは社會を構成すと言へない。蟻や蜂の複雑なる活動が社會的か否かは、彼等の相互作用が意識的であるか否かに基くとエルウッドは述べて居る。然し意識と行動とを分けて考へることは、非常に困難な問題を生じ、現時の心理學では兩者を包括して取扱ふ者が多い。従つて社會的か非社會的かを意識の有無によりて決定せんとすることは多くの困難に遭遇する。人間以下の動物に意識の存否を發見する確實なる方法を有しない今日では、一方の有機體の行動が、他方の有機體の行動によりて直接に

影響を被むる場合は、社會的行動と看做す方が無難である。

次に人間社會が如何にして生じて來たかの問題も古來から種々と議論がある。ホップスやルソ
ーなどの考へによると、社會は、相互の掠奪に對して防禦を必要とするに至つて、個人間の契約
により成立したものとする。かゝる見地は社會又は社會的關係の存在しなかつた時代の存したこ
とを豫想し、社會關係を以て組織された社會及びその現象に限つて居る。然し今日に於ては争闘
の如き非社會的事實をも社會的のものとして看做して居る。實に社會は人間と同一の起原を有し、他
人に對する豫想せざる自然の反應として組織されたものである。尤も社會構成を助長するに生物
學的條件と物質的條件とがある。生物學的條件の第一は兒童期の長いことで、相互依存の有力な
る源泉になつて居る。出生前は母に寄生し、出生後は母やその他の家族の保護の下に生育する。
従つて早い時代から集團生活の陶冶を受ける。第二は遺傳的傾向又は本能で、例へば幼兒は獨り
残されることを嫌ひ、且つ恐れる。これは生物學的に孤立無援を恐れ、爲めに集團生活を好むに
至つたと解すべきである。憤怒の如きも反社會のもの、やうに見ゆるが、配偶、家族、社會を保

護し發達せしむる上に極めて重要であることは勿論である。尙ほ食物攝取や性慾の如きも團體生活の發達に根本的に必要なもので、社會現象はそれが原始的のものにせよ、或は進歩せるものにせよ、食物と性慾との根本的本能の周圍を廻轉して居ると言つてもよい位である。第三に共通の身體的構造を有すること、類似した身長、眼、耳、鼻、口、毛髮、その他共通の行動を有すること、單言すればギッディングスの所謂同類意識が社會構成に大に助けを與ふるもので、今日に於てすら尙ほ共同生活の妨害をなして居る、かの人種的偏見の如きは、同類意識を生じないことが、その一因となつて居る。

次に物質的條件としては地理的並に天候的成分がある。人間は地球の子供であり、地球によりて養はれ、仕事を課せられ、精神を發達せしめられ、身體を強壯にせしめられ、航海、移住の問題を生ずる。都市は川や湖の近くに建設され、山は一の社會團體と他のそれとを分離する。礦山や耕作地、さては便利な街道等は人間の集注を助ける。この地理的條件と密接な關係を有するものは天候である。ハンチントンの興味ある研究「文化と氣候」の著者によると、社會的活動、文

化の重なる産物は、從來想像されたよりも遙かに規則的に天候と關係することが分かる。多數の人間が地理的に天候的に最も恵まれた地方に集注することは自然の狀勢で、古代史を播くと、テイギリス、ユーフラテイス、ナイル等の河邊に多數の人間が棲息して居た。しかし地理的天候的成分は文化の進歩によりて幾分變化せしむることが出来る。例へば集合に不利益な土地でも鐵道の敷設の爲めに多數人が集まつてくる。堤防、隧道その他の工事が天候の暴威と運搬の通路とを變へて、社會團體を新に構成する。

第二節 社會生活と本能

社會的としての個人を十分に説明せんとするには本能の研究から始めなければならぬ。蓋し本能は總ての行動の根本形式で、後に發達した行動は凡て本能の變化したものと云ひ得るからである。本能が發達し變化するに當りて社會的要素の影響を被むることは非常に大である。吾人は隣人の恐れるものを恐れるやうに學び、社會的慣習の示す方法によりて配偶や食物を求め、好奇

心や嫉妬も吾人の生活する團體に於ける傳統的方法によりて生じ、また満足する。かやうな點に於て凡ての本能は社會的である。然し本能が社會的標準と一致するといふことを考察するのみならず、尙ほ本能の生じた状態や、本能の役立つた原始状態からも考察する必要がある。この見地からすると性慾、嫉妬、親の本能、恐怖、憤怒も社會的の本能になる。

本能が社會に對して重要なことは二つの方面から考へられる。第一に本能は行動に對する根本的發動力を個人に與へる。本能は種族の過去の歴史の中にも働いて居るから、慣習、傳統、便宜、嗜好等は本能を考慮に入れなければ説明は出來ない。種々の形式を有する結婚は性慾と親の本能の上に建設され、食物の生産及び分配の習慣は飢餓の満足、競争、獲得の本能を基礎とする。第二に根本的反應を示す本能は、稀に起るやうに抑壓したり、又は變形せしむることは出來るが、全く根絶することは出來ない。この事實は社會上の慣習や風俗に於て認められ、例へば性慾の如きは全く除去することも抑壓することも出來ない。かの禁慾生活が往々破綻を來たすことはこの理由に基いて居る。敵對、競争、嫉妬、憤怒、報復等は有機體の永久的行動で、社會團體は此等

を變化し得るが、模倣することは出来ない。争闘本能は競技や政黨に於ける競争に現はれて居り、性慾は文學や藝術に於ける創作や鑑賞に淳化されて居る。

これ等の本能又は情緒と稱へらるゝものが、社會的行動に發達するに最も必要な成分として、四種が列擧される。

(一) 模倣。個人の行動が模倣によりて影響され、社會的一致行動を取ることを強調するものはタルドとボールドウィンとである。一般に模倣といふことは、他人の行爲を複寫すること、恰も同情が他人の感情を複寫すると同一である。子供は兩親の行動を模倣し、成人は流行や傳統に一致するために他人を模倣する。故に模倣には多少の意識があり、又多少の推理が働かなければならぬ。尤も動物に於ける模倣に推理作用の存するか否かは不明である。獸群の一疋が叫聲を發すると、他の獸はそれに共鳴して叫聲を發し、鳥群の一羽が飛び去ると、残りの者も飛び去る。これ等は他の動物の行動を知覺することによりて生ずる極めて原始的形式のものである。

かやうな原始的形式の模倣は種族保存に價値を有することから模倣を以て本能であるとするも

のがある。遺傳によりて一つ又はそれ以上の本能が危険の事物又は苦痛を與ふる事物に對して生ずるばかりでなく、他の者の中に生ずる本能そのものを知覺して、それと同一の本能を生ずると假定する。例へば、マクヂューガルによると、他のものに於ける憤怒の認知が、それを見て居るものに憤怒を惹起すと言つて居る。しかし他人に於ける憤怒の認知は、見て居る者に滑稽、喜悅、恐怖などそれ／＼異つた情緒を生ずるかも知れない。換言すれば憤怒そのものが刺戟となつて其の團體に憤怒が擴がつて行くものでない。

模倣は恐らく條件反射と思考とによりて説明されるかも知れない。例へば汝の欠伸を見て私が欠伸するとする。吾人は同一の一般的环境に生活するため、一方がある原因殊に身體的原因からして欠伸を催す際に、同一の原因からして同時に欠伸をしたに相違ない。それで後には他人の欠伸を見て、假令欠伸を引起す原因なくしても、直ちに欠伸を生ずるに至つたのであらう。次に思考によりて他人の行動を模倣することは勿論で、有利な行動は直ちに模倣される。流行や慣習の如きは主として模倣によるもので、殊に慣習の如きは團體によりて模倣を強むられることが多

い。この種の模倣的行動に於ける最も強力な理由は、一般的に團體から孤立せしめられることによりて生ずる助け無きこと、失はれて居ること、恐怖の感である。

(二)暗示。通常暗示は社會狀態の中に遭遇する刺戟を無批判に承認する過程として定義される。一方に催眠術から、他方に新聞に起る日常の事項に至るまで、幾多の暗示に吾人は遭遇する。サイデイスによると人間は暗示にかゝるが故に社會であると言つて居る。廣告家は暗示性の非常に重要なことを知り、民衆運動家は暗示を利用して團體的行動を煽動する。暗示は模倣と區分して説明することは困難であり、不必要である。吾人は直立せる人を見ると無意識に肩を聳かし、權威者の命令には直ちに服従する。單に他人と共通に行つた事と、承認し信仰して行つた事の境界は極めて僅かである。従つて前者を間接暗示、後者を直接暗示と區別されることがある。同情、模倣、暗示は同種の個人の中にある類似又は同一を基礎として居る。隣人が泣くのを見て、直ちにその悲哀の幾分を分擔する。友人の新調の洋服を見ると、洋服を買ふ時に際し、殆んど何等の熟慮無くして、同じスタイルのものを注文する。隣人に同情することは、その者の感ずるやうに感

ずること、必ずしも同一の反應や模倣行動を包含するとは限らない。それと同じことが暗示にも言へる。暗示は觀念の信仰から觀念の實行に至るまでの短い階段に過ぎない。若し觀念が二人以上の者に分配されると、その行動も二人以上に分擔され、模倣と名づくる行動を生ずる。

前の異常心理學の章下で暗示の現象に言及した。個人の批判力を妨げたり、批判的考察なくして觀念が意識に入るやうにすると、暗示は強く働く。暗示に對する抵抗は經驗が深く廣く組織されるに従つて強くなる。故に婦人、子供、又は一層原始的民族の者は一般に暗示にかゝり易い。ロ。スは暗示を助くる條件として、名聲、年齢、種族、性、情緒的興奮、反復的刺戟、多勢の中で唯一人であるとの感を列擧する。

(三) 同情。これは他人の情緒を認知し評價すること以上のものである。即ち吾人が他人に同情するには、他人の情緒を高い又は低い程度に經驗しなければならぬ。喜悅や悲哀に同情するにはそれ等を認知するのみならず、それ等と同じ情緒を意識しなければならぬ。故に同情は二人又はそれ以上の個人の情緒間の一定の關係を意味し、一個人の特殊の感情又は情緒を意味しない。從

つてその關係は社會狀態に於てのみ生ずることが出来る。同情が社會の發達に重要なことは、特にギッディングスによりて強調された。同情の最も大なる價值は、實に團體各員の中の有力なる密着的成分として働く點に存する。

同情は本能的と理性的とに分けられる。後者は利他的及び創造的であるが、前者は利他的であるとは言へ、利己的の所がある。僅かの喜捨を以て不幸の人を卑下することは本能的同情であり、不幸の人の生存の權利を覺醒し、その權利の使用を刺戟する如きは理性的同情である。建部博士は同情と仁とを區別するが、氏の所謂同情は本能的同情に、仁は理性的同情に相當するやうである。同情は又受動的と發動的に分類される。前者は同一の情緒を單に經驗するだけで、後者はベーンが言つた如く、彼自身の情緒の如く他人の爲めにその情緒を働かすものである。受動型のものは、隣人の苦痛や困難に對して顔を背け、又は明るい方面に眼を向けかへる。かくして彼は不注意又は忘却の防禦機制を行ふ。所が發動型のものは隣人の苦痛を見れば救助し、喜悅を見れば共に喜びを示す。この兩者の相違は一部は慣習と便宜とに基いて居り、一部は特に自我に興味を

有する内部組織に基いて居る。

これ等の形式の同情を生ずるには二つの條件がある。第一は同情的反應を惹起す喜悅や悲哀を過去に於て經驗せること、第二は被同情者が同情者と同一種類の者たるとの意識である。故にこの二つは個人の想像力に基いて居る。子供を失つたことのない人はそれに對する同情が十分に表はれず、未知の人の災厄は強き同情を生じない。かやうに想像力が、同情に制限を加ふる點に善と惡との方面がある。惡しき制限としては、價值ある人を知らない爲めに同情しないことで、善い制限としては、社會的又は國際的法則を破る者に對して敵意を示すことである。

(四) 愛情 同情と愛情とは密接に關係して居る。フロイドの如きは暗示と同情の本質をリビド (Libido) によりて説明し、群集心理學に一の光明を與へて居る。リビドは勢力又は活力を意味するが、それは特に性的のもので、性的結合を目的とする性愛と區別することが出来ない。

而して大多數の情緒的傾向はこの本能的傾向によりて跡づけ得られる。この傾向の發端は性の間の誘引であり、その終局は性的表現の充足である。

フロイドによると、一の團體は或る種の力によりて結合されて居ることは明白である。而してこの團結力を以て、世界に於ける總てのものを結合する性愛 (Eros) に歸する外は無いと言つて居る。氏は教會と軍隊との例を引き、二つの團體が愛の錯覺に基いて居ること、即ち一はキリストに、他は司令官に對する愛着から結合されて居る。若しこの錯覺が破れると、教會も軍隊も崩壊するとする。この外尙ほ團體の一員が他の團員に對する愛の結合もある。各個人はリビドー的結合によりて、團體の指導者と、その團員とに結びつくから、フロイドは、各員の人格の變化と制限とを説明するに困難を感じない。氏は恐慌 (Panic) を神經病的恐怖であるとす。

⑤ 社會的と考へられ得る總ての關係に於て、嫌厭と敵意とが重要な役目をなす。これ等は軋轢と利害とによりては十分に説明することが出来ない。フロイドは未知人に對して感ずる反情は自己愛 (Narcissism) の表現であるとする。團體に於ては各個人は他の人間を忍容し、嫌厭の情を示さない。所が愛情が他の人に向はないで、自身を對象とする時には他人に對して嫌忌を示し、未知人の場合は特に強く表はれる。氏は曰く利己主義より利他主義へ變化せしむる意味に於ける人

類全體の發達は個人のそれと同じく、愛情が文化的成分として働いて居ると。

フロイドの主張は全然眞であるとは言へないが、又一部の社會現象は愛情によりて説明が出来る。要するに今日の社會生活は極めて複雑で、人間の傾向の多様なるだけそれだけ學說の相違があると言へる。社會が進化的過程を取る如くに、それを説明する總ての原理も亦進歩しなければならぬ。

第三節 社會的產物

社會そのものが社會的產物である。社會に於ける諸種の現象、例へば流行、便宜、傳統、群集、暴徒、團體、組合、道德、法律、言語、藝術、宗教等も亦社會的產物の一つである。然しこれ等の產物の中には常に個人の一部が存在する。或る個人は特に流行に、他の者は道德に、他の者は宗教に興味を引かれる。此等一々の現象を詳細に論ずるには、其等の分析のみならず、その中に於ける變化を惹起す條件をも述べなければならぬ。従つて概論的に述ぶる本書に於ては、其等

一々を記述する餘裕が無いから、茲には主なる現象の二三に就て述べることにする。

(一) 群集。これは共通せる知覺によりて社會的になつた、身體的に結合した集團である。群集は偶發的事變を視たり、躓いた人や帽子を飛ばしたものを見て笑ひ、奇抜な廣告があると立止つて見る。この知覺的出來事は、身體的に結合した個人に對し、それぞれ全く異つた意義を與へる。ある事件は只一人居る時には社會的事項とならないことがある。例へば躓くことは群集の面前で行ふほど滑稽に見えることはない。

最も低い程度の社會的接觸は單なる集合の中に發見される。汽車の到着を待つたり、辯士の出演を待つたりする個人の集合は最も低い程度の群集である。この場合に集合せる人々は特殊の社會的對象によりて引きつけられたのでなく、只彼等の仲間就て意識せしむる不明瞭の過程があるだけである。第二の階段は、好奇心や興味の共通對象によりて引つけられた、一時的且つ自發的集合である。街道に於ける事變、疾走する消防自動車、巧に飾れる店頭の窓、奇抜なる廣告看板は一時的に人を集中せしむる。これよりも程度の高い組織は、ある辯士の話を聞くために、種

々の人々が一時的に集合する場合である。この種の群集は知覺的機能の發動的行動を有するのみならず、幾分の推敲過程を有して居る。この群集は種々の點に於て聽衆と相違する。聽衆の人々を結合する社會的關係には一の歴史がある。即ち彼等は以前の會合を樂しんだことがあり、共通の利害を有する。この種の會合は特殊の目的のために行はれ、その人々は社會的奉仕の理想や、個人的利害を犠牲にして公共の原因に專注することを吹き込まれることが往々ある。

(二) 聽衆。これには多數の特殊の心的傾向がある。團體の人々の興味は凡てに共通であるから、聽衆は服從的氣分に於て集まつて居る。それは樂しむため、教へられるため、感動せしめられるために集まる。聽衆は指導者の權威に對して烈しき反抗を示さず、指導者の主張を疑はない。聽衆は又訓練された會合である。教會の儀式の反復が適當な宗教的祈念に必要な氣分を生ずる。友達と一所に居ること、馴れた建物に入ること、與へられた題目を豫期すること、古く聯合した傾向を再び喚起されること等は聽衆の人々がよく經驗する所である。これ等の特質から見ると、聽衆は一定の極に向けられた團體であると言へる。謂はゞ談話者や、實演者は個人が集合的注意を

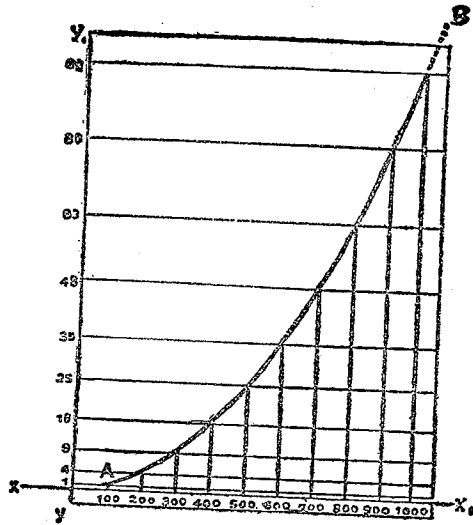
與ふる對象になる。談話者が言つたり行つたりすることの凡てを識得することが、意識に最初に表はれる事項である。

團體がその團體に於ける個人の作業に影響することは、知られて居るが、實驗的に研究されたものは極めて少ない。グリフィスによると、大學生の成績が教室内の場所によりて異なるといふことである。聴衆の周圍に居るものは、中央にあるものよりも一般に成績が悪い。即ち室の後方のみならず、兩側のもの又前方のものも平均點が低い。故にそれは講義が聞えないとか、説明が見えないとかの爲めとは言へない。尙ほ聴衆の多少に就て調査すると、多い聴衆中の成績のよい範圍と少ない聴衆中の成績の悪い範圍とが屢々一致した。これ等の事實と他の事實とからして、作業に於ける個人差は、社會的複合體の程度によるといふ結論が得られた。群集の周縁にある個人は、不安に陥り易く、主なる團體の興味を引きつける何物にも不注意になる。所が身體的に密着せること、談話者の方に局限された興味と團體の活動とが、聴衆の主なる團體を密に結合せしむる。換言すれば、聴衆の心が談話者の方へのみならず、それ自身に就ても組織される。その内

部的組織が個人の作業を有利ならしむるといふことである。

(三) 暴徒。これはある状態の知覚のみならず、その状態によりて惹起された情緒の影響によりて集合した個人の集團である。暴徒は群集や聴衆と異つて直ちに實行に移るものである。度々目撃される警官と人民との衝突事件を、一例としてその本質を列擧すると、(a) 興奮せしむる原因、例へば無辜の人民を警官が捕縛したことが民衆を深く感動せしむる。(b) 同情者が交番に談判に行つたとか、人々が四つ辻に集つたとかの報告が擴がる。この事が好奇心をそゝつて群集の數が尙ほ増加して行く。(c) かゝる團體に於ては暗示性とその最高に達し、かくして暴徒行爲への道が用意される。(d) 指導者が表はれて群集に演説する。彼は事件の内容に就て群集の注意を集め、人民の權利を無視したことに就て群集の情緒を惹起し、直接行動の必要を感じしむる。その後高度の緊張を持つた群集と共に、指導者又は自發的に指導者となつた二三の人々は、警官を引ずり倒せとか、交番を焼打ちすべしと叫ぶ。(e) 暗示が擴がり、その觀念を有することとは、それを實行することになつてしまふ。

圖 六 十 三 第



かやうに單純なる情緒的觀念によりて支配された團體の、非合理的、暗示的、子供らしき行動

に多くの人は随つて行く。實に一種の團體的催眠にかゝるのである。サイデイスは暴徒の人數とその勢力との關係を算出して第三十六圖の如く示して居る。横軸は人數を示し、縦軸は勢力を示すとすれば、暴徒の勢力はA B線の如く増加する。即ち暴徒の人數が算術的級數にて増加すれば、その勢力は殆んど幾何學的級數を以て増加すとする。かやうに暴徒の勢力が増加するとは思はれない

が、政治上の集合、宗教上の革命等を見ると、人數の増加に比し、勢力は可なり急速に増加するやうである。然し何れの暴徒的行動を見ても、ある種の情緒の影響によりて、社會的結合が行はれて居ることを發見する。

(四) 慣習。慣習は社會的遺傳によりて世代より世代に傳はる行爲の一定様式である。かくして宗教、道德、法律、その他に一定の慣習がある。これは以前の世代から行はれて居り、且つ多數の個人に共通せる習慣である點に於て普通の習慣と相違する。然しこれも習慣と同じく一部は偶然に起り、一部は反省の結果から生ずる。たゞ慣習の方は偶發的のものが多いやうである。而して反復される間に習慣や慣習を生じた動機は多く失はれてしまふ。今一例として狩獵に於ける慣習の構成を述べて見よう。

食物を得ることは原始生活に於て最も重大な事項であるから、強き情緒を惹起し、獲物が少しでも多いやうに、何等かの補助力を求むるに至るものである。狩獵の朝、弓と矢を持つて家から出て來る時に偶然躓く。而してその日獲物が無かつたとする。然る時は躓くことは不幸の兆候と

なり、狩獵の前には必ず避くべき一の事項になる。同様に満月は獵の少ないこと、聯合され、狩獵は常に暗夜に行はれるやうになる。數日間狩獵が旨く行かないと、弓を三度擦りて「矢よ眞直に行け」と言つた後、暫くして獲物があつたとする。さうするとその行爲がその者の友人や子孫に傳はり、遂に一の慣習になつてしまふ。

智能が一層發達した社會に於ては、主要なる慣習を反省の結果から構成せんと企て、居る。かの法律の如きは慎重なる會合によりて制定され、播種や收穫の方法は科學的研究の結果を重んじて來る。然し最も智能の發達した人士の中にも猶ほ偶發的印象の支配を受けて居る者がある。それは一部はその状態がその個人に對して餘り致命的のものでないからで、例へば四や十三の迷信の如きはそれである。又一部は或る宗教上の慣習の如く性慾の統制になるために保存される。かやうに社會は大なる惡結果がなければ、承認された慣習に干渉しようとはしないものである。か慣習が個人に固着する條件として四つを列擧することが出来る。即ち(a)慣習に外れること

によりて生ずる未知並に異常に對する恐怖(b)承認されたことを行ふことの容易、便利、疲勞

少なきこと (c) 古いもの程勢力が大なること、(d) 輿論の結果である。慣習が個人に重大なる關係を有する程、第一の條件の影響は大になる。原始人は狩獵の慣習や家畜を飼ふ方法を改めない。蓋し改正して不馴なことをすると、失敗の罰を被るかも知れないと恐れるからである。尙ほ長い間馴れた行爲は容易であるが、改革の道を進めることは困難である。古いものは殘存に對してよく働いたもので、勢力を有して居る。尙ほ輿論が勢力を有することは、一部は暗示力によりて多數の人々を引つけるのと、一部はそれに従はないと孤立に陥ることを恐れるためである。

慣習は又法律に前行する。ジャスチニアンのローマ法典の中には、長い間行はれた慣習は、それを使用した人々の同意によりて定められて居るから、法律の性質を有すと言はれて居る。英國の不文法 (Common Law) や、米國の法律の大部分はイギリス人の慣習を文字に書いたものである。かやうに法律は慣習を基礎とせるもので、慣習に反對して何等の法律も強行することが出来ないと言はれて居る。

(五) 流行 これは慣習と同じく行動の社會的様式であるが、種々の點に於て慣習と相違する。

その主なる相違點は、程度と持久性に於て異なり、又その強行の様式に於て相違する。即ち流行は間斷的・一時的のものであるが、慣習は比較的永續するもので、流行を支配する條件によりて影響を被らない。又流行は熟慮的選擇の餘地があるが、慣習は社會的承認で、それに背くことを許されない場合が多い。衣服の色合、縞柄、形などは流行の最も代表的のもので、その原因としては（a）他人から區別され、自分に注意されんことを欲すること、（b）商品を改良し、又は販路を擴げんとする商工業者の意圖、（c）國家的又は異常の人物又は出來事である。例へばルーズベルトの大統領の時はテデーの熊が流行し、ウィルソンの時はウィルソン紫が流行し、昭和の御即位式の年には大典に因んで紫色が流行するといふ如きである。

流行は勿論衣服に限らない。髮の結び方、家の建て方、文學、藝術、教育、哲學、科學等あらゆる方面に流行がある。これ等の流行には單に好奇心にかられるとか、自己表彰とかいふばかりでなく、非常に便利だとか、合理的だとか、進歩的だとかいふ多少の反省を伴ふものである。かの用語の流行の如きも利権とかモガとか吾人の常に目撃する所で、殊に新聞に於ける用語は非常

な勢を以て流行する。人間の論理の仕方即ち論じ方の如きも流行があるやうである。昔支那の六朝の頃には清談が流行し、希臘の古代には詭辯論が流行した。要するに流行は一時的のもので、社會組織の上に餘り重大なる關係を有しないが、しかしそれが社會組織に關係を及ぼすやうになると、流行でなくなり、習慣となり、慣習に變化するものである。

(六) 宗教 宗教が社會心理學に關係する點に三つある。第一は宗教は吾人が原始的集團に負ふ所の最も一般的社會的產物である。言語を除くと、宗教は他の心的創造物よりも遙かに多く原始的精神とそれの發達とを表はして居る。ある意味に於て宗教史は自然に於ける最も大なる物を捕へんと人間の企てた歴史であり、彼の種々の成功と失敗とが、種々の文化階段に於て用ゐられた心の能力を示して居る。第二に宗教上の大系は社會團體の構成の有力なる動因になる。宗教上の儀式や祭典は團體の行動を決定する。宗教上の理想と教義は全部の社會生活を構成する有力なる成分にある。第三に信仰者、宗教振興者、祈願者の精神や、神祕又は入信の心は一面に個人的であるが、又社會的に規定されるものである。

原始人は自然と共に又は敵に反對して成功ある作業をなすために殆んど全く宗教を使用したといへる。彼等の行動と儀式の多くは或る種の力を得んとの手段で、例へば雨を降らしめんため、保護を得んため、單言すれば彼等が闘はなければならぬ反對の條件を緩和するための手段である。總ての原始的宗教の特質は、祈願者の經驗と動作とが彼自身を通じての救助に對する訴へでなく、反對條件の上に直接に働く力に對する訴へである點である。彼自身の經驗と彼自身の生活の行爲とは、自然の上に働く外部の力の作用に比ぶれば二次的のものである。

神の概念が發達し初め、宗教が社會團體の生活に高い役目をなすやうになると、神の動作の場所が自然より人自身の方に變つて行く。儀式や祭典は祈禱になる。この新見地によると世界は惡魔が種々の部分に住むために、反對されるのでなく、人自身がより良き世界に住む價值がない爲めに反對されると考へる。信仰は外部の力の助けを得るためでなく、神の慈悲に値するだけの彼自身の生活と彼自身の社會關係を有するやうに支配する助けを與へるものとする。以前は彼の敵に對してよく戦ふやうに武器に良い精靈を得んと求めたが、今では彼自身の筋力の確さと強さ並

に心の勇氣とを得んと求める。宗教の發達と世界に就ての知識の増加と共に、この世のみならず未來の生活をも考へるやうになるが、不死の信仰は宗教史に於て遅く發達したものである。それは宗教が個人並に社會團體に對して有するに至つた新しい意義の產物である。

宗教上の罪惡觀を見ると社會性に關係して居る。罪惡の意識に對する主なる基礎の一は、他人より承認されることの欲求で、他人が承認しないと認むる時に吾人は不快を感じるものである。幼兒は父母からの承認を熱求し、年長の子供は教師や友達から承認されることを欲求する。大人になると彼の住む社會からの承認を求むるが、この他人の承認を求むる最高の欲求は神佛の承認である。この神佛の承認は實に同胞のそれよりも遙かに偉大で終極のものであると感ぜられる。更に發生的に考へると、野蠻人の罪惡の感は團體の道德を破ることから來る。團體間の掟や標準を破ると種族の神は怒りて、犯したものの、みならず種族全體を罰すると考へる。彼等の善惡正邪の標準は團體的標準によりて規定され、例へば一般に信仰されたものは善であり、一般に禁忌されたものは惡である。禁忌の考は今日と雖も存し、かのキリスト教の禁酒の如きは然りで、若し

これを犯すと罪惡であると考へる。

回心の過程を見ると、回心が近よりつゝある時には二重の價値觀がありて、今まで實際有して居た價値標準と、未だ達しないが、しかし達したいと望んで居る理想標準とが對立する。而してこの低い價値と高い價値とは二つの點で相違する。(a)その瞬間の生活を満足する所の直接満足で、人生の最後の満足に適しないものは、低い價値のものとされる。故に低い満足をして高い満足を犠牲にすることは神佛の承認しないものと考へ、それを以て罪惡と感ずる。(b)低い價値は反社會的のものに存する。他人の必要や權利を認めることが價値標準の高上であると感ずる。即ち最高價値の生活は同胞と一所に生活すること、その場合に神佛の恩恵や救済に預るものと考へるのである。この二つの價値の争が靈と肉との戰として回心の告白の中に報告されて居る。

参 考 書

1. Allport, F. H. Social psychology,
2. Ellwood, C. A. An introduction to social psychology.

3. McDougall, W. The group mind.

4. Freud, S. Massen Psychologie und Ich-Analyse. (附註 89)

5. Stimmel, G. Grundfragen der Soziologie, Individuum und Gemeinschaft.

6. Hickman, F. S. Introduction to the psychology of religion.

第九章 民族心理學

第一節 縱斷的研究

今日民族心理學は二重の形式に於て表はれて居る。第一は最も古い原始時代から今日に至るまでの人類發達の年代的縱斷面を示し、その研究方法は演繹的で、他の類似の科學から材料を取り來り、心理的根本事實の説明をして居る。かのヴェントの民族心理學の系統はこの形式に屬するものである。第二は今日の人類の橫斷面を見る研究で、自然民族並に半文化の民族を材料とし、實

驗を用ゐて彼等の精神的貯藏を調べ、全體的动作を分析し、中には民謡の旋律を蓄音器に取つて研究して居る。蓋しこれ等の研究者は原始人の異つた精神構造を歐米の研究室で理解することは出来ず、學者に表はるゝ心理學的事實を熱帯地方の蕃民に適用することは何等の説明にならないと信するからである。

先づ第一の縦斷的研究から述べる。

今日民族心理學と言へば直ちにヴントを聯想する位に、氏はこの科學に貢獻して居るが、その當時に於ては個人心理學の研究が盛んで、人格や全體精神の考察は最後に置かれ、個人と社會との相互作用や社會心理的現象を知ることがは後廻しにされて居た。所が氏は一八六二年に「人及び動物精神講義」二卷の書を公にし、第二卷の方は主として民族心理學的研究に満たされて居る。

これは實に氏の實驗心理學に對する一種の上部構造を形作つて居ると言へる。蓋し氏は精神生活が社會的に規定される部分が非常に多く、爲めに感官心理學のみでは研究が盡されて居ないといふことを考へたに相違ない。氏によると、民族には民族精神がありて、それは個人精神の相互作用

用から生じたものである。故に個人精神を離れて存在しないが、然し個人精神の總和でなく、個人精神の作用のみでは説明の出来ないものである。故に民族心理學では個人精神生活に發見することの出来ない特殊の法則を發見すること、それは言語、神話、宗教、藝術、慣習、法律等の民族精神の產物に現はれて居る。故に此等を研究して民族精神の發達法則を知ることが出来る。而して民族心理學に於て此等の產物を研究するには、原始時代の凡ての民族が總て一致して居る點を研究すべきで、各國民、各人種に於けるその發達の差異を明かにし、それに依りて國民性、民族性の差異を明かにすることは斯學の任務でなく、其等は人種學又は人類學の研究範圍である。

それで氏が一九〇〇年から一九二〇年の間に公にした民族心理學十卷は終始民族精神の縦斷的研究であつた。氏の取扱つた主なる對象は、言語、神話、風俗、藝術で、これ等はいづれも個人の所産で民族的のものであるとした。尤も藝術はその初期に於ては民族心理學の取扱ふべきもので、後の發達は美術史の領域に屬するものとした。神話は更にそれと關聯して宗教の起原を述

へ、風俗よりして社會、法律、經濟の初期に論及して居る。かやうに民族心理學の對象は多種であるが、しかし文化の最初から存在し、且つ共同生活の他の産物の源泉となつて居るものは言語、神話、風俗、藝術の四つであると氏は考へたのである。歴史的經過は直接に進歩と發達とを示すと信じた氏は、如上の四種の現象を叙述するに當りて、四期に區分して居る。而して何れの時期にもその中心たる表象感情及び動機が存在するもので、それを中心として他の現象が配列せられるとし、その中心的動因を以て、その時期の名稱にした。

第一は原始人時代で、ヴァントは衣食住の起原を尋ね、植物を掘る棒や弓矢の如き木器時代が石器時代の前にあることを述べ、この時代の社會組織は、組織のない人群であり、言語は身振語であつたに相違ないと推論し、原始人の信ずる神話的表象は呪術と惡魔であるとす。惡魔には死者の魔と病魔とがあり、何れも原始人の恐怖の情緒から生じたものである。呪術は種々の場合に表はれるが、その主要なるものは病氣に關するもので、これにより病氣を防ぎ又は治したり、或はその爲めに病氣に犯されることがある。衣服の起原の如きもヴァントは呪術であるとし、結婚の

時に男は女の腰を結び、時としてはこれを交換する。裝飾例へば櫛の如きは魔よけになり、頭の巻き物は呪術者によりて巻かれ、結婚の時に取換へられるといふ如くに、その起原は今日の如き裝飾品でなかつたと言つて居る。原始人の藝術の中で最も發達したものは踊であるが、その動機は呪であつた。踊に伴つて歌を生じ、更に進んで樂器が表はれる。しかし眞の樂器は原始人には未だ發達せず。粗野な絃樂器、即ち音樂弓 (Musik Bogen) の如きものであつたと述べて居る。

第二はトテムイズムの時代で、これは徹頭徹尾トテムイズムでなく、その概念を廣く用ゐたので、ヴントはトテムイズムと名づけて居る。トテムとは種族の内の團體の名で、多くは動物の名である。例へば鷹、狼、水牛トテムの如きものがある。しかしトテムは單にかゝる團體の名稱に留まらないで、一般にその團體の祖先であるとし、或は祖先の靈を宿すものとして畏敬されて居る。又一定の動物例へば狼がトテムとなる時は、それに屬する人々は總ての狼に對して畏怖するのである。かやうにトテムは最初動物に限られて居たが、後には食用の植物に移り、更に石その他の無生物に及ぶやうになる。かの神聖なものに對して畏敬し、不淨なものに對して嫌惡するといふ

タブーの対象もヴントによるとトテム動物が最初であるとする。蓋しトテム動物をその團體の者は殺したり、食したり、狩したりすることを禁じられて居るからである。かやうにタブーはトテムと共に関係したものであるが、しかしポリネシアに見る如くタブーはトテムよりも生命が長く、後までも流行して居るとヴントは述べて居る。

トテム時代になると種族組織も規則正しくなり、先づ種族が二分され、その兩部に數個のトテム團體がある。更に種族組織が複雑となれば二分して四氏族となり、更に進んでは二分して八氏族に分れ、その各氏族が數個のトテム團體を有する。而してこのトテム團體の間には、異なる團體間のみ結婚が行はれ、原始人の同族結婚とは大に趣を異にして居る。この結婚と關係した死及び成人に關する風俗に、トテム的種族編成が影響し、且つトテム崇拜に關聯して特殊の崇拜團體を生ずる。氏族の祖先たるトテムからは個人を守護するトテムを生じ、更に男又は女全體の所謂性トテムが發達する。尙ほ種族組織からは酋長制が起り、この酋長制は後に種族組織を破壊して、次の政治組織を發展せしめる。かやうに種族の組織が鞏固となるに従つて種族の間に、土

地の所有や狩場の問題で戦争が起る。殊にこの戦争は種族の移住によりて促進される。この戦争からして種族及び氏族の所領が確定し、更に個人の所有が始まつてくる。商業も種族の交通の結果、その範圍を擴張し來り、衣服、器具、住宅の建築等も發達し、踊、音樂、歌の如きものも原始人時代よりも遙かに豊富になつてくる。農業も犁の使用が發見され、家畜を飼ふことが行はれて來て、動物は人間の使役する所となり、そのトテムの崇拜の意味は失はれてくる。而して酋長制の發達と共に、優れたる個人が生神として崇拜されるやうになり、且つ死後も尊崇されて、次の英雄及び神の時代に移つて行く。

第三は英雄及び神の時代で、英雄及び神が最も活躍した時代である。ヴントのいふ英雄とは、ホーマーの描いて居るアヒレウスの如き古代の英雄傳説に表はれて居る勇士的英雄のみをいふのではなく、その外に精神的領域に於て都市の建設者、建國の祖、及び宗教の開祖等までも含まして居る。又ヴントのいふ神は人格が明かにして、且つ超人的性質を有するものである。舊來の神話學では、英雄の觀念は神のそれから變化して人間に應用されたものと考へて居るが、ヴントは

これに反對して、勿論神から英雄に變化することは時々あるが、全體の發達は寧ろその逆で、英雄の觀念と在來の惡魔の觀念とが類化して神の觀念は生じたとする。英雄の觀念も既に前時代に於て動物祖先の形として、又人間祖先の形として準備されて居たものが、この時代に著しくなつたのである。又惡魔の觀念は前の時代に於ては幽靈、トテム動物、祖先その他の神話的觀念の形で表はれて居るが、この時代になつて新しく表はれた英雄の觀念と結合して、その英雄の力を更に超人的に高めて神の觀念を生じたのである。この時代の神には三種の特質がある。第一は人間と異つた一定の住所（多く天上）を有すること、第二は完全なる生活を送ること、第三は人間的の性格を有し、意志の方向がこれによりて規定されることである。この三つの特質によりて惡魔や英雄と區別される。即ち惡魔は人事又は自然現象に於てその呪力を示す點は神と同様であるが、神の如く人格が明かでなく、個性が表はれて居ない。英雄は神と同じく人格を有するが、神の如く人事及び自然現象を支配する不思議な呪力に缺けて居る。

英雄時代には前の時代の種族組織は發達して國家が起つて來た。その國家發生の性質は民族に

よりて相違することは勿論であるが、その根本原因は一致し、主権者の發生、民族の戦争及び移住がその主なる原因である。前の時代にも可なり大仕掛けの移住があり、人種の混交、文明の變化を生じたが、文明の全體を根底から變化するほどに至らなかつた。然るにこの時代には民族の大移住が起り、その爲めに民族の特質、傳承、英雄及び神が新しい土地に移つて行く。尤も侵入した民族と土着の人民と混交して、それ自らの文明を變化して行く。バビロニア、ローマ、ギリシヤ民族は何れも混合民族である。而してこの民族の移住及び混交と伴ひて、種族組織の舊い動因から國家を發生せしむる新しい動因が起る。有意的に國家を組織するに至つた原因は生活條件の變化で、その一は土地の分配であり、他は軍事上の組織である。前者に於ては犁の耕作と共に土地の私有が盛んになり、従つて相互の守護及び補助のために各人の團結が起る。これが村落である。しかし農耕の團結よりも更に鞏固な結合を要するやうになり、軍隊組織を生ずるに至つた。

この農業的及び軍事的組織の外に尙ほこの時代の特徴として三つある。一は家族制度の變遷で

大家族制度が表はれ、家長によりて支配されることである。二は、階級及び職業の別で、征服者と被征服者との間に階級が別れ、所有の差別によりて階級が別れる。階級の區別が頂點に達すると職業別が生ずる。即ちこの時代には政治的及び軍事的活動が貴族の仕事とされ、農及び商之に次ぎ、工業は奴隸の職といふやうに考へられた。三は都市の建設で、新領土を占領した指揮者の居所、即ち國家の政治的勢力の中心として都市が發生する。而して都市の中心は城であつて、最高權威者がその中に住居し、又守護神を祭る社がその近くに建立される。従つて經濟、政治の必要上その附近の地方から人民が集つてくる。これと聯關して、藝術、工藝、商買、役人の職業が農業から分離してくる。

最後に社會的制度の一として法制がある。これは本來風俗によりて多く維持された來て社會の秩序を國家の制裁と結び付けたのである。家族、階級、職業、住居、財産、交通、契約等の事項はこれが法制の成分となる前に、既に風俗によつて規定されて居たのである。即ち法制は風俗から分れ出でた一分枝である。しかし法制は初からこれ等の秩序全般を規定するものでなく、初め

は個人間の關係を規定し、次に家族生活に及び、遂に政治的社會を規定するやうになる。而して風俗から法制が發達する原因には二つある。一は政治的原因で、即ち種族組織が國家の形式に發達すること、二は宗教的原因で、即ち法令の規範が宗教的に神聖視せらるゝことである。法制がその初めに當りて非常な力を有することは、國家の權力と宗教の力が相結合して居るからである。

刑法は私法から發生したもので、仲裁人の形から刑事裁判官が起つた。而して犯罪は最初は神明胃瀆が主で、その後生命身體に對する罪、財産に對する罪が起る。生命や財産の侵害に對しては原始人は個人的に報復して居たが、トテムズムになると民族的に復仇をするやうになり、國家の權力が大となるに従つて、國家の手によりて裁判するやうになる。その際國家の諸機能は種々の官公吏によりて分掌されるので、國家の權力そのものを規定する法制、即ち憲法を生ずる。故に國家は歴史の產物であつて、立法家の作つたものでなく、憲法は現存の國家組織を法制に變形したものである。

第四は人間性 (Humanität) への發達の時代である。前の時代の英雄も神も國民的の範圍に局限されて居る。しかし人間の精神は、更に進んでこれ等の國民的の限界を打破しようと努力する。即ち國民以上に人間的世界的たらんとする。この人間的の努力は現今未だ到達せられて居ないから、人間性の時代でなく、人間性への發達の時代である。而して吾人は尙ほこの時代の中にあると言はれる。しかし民族關係が世界的となつても尙ほ各民族及び國家の形を保存するばかりでなく、寧ろこれを鞏固にし、これを豊富にし、これを高めて居る。故に人間性への時代と言つても、相對的の意味にこれを解しなければならぬ。人間性へといふことを唯人間性的の觀念のみが支配して居ると解するならば、吾人は人間性への道程にあるとは言へなくなる。又人間性の觀念の發現が漸を以て進むとも言はれない。往々にして一進一退する。この動搖は過去にもあつたし、又將來にも起るであらう。しかしかやうに動搖はあつても、尙ほ本質的心理的の規則性がその間に行はれて居る。

人間性の發達には四つの階段がある。即ち世界國、世界文明、世界宗教、世界歴史である。世

界國とは諸國家の併合から生ずる大國の意味でなく、人類一體の觀念に基いてこれを總括せんとする要求から來るものである。この世界的統一の結果として文化の世界的交渉が起る。この世界文明は初めは世界の自然の結果として起るが、進んでは意識的にこれを實現せんとするやうになる。而してこの世界文明は先づ物質文明に初まり、漸次に精神的文明に及ぶのである。その精神文明の中、主となるものは人類に最も普遍的なる宗教である。茲に於て世界宗教即ち世界教が生れる。而してこの宗教は歴史上唯一に限られて居らず、その主なるものに基督教と佛教とがある。

この世界宗教に繼いで最後の段階は、これ等の人類全體を横斷面即ち空間的に見ないで、縦斷面即ち時間的に見たる全發達である。即ち世界歴史がそれで、この意味に於ける世界歴史は世界各國の發達を無關係に並列するのでなく、人類全體としての發達の觀念である。國家時代の歴史は單にその國家に限られて居るが、世界國の出現によりて、吾人の普通に用ゆる意味の世界歴史が準備され、繼いで世界文明、世界宗教の出現によりて人類の觀念が更に擴大され、最後に宗教的の解釋を脱して、人間の精神に内在せる人間性の發達史が生ずる。

以上に於てヴァントの研究の大綱を述べたが、氏の見解に對しては種々の點から批判されて居る。第一に氏は歴史的經過は直接に進歩と發達とを示すと信じ、發達の遠景視に導かない種々の像があることを看過した。即ち文化の山の頂上は幾多の深い溪谷によりて分れて居り、決して直線的に考へられず、錯綜した小徑に就ても考察しなければならぬ。第二に氏は社會生活を人格的構造によりて研究しなかつた。第三に氏は實驗心理學の創設者であるに拘らず、旅行記の如きものから民族の文化を知ること満足し、又民族の文化が少數の代表者によりて示されて居る事を明かにしなかつた。第四に文化として示されるものは、如何にして生じて來たかを考察せず、爲めに民族精神に對して不明瞭な態度を執つた。尙ほ文化或は民族精神が如何なる社會によりて生じたかの經過を分析せず、又政治上の推移に就ても興味を有して居なかつたと批判されて居る。

第二節 横斷的研究

前述の如き民族精神の一般的普遍的の方面を研究する外に、國民及び民族の特異性を横斷的に

比較研究するものもある。この種の研究は最初人類學者によりて行はれたもので、オーストラリア、メキシコ、アフリカ等の土民の研究が一時的又は永續的に企てられた。就中便利のためにノルウェーの研究者は北極人民を、アメリカの研究者はアメリカ印甸人を研究して居る。而して實驗心理學大會の報告の中にも原始人の心理學的研究が載せられるやうになつた。殊に智能検査法の發達につれて、民族間の智能の高下を研究するものが續出した。今その近業の主なるものを述べると次の如くである。

グラハムは米國ジョージヤ州アトランタの黒人兒童三千人以上に團體並に個別検査法を用ゐたが、白人兒童との智能の相違は年齢の増加と共に烈しくなり、七歳に於て双方殆んど同じであつた。ガルス及びガーレットは二千名以上の印甸兒童に國民智能検査法を課したが、白人の血の混入が増加するに従つて智能指數が増加した。印甸兒童の智能指數は七〇より九一の範圍であるが、白人兒童は一〇〇であつた。パシヤル及びサリヴァンはメキシコ兒童九歳兒二百四名、十一歳兒二百十一名に六種の作業検査法を試みたが、總ての検査法に於て米人兒童の標準以下であつた。グ

ラハムは桑港の支那人兒童を検査したが、コースの立方體検査では米人兒童に優り、國民智能検査では劣つて居た。ダルシーは米國生れの日本人兒童六百五十八名にビネー検査を行った所が智能指數の中數が約九〇であつた。しかし軍隊検査のβでは米人兒童の標準と同一であつた。ミードは伊太利兒童にオーテイス團體検査法を行ったが、二百七十六名中の僅かに七名が米人の智能指數の中數以上に出た。ピントナーはベルギー兒童二百七十一名に文字を用ゐざるピントナー検査法を用ゐたが、九歳より十四歳までの中數點に於て米人兒童と相違が無かつた。予は安東縣に於て、日・支・鮮の兒童に文字を用ゐざる智能検査法十種を課したが、その得點の中數は日・鮮・支の順序であつた。更に樺太アイヌ兒童に十二種のテストを試みたが、これも同地の日本人兒童に比して遙かに劣つて居た。しかし智能に於ける民族的相違は、それを検査する方法が往々妥當でないこと、並に種々の條件例へば教育、社會狀態、言語等が複雑で、統御に困難なことの爲めに、今日の處いづれの民族が智能に於て最も優れて居るかを言ふのは妄斷である。

身長、體重、骨格、色、頭や鼻や顔の形、毛髮等の解剖學的又は生理學的研究からして種々と

民族的相違が列擧されて居るが、それ等から精神的相違を引き出すほどに至らない。又分泌腺の研究が發達するにつれて、歐洲民族は粘液腺の活動が優勢であり、黑人種族はアドリニンの活動が主として行はれ、モンゴリア種族は甲状腺の活動が盛んであるとし、文化發達の程度を分泌腺で説明せんとするものもあるが、少しく速斷の嫌がある。又血液型を四種に分ち、その配合に民族的相違の存することが明かにされたので、更に進んで血液型と文化又は性格上の相違とを比較せんとするものもあるが、これも亦今後幾多の研究によりて決定さるべきものである。

この他自然民族の精神文化の材料を集めた研究者も可なりある。プロイスの「自然民族の精神文化」ボアスの「原始人の心」、レビー、ブルユールの「自然民族の思考」に就ての研究等は著名である。レビー、ブルユールによると、原始人の思考は、論理以前 (Prälogisch) 又は非論理 (alogisch) であるといふことである。しかしこれには異論がありて、例へばツルンワルドの如きは、曰く、原始人の思考は非論理的に見ゆるが、自然人民の見地からいふと、十分に論理的である。例へば若し人が酒に酔ふか又は特殊の状態に襲はれる時には、靈に取りつかれたと考へる。この

靈から免れるために、それを逐ひ出すことを求める。而してその方法としては、恰も具體的の間を逐ひ出すかの如き仕方を用ゐ、大騒ぎをして、惡魔の名を叫んで出て行くやうに要求する。一定の手段を取つた後に嘔吐を生ずると、それは惡魔がその人を去つたと説明することが往々ある。而してその後沈靜の症候が表はれる。若し吾人がこの場合に近世の科學的醫者と同じく、酩酊又は癡癡的發作として知る時に、これ等の方法や儀式は常識に外れた行爲のやうに見ゆる。しかし土人の知識程度と經驗範圍から言へば決して矛盾したことでない。現象の變化を外部の作用に歸する自然人民が、これを以て恰も彼等の周圍にある友人や敵の仕業の如く考へて行動することは全く論理的であると言へると。

尙ほ小さい範圍の單行本が公にされ、プロイスはコーラ印甸人の調査、ツルンワルドは濠洲近海の土人の人類學的・心理學的研究、スピートの南亞弗利加の土民の宗教の調査、ベルリーナー及びウィーネルの自然民族並に半文化の民族の旋律の蒐集等は何れも大なる貢獻である。これ等の民族心理的横斷面の研究は、全く近世の複合及び構造心理學の基礎の上に立つて居る。殊に全體は

その部分よりも、一層早く表はれたものであり、且つ多數であり、部分とは異つて居ることが示され、意識構造や複合質の區別を知るに努力するやうになつた。例へば結婚とその起原に於ての原理は、啓蒙時代からの遺物として、自然主義的合理主義的着色を帯び、極めて曖昧な點が多い。ヘンニングは子供に對する母の關係を規定する所の母の權利としての母權から、男子に對する婦人としての婦人權を區別した。婦人權は古代の愛蘭及びゲルマン民族の法文に存し、それは父權や母權と相並んで行はれるので、この二つが相寄ることは歴史の上から證明される。このことから團體結婚が初めて理解されるやうになる。

自然民族のものは一生涯直觀像者に止まり、種々の文化民族は精神的變形に於て時間上の相違を示して居る。故に自然民族は一層粗野なる前階段をなすものでなく、又單に文化民族よりも一層原始的なものでない。只彼等の意識構造と文化とが異なつて居るだけである。即ち原始的でない如くに、嚴密な意味の自然の民族でない。所が構造心理學的根本事實は誤解されて、研究者の中には、世界史家のランブレヒトの學派の如く、自然人民の文化の停止を規定する、遲滯的禁止

的條件を探究せんとするものがある。しかし他方には多くの心理學者は今日の自然民族と文化人の祖先との間の並行が不可能であるといふ程極端に走つて居ない。例へばナウマンの著した「獨逸民俗學」は文化人の下層及び田舎のものは、原始人から理解されることを吾人に教へて居る。かくして民族心理學の縱斷面と横斷面とが發生的統一に結局綜合されなければならぬ。故に民族心理學に於ては一方に縱斷的に民族精神の一般的普遍的の方面を辿ると共に、他方に國民及び民族の特異性を横斷的に比較研究しなければならぬ。即ち文化或は民族精神を發達的に研究し、普遍性と特異性とを明かにすることが民族心理學の任務である。従つて發達心理學は文化階段と變化する價值系統とを研究する點に於て民族心理學に屬して居る。

1. Wundt, W. Elemente der Völkerpsychologie. (邦譯)
2. Freud, S. Totem und Tabu. (邦譯)
3. Bartlett, F. C. Psychology and primitive culture.
4. Lévy-Bruhl, Das Denken der Naturvölker.
5. Werner, H. Einführung in die Entwicklungspsychologie.

附
錄

内省と客觀的觀察

一

内省法が心理學の基本的、特殊の研究方法たることは、大多數の心理學者が認むる所で、ジェームスの如きは、「内省的觀察は吾人が第一に眞先に常に依頼せざるべからざる所のものである」と言つて居る。最近十五六年間に於ては、ミュンスタールとベルヒの言つたやうに、精神物理的實驗場に於ける事業の特質は主として内省であるといふ有様で、(ラックミッチの調査によると、千九百〇五年から千九百十五年まで、一般心理に關する米國雜誌の中で、内省に基く實驗的研究の數は、内省に基かざる實驗的研究の數の約二倍半であるといふことである)従つてその研究法は實に著しい發達をして居る。殊に之にはヴェルツブルグ派の思考作用の實驗的研究が主としてその進歩を促したと言つて過言でない。かのマルベが千九百〇一年に判斷作用に關する實驗的研究を公に

してより、ワット・アッハ・ミュラー・メッサー・ビューラー等の研究が續出し、從來認められて居なかつた諸種の問題、例へば *Aufgabe, Kundgabe, Bewusstseinlage* 等に關する問題が盛んに論議せられ、内省に關する見解もその様式も、以前の其等とは大に趣を異にして來た。然らば近時の心理學では、内省といふことを如何なる風に考へるかといふに、ティチナーによると、「理想的なる内省的記録は、心理學の興味よりなされたる或意識過程の正確なる記述である」と述べ、(氏)の最近の著書 *A Beginners Psychology* には、内省てふ術語を心理學より省いても差支ないが、併し吾人は總ての科學に於ける研究方法たる觀察が、明瞭なる心理的態度を以て行はれる場合、換言すれば人間の經驗中にあるものとして世界を見るといふ場合の觀察に對する名稱として其を暫らく保存すると述べて居る)その記述には種々の區別があるとして、ミュラーの考に基づいて之を次の様に列舉して居る。

- I. Immediate Description, on the basis of immediacy of process and present apperception.
- II. Retrospective Description :

1. On the basis of present apperception of a memory image of the process :
2. On the basis of a remembered apperception, which itself occurred when the process was given :
3. On the mixed basis of these two memories.

しかし一方には之の内省法を全くは捨てないが、之よりも客観的觀察を重んずべしといふ學者も尠くない。例へばホールは、「吾人の精神作用は恰も氷山の如く、十分の九は意識以下に沈み、僅かに十分の一のみが意識面に表はれて居るもので、無意識的・本能的力が精神生活の大部分を占めて居る。而して之は自然科学の方法によりて客観的に研究することによりてのみ知ることが出来る。即ち他人の行爲に就て吾人の見る所を注意深く記載することによりて、層一層廣汎の知識を得ることが出来る」と述べて居る。この考は、ジャッド・ソーンダイク・ピルスブリー等も著書にも見ることが出来る。ドッチが内省法の限度に就て列擧して居る中にも、内省法によりては副意識界の研究の不可能なることを第一に擧げて居る。次に意識の要素殊に單一感覺の如きも、内

省によりて發見することは不可能である。次に又内省によりては或瞬間に覺醒されたる明覺群の全部を發見することは困難である。蓋しその一部分を抽出して之を意識の焦點に將來し得るに過ぎないからである。内省は又意識の事實の因果關係を完全にすることが出来ない。換言すれば意識の條件の有様を充分に見出すことが出来ない。觀念の出現は常に不可思議である。それが表はれ出た後初めて、其以前の意識中に於ける豫告を發見することが出来る。しかしその發見し得る豫告も明日は全く異つた結果を生ずるやも知れない。如何にして或殊特の概念が綜合されたかを吾人は内省によりて言ふことが出来ない。最後に心理的傾向・精神物理的或は生理的殘存等も直接に内省によりて知ることが出来ないと言へて居る。勿論ドッヂは内省の價値を疑つたのではなく、只如上の限度を列擧し、内省は心的實在の一指示者であると主張する。

之に反して内省の價値を疑つて之を攻撃するものも尠くない。古い所ではカントが心理的觀察（内省を意味す）は其本質上觀察せらるゝ對象の状態を變化し偏枉せしむると言ひ、コントは内省は之を行ふ個人個人によりて異つた意見を生じ、一致する所がないと非難する。モーズレーも亦

コントと同様の意見を述べて居る。勿論内省心理學者も内省の結果が時によりて全く相反することがあることは許して居る。例へば思考作用の研究で、一方には心像が無くても思考作用は行はれると言ひ、他方には必ず心像があると言はれる。又樂器の音を聞く際に一方には注意によりて或特殊の音が強調になると言ひ、他方には之を否定して居る。併し内省心理學者によると、此等の意見の相違はn光線に就て、それは積極的性質の放射現象であるか或は消極的性質のものであるかとの紛争があり、又心臟の鼓動に就て、それは筋作用に基くか或は神經作用に基くかの議論があるると大差ないと主張する。殊に注意によりて或音の強調を生ずと考ふのは、音の強さと音の明瞭とを混同した結果であるといふことが知れた。又思想過程に於ける心像と無心像との争は、該過程の叙述と説明即ち事實と意味との差異に基くと言はれて居る。従つて研究者が内省に熟練すればする程、その記録が正確のものとなりて結果の相違も減少してくると内省心理學者は辯護するのである。

内省法に對する以前よりの攻撃の一は、吾人が内省する場合に、精神作用が内省するものと内省せらるゝものとに二分せらるゝといふこと、即ち一方に或精神作用が進行して居る間に、他方に之を觀察しなければならぬから、その方法は他の自然科学に於ける純客觀的觀察の如く完全に行はれるものでないといふ非難である。例へばワードの如きは、吾人が注意作用を研究する場合に、吾人は最初或物に注意しなければならぬ。而して後にその注意過程に注意しなければならぬと述べて居る。かやうな考は恐らく内省する際には、觀察せらるゝものとしての自己と、其觀察者としての自己と、之と同時にその二つの自我の關係とを意識するといふ假定から起つて居る。處が内省心理學者例へばテイチェナーによると、實際の内省にはかやうな自我とか、その關係に就ては全く無意識である。内省は經驗の質問である。而してそれは現在の意識的目的から起り、或は以前の意識的目的の結果たる觀察の習慣より起つてくる。而して自識の内省作用に表はるる

意味と程度とは、物理學や化學に於ける觀察に自識が表はれる其等と同一である。而して其自識は時と經驗とによりて意識しないやうな習慣を得るものである。故に如上の非難は實際に内省を習練した結果から起つたのでなく、只内省の形式に就て論理上錯誤があるといふに過ぎないのであると辯護する。

ミューラーは内省する場合としない場合とを抑制的意識と自由意識とに區別して居る。即ち意識過程が觀察せんとする意向によりて影響しない場合には自由である。之に反して内省的志向によりて意識過程が喚起せらるゝ場合には抑制的であると述べて居る。これは方法的基礎から言へば正當であるに相違ないが、實際に内省をして見るとその區別は明瞭でなく、自由的より抑制的意識へと不知不識の間に移つて行く。ヴントも亦「心理學の觀察者が、觀察の下にある現象に向く注意は、物理學の觀察者の夫と同じきもので、彼等は觀察しつゝある状態に主觀的注意を與ふることを全く忘れて居る。蓋し之は度々同じ様な觀察を繰返した結果として生ずる練習又は習慣の機制に基くからである」と云つて居る。近時の思想過程の研究によると、内省せんとする目的

は最初意識中に存するが、漸次内省の進行につれて精神物理的狀態より生理的狀態へと移行し、内省は全く無意識の過程となつてくる。觀察の行爲が熟練せられてくると、カントの言つたやうな動搖は減少し、總ての觀察も同様に行はれる。而して假令その間に變化があつても、それは恆常的變化であつて、何にも科學の致命傷となるものでない。蓋し科學で恐るゝ所は變轉常なき變化で、若し一の觀察より他の觀察へと移る時に、絶えず豫測し難き變化や錯誤に遭遇する時は、科學は成立することが出来ないからである。

如上は従來行はれた内省法に對する批評と之の辯護とであるが、尙一層急進的に内省法を心理學より排除せんと努力しつゝあるは行動論者の主張である。即ちワトソンによれば「心理學は行動論者より言へば、自然科学の一純粹客觀的實驗的部門である。その理論的目的は行動の豫示と統制とである。而して内省はその方法中の必須なる部分となつて居ない。否却つて内省によりて得た材料は科學的價值を有して居ない。蓋し内省に於ては容易に意識の語にて註釋する傾向があるからである。行動論者は人類と動物との間に區劃のないことを認め、彼等の行動を凡て一元的

に動物の反應を以て説明せんと努めて居る。人間の行動はその精練せると複雑せるとに係はらず、行動論者の研究の全計畫の一部をなして居るに過ぎない」と述べて居る。かやうに内省を離れて純粹に客觀的に研究することは、動物及び兒童心理學には必要上已むを得ないことである。従つて動物心理研究者は種々の實驗的裝置を施して客觀的に動物の行動を觀察した。例へば迷路を用ひて實驗したり、或は箱の中に食物を容れて、その箱の戸を種々の組み合せて開くやうに仕掛けたものを用ひたり、或は一定の刺戟例へば色・光等に賞(食物)と罰(電氣刺戟)とを連合して、動物をして此等の刺戟を辨別識得せしむる方法を取つたりして彼等の智能を検査した。併し是等の研究は動物の意識とか智能とかの從來の心理學の術語を用ひて居るので、行動論者中の急進派は之等を目して一方に心理學から全く足を離すことなく、他方に行動主義を捕えんとしつゝあるものと非難する。この傾向は殊に人間の心理學を研究しつゝあるものゝ中に甚しい。例へばビルスブリーの如きは心理學を以て心的行動の學 (Science of mental behavior) と定義を下して居る。かやうに行動を廣い意味に取扱つて居る心理學者は目下大分多い。それで露西亞のバ

ヴロフは之を批評して、誠に面白い思つきであるが、それ等は純然たる客觀的研究と言へない。それで早晩は舊套を脱して吾々（バヴロフ流）の研究法に入り來るに相違ない」と言つて居る。このバヴロフ派の研究は、彼が言ふ如く實に全くの客觀的研究である。

三

バヴロフは一定の刺戟に對して犬が反射的に分泌する唾液の量を測定した。その反射作用に無條件的と條件的とがある。例へば口腔又は胃の中に直接に食物又は化學物質を與へると唾液の分泌は全く器械的で、謂はゞ一定刺戟に對し一定量の分泌が起る。この場合は即ち無條件反射と名づけられる。之に反して食物の香を嗅がせ、又はその形や色を見せる時には、唾液分泌の量は不定である。即ち之は條件反射又は相對的反射と名づけられる。バヴロフの研究の中心となるべきは、吾人が或任意の外部刺戟を無條件刺戟と同時に與へ、之を度々反復すると、遂に任意の條件的反射を作り得ることである。例へば食物を與ふると同時に一種の色や形を見せることを度々反

復すると、其の色や形を見せると直に唾液を分泌するやうになる。所が一定の音を聞かせる場合には食物を與へないことを度々繰返すと、遂にはその音が禁止的刺戟となりて、その音が聞ゆる場合には何時も唾液の分泌が禁止せらるる。かやうにして條件的反射は任意に之を作り、任意に之を壊すことが出来る。この事實がバヴロフ研究法の基礎となり、其の門下のオルベリーやゼリオニー等は視・聽・嗅・觸等の感覺刺戟を用ひて條件的反射を作り、犬の此等諸刺戟に對する辨別力を研究した。

バヴロフの研究法は從來の動物實驗法よりも諸種の點に於て長所がある。從來の辨別法では二種又は三種の刺戟を同時に與ふることが困難であるが、この條件反射法ではそれが簡単に出来る。又條件的刺戟となり得るもの、範圍が廣く且つ自由である、次に從來の實驗法では意志動作をその研究の標徴又は指示とするのであるが、條件反射法では全く反射的結果を得ることが出来る。従つてその結果の性質も全く客觀的であつて分量的に正確に測定することが出来る。これは犬點である。處がバヴロフや其の門下の實驗は主に犬に限られて居るといふ非難がある。これは犬

が最も實驗をするに都合がいゝからで、勿論この方法を人類に應用して研究したものも決して無いでは無い。例へば Laigne と Truak とは被験者に乾燥した食物を含ませて置き、實驗の後その重さが幾何増加したかを測定した。併しこの方法の應用には勿論限度がある。それで Eckhard と Oehl とは大なる腺の管中に套管を挿入することを發見した。所が Ortelien は之の方法によると套管の周圍に於ける分泌の漏洩が起り、且つ套管を原位置に保持することが極めて困難である爲め、その結果は不正確であると云つて居る。又 Hahn は腺管に挿入せる套管の壓迫が絶えず腺の反射的昂進を生ずと述べて居る。最近には如上の弊を除去する目的で、ワトソンの實驗場でラシュレーが Salometer といふ器械を案出した。その器械は管を真空にすることによりて内頰の耳下腺の開口部に附着せしむる様に装置し、その管に唾液が入ると其の壓力が之と連結しある他管の中の水銀を壓し、該管にある目盛りによりて分泌量を讀むやうに出來て居る。その結果は未だ發表してないから茲に批評することは出來ないが、若し氏の云ふやうに完全なる器械であるならば、條件的反射の研究に一新紀元を劃することになるであらう。

前に述べたやうな唾液の分泌以外の反射作用によりて人類の行動を研究しやうとする企も色々
と案出された。バヴロフの實驗場でクラスノゴルスキーは子供に就て次のやうな實驗をした。即
ち年長の兒童に於ては口を開くことにより、乳兒に於ては吸乳運動によりて條件反射を測定し
た。而して氏は異常兒と正常兒との間、又正常兒と動物との間に於ける反射の様式が異なること
を列擧して居る。しかしその方法は不完全で、その結果も亦分量的に明に表はれて居ない。次
にベヒテレフの門下生は電氣刺戟を足部に與へ、その爲めに生ずる反射運動を記録した。之と似
寄つた實驗がワトソンの實驗場でも試みられた。即ち之は足趾の反射運動でなく手指の反射運動
を測定したのである。實驗者が隣室内にある電鍵を押すと、電流を指に通ずると同時に鈴が鳴つ
たり、又は鳴らなかつたりするやうに装置し、電氣刺戟に基く指の反射運動を測定するには、指
の上に感受器としてタンプールを置き、それが記器に連結されて居る。最初單獨に音を發する時
は被験者は勿論何等の反射運動を示さない。しかし音と電氣刺戟とを同時に五行ひ、而して後
音のみを與ふる。此の時若し何等の反射運動をしなければ又五行音と刺戟とを同時に與ふる。か

くして十四回より三十回まで繰返すと全く條件反射が成立するといふことである。この方法の實例として五六の結果を擧げて居るが、ワトソンの言ふやうに此等の結果が早晚果して内省と同じ結果を得るやうに至るやは目下の處疑問である。

四

要するに上記の研究者は、刺戟と反應・習慣の形成・及びその歪枉等の術語を以て、動物並に人類の行動凡てを説明せんと企て、居る。殊にベヒテレンフの如きは、吾人の總ての精神現象は、この反射作用を以て説明し得るとし、且つ舊來の心理學てふ名に對して、自己の研究は精神反射學 (Psychoreflexologie) と名づけた方がよいと言つて居る。しかし吾人の精神過程を單に刺戟と反射とで説明し盡すことが出来るであらうか。若し總ての刺戟は必ず夫々或反射行動を生ずとし、又總ての反射運動は常に夫々或刺戟によりて喚起せらるゝものとすれば、行動説の主張は容易に承認せらるゝであらう。ワトソンによると、神經系統は完全なる弓 (Bow) に於て作用するもので、

受容機關 (Receptor) と實行機關 (effector) とは密接な關係を有して居る。而して若し反應が與へられると、それを惹起した刺戟を豫言することが出來、又刺戟が與へられると、それより生ずる反應を豫知し得る位に、この兩者の關係は密接であると述べて居る。神經系統の構造や機能をその發達進化の方面より見る時は、受容機關と實行機關、或は刺戟と反應とが密接に關係して居ることは疑も無いことである。しかし下等動物に於て屢々確めらるゝこの原理を以て、直ちに最複雑なる吾人人類の神經系統に應用することが出來るであらうか。若し衝動が運動域に達せずして或る所例へば抵抗の強いノイロンやシナップスの中に停滯することがなからうか。處がワトソンによるとそれは廻り道をして早晚運動域に行くに相違ないと言つて居る。而してこの衝動はその受容機關の境界を横ぎりて、運動域に入る時にのみその通行券を意識に與ふるからして、若し行動論者の言が正當なりとすれば運動域は意識に對して最も重要なものに相違ない。處が腦髓研究者の中には、運動域の障害は、その他の部分の障害に比して意識に損害を與ふる程度が弱いと云ふものがある。

次に求心性並に遠心性神經の構造を考察する必要がある。行動論者によると、受容と運動との兩域は同一の仕事をするものである。即ち兩者は同一回線或は同一過程の部分を作つて居る。而して運動部は活動をなす所で、感覺部と同じく重要であると主張する。所が解剖學上より見るとこの事は主張が出来ないと非難せらるる。何となれば感覺域は運動域よりも三倍乃至四倍廣く、神經纖維も前者が後者よりも多數である。殊に感覺機關の複雑なることは、筋肉又は腺等の簡單なるに到底比較すべきもない。かやうに兩者は不同であるからである。

尤も總ての刺戟は何等かの印象を吾人の腦髓中に殘して、他日再現してくるとは變態心理學者間に主張せらるゝ所である。殊にフロイドの學說によると、幼時に於ける性慾に關する印象は、終生消失せらるゝことなく、種々なる形式を以て表はれてくると言はれて居る。しかし之も或特殊の印象のみで、總ての印象が行動の或る形で表現することは、先づ吾人の日常生活では無いと言つてよい。例へば茲に東京から長崎まで旅行すると假定すると、その途中で受けた種々の印象が悉く何等かの形式で運動域に表現するとは、目下の吾人の知識では斷言することが出来ない。

又發語障害にかゝれる患者、即ち思想や言語像は明瞭に有するも、發音が出来ない患者の場合は行動論者の立場からは最も説明に困る所であつて、ワトソンも、之は極めて稀に起る例であると云つて、別に明確な説明を與へて居ない。(尤もワトソンは普通の言語障害 (Language) を含まず) を以て習慣の歪枉 (habit twists) に基づくと近着の雜誌に述べて居る。氏は又精神病學者がある病症を mental であると云ふのは解し難いことで、其等は凡て習慣系統の障害によると述べて居る。)

次に行動説に對する批評中最屢々繰返さるゝのは、此論者の主張によると感覺の研究は出來るが高等精神作用の研究は不可能であるといふ點である。蓋し想像作用や思考作用は複雑で、刺戟と反射とを以て説明することは如何にも困難であるからである。尤もこの反射の原理を以て全精神作用、殊に高等精神作用までも説明を試みた客觀的心理學者が無いでは無い。ベヒテルフも亦其の一人であるが、最近にはコスチレフが大膽な意見を公にした。彼は總ての精神現象を腦髓反射 (reflexes cerebrales) によりて説明した。例へば、ヴェルツブルグ派の主張する意識態度 (Bewusstseinslage) も腦髓反射の一機能に過ぎないとし、判斷作用も刺戟と反射との指導的聯合であると説

明する。夢もコスチーフによると外部に排出せらるゝことなくして内部に止まる印象の再現であるとし、想像作用も特殊の脳髓反射であると述べて居る。

五

併し此等の人々は舊來の心理學上の諸事項を無理に刺戟と反射との語を以て説明しやうとする嫌がある。此點に於てワトソンの告白は寧ろ正直である。吾人の行動には直白的行動(explicit behavior)と含蓄的行動(implicit behavior)とがある。或刺戟に對し直ちに、或は多少の時間經過の後に反應する場合は之を直白的行動と稱し、かの思考過程に於ける如く、行動が主として喉頭部・手指・腕或は身體全部の運動に表はれ、しかも其等は屢々容易に吾人の視界を脱する場合は之を含蓄的行動と稱する。而してこゝ、數年間はこの直白的行動の實驗的觀察及び統制を以て吾人は満足しなければならぬ。しかし予(ワトソン)は研究法の發達と共に數年ならぬ内に、この含蓄的行動をも實驗的に取扱ふことが出来るに至ることを確信するものであると述べて居る。

以上は行動説の主張と之に對する批評の概要であるが、行動説には種々の長所がある。例へば心理學では意識といふ語ほど不確定の術語はない。最近にダンロップが亞米利加心理學會々員百二十五名に手紙を送りて、心理學上の術語例へば意識・經驗・思考・感覺等の意義や使用の有無等に就て各自の意見を尋ねたが、それによると意識てふ語が如何に曖昧に用ひられて居るかゞ分かる。而してこの曖昧と混雜とを避けるには、行動論者のやうに心理學の術語より意識てふ語を全く除去した方がいゝかも知れない。この他又内省心理學には種々の論争がある。例へば明晰は感覺のみの屬性なりや否や、或は明晰を以て他の屬性即ち強度・質・持續等と同じ意味の屬性となすことが出来るや否やも、行動説から言へば全く無關係の問題である。思考過程に於ける心像の有無も亦彼等には問題外である。ゴルトン以來心理學者の注目を惹いた感覺型も彼等には無意味である。而して彼等は是等を以て全く無益の争とし、それよりも吾人人類の行動を研究すべしと主張する。殊に感情の起原に關する説明に就ては行動説が尤も都合がよい。感情は感覺に伴ふものと、情緒は最初中樞に起りて末梢に於ける諸種の現象を同伴するものであるとか、或は諸種の

有機感覺が中樞に反映して後或一定の情緒を意識するとかいふことは、行動説には少しも議論に
ならない。例へばワトソンの如きは之を簡單に説明して、感情は有機感覺的反應 (organic sensory
response) とするのである。之を要するに行動説では從來其の數が多過ぎて、繁に堪へなかつた術
語やその解釋を一掃し、最も新しい瓶に最も簡單なる術語を盛りんとするのである。又彼等の研
究によると實驗條件が一定不變で、例へば被験者が動物たると人間たると、又心理學殊に内省に
精通せると否とに拘らず一様に實驗することが出來、又實驗の結果も全く客觀的分量的に正確に
測定し得るといふ長所がある。

併し吾人の精神生活は複雑であつて、ワトソンの所謂含蓄的行動が非常に多く、到底目下の行
動論者の研究法では充分に研究が出來ない。それにはやはり内省を用ひてその缺陷を補はなけれ
ばならぬ。内省法を以て科學の敵であるとなすは、餘りに舊來の心理學を無視し過ぎて居る。又
内省を以て心理學の唯一の研究となし、之を捨つる時は心理學はその存在を失ひ、生理學や生物
學や神經學の一部となつてしまふと言ふのも杞憂である、吾人はこの點に於てエン●エルの考が

目下の所では最穩健であると思ふ。即ち「内省はこの客觀的研究によりて精鍊せられ検査せられ訓練せらるべきで、汝が之よりも一層良き道具を確實に手にするまでは之を放棄すべきものではない。而して吾人の忘るべからざる事は、所謂客觀法として提唱するものの中には、内省が直接又は間接に包含されて居るものが多いといふ事である」と氏は述べて居る。

〔哲學雜誌〕大正六年四月號

快と苦

一

快と苦との研究は心理學上最も根本的のものであり、且つ最も興味のあるものである。蓋し快と苦とは下は動物學、生理學に關係し、上は藝術、宗教に及び、總ての科學に關聯を有して居るからである。従つてその全般に互りて快と苦との研究結果を知ることが困難である。所が近頃ダ

トマウス大學理學部助教ヘンリー・ムーアが最も手際よく、これまでの研究を總括して居る。以下に述べる所は氏の著書の梗概である。唯氏は自然科學に屬する人であるために、快の原理に就て革命的な主張をして居るフロイド一派の説に少しも觸れて居ないことは、吾人の大に失望する所である。

二

快とか苦とかいふと、すぐ分つてゐる様な氣がするけれど、よく一々の場合を考へて見ると極めて曖昧な語である。聽覺とか視覺とかになると、そこにはつきりした所があるが、苦感といふと、指が痛む時でも苦であるし、親友が死んで悲しい時もやはり苦である。しかし一方に分化が充分出來て居ないといふことは、この苦とか快とかいふ感情を聽・視・味・嗅等よりも、吾人の生存上ずつと基本的の條件にその基礎を置いて居るといふことを示して居る。先づ苦感の方から述べると、苦感には單一感覺に伴ふ場合と、吾人の情緒が高等精神過程の中に包含される場合とに

分けられる。

表面的苦感。 苦感の中最も簡單なるものは、吾人身體の表面又はその近くを傷けて生ずるものである。釘を足に通したり、燒火箸を握つたり、爪をはがしたりすると、一種特有の感覺を生ずる。光つたものや尖つたものに觸れると、その方に注意が奪はれ、且その苦をのがれやうと努める。而して之等の感は逼迫せる危険を警戒するやうなもので、その不快を與ふる原因が除去されるまでは意識から消え去らない。この點に於て他の感覺と相違する。例へば嗅覺の如きは二分間以上も續いて意識されるものは無い。阿魏の強烈なる匂も一分半かぐと、その匂が分からなくなる。最も匂の強い乾酪も八分間ばかりすると匂無しになつてしまふ。觸覺も之と同じく帽子をかぶつて居ながら、或は眼鏡をかけて居ながら、氣づかないで帽子や眼鏡を家内中搜し廻るといふ滑稽を演ずることもある。

身體的苦感。 次に又吾人の身體的内部の活動が満足に行はれて居ないことを表はす一種の不快感がある。即ち指の怪我と頭痛とは夫々異つた不快を感じ、胃痛と足の火傷とは異つた痛みを感

する。佛國の戰線から歸つた外科醫の談によると、一兵士が右の心臟の所を銃丸で貫通されたが、只一種の燃えるやうな感じをしたに過ぎない。その兵士は數日間血の唾嗽を吐き、凝血を除去したりしたけれど、胃の中の潰爛の爲めに生じた自發的痛みの外何にも不快を感じなかつたといふことである。

腦髓の表面を外科醫の機械や、弱き電流で檢索される場合に、手術されたる患者は何等の痛みも感じないが、腦の分量そのもの、變化とか、他の病的内部條件、例へば腦髓膿腫の如きものは極めて感受性が高い。血管の場合も之と同じく、外部の手段によりては痛を生ずることは無いが、血液の循環が旨く行かない時には痛みを感じる。之によりて見ると、內的痛苦を引起す通常の方法は、表面的痛苦を生ずる方法と全く相違して居ることは明白である。身體の外部にあればある程、例へば皮膚・筋肉・腱・關節のやうに外界を知る道具となりて居るもの程、その周圍に對して一層敏感である。

之に反して内部の苦痛になると、その局所が極めて不明瞭で、何だかだるいとか、氣が重いと

かいふやうな氣分がする位である。或無智の兵士が、飢餓の感はどこにあるかを尋ねられた處が、多數の者は頸と胸部とを指さし、只二人が胃を指し、四人は或る一定の場所から飢餓の來るのを拒んだといふことである。腹部の痛みが肩の痛みを生ずることがあり、咽喉痛が腕や頸の邊の痛みを引起すことがある。要するに、内部の痛によりて間接に身體外部の痛みを生ずる場合には、その曖昧なる内部の障害を犠牲にして、或特殊の外的部分の痛みを生ずるものである。

不快。前に述べた表面的苦痛と相反し、且つ内部的痛苦よりも尙一層明瞭と直接との點に於て缺けて居るものは不快の感で、その感の生ずる全状態より全く分離して考へることが出来る位である。かやうに直接その附屬して居る所が不明瞭である爲めに、古來幾多の心理學者をして快と不快とは他の心的内容から離れて考へ得る單獨の心的經驗であると信ぜしむるに至つた。即ち不快は感情で苦感は感覺であると言つて居る。之の説に味方するものもあれば又反對するものもあつて、今尙その争は全然終結したと云はれない。しかし多數の人々が一致して居る所は、不快と苦とは似て居るけれど又異つて居るといふこと、一方の究極的説明は又他のもの、説明になると

いふことである。

キニンを味つた時の不快は、社會的間違より引起された不快と相似て居る、しかしこの不快感
は一方にその味覺より、他方に社會的情緒より分解して比較することが困難である位、その同一
性を缺如して居る。即ち不快感はそれと聯合して居る各事物の特質を帶ぶるやうに見え、従つて
不快感の數は吾人の精神生活の多様なると等しく多數であるといふべきである。只各種の不快感
の共通點として、快感が餘り長くつゞいたり、餘り強過ぎたりすると不快感となるといふこと
が出来ゝる。例へば適度の湯に入浴して居る間に漸次湯が熱くなつてくると不快になつてくる。又
餘り變化のない處に長く居ると漸次退屈を感じ不快になつてくる。之に反して不快の刺戟を
長く經驗すると、それは快にはならないが、無頓着の状態になることがある。

かやうに不快感は、一定の局所を有しないで、全身に擴がつて居るやうであるが、中には長い
間種々の不愉快なる經驗に遭遇した爲めに、嫌忌とか回避とかを示す身振とか表情とかを生ずる
やうになつた。しかし不快の經驗が長く續くと、吾人の活動は弱くなり、且つ吾人の内部の方に

向つて行く。原始動物では不快の刺戟を長くつゞけると身體を漸次にちゞこめ、不意に驚かすと身體を卷縮して伴死を呈することがある。人間に於ても同じやうな不快感に對しては同様の表情をする。痲痺や病氣を引起すやうな恐怖は、有效なる身體的反應が全く中止したこと、同意味になる。羞耻、悲哀、其他不快の情緒は、吾人の活動をして有機的榮養方面に向はしめて、知的行動の如きものは中止するやうになる。その最も烈しい例は憂鬱的思想によつて占領されて居る精神病者に於て見られる。要するに絶えず不快に委せられたる生活に於ては、生存は閉止され、活力は減退するものである。次に快の種類に就いて述べる。

三

表面的快感、即ち操り。健康な子供は操られることを好むものである。足の裏や横腹の所や腋下などをさわると子供は大きな叫聲を發して笑ふ。餘り長く操られると、叫んでその中止を要求するけれど、常態に復すると、再び操つて貰ひたがるものである。この表面的快感が、前に述べ

た所の表面的苦感と異なる點は、前者は眞の害を與ふるに至らぬ程弱くはあるが、しかしその害を暗示する位に強い刺戟によりて生起する點である。即ち苦感は皮膚が損はれたり傷けられたりする時に生ずるが、快感は威喝はされるが、充分に觸れない時に生ずるのである。若しその物が充分に皮膚に觸れて確實にその物の感覺を得るに至る時は、其の無害なる事物からして確實慣熟の感を得るからして、何等の快感を生じない。自分で自分の體を擦ることの出來ないのは、やはりこの理に基いて居る。又嫌いな人に擦られたり、或は怒つた時にその對手から擦られたりしても快感を生じないのは、實際の或は可能的危険の感によりて威喝されるからである。

ホールとアリンとが蒐集した材料によると、身體の部分で擦りの感を生ずる順序は、足の裏・腋下・頸と咽喉・肋骨の邊・脊中・頤の下・胃の邊・膝部等である。之に反して擦りの感の生ずることの最も少ない部分は、肩胛骨・肩の邊・足の腓・腿部等である。之によると、擦りに對して最も感じの強い所は、最も多く損はれ易く、危険を暗示して居る部分で、擦りの感の鈍い所は、少しも危険のない牡牛的鈍感の部分であるといふことが分かる。

又ホールとアリンの材料によると、子供によりては、一寸さわると哄笑を以て叫び出すものもあり、或は只コチヨ〜といふだけで擦つたく感じ或は指をその部分に向けるだけで叫び出すものもある。中にはエレベーターを下る時に擦りの感を生ずる子供もあると言はれて居る。

サリーは擦りによりて生ずる種々の表情を次のやうに列挙して居る。足の裏が擦られる時には足を引込ませる。頸を擦ると頭を肩の方に曲げ、横腹を擦られると體をその方に曲げる。又擦る人の手をなげやつたり、子供が仰向に寝てる時に擦られると手でもがいたり、擦る人を防禦したりすると。しかし此等の表情は二人と精密に符合するものでなく、個人差が極めて烈しい。之によると擦りに基づく表情は苦感の夫と異つて、未だ種族の成型的行動となつて居ないと言はなければならぬ。

満足、即ち内部器官の快 前に述べた身體的苦感ほどその局所が明瞭ではないが、吾人の器官の機能が順調である時は吾人は愉快に感ずる。種族の生活の中で有機的満足の最も強烈なるものは、飢餓を醫した時である。野蠻民族や幼兒に於ける主なる問題は食料である。故に満足を表は

す身振が食物を攝取する表情と同一であることが屢々ある。旅行者の談によると、ナイルの上流に住む黒人は、嘆美する時に腹部を擦ると云はれ、グリーンランドの土人は快感を示す時には恰も食物を嚙下するやうに空気を嚙下すと言ふことである。

飢の満足と同じく、吾人が欲求するものは渴の満足である。飲料水の缺乏は食物ほど烈くないので、餘まり注意しないやうであるが、若しある事情で飲料水が得られない場合には、飢と同じく種々極端な行爲をする。ゼームス教授の談によると、或る大酒家が養育院に入りてから一滴の酒をも飲むことが出来ずに困つて居た。或日一策を運らし、森の中に走り行き、斧で自分の片腕を切り落し、人が驚いてまご／＼して居る中に、ラム酒を持つて來てくれ、片腕が切れて仕舞つたからと叫んだ。それで一人がラム酒を持つてくると、彼は鮮血淋漓たる手でその茶碗を取上げて一息にのみ干し、あゝこれで満足したと絶叫したといふことである。これと同じやうな例が今度の歐洲大戦争中にもあつた。北方の塹壕に居る或軍隊の如きは四十八時間も一滴の水を飲むことが出来ず、爲めに溜り水を飲まうとした兵士があつた。それで士官はこの水を飲むと射殺す

るぞと威嚇した。しかしその兵士は、殺したければ殺してもいい、僕はこの水を飲まなければならぬと言つたといふことである。

水と同じく吾人の生存上必要なものは空氣である。長い間閉め切つた室に居たり、工場の中の腐敗した空氣を吸つて居た後で、郊外を散歩すると吾人は何とも言へない快感を覺える。即ち空氣は美酒佳肴に匹敵し、胸を擴けて充分に吸收したくなつてくる。

飢や渴を満足さして得たる快感ほど強烈ではないが、極めて一般的で且つ重要な快感は性慾の満足に伴ふそれである。古來幾多の演劇は一として飢や渴のことを書いたものはない。偶々飢渴に關したものはあるが、單なる滑稽を表はすに過ぎないものである。渴いて居る時には、口腔が咽喉を濕すことが快感を生ずるけれど、性慾の場合はそれよりずっと廣い範圍に於て満足される。握手・接吻・抱擁等が身體的満足を生ずることは普通であるが、近時フロイド派の研究によると、最初は全體が性的慾求に對して分化せず、多少の快感を生ずる所であつたが、進化の結果今日では一定の場所に限られて満足が出来るやうになつたといふことである。

愉快　人生が若し樂りとか身體的満足のみに限られて居たとすれば、快感は極めて範圍の狭いものであつたらう。所が吾人は此等以外に多數の快感を有して居る。薔薇の匂を嗅いでも、美しい日の出を見ても愉快である。感覺に伴ふ快感の中には、刺戟の強い間は不快であるが、弱くなると快感を生ずるものがある。麝香の如きも適度に弱くなければ頭痛がするし、八ヶましい喇叭も少しく隔て、聞くと面白い。山椒とか唐辛とかの調味に用ゆるものも同様で、彼等の持前よりも弱くなると、それ等が舌を刺戟するのが愉快に感ぜられる。

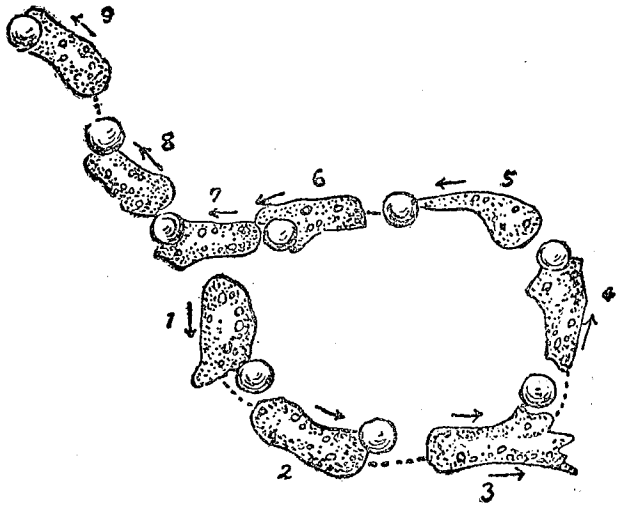
しかし常態を維持して愉快を引起すものは尙多數ある。恰も好きな形状を取る粘土のやうに、愉快は心の總ての状態によりて種々の形をとる。即ち吾人が愉快なる光景とか愉快なる思想とか愉快なる氣分とかいふやうに、種々の感覺・情緒・記憶・思想等と聯合して、只氣持のいゝといふ基本的・非分化的特性を維持するに過ぎない。故に愉快は前二者即ち樂りとか身體的満足とかに比し、局所の最も不明瞭なものである。

愉快を表はす種々の身體的態度は、擴大し近寄る傾向に起原して居るやうである。知識の發達

しない有機體に於ては、快感を引起す事物に添ふて自己の身體を擴げ、或はその物を引よせるといふ身振りによりて愉快の感を出するであらうと想像することが出来る。吾人人類に於ても、愉快の時に微笑するとか手を擴げるとか、前進せんと用意する態度とかを示すのは即ち如上の原始的表情の發達に基づくこと云ふべきである。しかし前進的態度も、餘り愉快に捉はれるやうになると、言語は間投詞的になり、思想も極めて制限的になる。藝術批評家の敵は、それを味ふ際に生ずる感情に捕はれることである。有名なる獨逸のピアノ演奏家が、ベートーベンとワグネルとの批評をしゃうと絶えず努力したに拘はらず、「ベートーベンはよくて、ワグネルはよくない」と言ひ得るに過ぎなかつたといふことである。かの支考が吉野絶景を眺めて、「これはこれとはばかり花の吉野山」と云つたといふ話はやはり之と同じ範疇に屬するものである。

四

下等動物の心に關する考察は、凡て間接的證據に基いて居ることは今更ら言ふ必要もないが、



第一圖 アミーバが滴を逐ひかき之を取
入るとしつゝあつる圖

その間接的證據によると感覺としての快と苦とは、適意と不快の曖昧なる原始的狀態から漸次に發達したものであるといふことが出来る。今その發達した階段を分つて三とする。即ち第一階級では極めて粗笨なる快と不快の經驗である。この階級の例としてアミーバを取つて説明しよう。

アミーバは單一細胞より成立し、神経系統らしき物は少しも

ない。而してその行動は唯三種の反應に跟られて居る。アミーバが堅い物に衝突するか、一方に高熱を加へられるか、水中に光線や電流を通したりする時に消極的反應をする。これ等の場合に於けるアミーバの行動は、不利益なる刺戟の方向へ運動することを抑止し、その全身を短縮することによりて、退去又は方向を轉換する。その行動は恰も吾人が不快の事物に遭遇した時と同じで、若しアミーバに吾人と等しき精神があるとなれば、彼は慥かに「私はそれを好まない」と云つたやうな行動をする。しかしこの不愉快といふことはアミーバの一定局部に關聯せず、寧ろその全有機體より起つたものと見るべきである。

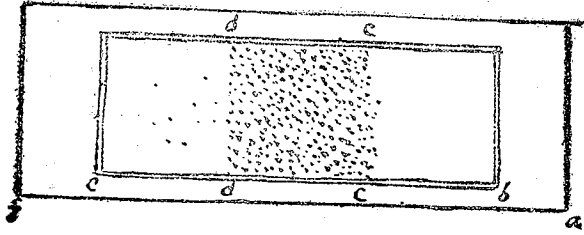
積極的反應はアミーバが堅い表面又は食物と靜かに接觸する時に表はれる。これ等の場合に



圖二第

パ愉快對
ラ積し居
シる極て
ムシる居
に接觸的
が反應圖

は、アミーバは尙そのものに近接し接觸しやうとする。堅い表面の時はその上を匍匐するが、食物になると第三の反應たる食物攝取の行動を取る。それは極めて簡單で且つ不作法で、全身を開いてその食物



第三圖 麥拉姆-ユシム熱攝氏十三度と
寒(氷)にと對して反應せる圖

を包み込むのである。この食物攝取の反應と前の積極的反應とは、吾人に於ける愉快に基く一般的筋肉運動に相應するものである。吾人が快感を感じる時は開大し、不快の時は萎縮することから推測すると、アミーバにも極めて初歩な快感とか不快感とかあると言つていゝかも知れない。

吾人の中には冬になると南方に寒をさけ、夏になると北方に暑を凌ぐものがあるが、これ程大袈裟でないが、單細胞動物にもやはり同様の好き嫌ひを示すものがある。ホルムスによると、バラメシュームを槽に入れて、その一端を攝氏三十五度に熱し、他端に氷を入れると、その動物は攝氏の二十四度より二十八度に於ける温度を有する中央部に集まつてくる。又ハサミムシは裂目を非常に好み日光は大嫌ひであるが、之をガラス板の割目に入り込む

やうにすると、假令強い光線を送つてもその處に附着して離れないといふことである。これを見ると此等の動物には適意と不適意といふやうな極めて曖昧なる感があるに相違ない。

次に動物が進化して極めて初歩な交感神経系統を有するやうになると第二の階級たる有機的満足と不快とを生ずるやうになる。此等の動物が満足の感を生ずるといふ間接の證據は、飢餓や性慾の場合に見る如くに特殊の慾求を生ずることである。例へば水母に食物を與へないで置くと、絶えず上方に浮き上がり、傘を擴けながら靜かに底に下りて行く。これは食物を攝取するに極めて都合のいゝ方法で、飢えた水母は終日この行動を繰返すものである。ロマネスによると、飢えたる「ひとで」は臭のとゞく範圍の處に食物を持つてゆくとその力に引つけられるといふことである。この種の動物は食物に似たものや、その臭をつけたもので欺くことが出来る。しかし之を取り入れて、直ぐに偽物であることを知り、之を吐き出すものである。

昆蟲に於ける性慾の衝動も亦侮るべからざるものがある。フォーレルによると、一疋の雌蛾を市内の室に飼つて居た所が、その窓の所に多數の雄蛾が集つて來たと言はれて居る。リレーによ

ると、或一種の蛾七疋を孵化した。この種の蛾はその近所數百哩の中にはない珍品であるが、一日その中の一疋の雌蛾を籠に入れて木の上に吊して置き、一疋の雄蛾に目標として體に絹絲を巻きつけて、一哩半を距てた所に放した。所が翌朝この二疋は一所になつて居たといふことである。

下等動物に於ける身體的苦痛の最適例は蚯蚓である。蚯蚓の表面を引裂いても別に痛みを感じないやうに見ゆる。かやうに表面的痛感を有しないから、その他總ての苦痛をも感じないかといふにさうでない。吾人が内部から起る堪へきれない有機的痛みに對して輾轉するやうな反應を、蚯蚓は永續する烈しき刺戟に對して表はすものである。ジェニンングが漸次に増加する六種の程度の刺戟を蚯蚓に與へた處が、最後の二つの程度に於ては明かに身體的苦感を呈したといふことである。

かやうに蚯蚓が二つに切られても平氣で居て、ある特殊の刺戟に對して感受するといふことは、恰も吾人の胃・腸・腎臟等が外科醫の力に對しては無感覺であるのに、機能の不秩序に對して

は烈しい苦しみを感ずるのと相似て居る。即ち蚯蚓が苦痛を経験する能力と吾人の生活機關の能力とは同じ程度のものであるやうである。この推測は次の事實によりて尙主張が出来るやうである。即ち内臓に分布されたる神経系統——所謂交感神経——は吾人の視・聽覺や表面的苦感を生ずる固有の神経系統よりも一層原始的であるといふ事實である。而して前者は神経纖維と神経節とからなつて居て、蚯蚓の神経系統と大體に於て似て居る。それで吾人は蚯蚓を以て苦感の發達に於ける第二階級、單に有機的苦痛のみを有する程度にあると推定するのである。

次に第三の階級、即ち表面的苦感と擦りの感とを生ずる階級が表はれてくる。しかしどの程度の動物から此の二種の感が表はれるかを明確にいふことは困難である。只少しく言ひ得る事實は次の二つである。(一)苦と快とは中樞的神経系統、即ち脳髓と脊髓との連結を有する動物以外には明確に表はれない。(二)感覺としての痛苦は快感よりもずつと多く發達して居る。蓋し動物の生命を維持する上に、快を得ることを知るよりも、痛苦を避けることを知る方が大切であるからである。故に脳脊髓神経系統を有する動物に於ては、表面的痛苦に對して一様に反應するけれ

ど、擦りの感に至りては個體的相違があつて、或動物に於ては之を有しないものがある。例へば類人猿は腋下を擦られると、吾人の哄笑に等しき叫聲を發する。犬は肋骨の處を軽くさわると口角を後方に引いて快感を呈する。猫も害を加へない人から頸の所を撫でられると快活の顔貌を表はすものである。所が馬や羊は生活の喜悅として跳んだり嘶いたりするやうな表情を呈するが、擦られると明かに不愉快な表情をなすものである。

表面的痛苦を知るといふことは、その刺戟が深く内部に入らぬ前にその刺戟に對して豫防することが出来るからして、生物の生存上極めて重大である。故に擦りの快感よりも早く發達したに相違ない。動物進化の順序を繰返すと言はれる兒童の精神發達を檢して見ても如上のことは確實である。即ち嬰兒は生後數週乃至數ヶ月間は表皮の負傷に對しては無感覺であるが、内臓に於ける異常には苦痛の叫びを發する。或婦人の談によると、四ヶ月の子供が安全ピンで皮膚を刺されて約十時間も経過したけれど何等の叫聲を發せず、又其子供の爪を剪つて血が出る位にしても何等の反應を呈しなかつたといふことである。之に反して四ヶ月頃になると擦りを感じる。しかし

その發達も漸序的で、例へば最初は頸の處だけ感じ、やがて足の裏が擦りを感じるやうになるものである。

五

かやうに快と苦とは兩極端をなすやうに見えるけれど、兩者は密接の關係を有するもので、快は容易に苦に變じ、苦は亦快に移行するものである。同一事項でも人によりて快ともなり苦ともなる。例へば勢力旺盛の人に取りては相撲をとつたり、登山を試みたりすることが愉快を生ずるけれど、身體の虚弱の者には却つて苦痛を引起すやうになる。

又同一人で身體の狀態が餘り變りはなくとも、その作業が仕事であるか遊戯であるかによりて異なる。即ち仕事となると餘り氣のりがしないが、遊戯となると喜んで行ふことが多い。勞働に疲れ切つて居ても、舞踏をしろと言はれると直ちに之に應ずる青年男女が尠くない。家庭では臺所のことをするのを厭がるが、旅行をしたり野營をしたりすると喜んで水を汲んだり料理を

したりするものである。

快と苦とが互に相關係して居るといふ最極端な例は、神經の不確實のものに於て表はれる。ホルルの擧げた例によると、十九歳より二十四歳までの男女の一群が、知人の死を聞いて、互に顔を見合せて哄笑し初め、暫らくは眞面目になれなかつた。邊境を守る人が家に歸りて、妻子が印甸人に殺害されたのを見て「こんな滑稽なことをこれまで聞いたことはない」と突然吹き出して哄笑したといふことである。

快と苦とが容易に交換することは、時間の経過に基づく場合もある。例へば異常な災難のあつてから數週間も経つと往々笑の種となることがある。過去の悲哀を想起することの喜びはホームアの氣付いたことである。昔時の榮華を零落せる今日に思ひ出す程悲哀なこととはないとはいへないとはダンテの述べた所である。

かやうに快と苦とが容易に相交換し易いといふことは、兩者とも同一の一般的状態から發生するからである。即ち生存競争が吾人に過重の要求をなす時か、或は活動せんと準備して居る吾人

の力が使用せらるゝ機會を與へられない時に苦感を生ずる。即ち前者は過剰の苦で後者は沮止の苦である。所が吾人の力相當の競争が行はるゝ時か、烈しい争鬪の後休養によりて均衡を回復する時に快感を生ずる。即ち前者は活動の快で、後者は休養の快である。要するに快と苦との總ての形式は争鬪てふ事實の周圍を廻轉して居ると言ふべきである。

この原理は高等なる快及不快よりも、有機的快と苦、表面的快と苦とも充分適用が出来る。即ちビールを飲むことや辛味を用ゆることは最初教へて貰はなければならぬが、漸次之に對する抵抗力を生じ遂にはその刺戟を好むやうになる。音楽も最初は複雑で噪々しいけれど、後には好んで之を聞くやうになる。ワグネルは調和といふことを高唱した人であるが、吾人の耳には尙噪々しい。しかしその噪々しいのを聞いたがるのは、吾人の力以内において、聽覺的均衡を破壊しないからである。

有機的快や苦に於ても同様である。例へば餘まり種々なるものを詰込むと胃の痛みを感じる。それかといつて胃中無一物となると亦痛みを生ずる。キャノンとワオシユバーンとの飢餓に關する

實驗によると、次の如くである。即ちウォッシュバーンは直径八センチメートルの軟かなゴム製の球を一端に附屬したゴム管を食道に挿入し、其のゴム管の他端は記録装置に連結されて、球の壓縮如何を記録するやうにした。氏はその球が胃の上口まで達する位に嚥下することを稽古した後には二三時間そのまゝに挿入して置くことが出来た。而してウォッシュバーンは朝食を食はなかつたり又は極少量だけ食し晝食は全く取らないで、二時に實驗室に來ることを常とした所が、彼が飢を覺ゆる時は胃の烈しき收縮を起すことが記録され、その記録は彼が痛感を覺ゆる内省の記録と一致したといふことである。かやうな原理は肺臓に於ても然りである。又表面的痛苦とか穢りの快感等に於ても亦この原理の適用が出来るのである。

六

消化作用に於ける影響 快と苦とが身體に及ぼす影響には種々あるが、その中で最も著しいものは消化作用に及ぼす影響である。殊に唾液と消化とは密接の關係を有し、唾液の分泌が遅いと

少いとかになると消化作用に障害を來たすものである。而して何か旨しいものを見ると唾液の分泌を生ずるので、口中が濕ふといふことゝ快感とが聯合され、分泌の不可能と不快とが聯合されるに至ることは自然の理である。それで或る野蠻人例へばオーストラリア土人の如きは、舌打ちすることが賞嘆を表示することゝなつて居る。子供は屢々グル／＼いふ音で喜悅を表はし、成人に於ては、微笑は濕潤の暗示を與ふるものである。之に反して口の乾いて居るといふことは不快感に伴はるゝもので、例へば烈しい恐怖に襲はれると口が乾いて仕舞ふ。印度に於て行はれた一種の犯罪發見法は髓かにこの事實から來て居る。即ち嫌疑者に神聖にされたる米を嚙ませ、暫くして之を無花果の葉の上に吐出さしむる。此の時若しその米が乾いて居れば、その者を犯罪者と決するるのである。蓋し神聖なる米を食ふのであるから、若し罪科が發見されはしないかと心中竊かに懸念し、その爲めに唾液の分泌が中止するに至つたに相違ない。

唾液に次で消化に大切なるは胃液の分泌である。而して快と苦とが、胃液の分泌に如何なる影響を及ぼすかに就て、近來科學的に研究せらるゝやうになつた。露西亞の有名なる生理學者バヴ

ロフは、愉快なる倉物の觀念が、假令その食物が胃に達しない中でも、胃液の分泌を促がすといふことを犬に就て夥多實驗を試みて居る。然らばどんな風にして實驗したかといふに、一方の胸の所に穴を明けて管を通し、そこから胃液を抽出し、それが幾滴分泌されたかを計算し、他方には口腔の側に穴を明け、犬が食物を嚙むが、それを胃の處まで嚙下せずして、途中でその穴から排出するやうにした。かやうに食物を口に入れて嚙み込むけれど、それが胃に達しないので、之を「虚偽の食事」と名づけて居る。犬が靜かに五分間愉快氣に虚偽の食事をすると、胃液が澤山に分泌され、往々にして二十分間に六十七立方センチメートル位の分泌があつたといふことである。

之に反して犬に不快の感と與ふるやうにすると、胃液の分泌は著しく減少する。キャノンの叙述によるとその犬の側に猫をつれて來た所が烈しく怒つた。猫を他に移して犬は平靜になつたので、五分間例の虚偽の食事をさせた處が、犬は飢えて熱心に食事するに拘らず、著しい胃液の分泌を認めなかつた。即ち二十分間に僅か九立方センチメートルの分泌があつたに過ぎなかつたと

いふことである。

次に消化作用に於て大切なことは胃と腸の收縮である。所が快と苦とはそれ等の蠕動に反對な影響を與ふるものである。即ち不快を引起すものは蠕動作用を禁止し、快を生ずるものはその作用を促進する。キャノンがレントゲン光線を以て實驗する爲めに、猫を支持臺の上に靜止させた。一疋の雄猫はその支持臺がさう苦しくないに拘らず、不馴の爲め驚いて、非常に興奮して居つた。所がこの時は胃の收縮作用は全く禁止されて居た。之に反して一疋の雌猫はこの支持臺に馴れて居る爲めに靜肅にして居たが、その收縮作用も平常の状態と少しも變らなかつたといふことである。

吾人人類に於ても不快が胃の消化を悪くすることは常に經驗する所である。キャノンの擧げて居る例によると、學識ある敏感の一婦人が胃弱の爲めに診斷を受けにその夫と共にボストンに來た。その夜宿屋に泊りて、翌朝試験用の食事をした後一時間ばかり經つて醫局に來た。胃の内容物を検査して見た所が昨夜の食物が停滯して居るのを見た。その理由に就てはその患者の掛りつ

けの醫者から次のやうな報告が來た。彼女の夫は時々町に行つて無暗に酒を飲む癖がある。それが彼女の絶えざる苦痛の種となつて居た。而して丁度その晩も酒飲みに行つて彼女に心配を與へたといふことである。次の朝は婦人は非常によく休息をした。その時又胃の内容物を調べて見た所が、適度の酸を含み、試験用の朝食は正當に消化されて居たといふことである。之によると、事務的に食事するといふことが、如何に吾人の消化に害を及ぼすか分かる。休養を計るといふ技術が発達するといふことは、吾人をしてそれだけの長命を維持せしむることになる。かの目下流行しつゝある安全第一の運動なども亦社會の福祉増進運動の一となるであらう。

循環作用に於ける影響 快と苦とがその分泌に於ける影響は近頃になりて明瞭になつて來た。腎臓の上端に位する副腎腺に就てはピーヅル、ドライヤー、エリオット、キャノン等の研究によりて有名になつた。此の腺より分泌するアドリナリンは苦感、身體的苦痛或は興奮的情緒（それには烈しき快感をも含むが）によりて生じ、且つそれは種々の著しい結果、即ち血行を都合よくし筋肉系統をして偉大なる努力をなさしむるやうに補助する等の結果を生ずるといふことが知ら

れて來た。アドリナリンが血液中に放射されると、心臓の働きを速め、心臓や肺臓以外の内部器官が凡て血液が減少するやうに、それ等の中にある脈管の收縮に變化を生ずる。かくして手足や表面的筋肉の方に血液は非常に多く供給されるやうになる。肝臓は餘分に蓄積せる糖分を放出して筋肉細胞に餘分の食物を供給し、以て筋肉をして奮闘的行爲をなさしむるのである。しかし此等よりも尙著しい事實は、血液をして平常よりも急速に凝固せしむることである。これは致命的損傷に對する保護として非常に利益があることは明白である。大なる苦痛を被れる動物は、アドリナリンを分泌するので、假令傷を受けてもそれが治るのに極めて都合がよい。

アドリナリンを帯びた血行は又呼吸を容易ならしむる。蓋しアドリナリンの爲めに氣管の筋肉が弛緩して、空氣の入つてくるのを容易ならしむるやうにするからである。アドリナリンは又疲勞した筋肉に對して休養と同一の結果を與へる。アドリナリンを一立方センチメートル注射すると、疲勞した筋肉の効果を五十%から七十五%まで恢復する。この驚くべき事實の爲めに有機體は自己の普通の力以上に奮闘をつゞけることが出来る。人が興奮した時に二倍乃至三倍の力を表

はすことがあるのは、即ちこのアドリナリンの分泌によるのである。

かやうに苦痛の爲めに種々有利なる反應を引起すといふことは、苦痛が結局身體に對して偉大なる物であるといふことを知らしむるのである。即ち過度の需要に對しては過度の供給を以て應じなければならぬ。しかし戰時公債は平和が恢復されると償却しなければならぬと同様に、かゝる過度の供給はやはり苦痛が除去された後にそれ相當の影響を及ぼすものである。即ち心臟の働が鈍くなり、血壓が減じ、消化器官が不活潑になる等の現象が起つてくるものである。

七

快と苦との腦神經中樞は視神經床にあると云はれて居る。極めて簡單に云へば吾人の腦を上中下の三階に分けることが出来る。而して、神經床は中階の最大切なる部分である。その上は大脳半球で智力及び熟慮的制御の座所で、何等の感情をも存しない部分である。この部分に損傷を生じても、事物の苦及快的方面に何等の變化をも生じない。神經床の下の所は延髓と小腦のある所

で、吾人の身體的存在に極めて必要な行爲を支配して居る。

かやうにして腦の中階即ち神經床のある所は、快と苦との感受性の特種の條件を準備するやうに見える。この部分が損傷を被りたる時の最も著しい結果の一は苦の感受性が異常に昂進することである。ヘリックによると、神經床の側面を傷けると、鋭く固執せる發作的苦痛が常に存在し、往々堪へ難くなりて、苦感脱失の療法もその効果がないことがある。且つ又不快なる刺戟に特に烈しく反應する傾向があると述べて居る。蓋し之は神經床の損傷によりて大脳皮質の制御的活動から分離して、その結果感情的活動が自由になつたと説明すべきである。

腦髓以外の神經系統に於ける苦と快の結合は、表面的苦痛と擲りの感に於ける以外は未だ明かになつて居ない。快と不快とは或特殊の神經に關係するものでなく、神經が活動をする時に生ずる所の一種の神經的放射に基づくと一般に考へられて居る。例へば快感は味覺の神經の刺戟からも嗅覺・聽覺・視覺の神經の刺戟からも等しく生じてくる。快と不快との差別をするのは、放射の性質以外に特殊の神經がない。マーシャルによると、神經活動がその蓄積したる過剩の力を使用

する時には快感を生じ、その蓄積以上にエネルギーが消費される時には不快を生ずると云つて居る。吾人が長い間汽車にのつた後、そこらを歩くと非常に氣持がよいのは汽車にのつて居た間に蓄積したエネルギーを消費するからだと言明される。しかし吾人の快感は單に過剰せるエネルギーを消費する爲に起るといふことで説明のつかぬものがあるやうである。それでマックス・マイヤーは次のやうな説を述べて居る。即ち一定の神経的放射エネルギーの不意の増加の爲めに高上する時に快感を生じ、それが干渉の爲めに減少する時は不快感を生ずる。例へば茲に人ありて大統領の選舉に非常な興味を有するとする。食事の鐘をきいて椅子を立上らんとする時に、不圖雜誌の表題に目がとまり、大統領候補者に就ての論説をよまむとする。これが食堂に行くのを妨げてその人に短時間の不快感を生ぜしむる。しかしその新聞に注意を向けて讀む間は愉快に感ずるに相違ない。即ち注意が初まる間は不快であるが、それが同一の方向に向けられて居る間は愉快に感ずる。要するに快とは神経的能率を意味する。決して過剰の蓄積を消費する所の神経細胞のみの能率でなく、目的を仕遂げる爲めに集中される全神経系統の能率である。このマイヤーの説

は勿論假説であるが、しかし最も合理的の説のやうである。

身體的苦痛と満足とは腹腔に供給される特殊の神経系統の作用に基いてゐるやうである。近頃の研究によれば交感神経が自體内部の苦痛を傳導する役目をするやうである。一種の脊髓病(*rhizomyelia*)の場合に、交感神経の入口よりも下の部分に障害が起ると身體的苦痛は相變らず感ぜられる。しかし交感神経の中樞接續を妨げる程上部、即ち脊髓の第五乃至第六對より上部に障害が起ると、身體的苦痛が無くなると云はれて居る。

表面的苦痛及び擦りに對する神経組織に就ては、前二者よりもずつとよく發見されて居る。毛の尖端で皮膚を検索すると痛點を發見することが出来る。この點は一センチメートル平方で百乃至二百ある。場所は表皮に於ける神経の終端に度々發見される。しかし痛苦を感じる神経は他の皮膚に於ける神経と極めて密接して居るので、一方例へば烈しく壓を加へるとか、熱を加へるとかすると、それ等の刺戟が痛覺神経の方に傳はりて痛みを感じる。吾人が若し熱湯に手を入れると熱い感じと痛みとを覺ゆるのである。

この神経末端から脊髓を通りて神経床に終るまでが苦感の地域を形成するもので、テールの實驗によると、患者の脊髓を麻痺せしむる時は、針の先で患者をついても、只むづがゆい位に感ずるといふことである。この事實は弱い刺激を與へてむづがゆい感を生ずるのと一致して居る。擦りの感は壓感と同一の神経によりて生ずる。故にこの感を生ずる皮膚に於ける末梢器官は、毛根にある球、無毛の場所、マイスネルの觸小體等である。通信はこの末梢器官より脊髓に傳はり、それより上の方へ傳はりて行くが、若しこの通路に障害が起ると普通の觸接が擦りの感を生ずることがある。しかしその障害が尙ほ烈しくなりて、神経が能率を失ふと擦りの感も消失するものである。

八

快感の基本的條件は、吾人が生物として環境に對し絶えず試みつゝある争闘の中に發見されることは既に述べた所である。快感は實際の争闘に於て首尾よく打勝つ場合にか、或は新争闘に對

して準備せる力が充分に蓄積されて居る場合に生ずるといふことは吾人人生の上に極めて大切なことである。争闘に成功するやうな状態ならば如何なるものでも吾人に快感を與ふるものである。美的状態の如きも亦恰度この理由に適合するものである。實在からそれが如何に離れて居るにしても、美的状態は表出せんと争闘し且つその表出を發見する種々の傾向を喚起するものである。多様中の統一といふことは恐らく最も多く美の定義に用ゐられて居るやうであるが、この定義によりて美は精神が複雑に打勝つといふ意味を表はして居る。即ち精神は多様ものを結合することを喜び、事物の分離することを拒み、世界の種々なる部分を理解し易い或ものに出來るだけ集めやうとするものである。アルキメデスのやうに、當惑するやうな複合物を簡單にすることを發見して、*heureka!*と誇り氣に絶叫した人は、この不純の快の感動を知る人である。藝術に於ける美と快とは、その對象物が不當の緊張なくして統一され得る夥多の小部分を供給するといふ事實に基づいて居る。精神の勢力が強く、壓服する力が多ければ多いだけ、益々藝術の材料の複雑なることを要求する。容易に征服し得るものは、満足の感を與ふることも亦それに準じて少な

い。故に國民によりてそれ〴〵美に對する快感も相違するもので、例へば北歐羅巴と南歐羅巴とに於ける音楽、戯曲、繪畫等を比較して見ると、勢力の強い國民には強い豪壯の藝術が賞讃され、弱い國民には優美な藝術が勃興して居る。又時代の相違によりて藝術評價に差異を生ずるのも、やはりこの原因に基づくものである。かやうに多様を統一せんとする努力が烈しく、しかもそれに成功する時は、美的快感はその最高調に達するが、之に反して努力が弛む時は美的快感も少なくなつてくる。しかし又その努力が吾人の心的活動に費す力以上を要求するか、或は折角喚起された力が烈しく妨害される時には、吾人は醜なる苦しき激動を経験するものである。

次に遊戯に伴ふ快感に就ては、古來種々の説がある。例へばスペンサーの如きは、遊戯は勢力過剰を防ぐ爲めで、従つて快感を生ずるといつて居る。パトリックの如きは、吾人の遊戯は祖先時代の行動を繰返すといふホールの説を更に發達せしめて、吾人が遊戯して快を感じるのは、祖先時代の行動をするので身心に弛緩を來たし勢力を回復するに至るからであると述べて居る。

其他種々の説がある。遊戯は將來の生活の豫習をなすものであるといふグロースの主張もあ

る。しかし此等の學説は何れも一部分眞理で、遊戯の全體を説明するには不十分である。遊戯的活動は、ずつと粗雑で烈しい本能的活動の輕減され推敲されたもので、遊戯に伴ふ特殊の快感は凡てこの事實と聯關して居るやうである。恐怖・憤怒・嫌忌等の烈しき爆發は漸次に制遏されて、競争とか冒險とかの愉快なる經驗に變化されて居る。兩親の愛・自己確認・藝術等に伴ふ適意の感情は、それ等の本能が背景となりて居る幾分快感の少ない興味ある空想的状態から變化したものである。

九

上來述べ來りた所によると、快感は直接の追求によりて獲得されるものでなく、寧ろ吾人の有する活動傾向を充分に働かしむる争闘の副産物であるといふことが出来る。故に吾人の征服する力に匹敵する争闘が多くなればなるに従つて快感を惹起する機會は多くなりてくる。之の事實は自己に相當せる活動を將來する特殊の環境を要求する特殊の天才家に於て殊に然りである。例へ

ば音楽家は音の世界に對して拮抗して行く時に幸福である。實業界の首領は商業をする間に快感を發見し、發明家は機械的征服を行ふだけの自由なる遊戯をなす時に快感を感じる。快はそれ自らによりて決して求められるものでない。只自己發表の附帶的現象として表はれてくるものである。徒に快樂のみを追求する享樂主義者はこの原理を知らない者である。

快は實に直接の探求や、障害を避けることによりて得らるゝものでない。それは只勇猛邁進して、成功ある結果を收めることによりてのみ得らるゝものである。原動力の萎縮や苦痛の受容力の増加は單に人生に對する防禦的態度より生じた已むを得ない結果に過ぎない。幸福に生活せんとするには只心理學的に健全なる一徑路が存するのみである。即ちその人は須らく争闘を求め、その争に首尾よく打勝つ準備をしなければならぬ。殊にその人は自己の個人的能力を知るに努め奮然と之に對抗すべき環境との衝突を求めなければならぬ。(「教育學術界」大正七年四月號)

動的心理学

動的といふ語を用いたものは精神分析學の泰斗フロイドであるが、動的心理學といふ名稱の著書はウッドウォースのそれが最初である。しかし吾人の行動の原因と結果とに興味を有する研究者は極めて早くからこの考を懷いて居る。心理的研究に於ける初期の主動者の一人たるロックはその著「人間悟性論」を以て、「吾人の有する事物の意味を獲得するに至る吾人の悟性の方法を論ずる」ものとし、パークレーはその著「視覚新論」の初めに、「予の目的は視官によりて事物の距離、高さ、位置を知覺する方法を示さんとするのである」として居る。又ヒュームは「人間悟性の研究」を以て、恰もニュートンが遊星の運行を支配し指揮する法則と力とを規定したやうに、幾分なりとも人間精神を作用せしむる秘密の源泉と原理とを發見するを期するのであると述べて居る。近年に至りても心理學は既に述べた如く一般に意識の記述的科學であると定義されては居るが、心理學者が實際に取扱つて居る問題を調べて見ると、彼等の興味は即ちこの原因結果の問

題に向つて居るやうに見ゆる。

しかしそれ等の動的見地に廣狹の二種がある。前者は吾人の各種の精神機能に對し、それらの原因を假定するもので、後者は性慾又はその他二三のものにその動力を歸するものである。而して前者の代表的作品は前述のウッドワースのそれで、後者の著書はマッカーディーのそれである。故に先づ廣義の動的心理學の何たるかを説明し、然る後狹義の動的心理學を紹介することにする。

二

ウッドワースによると、原因結果の研究といふことは、勿論究竟の原因を發見するといふのではないが、しかし精神組織に於ける微細なる要素や廣汎なる傾向を研究して、その間に如何なる一様性があるかを發見し、又秩序ある様式に於て全精神道程を解釋し得る法則を知らんとするのである。故に意識も行動も共に因果關係の研究に對して適當なる組織を與へない。蓋し意識のみ

の研究では識閥以外に働いて居る過程を説明せず、又行動のみの研究では刺戟と反應との間に行はるゝ過程を説明しないからである。尙又意識と行動とを同時に研究しても一の統一的組織を得ることが出来ない。何となれば刺戟と反應との間に横れる内部過程の多くは無意識であるからである。故にその過程を精細に分析するには吾人は疑もなく脳髓生理學の力を藉らなければならぬ。即ち動的見地を持ち、意識學派や行動學派の與ふる斷片的結果に満足せず、精神活動並にその發達の全過程を理解する爲めには、此等兩派の結果のみならず脳髓生理學の結果をも利用しなければならぬ。

動的心理學には二個の一般的問題がある。一は機制(mechanism)の問題で、他は推進(drive)の問題である。今ベースボールの競技に於ける投手の例を取つて見よう。機制の問題は彼が如何なることを目的とするか、距離や屈曲の量を如何にして計るか、又所期の目的を達する爲めに彼の運動を如何に共應せしむるかの問題である。推進の問題は彼は何故にこの種の運動を行ふか、何故に今日は他の日よりも巧妙に投球したか、何故に甲の打手に對しては乙の打手に對するよりも

鼓舞されるか等の問題が包含される。かやうに機制の問題は「如何に」といふ言葉で尋ねられ、推進の問題は「何故に」といふ言葉で質問される。所が現時の科學は「何故に」といふ問に對して疑を挟み、「如何に」といふ問を以て之に代へるやうになつた。蓋し「何故に」といふ問に對する答は、又更に「何故に」といふ問を生じ、同一方面に進む限り常に同種の質問が反覆されることになる。所が「如何に」といふ問はその答が精密であれば假令それが完全したものでなくても、それで満足されるからである。尤も推進の問題は機制の問題の中に包括し得るが、しかし人類生活の活動の動機と源泉とは之を別にして考察すべき程重要なものである。

以上はウッドワースの動の見地であるが、氏は之の見解によりて人間に於ける先天的行動、學習したる行動、選擇並に統制の要素、創作力の要素を分析し、更に進んで異常の行動や社會的行動に於ける推進並に機制を説明して居る。以下に於てその大要を摘記しよう。

三

吾人の行動を観察すると、或る場合には食物を求むるに汲々とし、或る場合には朋友を得んと努め、ある場合には休息を取らんと欲する等、實に吾人は種々雑多の推進力と之によりて推進せらるゝ、機制を有することが分かる。然らばかやうに多種多様の行動をなすべき組織は如何にして吾人が獲得するに至つたか、又その幾何が自然と遺傳とによりて賦與せられ、又その幾何を個人が自己の努力と經驗とによりて附加されたかを知らんと欲するのである。

先天的に賦與された機能か否かを判定するには、種々の標準が必要である。第一は生後直に表はれて、その間に何等學習の期間を有せざる行動で、例へば呼吸作用の如きはその一例である。

第二は出生後一定時間を経過した後には表はれる行動ではあるが、若し何等の經驗をも獲得し得ざるやうな條件の下に置いて尚その行動の表はれる如きものである。スポールディングは孵り立ての雛に對して翼を使用することも又他の鳥の飛翔するのを見ることも禁止したに係らず、一定期間の後、鳥は自由に飛翔することが出來たと報告して居る。第三は同種族に屬する者で各個體の經驗によりて得たと考へられる以上に相互に類似を示し、或は相違を表す場合には、其等の類

似又は相違を先天的のものとするより外はない。例へば猫が鼠を捕ふる如きは、彼等の經驗によりて説明し得る以上にその性癖が互に類似し、又その生立ちの相違によりて説明し得る以上に一方が他方に比して捕鼠の能力が優れて居る。故に吾人は猫を以て先天的の捕鼠者であるといふと共に、又或る猫は他の猫に比し、この能力が優れて居ると結論することが出来るのである。

かやうに先天的機能に呼吸の場合に於ける如く最初より十分に形成されてあるか、或は出生後成熟すべき諸種の本能の如く十分なる機能状態に發達するか、或は各種の能力の如く、經驗によりて機能状態が發達し、個人の經驗の特質によりてその精細なる形式を取るやうになるかの三種の機制よりなると考ふべきである。此等の機制中、その或物は他の機制と關係することなく、固有の刺激に對して常に直ちに反應を生ずる位に、その作用が簡單に且つ圓滑に行はれる。所が他の機制に於ては活動を生ずるや、直ちにその目的を達することが出来ずして活動を繼續し、他の機制に對し推進力を與へる。換言すれば完成的反應の方に向へる機制は、それが活動し初めると、豫備的反應の機制に推進力を與へる。かやうに先天的機能は推進と機制とを生ずる。尤も各の推

進はそれ自ら機制である。

推進として作用する此等の先天的機制は、それが人間並に動物の生活に於ける最初の動力又は活動の根本的源泉であるから、極めて重要なものである。成人の動機は彼の遺傳せる動力より不斷の發生的過程によりて派生したものである。この派生的或は獲得的動機の發達過程は一般に次に述ぶる所の學習過程の一部をなすものである。

四

種々の感覺・情緒・運動・興味等の吾人の先天的機能は可なり廣汎なものではあるが、之を成人に於ける全部の行動と比較する時は、その數が寧ろ少い。身體内部の作用を除き純然たる本能的行動をなすものは稀である。以前の學習が常に吾人の行動の中に現はれ、その活動の形式を變化せしむる。吾人は學習した通りに行動し、學習した通りに見、學習した通りに興味を感じ、學習した通りに享樂し、又は嫌忌する。しかし吾人は先天的機能が全部脱落されて、合理的活動によ

りて全然新しき機能を形成するに至ると考ふるのは誤謬である。先天的機能の多くは依然として使用せられ、一層複雑に且つ特殊化された學習活動の機制が構成せられるものである。

學習といふことは生得的推進が除去されたり、或は分離又は結合されて新刺激に附着することである。學習の動力として特筆すべきは、吾人が困難に打勝つことに興味を有すると共に、他方に又成功を收むる行動を取ることの出来ることに興味を有することである。困難は動作を行ふ運動的方面にあることもあり、或は事件の状態を知覺し捕捉する方面にあることもあり、或は此等兩方面に同時に存することもある。總ての困難が除去されて極めて容易になつた動作や、或は既に習慣を構成した動作に對しては興味よりも寧ろ自動的になる。之に反して非常なる障害に遭遇する動作は又吾人の苦惱を生ずる。所が妨碍は受けても或る程度の努力によりて成功し得る動作に對して非常に興味を感じる。

吾人は社會を熟知するに従つて諸種の事物を知覺し理解することを學び、かやうにして新しき興味を生ずる。各事物の中には理解の困難を伴ふが如き新奇の點があつても、それが吾人の練習

した知覺力の範圍の中にあれば、やはり吾人の興味の對象になるもので、吾人は目前の困難に打勝たんとする衝動によりて其を理解せんと推進されるのである。筋肉活動の場合も之と同一で、幾分新味を帯びたものであれば吾人の興味を引起し、乗越え得べき障礙に打勝たんとする衝動によりて、その實行に推進される。ある一派の人々はかゝる行動を好奇心や操縦の先天的衝動によりて推進せられるとして、前述の點を看過して居る。好奇心は甲の知覺にも又乙の知覺にも行はるゝ、知く非分化的の動力の源泉でなく、好奇心は或る對象を知覺し理解するあの程度の能力の存在に基く衝動の集合的名辭に過ぎない。兒童は最初に眼に對する自然的刺戟たる輝ける光線の對比現象に好奇心を示し、或る程度の事物や人間のことを學ぶやうになると此等の方面に好奇心を表はし、事物の關係を知覺するやうになるとその關係に就て好奇心を生ずる。種々の事物を取扱ふ機制を獲得する能力は確かに先天的であるが、この能力が練習によりて發達して初めて、その事物を取扱ふ興味が生じてくる。換言すれば何れの知覺作用に於ける推進力たる好奇心も、特殊の知覺行爲に於ける興味と解した方が一層妥當である。兒童が經驗によりて對象を識得するやう

になると、彼の知覺に對して新しき興味、新しき推進力を得るやうになる。熟練運動に對する興味の發達も亦之と同様に説明することが出来る。要するに吾人の有する新機制を獲得する力は、同時に新推進力を獲得する力である。蓋し各機制はその發達の階段に於て全く自動的とならない中に或る程度の効果を收める時には、自ら推進し、その直接範圍を超える發動的活動をなすことが出来るからである。

五

精神活動が複雑なるに従つて、各刺戟に對して多數の反應が聯合するやうになる。しかし實際に各刺戟に對して喚起せらるゝ反應は選擇されたる一箇の反應である。然らば選擇作用をなす動力は如何なるものか種々の選擇反應中最初に喚起せられるものは、それが他の反應に比し優越を有する爲である。數箇の刺戟が人又は動物に同時に作用すると、その中で最も強度の強いものが他よりも優越を示し、多くは之に對して注意し且つ反應を生ずる。動く事物が靜止の事物よりも

優越を有し、不意の刺戟が不變化的に又は漸化的に一定時間繼續する刺戟に比して優越を示し、子供の場合には事物よりも人間の顔が優越を有する。凡て此等は原始的自然力の結果である。

かやうに自然的優越の外に、練習の結果として生ずる優越もある。或は再三再四刺戟が反復された爲めにその優越を失ふことがある。或は妨害を被りて動作の一傾向より他の傾向へその優越が轉移することもある。しかし複雑なる状態に於ては大部分その場合に於ける興味の優越が選擇の推進になる。この興味は時として疑問の形式を取る。これまで看過された事物も之に對して疑問が生ずるや注意を喚起するやうになる。尤も疑問を以て鋭利なる觀察に於ける推進力となす代りに、好奇心を以てこの場合の推進力と言ひ得るかも知れない。しかし之は一般的動機としての好奇心でなく、或特殊の事物に關する好奇心といふべきである。故に觀察に對する推進は特殊の對象によりて喚起された興味といふべきである。

最後に一言すべきは吾人は選擇能力といふことを言ふが、しかし選擇を行ふ能力なるものは元來無く、只選擇の事實があるだけである。ある完成的反應に向ふ傾向は選擇力として働くが、し

かしそれは同時に一定の目的へ向ふ傾向である。興味は又一つの選擇力として働くが、しかしそれは或特殊の事物や事物の集團に對する興味である。疑問は又一の選擇力として作用するが、しかしそれは常に一の特特殊の内容を有して居る。聯絡も亦選擇力として作用するが、それ自身に特有なる具體的狀態を意味する。選擇力は多數で、その一々は特殊の傾向や興味に過ぎない。選擇といふことはある傾向又は興味の一特質で、特殊傾向と共在する一個の一般的能力の特質でない。即ち前に述べた如く推進は又機制で、機制は又推進であると言はなければならぬ。

六

吾人はこれまで主として本能的並に習慣的過程を述べたが、動的心理學としては人類活動の種々の舞臺に於ける獨創力の行動を研究しなければならぬ。それには先づ天才家の獨創力に就て説明する必要がある。

天才家は少くとも或る種類の對象——天才家その者の特殊の性格によりて種類が相違する——

に關する知覺並にその取扱に就て極めて優秀なる先天的能力を有するものである。或種類の事物に對する自發的興味、敏速且つ徹底的なる事物の理解、事物の巧妙なる取扱、人生の低級なる興味を看過して、その事物に専心なること、事物を處理するに非常なる固執と勤勉とを有すること、並にその結果の多産的なること等は、その名稱こそ異つて居るが、天才家に共通した性格である。天才家の勤勉の背後にある推進は飢餓や性慾や競争等の推進でなく、活動その物の中に求められる。單言すれば天才家は現實の或る方面に特に順應し反應する者である。即ちその方面に接觸するや、その反應的活動を喚起し、恰も獅子が獲物の出現に對して行ふやうに自然にそれ等に反應する。凡そ吾人の知覺的傾向は自ら推進を供給することが出来るもので、自己以外の推進を要しない。本能的搜索の如きも同様である。兒童が最初事物に興味を有することは、その事物の實際的價値の爲めに興味を生ずるのでない。兒童は好奇心に富み且つ嬉戲を喜ぶものである。故に兒童は事物に反應する爲めに、その物に興味を感じる。天才家は或種の事物を取扱ふに當りて著しく此の種の能力を發揮する。即ちこの種の事物に對し長時間好奇心を保持し、それと嬉戲す

る。天才家は勤勉刻苦の者であるが、それは決して苦役でなく嬉戯に類して居る。要するに彼等は外部より推進されるのではなく、自己に遺傳せる興味によりて推進されるのである。

通常の人々がその日常の事務を取る場合には獨創力は表はれない。これは多く熟知せる事物によりて圍繞せられ、古き方法を以てそれ等を知覺し、又それに慣れて居る爲めに之を看過するからである。彼は學習したる正規の行爲によりて、彼に課せられた正規の要求に應ずる。假りに幾分珍らしき事物が表はれることがあつても、自己の熟知した型式に類化して、その新奇に少しも反應しない。又多少新しい事情に逢着しても古い反應の方法を以て之に應ずるのである。

かやうに吾人は一般に習慣的行動に墮して獨創力は全く消失して居るかといふに、さうでない。事情宜しきを得れば之を再燃することが出来る。ある著者は獨創的行動に推進を與ふる傾向は、人類並に動物に共通せる原始的本能によりて供給せられる。例へば危険、經濟的必要の典型としての飢餓、競争、性的衝動等が屢々動力と考へられ、その何れも確かに推進を與ふるものとされて居る。しかしそれは全く理由なきことである。動力は個人の經驗の進みの中に先天的材料

に附加されたものである。天才家が吾人に示す所によれば、それは實に客觀的興味である。ガウスが飢餓と友人の訴へとを忘れて仕舞つた位に數學上の發見に夢中であつたことは、彼が實際從事して居た事に就ての興味以外の或るもの、即ち飢餓や競争や性的衝動等の爲めに推進されたとは考へられない。この事は彼れ程の人物でない人の場合でも同一である。推進は一度それが惹起されて直に満足の結果を得ない時は依然として覺醒されて居る。而してそれは他の機制に活動を供給すべき傾向として存する。何れの推進も妨害されると、獨創的活動を生ずるものである。之を要するに獨創的活動を引起す條件は、或る結果の方へ覺醒された傾向が何等かの妨害に遭遇することである。

七

社會的行動に於ける動機は社會的活動の中に傳承せられる。若し人が集團的活動の能力を有すると、かやうな活動に興味を有する。而して彼はそれに引つけられるやうな外面的動機を要しな

い。即ち彼に取りては一場の遊戯たるに過ぎない。之に就ての彼の興味は一部分は人格（彼は之を理解する先天的能力がある）の相互接觸から來り、一部分は數多の關係者が調和統一して活動する共應から生じ、一部は集團間に生じたる競争の精神や、共同動作によりて行はれ得る大企業等から來る。一言すれば社會的興味は人類に普通なる客觀的興味の一部である。

社會的動機は音樂的又は數學的動機と同一の種類に屬するものである。恰も音樂上の天稟を有する者が自然に音樂を取りて之に興味を發見する如くに、社會的方面に天稟の才を有するものは他人を了解し、團體的活動の可能性とその共應する方法とを知り、興味を以て之を行ふものである。故に此の種の行動の背後に存する社會的本能を云爲するのは妥當でない。蓋し自然は他人の出現によつて喚起される如き。出來合の運動を吾人に與へて居ないからである。社會的天才とは社會的行動を學習する能力を意味する。各個人は他の能力と等しく、社會的天稟の程度に於て夫々相違する。即ち或者は社會上の創作的藝術家又は發明家となる能力を有し、或者は唯それに追從して行く。尤も後者とても團體活動に參與するだけの能力は賦與されて居るのである。

社會的活動を生ずるに當りては多くの推進が結合されなければならぬ。恐怖の動機は不安の時に於て人々を集合せしむる推進となり、好争の動機は群集争闘の場合に彼等を結束せしめ、經濟的動機は産業組合や組織を促し、自己主張並に服従傾向は競争並に服従を生じ、自我が一家族、一黨派、一階級、一國家へと擴大して行くと共にそれ等の一々に對する忠誠に貢獻し、援けなき嬰兒のみならず、他人をも救助せんとする程度に擴大せる親としての本能は自己犠牲や利他主義に到達する。しかし以上の外に別に固有の社會的動機即ち集團活動への傾向が存して居る。而してこの傾向は單に利益であると經驗によりて發見せられる計りでなく、尙この種の動作に對する先天的能力を有する者が社會的活動に興味を感じるものである。

八

ウッドウォースはこの外に變態行動に於ける推進と機制とを述べて居るが、之はマッカーディーの所説を紹介した後にする方が便利である。蓋しマッカーディーは主として精神分析學の諸問題を論

じて居るが、ウッドワースも變態行動の一部の推進として精神分析學者の主張を採用して居るからである。

マッカーディーによると、「動的心理學とは注意・知覺・記憶又は論理過程の如き比較的靜的なる機能に反對した、本能・動機・情緒・想像的思考等の研究を包括する有用なる術語である」として居る。尙氏は「動的心理學は社會學者、人類學者、犯罪學者、神經病學者、精神病學者（正常人を取扱ふ心理學者からは極一小部分）から發達した比較的新しい科學である」として居る。故に氏によると動的心理學は單に精神分析學の主張以上に廣汎なものであるが、その書の内容は精神分析學の批評と建設とを主として居る。氏はフロイドの效績を述ぶる所に「眞の動的心理學の建設者」と推稱し、且つフロイドの主張に矛盾はあるが、その創見は實にコロンバスが印度の一部と誤つては居るが米大陸を發見した效績と同一であるとして居る。

氏の批評に先だち、フロイドの考の一般を述べて置く必要がある。フロイドによると或る傾向の抑壓はその進路の妨害によつて、吾人はその組織から排除しないで之を意識から驅逐する。故

に抑壓された傾向はその人の無意識中に殘留し、相當の刺激に出會ふと、往々その幾分は喚起されるが、多くは吾人を支配する意識的自我によつて抑壓される。睡眠中は無意識の働く最も都合のよい時ではあるが、それでも自我の抑壓から全然開放されないで僅かに夢の象徴主義の中にその禁制的傾向の假裝を表はすのである。而してその抑壓を蒙る傾向は性質上性的である。嬰兒の根本的傾向は單に特殊の性的衝動の核にとゞまるが、それでも早き時代から抑止されて無意識界に止まることがある。故に若しその抑壓傾向に適當の通路を與へると、從來その逸出を求めた爲めに生じた種々の苦悶が除去される。又その性的傾向は他の通路に轉向せしむることが出來、所謂純化が可能であると主張する。

九

マッカーディーは先づフロイドの無意識てふ定義の動搖して居ることを指摘し、フロイドの無意識には自我の監視を通りて意識的になる「前意識」と自我の抑壓を蒙つて居るものがある。而

して後者はモルトン、プリンスの共在意識に比すべきものであるが、フロイドは之を認めて居ないやうであるとして居る。マッカーディーによると前意識は無意識中より除去して共在意識のみを残し、且つその共在意識は行爲や徴候を規定し、決して意識界に登らぬものとした方が徹底して居ると評して居る。

次にフロイドの「欲求」といふことは、心理學に一の新しき動的單位を導入したものであるが、この欲求は時としては意識的であると述べたり又は嬰兒の性の欲求に於ける如く、それが無意識に發達するとも述べて居る。フロイドの欲求の概念は、心的熱求、內的傾向、動的精神過程の意味に絶えず用ゐて居る所を見ると、尙一層明確に有用なる術語を用ゐた方がよいかも知れない。而して一般の精神活動の構成は性の欲求ばかりでなく、自我本能、社會本能の要素がある。故に「欲求」と言はず本能的動因 (instinct-motivation) と言ひたい。而して之は全く無意識の動的要素であると述べて居る。

フロイドの思想中の最も重要なる動的要素は Ego である。リビドーは性的本能として表はれ

る力であるとフロイドは定義して居る。所がフロイドはリビドーに二つあるとし、一は性的で自己色情又は対象リビドーを形作り、他は非性的で自我衝動に屬するものであるとし、この自我リビドー (ego-libido) は自己保存の本能のやうに取扱つて居る。所がこの兩者を如何に一致せしむるか
は難事であるが、フロイドはある所で「エヂプス錯綜を形成する補助的力を與ふるもの」として自我リビドーを定義して居る。所がフロイドは早發性痴呆を説明するに當つて対象リビドーが自我リビドーに代るとも述べて居る。かやうにリビドー説は一定して居ない爲めに、マッカーデイは前述の如く自我、集團、性の三本能の存在を截然として區別した方が明瞭であるとして居る。
以上はマッカーデイの批評並に建設的方面の大要であるが、吾人の精神的行動の動因として性と自己保存の本能とを擧げたフロイドに對する非難はウッドウォースによりても行はれて居る。故に吾人は再びウッドウォースの動的心理學に戻りて氏の批評を述べることにしよう。

十

ウッドウォースは先づフロイドの嬰兒の性的傾向説は大人の立場より子供の行動を解釋したもので、子供の動作から公平に推定したものでないと批評して居る。而してフロイドは形式的に性及び自己保存の二動力を擧げて居るが、吾人の本能に關する研究は、これより遙かに多數で、尙學習並に獲得上の推進も亦認めなければならぬ。大人は多數の推進を有し、或るものは先天的組織にその起原を發し、或ものは先天的組織を基礎として發達する。しかし此等の諸傾向が一度發達するや各自その力を有し先天的傾向の動力に依頼するを要しないのを見ると、フロイドの推進に關する説明は不徹底であると評して居る。

氏は又好奇心、保護衝動、支配並に服従の本能、美的衝動等は、性的衝動と混和して居るから、フロイド派によつて混同されて居るが、しかしそれ等は獨立した推進であるとする。例へば藝術を以て性的興味によりて發動し、之が動機の影響は繪畫、彫刻、並に文學中に明白に表はれて居るといふが、藝術に於ける或る題目例へば自然の風景の如きは必ずしも性的衝動と交渉を有するものと言へないと述べて居る。

氏は又フロイドの抑壓並に純化の概念は動的心理学に對し大切なる位置を占むるものであるが、しかしフロイドの考へによると動機は抑壓されて無意識となつても依然その力を有し、他の力の秩序ある作用を妨害するとする。所がかやうな場合もあるが、選擇作用の動因の際に述べた通りに、制止されたる衝動の多くは單に自然的死滅に歸し、又或る者は背後に残りて居るが、その力は微弱で影響を與ふることが殆んど無いと言へると論じて居る。

十一

吾人は既に述べた如く從來の心理学が意識や行動の記述に甘んじて居るとは言へ、その裏面には原因結果に關する動的問題に興味を有して居たことは明かである。而して前記二氏の著書は實に此の方面を表面に持出した點に於て非常に吾人の興味を惹くのである。フロイドは動因として二つを擧げマッカーディーは之を三に歸したが、ウッドウォースは多數の先天的動因を列擧し、且つそれによる行動は更に又他の動因になると述べて居る。二元か三元か將た多元か、その何れが妥

當であるかは、今俄かに決定し得るだけの知識を有しないが、ウッドウォースの如く餘りに多數の動因を列擧しては、實にその捕捉に苦しむの憾があるばかりでなく、記述的心理學に動的を加味した位に見え、眞の動的心理學の建設には未だ遠いやうに思はれる。その點に於てはフロイドの二元説マッカーディーの三元説が徹底して居るやうである。尙又ウッドウォースは先天的興味といふことを多く用ゐて居るが、吾人は更にその興味の生じ來る動因を説明しなければ満足されない感がある。(「教育論叢」大正十三年三、四月號)

参 考 書

1. R. S. Woodworth; *Dynamic Psychology*. 1918.
2. J. T. MacCurdy; *Problems in Dynamic Psychology*. 1923.
3. S. Freud; *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. 1920.
4. 拙著、増訂「精神分析学」。

作用の心理學

茲に作用といふのは *Act* の譯である。しかし作用といふ譯は餘り適譯でない。寧ろ *Act* とそのまゝ使用した方がよいかも知れない。その意義は本文を讀まれたらば明白になることと思ふ。

近世心理學者中の此派に屬する頭目は *Pratt* である。*Pratt* によると、物的現象と心的現象とがありて、前者は物理學で取扱ひ、後者は心理學で取扱ふものである。而して志向的に事物を包含する現象は、作用で、心理現象は心理的作用である。この心理的作用の内容は一次的には物理的で（感覺的想像の内容は物的事物であるとの意味）二次的には心理的である。作用その者は吾人が意識の様式とする三種のもの、即ち觀念・判斷・愛憎に分類される。而して此等の三種も前記の順序に存在するもので、判斷の前に觀念が存し、愛憎の前に判斷が存して居る。

この *Pratt* の心理的作用の主張は實質上同一の根據から *Maynong* 並に *Fussell* によりて攻撃された。此等の人々は *Pratt* が行爲の内容と對象とを區別しなかつた點を批評し

て居る。例へば予が家を知覺して居る際に予は感覺的内容（ブレンタノーの物的事物）を知覺して居るのでない。予は感覺的内容により或はそれを通じて主觀化された事物を知覺して居るのであると言ふのである。この種の考は其後のマイノング派の心理學に表はれて來た。例へばヘフラ―は認識論では内容と對象とを區別しなければならぬが、心理學ではその區別を省略してよいと述べて居る。所が、ウィタセクは要素的心理現象は作用と内容との二方面があると考へてよい。内容なくして作用もなく、作用なき内容も無い。この區別は表面の色と擴がり、運動の速度と方向との區別と同一である。故に論理的には區別があるが、心理的には何れも同一で只便宜上一定の制限内に於て區別すると。

ミュンステルベルヒは又ブレンタノー及びウィタセクに攻撃の矢を放つて居る。曰くブレンタノーは觀念化アブザクティオンの作用といふことを述べて居るが觀念化は作用でない。作用は主觀の態度で、それによりて吾人は提出された對象や内容に M_1 または M_2 をいふのである。例へば判斷作用は承認と否認、肯定と否定とが對立し、興味には愛と憎とが對立して居る。所が觀念化の中には何處に

Yes といつたり No といつたりする活動があるか。觀念的階段ではその内容は吾人に無頓着に將來され何等の作用が行はれないと。之の論法を以てミュンステルベルヒはウィタセクの系統をも批評し、觀念以外の基本的要素例へば思考（肯定と否定）、感情（快と不快）、欲求（求むること、斥くること）に於てのみ Yes と No の態度が存して居ると。

次にスツンプの考を述べやう。氏は直接に吾人に與へられるものを三つに分けて居る。即ち、
（一）感覺的心像的内容を示す現象と、（二）知覺したり認識したり、欲求したりする心的機能と、
（三）現象と機能との間にある内在的關係とである。而してこの心的機能には形式・概念・客觀性・價值等の内容を有する。スツンプは之を總稱して構成と名づけて居る。この現象・關係・構成が思想の對象となる時 *Phenomenology, Logology, eidology* の三種の科學になる。心的機能は又作用・状態・經驗と稱せられて居るが、スツンプはまたマイノンダやフッサールと共に作用を内容と對象とに區別して居る。しかしその區別の仕方は此等二氏と相違し、心的機能の對象は概念的構成で、この概念の水準線以下に立つ作用は對象たることが出来ないとして居る。換言すれば吾人の思想

が概念や法則の如き一般的のものに向けられた時、内容と對象とが一致すると。然らばこの心的機能とは何であるか。スツンプは之は知的と情的とに大別する。知的方面では、最も原始的機能は知覺したり注意したりすることに感覺や觀念を生ずる二種の様式が包含される。知的生活の他の根本機能は捕捉したり綜合したりすることで、之によりて、多數の特殊の内容例へば觸的印象・線・音等が形・リズム・旋律等の全體に結合されるやうになる。情的方面には相反する二種の状態が對立して居る。例へば喜悅と悲哀、追求と回避、承認と否認の如きはそれである。

以上はスツンプの考へであるが、更にリップスの見解を略述しよう。リップスは心理學を以て意識並に意識經驗 (Bewusstseinslehre) の學であるとし、意識はそれ自らを越えて超越世界に達することが出来るもので、此の自己の影以上に飛躍することが意識の眞髓であると述べて居る。

感覺は客觀的のもので、自分に就ての經驗即ち主觀的のものと相違する。感覺は受け容れた經驗で、感覺の内容は感官の眼にのみ與へられる。若し吾人が心の眼を内容の方に向けるならば受容の經驗より活動の經驗へと移つて行く。而してこの活動の經驗は意識の廣がりて、意識は作用を

以て初まり、又それで終つて居る。即ち内容に吾人の心の眼が向くと、注意や捕捉 (Aufassung) の活動を生じ、それはリップスの所謂單純の思想行爲 (schlichten Denkk) を以て終るのである。所が對象が多く現はれるに従つて意識は複雑になり、今度は感官の目や心の目でなく、知の目 (geistige Auge) が働き出す。即ち單純の思想は統覺の活動に向上してくる。この統覺の働には分類すること、疑問を發すること、の二種類ある。分類行爲に於ては知の働は單純で對象を分類したり決定したりするが、或は理解したり關係づけたり抽象したりする。所が疑問の統覺に於ては之よりも一層複雑で、吾人の疑問とする對象が吾人に問答を與へ、吾人に對して彼等の法則・要求を提出する。吾人は彼等の要求に聽従したり、それを經驗したり、或は承認したりする。而して吾人が承認する場合には判斷の行爲となりて活動は終つて仕舞ふ。かやうに要求に耳を傾けると吾人は要求の經驗 (Forderungserlebnis) を有するやうになる。

意識は自己超越の本質を有すと前に述べたが、リップスは又之と活動とを同一視して居る。活動は努力 (streben) の作用で、その活動は自我に課せられた傾向と其の當時自我中にあつた傾向

との結果から生ずる。若しこの二つの傾向が一致すると活動が働いたとの經驗を得る。かやうに意識が活動であるとすれば受容的經驗、就中感覺的内容を有する場合にはどうなるか。リップスは潛勢的活動ポテンシャル活動といふことで之に答へて居る。感官的内容を有することは、自己の力の中にそれを有するのである。印象を捕捉する自己の活動をその對象の方に向け得ると感ずる。かやうに活動の一般的經驗を顯勢的と潛勢的とに分けることは心理學上承認し難い所であるが、しかし之の說明によりて受容的經驗にも又發動的經驗にも共に作用なる成分が共通して居ることの主張がなり立つて來る。

リップスはこの他意識的經驗に尙ほ二種の種類があると述べて居る。その一は感情で、即ち自我の状態(Zustandlichkeiten)、詳言すれば意識なる活動の着色である。他の一は經驗されたる關係で、吾人は各種の活動を経験する際に相互の關係を経験するもので、之によりて吾人が活動する際にその統一と連続とが破壊されないものである。

かやうにウィタセク、スツンプ、リップスの所説を述べてくると、その一々の點に於ては相違

するが何れも意識はその本質上志向的^{インテンショナル}で、それはそれ自らを超越し、それを超えて對象に關係して居るといふ點に一致して居る。かやうに志向的の傾向を論ずるに當りて、吾人は心理學者でないが、茲にフッサールの考を一瞥する必要がある。

フッサールの見地によると、總ての心理學は自然科学の態度を豫想する。之は事實の科學で、精神物理學である。他方に又身體的關係及び自然科学的豫見より離れたる純粹の意識を取扱ふ科學がある。この科學は事實を取扱ふのではなく本質 (Wesen) を取扱ふもので、その方法も本質に就て思索し内省するもので、之を現象學^{フエノメノロギイ}と名づける。この現象學に入ると、日常生活や自然科学に於ける素樸且獨斷的態度を去りて哲學的態度に變つてくる。茲に於て絶對的本質に於ける純粹の意識のみを見ることが出来る。

心理學は心的事實の經驗科學で、物理學は物的事實の經驗科學である。心理學は經驗に關係し、物理學は經驗と關係する非經驗のもの、詳言すれば作用の志向的對象を取扱ふ。自然科学は有機的^{有機}の生活の個體を認めるから、それ等の經驗は自我の經驗である。故に廣義の意識は心的自我が作

り上げた全現象を包括して居る。換言すれば意識は心的經驗の複合物としての現象的自我である。狹義の意識は志向的經驗即ち作用に對する包括的名稱である。

かやうにフッサールによると作用は志向的經驗と同一視され、それに内容（對象の基礎となれる）と執意とが包含されて居る。而してその内容は無執意的經驗であるから作用は内容から切り離して行爲の性質を有するものゝみに用ひてよい。この特殊の意味に於ける作用は強度を有しないで、只質と材料の差異のみがある。質と材料とは不可分のものであるが相互に獨立して變化する。質とは觀念化・判斷・疑問・懷疑・希望等の行爲として示さるゝ作用で、材料とはその對象に作用を指導するものである。今私は一定の幾何學的圖形を見て等邊とも解してよく、又等角三角形とも解してよい。この場合に對象は同一で、内容も同一で、作用の質も同一であるが、作用の材料が相違する。詳言すれば作用の材料は如何なる對象を理解するか、その理解さるゝ對象が如何なる屬性を有するものとして理解されるかを決定するものである。

フッサールの思想はブレンタノの法則と言葉は異なるが内容は同一である。ブレンタノが總

ての心的現象は觀念化であるか又は觀念化をその基礎として居ると述べたが、フッサールの法則によると、各志向的經驗は觀念化であるか又は觀念化をその基礎として居る。尤も前の觀念化は作用の質を意味し、後の觀念化は作用の材料を意味する。フッサールは尙詳細に觀念化の分析の歩を進め、それは廣義にては客觀化の作用と同一であるとする。又この客觀化は質的には規定的と無規定的との作用に分れる。前者はブレンタノーの判斷又はミルの信念の行爲と同一で、後者は單純の觀念化の行爲である。更に之を材料の方から分けると、命題と名辭との作用に分れる。例へば「コロンバスが亞米利加を發見した」といふこと、「亞米利加の發見者コロンバス」といふやうなものである。従つてブレンタノーの法則は更に次のやうに書換へられ得る。即ち各の志向的經驗は客觀化の作用か或は客觀化を基礎とする作用である。

フッサールの影響はその後のヴェルツブルク派の研究に表はれて居る。キユルペがどの位影響を被つたかは明言し難いが、メッサールの心理學中に最もよく表はれて居る。故に吾人は更にメッサールの考を紹介する要がある。

メッサラの意識的又は心理的といふ考には三つの特質がある。物質的現象は分割し得る經驗で、心理的現象は分割不可能の經驗であるといふミュンステルベルヒの形式を承認し、心的現象は常に「私」といふ感の中に存し、物的現象は否らずといふリップスの考を採用し、又心的現象は内在的であるが、物的現象は超越的であるといふフッサールの考を採用して居る。この物的現象が超越的といふことは意識を超越して居ることであるから、従つて心的現象はある者に就て意識して居ることを意味する。即ちメッサラは總ての意識は何物かの意識(Gegenstandswusstsein)であることを述べて居る。

心理學の主要事項を形作る經驗(Erfahrung)は知と情と意の三に大別される。即ち吾人は對象の意識(狹義の)に就て述べることも出来るし、状態の意識及び原因の意識に就て述べることも出来る。此等の經驗の要素は觀察の對象となり得るか、若しくは觀察を拒む爲めに反省によりて回復しなければならぬかによりて、認知し得るものと認知し得べからざるものとに分類する。認知し得る要素の中で、感覺は三種の意識の型式凡てに屬して居る。知即ち對象の意識はこの他認知

的要素として、感覺に相當する心像、時間的及び空間的内容、一般概念の基礎をなす同一・類似・相違等を包含する。状態の意識や原因の意識が特殊の（感覺的ならざる）認知的要素を有するか否かは言ふことが困難で、この點に於てメッサラの主張は矛盾して居る。即ち單純感情は時として之を精査することが出来るが、大體に於て認知し得べからざるものに屬する。執意も時として不隨意的に生ずる場合には認知し得べからざるものになる。

メッサラの用ひた作用といふ術語は二つの意義がある。第一は有意的經驗の全部に用ゐる、第二はかやうな經驗の方面又は作用の性質に用ゐて居る。第一の意味では作用は執意の對象が感覺や心像によりて表はれてくるか否かによりて認知が出来なくなつたりする。第二の意味では作用が執意的經驗の全部から抽象された意識的要素である場合には、外界に向けられた執意の場合を除き常に認知し難いものである。

メッサラは對象の意識といふ項目の下に、廣義の觀念化の作用即ち知覺・記憶・想像の作用を述べて居る。その次に概念・思考又は知（*Wissen*）の作用が来る。此の場合に概念や意味の經驗が得

られる。メッサーはこの他に尙ほ關係・比較・判斷・及び睿智 (Eikenths) の作用を擧げて居る。判斷は肯定と否定との極めて要素的行爲を伴ふ少くとも二つの群に於ける關係に就ての綜合作用である。各の綜合的行爲は單純行爲に翻譯され得るが故に、判斷の命題的行爲はそれと並行して名辭的行爲を有する。その上判斷はあらゆる程度の主觀的確實を通過し得るが故に、吾人は確信より推測に至る隨伴的行爲を有する。最後に判斷に對して假定が對立する。この判斷と假定との關係は恰も想像と知覺及び記憶との關係と同一で、その假定は有効とか無効とかの總ての關聯を有しない單純なる思想の働きである。

狀態の意識に於て、先づ認知し得ざる要素としては執意せざる單純感情があり、次に客觀的に向けられた感情(即ち情緒的評價・價值の感)とそれに相當する情緒的選擇の行爲とがある。最後に原因の意識は動能を包含して居る。少くとも慾求や意志の行爲と名づくべき、一定の方向に指導された動能を有して居る。メッサーは動能と意志の行爲とは明に要素的經驗に屬することを固持する。

注意の現象に就てメッサールは述べていふに、注意は作用でなく、寧ろ自我の態度 (Verhalten) である。それによりて吾人の對象に關する意識 (狹義の) が構成される。即ち吾人が對象に注意して居る限りに於てのみ對象は吾人に對して存在する。かやうに注意は對象の意識と密接なる關係に立つもので、情緒的評價の對象、情緒的選擇の對象、又は意志の對象を注意の對象といふやうに廣義に注意の語を用ゐてよいと。

かやうに述べて來ると、作用の心理學に屬すと言つても詳細の點に於ては非常に相違して居るが、しかしその間に此等の心理學の基調として志向的事實を發見することが出来るやうである。

ティチェナーは作用の心理學で最も困難とする點を次の如く列擧する。先づ第一に感覺をどこに入れるかといふことである。即ち主意主義の考からといふと外界事物の知覺が最も簡單なるものとしなければならぬが、しかし論理的にいふと、知覺の前に感覺がありて、その感覺は執意的のものでないといふことが出来る。それで作用の心理學者ではこの處置に對して種々異つた意見を述べて居る、或る者は知覺の様式といひ、又は全く作用を含まないものとし、或は作用と内

容とを有すとして居る。作用の心理學では系統化といふことを非常に重んじて、論理的に凡てを説明しようと企てたが、感覺の説明には大に苦しんで居るやうに思はれる。

次に注意に對する説明も亦種々と困難に遭遇して居るやうに思はれる。従つて説明も區々である。例へばスツンプの如きは知覺の初歩の機能と注意とを同一視して居るのを見ると、注意は最初から意識に存在して居るやうに思へる。所がメッサールになるとフッサールよりも寧ろリッブスの所説に傾いて、注意は自我の態度である。論理的に言へば事物の意識に先んずるものであるとして居る。ウイタセクは注意は作用で、判断に存する作用の一であると述べて居る。これを見ると主義主義では感覺には作用が餘りに僅少に含まれ、注意には餘りに多過ぎるので、其の取扱に苦しんで居る觀がある。即ち主義主義では知覺・想像・記憶・情緒・慾求等を取扱ふことは容易であるが、感覺や注意を取扱ふことが不可能のやうに見ゆる。従つて注意を以て、一方には注意を意識の外に逐ひやるかと思ふと、他方には執意的過程の一種と同一視して居る。又一方にヘフライやウイタセクによると感覺と同一視された簡單なる知覺が他方にスツンプによると内在的注意と

なつて居る。而して此等の意見の相違は偶然的・外見のものではなく、根本的・不可避のもの、やうに見える。

作用の心理學では前に述べた通りに系統化を重要視して居るので論理學の方面から見ても非常に興味がある。而して又それ等の關係・區別・構成の上に此等學者の個人的能力の閃が現はれて居る。従つて此種の心理學は恰も哲學や詩に於ける如く、個人的色彩が濃厚で、著者の人格が反映されて居る。殊にウイタセクとメッサラの相違は科學的心理學者の相違でなく、系統的心理學の術語の中に表はれて居る人格の相違である。主意主義が科學的であるとすれば、その科學は最早や超個人的のもので無くなつてくる。即ち著者の人格を印する應用論理學とも名づくべきものになると。

然らば主意的心理學を應用論理學と言つたテイチェナーは意識を如何に取扱つて居るか。氏は曰く、意識といふ術語の曖昧は結句二つの基本的意味の混同から來る。その一は科學的又は心理的の意味で、他は論理的又は哲學的の意味である。後の論理の意味に於ては意識は *awareness or*

Knowledge で、何々に就て意識するといふことは、何々に就て明覺して居るといふことである。後の心理學上の意味では、意識は心的經驗である。而してその經驗は心理的見地から見た經驗である。故に吾人が mental of といふことの出来ないやうに、conscious of といふことが出来ないと同である。若し汝が "I was conscious of so and so" といふことが自然であると考ふるならば、論理の意味が一般に流行して居ることを知るであらう。而して若し汝が心的經驗の名として mind とか mental process とかの術語を有することを記憶するならば心理學に於て意識の語は unnecessary なることが分かるであらう。意識の語は unnecessary 計りでなく論理的の意味と混同するから心理學に取つて害を與へる。心理學で awareness や knowledge を取扱はないのは恰も物理學者や化學者が之に觸れないのと同である。

テイ、チ、ナーによると心理學は經驗を許されたものと假定し、與へられた事實そのまゝを取扱ふので knowing や being aware of の問題は科學の範圍を脱して居るとするのである。例へば赤といふことが要素的意識過程といふ風に考へると、赤い事物に就ての要素的過程とか意識過程とか

を考へるやうになる。之に反して赤は要素的精神過程であるとすれば赤い事物に就て考へる必要がなくなつてくるとするのである。

主意的心理學で重大視する注意の如きもテイチェナーによると心的過程の明瞭度の變化と考へて居る。即ち「若し吾人が注意を純粹に敘述的に考ふるならば、それは心的活動でなく、心的過程の明瞭である」と述べて居る。即ちかやうに注意を意志の働と見ないで、心的過程の一變化と考へて居るが、その變化は何によるか。テイチェナーは生理的基礎にその説明を求めて居る。神經過程が強勢によると注意が明瞭になり、禁止されると不明瞭になるとする。

テイチェナーはかやうに事實をありのままに敘述するのが心理學の任務で、心理學者の取扱ふ心は觀察された事實の言葉で敘述し得られる心でなければならぬとする。しかし前の注意の本質の説明や知覺の説明を見ると生理的説明が入つて居る。これはテイチェナー計りでなく心理學者の中にはこの傾向を帯びて、吾人の行爲は身體的器官殊に神經系統の機械的行爲によりて規定されるとする者もある。かうなると經驗の主體は脳髓で、神經系統が靈魂、心、自我の位置を取るや

うに見ゆる。かやうに生理的説明に隠れ家を求めるといふことは、ありのままの叙述では心的過程を十分に説明し得ない所があるためである。蓋し内省によりて觀察叙述することは、心的活動の一面を知るに過ぎない。態度、志向、傾性の如きものを知るには心的活動の全體に亘りて體驗し理解する必要がある。内省上作用のみを分離して經驗することが出来ないことから、テイチェナ―は作用の心理學を論理的に作り上げたものと言つて居るが、それは心的活動全體に就て考察して得た概念であり、全體的活動の理解を助くるために抽象して得たものである。従つて作用の心理學は應用論理學でなく、心的活動を理解せんとする心理學の範圍に於て研究すべきものである。(「學校教育」大正十三年五月號)

精神發達の問題

兒童の精神發達に就ての研究が極めて重要であるに拘らず、今日まで餘り進歩しないといふ理由には種々ある。先づ第一は兒童を實驗の對象にすることを嫌ひ、兒童の人格を冒瀆するものとか、教育的に有害であるとか言つて、この種の實驗を妨げることである。この點には在來の研究者の側にも、未熟の所があつて、非難を被つたこともあつたが、近頃は可なり進歩して、行動心理學の人々は幼兒の條件反射實驗に成功し、吾人の恐怖の起原や發達の研究を企て、立派な成績を擧げて居る。第二は兒童の發達を完全に研究するだけ長く兒童を觀察することの出來ない點である。兒童の常住の觀察に最も都合のよい地位にあるものは、言ふまでもなく母親であるが、科學的態度に必要な隔りを保つには餘りに子供に接近し過ぎ、又中には科學的術語を以て之れを言表はすことの出來ない母親もある。これに反して専門的科學者は十分に觀察する機會が少なく、往々彼が発見せんと豫期したことを、その觀察の中に讀むといふ傾向があり、或は又不十分の材料を補ふに、成人心理學や動物心理學の結果から類推する傾向がある。第三に兒童の行動を説明するに、殆んど全く客觀的に取扱はねばならぬ爲めに、外見上同一の行動であつても、主觀

的には異つた動機から生じたかも知れないといふ恐れがある。内観は大人ですら困難とし、心理學の研究法として不適當であるとして之を否定する一派もある位で、沉んや子供に於て之を望むことは困難である。従つて子供に於ける或る行動が觀察者によりて極めて原始的の行動と考へられたり、或は極めて高等なる精神作用であると判断されたりする。兒童精神發達の研究の中で、最初に當面する問題であり、且つ議論百出の事項は、どれだけが先天的傾向であり、どれだけが學習の結果であるかといふことである。

二

先天的に賦與されたもの、あることは總ての子供に共通であるとは言へ、その内容に於て、相對的強度に於て、或はその要素の結合に於て一人の子供として同一のものはない。吾人に共通せる遺傳の中には人間本質の一樣性もあるが又各個人に於ける特殊の遺傳の爲めに個人差もある。遺傳的傾向は發育の可能と速度とを決定する。發達は環境の影響によりて助長され或は妨害され

るかも知れないが、最極度の到達線は稟賦によりて制限される。この制限の範圍内に於て、遺傳と獲得との相對的重要さが、一方には先天論者により、他方には經驗論者によりて論争され、今尙決定的結果に到達して居ない。

かの智能の本質や範圍に就ても、心理學者の間に異論がある。嚴密なる機械的見地に従ふと、智能といふものは無いと考へる。或は精々神經活動の機械的産物としての現象的存在を許されて居る。過去に於ては智能の働きをなさしむる傾向を人間の屬性とし、人生に於ける程度の低い行爲の決定者たる本能の上に位するものとした。しかしこの考は全然棄てられたとは言へないが、急速に經過してしまつた。マクヂューガルは曰く、本能と智能とは進化の二つの相異なる方向を示すものでなく、又進化の二つの階段を表はすものでもない。それは吾人が抽象の結果區別する所の精神生活の二つの位相であると。この考は一層多く支持され得るやうに見ゆる。

個人の場合や進化的見地から考へると、心的發達と身體的發達とは密接なる相關を有し、智能の大部分は腦髓皮質によりて規定せらるゝやうである。人間に於ける大腦は最も智能ある動物の

それよりも大であり、且つ新生児は他の種属のものよりも一層多く大脳に依存して居るやうである。犬の皮質部を取り去つても、それは多少の事項を學習することが出来るが、皮質部なくして生れた子供は三年間に何一つ學習しなかつたと報告されて居る。尙人間の皮質の卓越はその分量ばかりでなく、各部の相互關係の微細なこと、複雑に且つ有效なるやうに結合して居ることに基いて居る。

新生児の行動は號泣、手足や眼の出鱈目の運動、身體をのばすこと等から成立する。これ等の運動は大部分反射運動に屬すべきもので、且つ共應的に働かない。その外全身體の粗大な波状運動もあるが、これは反射的とか本能的とかよりも寧ろ衝動的のもので、時間を経過するに従つて消失する。最初に表はれる本能は飢餓のそれで、可なり複雑なる吸乳運動が極めて早く行はれることは自然のことである。しかし人間に於ける本能的活動は、それが完全になるまでに一定量の練習を必要として居る。

幼き犬や兎の實驗によると、それ等は成長した犬や兎よりも刺戟性の度が低いといふことであ

る。筋肉の收縮や弛緩は一層遅く、疲勞を生ずることが一層速く、禁止の能力が一層少く、反應の國が一層高い。嬰兒の知覺も鈍く、僅かの運動は全く意識されない位である。嬰兒に於ける最初の心的經驗は極めて漠然たるものであるに相違ない。彼は全く新しい世界の中に自身を發見し、多様な刺戟を分類するに補助を與ふる何等の範疇を有しない。感官も不完全な道具に過ぎず運動的機制や本能もその完全なる發達は成熟を待つより外はない。然らば茲に問題となるのは子供に表はれる經驗の最初のもの如何なるものと解すべきかといふことである。

三

この問題に就て二つの全く異なる見地がある。第一は在來の考へ方で、感覺器官を通して外界から受取つた刺戟や、有機體それ自身の中に發生した刺戟に對して一々反應したことが集積されて、經驗は漸次構成されて行くとする見地である。

第二は形態心理學者の主張する所で、形態が外界並に内界に於ける最初の且つ有意義の事物で

あるとする。コフカは曰く、知覺の第一の對象は、組織されないものでなく、構成されたもので、不分化の背景に對する一の質である。世界の一部は、その殘餘のものから區分されて、一の質として表はれ、その殘餘のものは同時に一樣な背景として表はれてくる。一の感覺は必ず一の刺戟によりて生ずといふ假定は全く捨てなければならぬと。

形態心理學は兒童精神の發達に關する種々重要な事實に對し吾人の注意を喚起して居る。即ち(一)子供の最も早き行動は刺戟の大なる集合を示さない。(二)子供が最初に認知する事物は、例へば人間の聲や顔の如く極めて複雑なものである。子供は極く單純なる事物間の區別をなす前に、微笑を含んだ顔と親しみのない顔とを區別することを學ぶ。子供の初歩的の抽象作用を見ると、經驗の形態によりて一々の事項を理解するやうになるもので、一々の事項を理解した後、全體の形態を抽象するものでない。(三)後年に於ては、疲勞とか病氣の爲めに、往々知覺の單調が生ずるもので、この場合には一々の事項は注意の外に棄てられ、一般的形體が残るものである。これ等の主張は種々の實驗的結果から證明された。例へば鶏や猿が、眞の色よりも相對的の色

によりて、食物の箱を選択するやうに練習された。即ちAとBとは同一の色ではあるが、AがBよりも淡いとする。今Bの色を有する箱にのみ食物を入れ、Aの色に箱に食物を入れないやうにして幾回か練習し、然る後Bよりも濃いCの色を有する箱を持ち來り、BとCとを並べて示すと、動物はBの箱に行かず、Cの箱を選択する。かやうに彼等の反應はBの色でなく、BはAよりも濃いといふ關係に對して行はれて居たもので、従つてBとCとを示される時にはBに行かず、一層濃いCに向つて反應するのである。

精神發達の問題の中で、最も困難なるものは前述の如く學習の問題であるが、殊に子供や動物は如何にして學習するかの問題に就て然りである。學習は記憶に基いて居るが、以前に記憶を以て精神の特殊能力と考へて居た時代は如上の問題は比較的簡單であつた。一の事物又は一の觀念は聯合の法則によりて他のものを喚起すと考へられた。しかし科學が一層批判的になると共に、聯合は如何にして働くか、何故に所與の刺激が過去の聯合された多くの事物の中から一つだけを選択して喚起するのであるかといふやうな研究が必要になつて來た。

四

機械的心理學の勃興と共に、その主張者は神經系統の組織と機能とによりて聯合作用を説明する必要を生じた。觀念の聯合は複雑に結合されて居る神經組織の事項として、全く具體的方面を取扱つた。即ち二つの事物又は觀念が一度經驗の中に持來されると、將來に於て一の觀念の再生が他の觀念によりて引起されるやうな風に、神經通路が開鑿されると考へた。パブロー一派の企てた條件反射の法則によると、最初その反應を生ずるやうになつて居た刺激と聯合せしむると、どんな刺激でも、その反應を呼びすやうになるものであると言はれて居る。この法則によると、限りある先天的反射弓によりて種々の經驗を得ることになりて、機械論者に取りては極めて都合のよい解決のやうに見ゆる。

しかし尙茲に問題として殘ることは、何故に一定の神經的通路が他のものより選擇され、習慣的に使用されるかといふ疑問である。ワトソンは動物の實驗よりして、習慣の固定は反復の頻繁

なること、新近なることに基つくとして居る。しかしこれとても無暗に反復を多くしなくても、又最近に経験しなくても、學習の結果が表はれることがある。それでソーンダイクは練習の法則と結果の法則とを用ゐ、動物に對し満足の結果を與ふる行動は頻繁に反復されなくても残存し固定するものであるとする。しかしケラーの猿に就ての實驗によると、何等結果の法則ともいふべきものなくして學習することが發見された。假令成功がそれに先行する反應を把住し得るとして、その結果は逆行的力によりて行はれなければならぬことになる。所が神經組織に於ける逆行的行爲は説明が出来ない。尙結果の法則は本能的活動の順應的特質を説明することが出来ない。例へば鳥が巢を作る場合に、種々の異なる状態に相當した行動をすることを、單なる反射の機械的連鎖とは考へられない。殊に胡蜂が卵の上にある土を搗き碎くために石を用ゆる如きは、到底反射の連鎖を以て説明することが不可能である。

形態心理學とは獨立して、既にスタウトやマクヂューガルはこれと相似た假説を述べて居る。即ち本能的活動の特質として、行動の統一と、漠然と感ぜらるゝ目的への努力とを列擧して居

る。到達さるべき目的は本能的行動の進路を形成するやうに見え、一々の細かい事柄は非常に相違するに拘らず、それに連続性を與へると氏等は考へる。かやうに刺激と反應との系列が一の動的機能的統一に結合されるとの考へは、形態心理學の主張と非常に接近して居ると言へる。

五

精神生活と身體的有機體との間に明白なる聯絡のあることを認めることにより、コフカ及び他の形態論者は、意識が神經的相關を有すと假定する。但しその相關は形態と形態との相關で、分割された系列中の一點と一點との相關でないとする。これは大なる假定ではあるが、内部と外部、刺激と反應との間の空隙を滿たす爲めに、何物かを假定する必要がある。而して兩者の結合の實際に就て吾人は現時知らないので、既知の事實の光明により、或はそれを説明するに補助を與ふるやうに見ゆることによりて、假定を評價するより外に仕方が無い。

かやうな基礎から見ると、この新説は少くとも在來の假説よりも一層多く支持され得るやうに

思はれる。即ち吾人の極初期の知覚は形態を有するもので、意義を有しないものは殆んど學習することの出来ないことが實驗によりて證明された。無意味の綴を記憶することも、リズムの或る組織に基づくやうに見ゆる。換言すれば回想される何れの反應系列に於ても、形態が主要なる因子で、記憶はその形態的形式に於て再生するやうである。多數の小變化が系列の中に生ずるかも知れないが、意味の同一が全體的組織の中に維持されなければならぬ。

形態説は又模倣の困難なる問題にも適用されるやうである。現在に於て吾人は子供が模倣によりて新事物を學ぶか否かも證明すべき決定的證據を有しない。しかし模倣は容易さを獲得するに補助を與へ、理解の擴大と共に模倣も増加することは眞である。従つて一々の連鎖が前行の連鎖を刺戟として生じなければならぬとする連鎖的反射として模倣を説明するよりも、それ自身の内的組織と意義とを有する動的形態の術語によりて模倣を説明する方が一層容易であるやうに思はれる。要するに形態説の現時までの發達では精神發達全部の問題に適用されては居ないが、既知の事實を破壊することなく、それ等の事實を説明するに可能的手段を與へて居るやうに見ゆる。

1. Koffka: Die Grundlagen der Psychischen Entwicklung.
2. Gilchrist: A new view of mental development. (「學校教育」大正十五年八月號)

人 格 的 心 理 學

一

新しく學説を主張するものは、多く在來の説を根底から覆へさうと試み、同一の點を無視して相違の點のみを強調する傾向がある。この異を立てる所に、吾人の觀察は鋭くなり、思考は深められて、科學の進歩を促すことは言ふまでもない。しかし同と言ひ、異といふも、尙ほそれ等よりも一層高い所に止揚して見ると、兩者は渾然として一つに融合してくる。近世の心理學は餘りに意識に拘泥して居た。その反動として意識を無視する行動心理學が主張されるに至つた。在來

の心理學は餘りに構成要素の分析にのみ没頭して居た。その反動として機能心理學が生まれ、形態心理學が唱導され、生命心理學が提唱されるに至つた。然るにこれ等の學は、意識と行動、材料と作用、部分と全部、要素と構造といふやうに相對立して居り、一方が眞であれば他方は僞であるといふ立場にある。尤も二つながら眞として、兩者の間に何等の一致點のない二種の主張であるといふものもある。しかし水と油の如きものを同一科學の中に並存せしむることは到底永續するものでない。やはりそれには兩者を超越した見地よりして渾一化するより外に、方法はない。而してこの渾一的態度を取る心理學者も可なり多いが、余の見る所ではシュテルンの人格的心理學 (Personalistische Psychologie) が最も優れたものであり、又現代の思考程度では、それ以上に出づることは困難であらうと思はれる。それで茲に氏の主張の如何なるものかの輪廓を述べて、斯道研究者の參考に資したいと思ふ。

人格的心理學は心理學の特殊の分派でもなく、又特殊の事項を對象として研究する學でもない。心理學に於ける總ての理論と實際とを包括して、心理學に新しい定位を與へ、心理學の基礎

づけをなすものである。尤もこの種の考は二十年來科學大系の中に既に存在して居たことであり、又現時の心理學の運動は凡てこの種の特質を示して居るから、シュテルンの主張は全然他と異つた見地とは言へない。氏によると現代の心理學は要素より全體への考察の最も優勢なる傾向を示すが、その全體といふことは、人間といふことより以上に直接的、現實的、本質的の人間の存在はない。故に心理學を人格的に基礎づけることは、近世心理學の種々の分派を、何等強ゆることなく包括し得るものであると述べて居る。

二

従つて吾人はシュテルンの思想を明かにするために、先づ氏のいふ人間とは何であるかを明白にしなければならぬ。氏の人間の概念は、在來の心理學で取扱ふ人間でなく、總ての心理學の上に位する人間學(Personalitik)の根本的概念をなして居る。即ちその人間とは精神的と身體的との對立を超越したものである。若し獨立的に自己規定をなし、目的努力を行ふ意味に滿ちた全體

であるとして人間を定義する時は、人間なるものは意識内容そのものでもなく、又身體的機能そのものでもなく、精神的のものと身體的のものが、互に獨立せずして存する究極の不可分のものを示すことになる。人間は實に精神身體的には中性のもので、精神と身體の根本的特質と機能とである。

人間の自己活動 (Egohätigkeit) に意味と方向とを與ふる所の目的系統を取扱ふ場合には、吾人は精神身體的中性のもを取扱つて居る。而してこの場合に一方には自己保存として或は自己開展として表はれる直接的自己目的を確定することが出來、他方には個人以上の全體例へば民族、人類、同胞や抽象的理想の中に存在する他人の目的を確定することが出來る。自己と他人といふやうに對立的に向けられた目的傾向の二重性は、第三の目的設定、即ち自己目的に他人の目的を取入れること、即ち受入性 (Introception) を、それ等の上位に持つてこなければ、人格的本質の統一といふことは言へなくなる。人間は客觀的價值を彼の行動の目的として肯定するが、他人の力の單なる奴隸となりて、受動的にその目的を取入れるものでない。蓋し人間はこれ等の目的の

自動的遂行者で、客觀世界の實現に共働することによりて自己を實現するからである。

目的實現に供せられる人間の活動は又精神身體的中性のものである。例へば意志活動に於て、その活動は一方に意識體驗（動機表象など）があり、他方に身體運動があるといふやうに特に區別されて著しく表はれて來ない。それは内部に於ける不分化の衝動よりして努力する所の、世界の客觀的狀態への侵入である。意志行爲に於ける精神的並に身體的部分單位は、最も内部の奥底に相互に觸れ合つて居り、その上に人間は發達して行く。これと同様なことが他の人格的活動・例へば言語や藝術的鑑賞等を考察する場合にも言ふことが出来る。故に一般に精神的部分と身體的部分とに區分することは二次的のもので、それは往々科學的考察の目的から人爲的に孤立せしめたものに過ぎないと云ふべきである。只中性的活動に對する衝突が外部からか又は内部から來るかによりて反動と自發活動とは區別される。

人間の出來事の制限を規定する幅合（Konvergenz）の事實も亦精神身體的中性のものである。人間と外界との因果關係に就ては、以前は一部は生得的に考へられ、一部は經驗的に考へられ

た。生得説では人間を以てその存在と生成とに於て一義的に決定されたものとする。即ち人間はその祖先から傳へられた生得的素質の全體であるとする。所が經驗説では人格の總ての構成を世界の外部的影響に歸するのである。これ等の一方面的考へ方は輻合説によりて根本的に覆される。輻合とは世界と人間の目的努力との共同作用をいふのである。人間の一々の實際的行爲、尙ほ又持續的狀態の中に、内部の傾向と外部の影響の二つが存在する。外部の世界は人間に對する周圍の世界で、内在的努力の方向と相對立して居る。而してこの内在的努力は實體化され、人間生活の具體的組織に進むことが出来る。それに對して外部の客觀條件は、刺戟、材料、問題、強迫、又は要求として働いて居る。

人間が内部から持來たすものは潛勢力で、それに多義的に固定される目的方向性、即ち傾性、(Disposition)が屬して居る。生活の初めに於ては、傾性は曖昧な多義的のもの、即ち素質(Anlage)として表はれるが、世界との不斷の輻合によりて漸次に一定の軌道を走るやうに向けられて、一義的になり、特質(Eigenschaft)として表はれてくる。總ての教育の根本的見地となつて居る人間

の可塑性の可能と制限とは、この特質の點に存して居る。即ち吾人は素質に基いて働くことが出来る特質を考慮に入れなければならぬ。故に教育は廣い活動範圍を有するが、無制限のものでない。教育は外部から持來した理想へ人間を適當に作り上げることは出来ないが、賦與された自己規定の範圍内に於て、最も價值ある一義的のものを持來すやうに求めることが出来る。

傾性は相互に獨立して相抵觸する能力でなく、統一した全體的のエンテレーキーの分岐光線ともいふべきもので、極めて多様に相互に適切に對立して居るものである。一つの傾向を單獨に考察すること、例へば意志の特質とか天賦の能力とかの考察は科學的に必要であるが、それは常に全體的關係からの考察によりて補充しなければならぬ。

一々の傾性の中には、能力と方向性とが同時に存在する。しかしそのいづれの成分が優勢であるかに従つて、準備的傾性 (*Rüstungs-Disposition*) と方向的傾性 (*Richtungs-Disposition*) とに區別することが出来る。而してこれは智能と興味との區別に殆んど近いものである。

身體的と精神的とに區別する前に存する人間の標識として構造 (*Struktur*) がある。蓋し人間は

種々の秩序に於ける部分全體 (Teilgantheit) から豊富に組織されて居る多様の統一であるからである。即ち器官、機能、目的に向ふこと、行動の範圍、經驗等の總ての部分全體が、密な又は粗な透入に於て、或は上位又は下位の配列に於て相互に關係して居る。而してその一々の部分全體の中には又同様な構造が行はれて居て、その中には下位の成分が、その特殊の位置と任務、即ちその存在を維持して居る。人間の組織はその中に何物も全く孤立したものもなく、又それは決して要素即ち根本的成分からも生ぜず、又その要素の總和的結合から成り立つても居ないで、非獨立的成分から生じて居る。全體は部分よりも一層初期のものであり、又全體は部分よりも一層現實的である。従つてこの考を心理學に適用すれば、精神生活は最も簡單なる意識の分子から構成されるとする在來の要素心理學を排斥することになる。

三

かやうに人間の全體は一の構造であるが、これを一定の方向から遠景視的に見ることによりて

簡單にされる。例へば生物學者が組織に就て話し、心理學者が氣質に就て述べ、精神科學者は精神の型に就て論ずる場合は然りである。どの方向から遠景視的に見るかの選擇の仕方によりて、同一の人間が他の構造型に屬するやうになる。所が近世に於ける多くの型の學説は、一定の型の分類を以て唯一の價値あるものと考へる爲めに誤謬を引起して居る。

上に述べた如くに他方にまた部分構造がある。それに對してはそれの全體關係の方法が大切である。人間とそれの生活との部分的成分には、何處かに全體から浮き出たり、又は全體の中に埋没したりすることが行はれる。この浮き上りより埋没への關係は思考上の階段を示し、その系列の一方の極端には比較的強く獨立した構造がある。それは直接に取りまく人間の成分と對立することによりて、明確に境界を附けられて居り、且つその比較的に全體的なる特質によりて、それに屬する總てのものは形態 (Form) であるとの特質を生ずる。而してその形態に對して一定の形態的合則性が建設される。かくして近時提唱される形態心理學は人格的心理學の中に、その地位を發見する。しかしこの形態はそれが身體的か、精神的か、又は精神身體的か、いづれにし

でも獨立せるものでない。それは人間の慈悲によりて統一と擬似的全體を構成する。單言すれば形態構成者がなければ、決して形態は存在するものでない。

しかし人間の包有する總ての構造は、上の意味に於て形態化されて居ない。寧ろ浮き出ることと埋没することとの關係の階段がその構造に存する。鋭く組織された中核の周圍に不明瞭な周縁帯が集まつて居るから、構造は人間の全體の中に境界なしに内部の方に埋没されて居る。即ち吾人は職業といふ體驗の複合體を考へ、或は豫期といふ精神身體的狀態を考へる時に人間の確定せる現在の體驗が不定な將來の中に動搖するのを見る。これ等の強く埋没した部分構造は比較的孤立したる形態よりも捕捉するに一層困難である。従つてその意義に就ては全く研究されて居ない。

最後の考察からして心理學に對し次のやうなことが言へる。一々の心的事實はそれ自からに於て組織されて居るのみならず、一層高等なる構造統一、即ち人間に於ける最終の目的の中に埋没されて居る。故に心的事實はその要素からでなく、この人間的全體關係から理解され説明され

るものである。

人間に於ける精神物理的中性の最後の特徴は發達することである。人間そのものは要素の總和でもなく、その生活は出來事の單なる相互排列でもなく、全體としての人間の意味に満ちた自己開展である。この發達に於て一々の進歩は人間の全體性の中に表はれる。故に例へば青春期は一方に身體的變化と他方に精神的變化とを包括する一の時期でなく、身體、精神、文化の三つが相關聯し、發達成分が最も内部まで透入して居る所の内部の全體革命である。

自から發達する人間は三つの構造上の標識を示すもので、その考察は青年學 (Jugend Kunde) に對して特に重要である。即ち(1)生長 (Wachstum) で、人間の生活は、生活内容と體驗内容、並にそれ等の活動の範圍の擴大と活動の多様性の増加を示す。(2)組織化 (Angeklammerung) で、人間の生活は、最初の不明瞭な配合をした状態から、強く組織されたもの、即ち包括的の全體構成と共に強く内部的に分化されたるものに移り行く。(3)變化 (Wandlung) で、人間生活は質的には相互に相違して居るが、しかし内部には相互に關係せる位相の系列の中に發達する。

精神的と身體的との關係を上述べたが、その中で精神的といふことは、この人間學 (Personae Intellectus) の中に如何なる地位を占めるかを少しく述べる必要がある。精神的のものは何も絶對的のものではなく、理解され易きものでもないといふことは消極的に明白である。尙ほ精神的のものも特殊の實體として考へ、精神の實體は人間の中に於て物質的本體、即ち身體に對立する特種のものとして考へることは排斥すべきである。それと同時に又精神的のもの、中に最後の意識要素の總和即ち複合體を見、その複合體は純粹の心理的合則性によりて(例へば聯合法則)相互に總合せらるものであるとの考をも排斥すべきである。寧ろ精神的のものは、人間が唯一の眞の實體であり全體であること、精神的のものが、その存在、機能、意味の中に包括されることを指示して居る。短言すれば精神的のものは人間の根本的存在に對して派生されたものであり、人間の實體的存在に對して偶發的のもの(關係せるもの、事情によれるもの)であり、人間の全體に對して、

断片的のものであり、人間の意味を與ふる自己價値に對して、意味を受取るもの、他人の評價によるものである。

かやうに述べてくると吾人が高く評價しようと思む所の精神的のものゝ威嚴を減ぜしむるやうに見ゆる。しかしさやうに見ゆることは、人間の範疇に歸すべき多くの特徴と價値とを、これまで誤つて精神的のものに歸せしめたことに基因して居る。精神的のものは完全なる獨立自治に對して何等の權利を有しないと云ふことが斷定される。何となれば、その獨立に就ての第一の疑問は人間に於ける精神的のものゝ意義に對して發せられ、且つ精神的のものは科學的假設として人間學に基礎を置かなければならぬからである。

人間は世界の中に存在するから、彼の統一を傷けることなく、二重の表現を行ふ。即ち一方は彼自身の内部に對して彼の存在を示し、他方は彼の存在以外の他の外部に對して彼の存在を示す。その爲めに人間には精神的と身體的との區別が生ずる。それはスピノザの學派や近世の身心並行論の唱ふる如き二つの靜止的、不變的、並行的に進行する屬性でなく、活動的人間が之れの

統一的本質を示す二種の仕方、人間に於ける根本的活動性の實行の二つの方向である。總ての身體的のものは人間の外向的方面であり、總ての精神的のものは内向的方面である。外向と内向とは最も密接に結合するが、しかし身體的存在と出來事の一々の部分が、精神的出來事の一々の部分に相應して居ないで、兩者は全體へ共通的に従屬せることによりて、種々の目的關聯と意味關聯の中に入り來るものである。

茲に於て現時發達した表情に關する科學、即ち人相學や筆蹟學等に對して斷定を下すことが出来る。一々の身體的事實例へば容貌や書記運動の如きものは、孤立した精神的の單獨事實でなく、全人格の特質を直接又は間接、曖昧又は明白に示して居る。従つてこれ等の觀察と密接に結合せる性格學 (Charakterologie) は心理學の一分派でなく、人間學の一分派で、身體的表現を捕えることは、精神的内部生活を捕えることと同じく、人間學に取りては等しく必要なものである。

しかし茲では人間の一方の行爲、即ちその中に精神的のものを創造する所の内向の方面を特に述べることにする。人間はその存在を意識的存在に變化し彼の生命を體驗 (Erfahrung) に變形する。如何にしてこれを生ずるかは總ての疑問を超へて居る。しかしこの事實の意味に就て少しく述べる必要がある。

意識せらるゝやうになることの意味を理解する爲めには前に述べた輻合概念に對して、衝突の概念 (Konfliktbegriff) を持つて來なければならぬ。輻合は生活を創造し指導するが衝突は人間の體驗を喚起する。人間の生活が馴れた軌道の上を、即ち獨立せる命中の確實なことに於て滑かに經過する限りに於ては、輻合は外界の條件と內的傾向とが相互に摩擦することなく持續することを示し、生活は全く靜かに止まり、内部の反映を要しない。所が内部と外部との不一致、禁止と反抗とが生ずるに至るや、初めてその摩擦から意識の火花が表はれる。この場合に全き生活は意識の中に反映されず、只生活の争鬪の部分、即ち自我意識の方面では自我の戰の部分、客觀意識の方面では妨害に打勝ち又はそれを保護すべき部分のみが反映して表はれてくるのである。

人間が一層高く組織されると、内容、出来事、價值が一層高く包含されるやうになり、それ等を全體の中に排列する爲めに、益々多くの緊張と禁止とに打勝たなければならぬやうになり、かくして意識は一層高き發達を遂げる。今動物と人間、兒童と成人、自然人と文化人とを比較するとそれが明白になる。意識はかくして高く發達した人間の生活の中に著しき意義を有する。しかしその意義は常に部分的意義で、その補充として無意識的意義を必要とする。この無意識界の概念の發見と研究とは最近の世紀の一大事業に屬するが、その概念は人間學によりて初めてその證明を得たといふべきである。何となればハネトマンやフロイドに於ける如く、この純粹に消極的に叙述された潛勢力は神祕な幻影として空中に浮動して居たが、今ではそれが意識に關係する限りに於て内向として表はれることなく、積極的の人間生活に對する表現になつたからである。

無意識は人間生活の不變なことで、それによりて一々の意識の閃光が有意味に結合されるもので、孤立的に考察すると眞の混沌池に過ぎないであらう。意識的體驗の後作用 (Nachwirkung) は無意識で、それは人間の精神身體的中性の活動に移り行き、茲に再び新に記憶内容として、その内

向特質を認知することが出来る。この活動は無意識であるが、人間の目的に役立つ如き意識の方法、即ち行動や創作等を使用する。最後に無意識には稀なる極度の状態が表はれ、その状態に於ては意識を生じた衝突が一時的中止、即ち痙攣や神祕な外觀を呈するやうになる。かくして人間の目的努力の無意識支配が、暗黒な、しかし意味を與ふる背景を構成し、その背景から意識の全體が多様な色彩と光度とに於て浮き上つてくる。

意識と無意識とは共に精神的といふ概念の周圍を構成する。精神的のものは、内部的關係の、内概念 (Inbegriff) としての人間で、換言すれば人間の生活が内向を行ひ、又は内向に關係する場合である。

次に體驗 (Erfahrung) の概念には尙ほ多く考察が結び付いて居る。人間の生活行爲に於ける一つの波、即ち組織された構造を流れから取り出したもの、例へば一の意志行爲の如きものを活動 (Tehnis) と名づけるならば、それは又精神身體的中性である。この活動を内向的のものにすると、體驗になる。或は寧ろ活動は意識の平面の中ではその全體を表はさないから、内向的のものに

變る限りに於て活動は體驗になると言はなければならぬ。體驗はその屬する活動から、現實性、集中性(その瞬間人間の生活は集中されて居る)組織性を引き出す。それは中央と周縁とを有し、自から浮き出て、内部的に組織する。しかし體驗は自分自身の爲めに存在せず、自身によりて其の意義が盡きることもない。單なる存在以上に體驗が超越して始めて意義を生ずる。然らばそれは何か。

人間は無條件に生活するが、しかし何物かを體驗する。然らばその何物かといふことは何であるか。總ての意識となるものは衝突から生じ、輻合に對立して働くことを記憶して見よ。中性的生活の輻合の中に人間は世界と不分離に輻合し、體驗の中に人間はこの融合を解くことを努力する。總ての體驗は同時に分離活動 (Zerlegen) で、自我と世界、主觀と客觀との分解である。従つて各の體驗は選擇された方向を有し、その特有の對象は特殊の人間か、或は世界である。而してその人間の時々の状態は感情として、その活動は意志激動 (Willensregung) として、その持つ續的本質は自己意識として體驗され、世界の現在は知覺として、その過去と將來とは表象や思

想として、その持続的本質は觀念として體驗される。

六

茲に於て意義内容の主なる分類の可能なることが知られる。しかし以前の心理學ではこの主なる團體を以て、それ以上の根據を有しない精神的の一次的根本質として述べて居るが、茲ではそれは人間から派生されたものとして、即ち人間によりてその意味が與へられるものとして示されて居る。

この體驗がそれ自からを表示する意義は象徴的に示されることが出来る。例へば感情又は意志の體驗の中に眞の自我が象徴化される。それは體驗の中の何處かに投射されるが、しかしその赤裸々と完全とに於てはなく、只斷片的に描寫される。何となれば自我の最深の層には意識は達しないからである。これに對して知覺又は記憶は客觀世界の斷片を象徴化する。この場合に意識内容は現實の蔽はれたる部分の描寫を與へないで、只接近せるもの、一定方向の選擇、模型的改

作物を與へる。何となれば客觀化への總ての努力に際し、自我と世界の幅合的紛亂は全く解けることなく、常に人は彼の主觀性の隠れたる且つ變色せる覆面を通じてのみ客觀物を觀察し、回想し、思考し得るからである。

體驗の象徴的特質に於ける消極的方面を考察すると意識の錯誤の概念を生ずる。即ち體驗の内容とその内容の關係せる對象との間の趣異が明にされる。客觀的の體驗に於ける錯誤に就ては長い間心理學の問題であつた。例へば感官の錯誤、回想の錯誤、思考の錯誤等が詳細に研究された。これ等の意識の錯誤に類似して、主觀化の體驗にも錯誤がある。私の感情は私の眞の状態を誤らしめ、私に意識される意志動機は私の行爲を眞に逐ひやる力を誤らしめ、私の自我意識は私の眞の自我を誤らしめる。かやうな意識の自己錯誤のあることは近頃明かにされたが、その一部は精神分析學の業績に基いて居る。しかし人間學はその錯誤を理解する理論上の可能がある。蓋し人間は彼が有し、又彼自身に就て有する意識よりも異つたものであり、且つより深いものであるからである。實に吾人の客觀的體驗が物其自 (Thing an sich) を示さない如くに、吾人の自

我體驗は自我其自 (Ich an sich) を示さない。

次に積極的方面に歸つて述べる。吾人は物其自と自我其自とを決して純粹に體驗することが出来ないとは言へ吾人の體驗は兩者への不變の道である。知覺、表象、思考に於ける總ての客觀的體驗は絶えず對象へ近よること、錯誤を見るや否やそれに打勝つものである。總ての主觀的體驗は自己探求、即ち自己を發見する旅行である。尤もこれは自己を理解する意味に於ける自己認識と混同してはならぬ。

この點からして體驗の表號を解釋する任務が心理學に生ずる。一の體驗も自身から表示することなく、一層深く横はる所のものを指示して居るから、吾人はこの體驗に深く横はる特殊の意味を研究する義務がある。従つて解釋が必要な心理學的方法になり、その方法の權利を勝ち得、科學的に非難のない適用を働き出すやうになるであらう。心理學的個々の事實に解釋を用ゐたことは既に長い間行はれたことで、例へば、精神分析學に於ける夢の解釋、筆蹟學に於ける手蹟の解釋、精神測定學に於けるテストの解釋等があるが、しかしこの方法に對する理論的根據はこれま

で欠けて居た。尙ほ又解釋の方法には最も粗野な任意的の所があり、非科學的の一般化が存して居た。例へば總ての表面的體驗を深い性的過程によりて解釋せんとしたのである。所が人間學は意識現象の解釋に對し理論的基礎を與へるから、今後解釋の方法論は科學的心理學の任務の一つになるであらう。

以上に於て人格的心理學の哲學的假説の輪廓だけを指示した。心理的事實に對するこの見地、範疇、方法の成果、在來的心理學の方向と方法とに對する人格的心理學の關係に就ては、茲にこれを省くことにする。要するに此の主張は現代に於ける精神科學に關する諸種の學説を統合して人間學の中に包括した所に長所があり、かゝる見地によらなければ、夫々異なる見地を矛盾なく綜合することは目下の所困難であると思はれる。(「精神科學」昭和三年四月號)

人名原語表 (附録を除く)

アドラー	Adler, A.	219	ウッドワース	Woodworth, R. S.	50 53
アリストテレス	Aristoteles	14	グレント	Wandt, W.	19 20 23
アトリッチ	Ulrich, J. L.	71	エリスマン	Erismann, Th.	28 40 42 83 206 269
アンダーソン	Anderson, H. G.	201			192 237
アンペール	Ampère, A. M.	206	エルウグッド	Ellwood, G. A.	240
イレネ	Irene.	239	エウルド	Ewald, G.	
ワイゼ	Wiase, L.	239	エインゾル	Angell, J. R.	27
ワイタセク	Witassek, S.	41	オーストリス	Jaensch, E. R.	141
ワイナール	Wiener.	283		Otis, A. S.	231
ワイバ	Weber, E. H.	17	カーチス	Curtis, S. A.	170
ウェッテルストランド	Wetterstrand.	233	ガレット	Garety, J. E.	230
ヴェルハイマー	Wertheimer, M.	41 47	ガウス	Gauss, K. F.	206
ヴォルフ	Wolff, G.	14	カミエ	Gannus, J.	198
ウーグ	Woods, F. A.	211	ガルス	Garth, T. R.	280

ガルトン	Galton, F.	64	ケルシェンシュタイン	Karschenshteiner, G.	111	114	23
ギッドイングス	Giddings, F. H.	24	ケムス	Kohs, S. O.	111	114	23
ギルブレith	Gilbreth, L. M.	188	ゴーリング	Goring, G.	177	177	1
ギヤン	Gatell, J. M.	137	ゴッダード	Goddard, H. H.	143	143	
ギヤノン	Gannon, W.	174	コフカ	Koffka, K.	29	44	46
ギルベ	Kulpe, O.	20			48	80	
グラハム	Graham, V. T.	280					
グラハム	Graham, V. T.	281					
グラマー	Cramer, A.	212	カリザン	Sullivan, L. R.	280	280	
グリフィス	Griffith, C. R.	235	カイザス	Sids, B.	257	257	
グルー	Grubbe.	211	ジーゴ	Seashore, G. E.	170	191	
クルーペリン	Kraepelin, E.	170	ジギ	Jegi, J. I.	97	97	
クルツェマー	Kretschmer, E.	156	ジバード	Shepard, J. F.	68	68	
クロツフェルド	Kronfeld, A.	200	シェパード	Shepardson, E.	89	89	
クーラー	Köhler, W.	44	ジェムス	James, W.	25	28	29
		77	ジハルド	Sihard.			212
		80					
ゲメリー	Gemelli, A.	198	シモン	Simon, Th.			

ジュリアニ	Justinian.	260	ストーナー	Stoner, W. S.	208	209
ジュッポ	Judd, C. H.		スピアット	Spieth, J.		283
ジュネ	Janet, P.	228	スベリンカー	Spencer, H.	16	17
ジュルコー	Charcot, J. M.	135	スボールディング	Spalding, D. A.		30
ジュテーター	Stekel, W.	178	セネカ	Seneca, L. A.		207
ジュテール	Stern, E.	123	セルク	Selz, O.		201
ジュテール	Stern, W.	53	ソーンダイク	Thorndike, E. L.	27	48
		187		76	77	192
ジュリアンガ	Spranger, E.	127	ソネル	Sommer, R.	62	170
ジュルーゾ	Schrödler, E.					
		114				
ジュン	Jones, W. F.	91	ダーウソ	Darwin, O.	17	85
	Jones, M. W.	85	ダーゼ	Dase, Z.		206
ジュノル	Shinn, M. W.		ターマン	Terman, L. M.	143	144
	Simmel, G.	123		209		
スコット	Scott, W. E. D.	67	ダールシー	Darsis, M. L.		281
スダウト	Stout, G. E.	27		Tarde, G.		245
ステンキスト	Stenquist, J. L.	188	ダルフ			283

ヂェリフ	Jelliffe, S. E.	220	ニニチエ	Nietzsche, F.	165
ツルソウルズ	Toulouse, E.	116	ネッパ	Nepper	198
ツルソウルド	Thunwald. R.	282	ノースウージー	Norworthy, N.	89
テララ	Taylor, F. W.	138			
テソ	Taine, H.	185	バート	Bart, G.	87 114 212
テイチエチ	Titchener, E. P.	19 20 23	バビロフ	Pavlov, J. P.	31 32 64
テイルダイ	Dilthey, W.	41 138	ハガチ	Haggerty, M.	71
テソソテ	Dessoir, M.	131	ハートレン	Hartley, D.	14 15
テミストルニス	Themistocles.	207	バツナル	Paschal, F. C.	280
テモスゼニス	Demosthenes.	219	ハグクスレン	Huxley, T. H.	17
ヂェウカ	Dewey, J.	22	ハンエック	Hancock.	99
ドニ	Downey, J. E.	167	ハンター	Hunter, W. S.	49 71
ドリージュ	Driesch, H.	49	ハンチントン	Huntington, E.	242
ドル	Doll, E. A.	177	ヒナリ	Healy, W.	177 214
			ビネ	Binet, A.	136 137 138
ナウマン	Naumann, H.	285			144 149 225

ヒューム	Hume, D.	14	15	ゾラゾフ	Bradley, F. H.	16
ビュローラ	Bühler, K.	117		ゾリス	Fries, Th.	97
ビヤソソ	Pearson, K.	211		ゾリーフ	Breed, F. S.	68
ビソトナー	Pinner, R.	281		ゾリソス	Prince, M.	226
ブゾル	Fabre, J. H.	75		ゾリソト	Breth, G. S.	22
ブヒネル	Fechner, Th.	17	135	ゾロイヌ	Preuss, K. Th.	282 283
ブエリダ	Périda.	225		ゾロイフ	Freud, S.	52 53 135 178
ブエルウアルソ	Verworn, M.	113			220 227 230 251	
ブアルケルト	Volckelt, H.	75		ベートーベソソ	Beethoven, L. V.	219
ブイソ・クリース	von Kries, J.	41		ベーン	Bain, A.	15 249
ブヂキール	Bjerre, P.	218		ベグクマソソ	Beckmann, H.	100
ブクダス	Fuchs, W.	44		ベグヘル	Becher, E.	42
ブグサール	Husserl, E.	41		ベチリ	Benary, W.	199
ブライド	Freyd, M.	180		ベヌグシ	Bennesi, V.	41
ブライヤソ	Bryan, W. L.	87		ベヒテソソ	Becherew, W.	32
ブライエルト	Preyer, W.	85	97	ベソテソソソ	Beckding, H.	27

ヘララニ	Höfler, A.	41	ホウイト	White, W. A.	220
ヘルバルト	Herbart, J.	15	ホキツブル	Whipple, G. M.	209
ベルマン	Bermann, L.	174			
ヘルムホルツ	Helmholtz, H.	17 19 44	マインツグ	Meinong, A.	40 41
ベルリナー	Berliner, A.	283	マクドゥーガル	McDougall, W.	27 38
ヘンニング	Hennings, H.	284			
ボアス	Boas, F.		マッカーサー	McCurly, J. T.	246 52 53
ホイットレー	White'y, M. T.	89	マリチ	Marina, A.	120
ボーンシュイン	Baenschamp.	226	マラストン	Marston, L. R.	155
ボートン	Boberag, O.	143	メーダ	Mead, M.	281
ホーヤム	Homer.	272	ミューラー	Müller, G. E.	42
ホーナル	Hall, G. S.	84 85 86 88	ミューラー	Müller, J.	17
ボーンルドクイン	Baldwin, J. M.	91 245	ミル	Mill, J.	15
ホッヂス	Hobbes, T.	241	ミル	Mill, J. S.	15
ホリソングクオース	Hollingsworth, H.	167	ムーア	Moore, J. S.	
ボルトン	Bolton, F. E.	89	ムーア	Moore, T. V.	

ヌーテ	Moede, W.	237	ロツリロモ	Rosolino, G.	170
モイマン	Meumann, E.	87 237	ロツゾロゾー	Lombroso, C.	177
ヤールゾロモ	Yarbrough, J. U.	73	ワトソソ	Watson, J. B.	32 35 36
ユソゾ	Jung, O. G.	157			37 42 48 69 89 121
ヨテーロー	Jōteyko, J.	90 91			
ライ	Lay, W. A.	87			
ラッシュレ	Lashley, K. S.	69			
ラソゾレヒト	Lamprecht	284 285			
リンカ	Link, H. C.	191 194			
ルリ	Roussier, J. J.	88 241			
ルーマン	Lehman, H. C.	103			
レヴィ・ブルネル	Lévy-Bruhl, L.	282			
ロエゾ	Loeb, J.	30			
ロス	Ros, E. A.	248			



昭和四年二月十五日印刷
昭和四年二月二十日發行

定價 金壹圓

著者 久保良英

發行者 神田豐穗

東京市麹町區內山下町一ノ一

輓心
近理
の學

印刷者 關根慶寬

印刷所 早稻田印刷株式會社

東京市牛込區早稻田池袋町三六二

發行所

東京市麴町區
內山下町一ノ一

春秋社

總發東京二四八六一番
電話 銀座 (97) 五六五三
五六五三

春秋文庫

※一つ五拾錢

- (1) 永井潜著 科學的生命觀 ※ (新刊)
- (2) 出井盛之著 經濟學說史 ※ (新刊)
- (3) 久保良英著 輓近の心理學 ※ ※ (新刊)
- (4) 瀧本誠一著 日本經濟思想史 (近刊)
- (5) 宮島新三郎著 文藝批評史 (近刊)
- (6) 阿部重孝著 教育學 ※ (新刊)
- (7) 入澤宗壽著 教育史 ※ (新刊)
- (8) 高野辰之著 民謡・童謡論 ※ (近刊)

—以下續刊—